

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第183集

清洲城下町遺跡Ⅺ

2013

公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団
愛知県埋蔵文化財センター

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第183集

きよすじょうかまち

11

清洲城下町遺跡 XI

2013

公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団
愛知県埋蔵文化財センター

序

愛知県北西部にある尾張平野では、木曾三川などによって形成された広大な沃野が展開しており、古くから多くの人々が生活を営んできました。戦国時代、織田信長はこの尾張を地盤に力を蓄え、その後天下統一に向けて邁進しました。一時期、織田信長が拠点構えた清須城は、戦国時代を通じて尾張下二郡を統括する守護所があった政治的な要衝で、織田信雄の改修以降は東海地方を代表する城郭・城下町として栄えてきました。現在、清須市は名古屋近郊の住宅地や工業地であるとともに、清須城を中心とする観光地としての側面も持つ都市となっています。

この清須城とその城下町は、昭和末期から清洲城下町遺跡として発掘調査が行われ、徐々にその繁栄した様子が明らかになってきました。これまでに調査された地点は120ヶ所を超え、調査面積も10万平方メートルを悠に超えるようになりました。

公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センターでは、平成22年から23年にかけて、県道助七西市場線建設に伴う事前調査として、清洲城下町遺跡の発掘調査を行いました。その結果、戦国時代から江戸時代初期にかけての金属生産が営まれた町屋に関連する遺構や遺物などが発見され、城下町の具体的な姿を知るための重要な資料として注目されています。

本書はこれらの成果をまとめたものであり、今後学術的な資料として広く活用されるとともに、埋蔵文化財の理解への一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査に対してご理解、ご協力を賜った関係諸機関並びに地元の皆様、発掘調査や資料整理に参加協力していただきました多くの方々に厚くお礼を申し上げます。

平成25年3月

公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団

理事長 加藤高明

例 言

- 1 清洲城下町(きよすじょうかまち)遺跡(遺跡番号 210002:『愛知県遺跡分布地図1(尾張地区)』1994による)は、愛知県清須市清洲などに所在する遺跡である。
- 2 本書は、愛知県建設部都市整備課が計画する県道助七西市場線建設(街路新設改良工事(住宅基盤整備)3・4・616助七西市場線)に伴う事前調査にかかる発掘調査報告書である。発掘調査は愛知県建設部から愛知県教育委員会を通じて委託を受けた公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センターが実施した。調査対象面積は2390㎡である。
- 3 発掘調査及び遺物水洗作業は平成22年5月から平成22年8月、および平成23年9月から平成24年1月にかけて行われ、その後報告書のための整理作業を平成24年4月から平成25年3月の期間実施している。
- 4 調査担当者は2010年度は樋上昇、奥野絵美(現愛知県埋蔵文化財調査センター)、伊奈和彦(愛知県埋蔵文化財調査センター)、2011年度は鈴木正貴である。現地における発掘調査は国際文化財株式会社と大成エンジニアリング株式会社の業務支援を受けて行っている。調査スタッフは、現場代理人:野々村光男・調査補助員:片山博道・測量技師:内田恭司(国際)、現場代理人:渡辺宏司・調査補助員:伊藤俊治・測量技師:大川康裕(大成)である。
- 5 調査にあたっては本センター理事・専門員をはじめの各関係機関のご指導とご協力を得た。愛知県教育委員会文化財保護室、愛知県埋蔵文化財調査センター、清須市教育委員会、愛知県建設部都市整備課
- 6 調査区の座標は、国土交通省告示に定められた平面直角座標 VII 系に準拠した。表記は世界測地系を用いている。
- 7 遺構は以下の分類記号を用い、原則調査時に使用した表記をそのまま使用した。
SB:建物、SI:竪穴建物・竪穴状遺構、SK:土坑、SP:ピット、SD:溝、SE:井戸、SL:埴跡、SX:その他の遺構、NR:自然流路
調査区表示は調査時の10A区～10B区、11A区～11C区を使用し、遺構番号は3桁表示が10A区～10B区、4桁表示が11A区～11C区の遺構を指し、これをそのまま用いている。
- 8 本書の執筆は下記のとおりである。
第3章第4節(2) 鈴木恵介(愛知県埋蔵文化財調査センター)
第3章第6節 奥野絵美(愛知県埋蔵文化財調査センター)
第4章第1節 鬼頭剛
第4章第2節 黒沼保子(株式会社バレオ・ラボ)
第4章第3節 大澤正己・鈴木瑞穂(九州テクノリサーチ・TACセンター)
その他は全て鈴木正貴が執筆している。
- 9 発掘調査および本書の作成に際しては次の方々のご指導とご協力を得た。内堀信雄、梅本博志、柴垣哲彦、城ヶ谷和広、中野晴久、仁木宏、藤澤良祐、(敬称略、順不同)
- 10 土壌水洗篩別作業・樹種同定の各分析については株式会社バレオ・ラボに、金属関連遺物の分析については九州テクノリサーチ、遺物の実測・トレース・図版作成・本書の編集についてはナカシャクリエイティブ株式会社に、写真撮影については写真工房 遊に委託した。
- 11 発掘調査及び整理については、多数の発掘作業員・整理補助員のご協力を得た。
- 12 調査記録(図面・写真資料・日誌等)は、本センターにて保管している。
- 13 出土遺物は愛知県埋蔵文化財調査センターで保管している。

目次

第1章 調査の概要

第1節 調査の経緯	1
第2節 調査の方法	1
第3節 地理的・歴史的環境	3

第2章 遺構

第1節 基本順序と遺構の概要	5
第2節 古代の遺構	6
第3節 中世の遺構	10
第4節 城下町期の遺構	11
第5節 宿場町期の遺構	36

第3章 遺物

第1節 資料の採取方法と概要	40
第2節 土器・陶磁器類	41
第3節 木製品	73
第4節 石製品・石材	78
第5節 金属製品・金属関連遺物	84
第6節 ガラス製品	89

第4章 自然科学的分析

第1節 清洲城下町遺跡周辺の地形解析と五条川の流路について	91
第2節 清洲城下町遺跡出土木製品の樹種同定	95
第3節 清洲城下町遺跡出土鍛冶・鋳造関連遺物の分析調査	101

第5章 考察・総括

第1節 城下町期における土師器の編年	114
第2節 城下町期の瀬戸・美濃窯産陶器	117
第3節 城下町期の金属製品生産	122
第4節 遺構変遷	125
第5節 総括	127

遺構図版	128
------	-----

写真図版	145
------	-----

抄録	161
----	-----

挿図目次

第1図	清須の位置	1	第51図	城下町期の遺物実測図(18)	64
第2図	清洲城下町遺跡の位置	2	第52図	城下町期の遺物実測図(19)	66
第3図	調査区位置図	3	第53図	城下町期の遺物実測図(20)	67
第4図	11A区東壁土層断面図	4	第54図	城下町期の遺物実測図(21)	68
第5図	古代の竪穴建物跡遺構図(1)	5	第55図	城下町期の遺物実測図(22)	70
第6図	古代の竪穴建物跡遺構図(2)	7	第56図	城下町期の遺物実測図(23)	71
第7図	中世の溝 遺構図	8	第57図	城下町期の遺物実測図(24)	72
第8図	0999SE 遺構図	9	第58図	宿場町期の遺物実測図(1)	74
第9図	城下町期の掘立柱建物跡遺構図	10	第59図	宿場町期の遺物実測図(2)	75
第10図	城下町期の竪穴状遺構 遺構図(1)	12	第60図	木製品実測図(1)	76
第11図	城下町期の竪穴状遺構 遺構図(2)	14	第61図	木製品実測図(2)	77
第12図	城下町期の竪穴状遺構 遺構図(3)	15	第62図	木製品実測図(3)	78
第13図	城下町期の竪穴状遺構 遺構図(4)	16	第63図	石製品実測図(1)	80
第14図	城下町期の竪穴状遺構 遺構図(5)	17	第64図	石製品実測図(2)	81
第15図	城下町期の溝 遺構図(1)	18	第65図	石製品実測図(3)	82
第16図	城下町期の溝 遺構図(2)	19	第66図	石製品実測図(4)	83
第17図	城下町期の溝 遺構図(3)	20	第67図	金属製品・金属関連遺物実測図(1)	85
第18図	城下町期の井戸 遺構図(1)	21	第68図	金属製品・金属関連遺物実測図(2)	87
第19図	城下町期の井戸 遺構図(2)	22	第69図	ガラス製品実測図	90
第20図	城下町期の井戸 遺構図(3)	23	第70図	清洲城下町遺跡周辺の等高線図	94
第21図	城下町期の井戸 遺構図(4)	24	第71図	清洲城下町遺跡出土木製品の光学顕微鏡写真(1)	99
第22図	城下町期の石理設置構・弁跡・土坑など遺構図	25	第72図	清洲城下町遺跡出土木製品の光学顕微鏡写真(2)	100
第23図	城下町期の粘土貼付土坑遺構図	27	第73図	清洲城下町遺跡出土鉄塊系遺物・含鉄鉄滓の断面金属組織観察結果	104
第24図	城下町期・宿場町期の糞埋設遺構遺構図	28	第74図	FeO系平衡状態図、および鍛造切片3層分離型模式図	104
第25図	城下町期の土坑 遺構図(1)	30	第75図	椀形鍛冶滓の顕微鏡組織・EPMA 調査結果	108
第26図	城下町期の土坑 遺構図(2)	31	第76図	椀形鍛冶滓・粒状滓の顕微鏡組織	109
第27図	城下町期の土坑 遺構図(3)	32	第77図	鉄製品(釘・鋳造鉄器片)の顕微鏡組織	110
第28図	城下町期の土坑 遺構図(4)	33	第78図	鉄塊系遺物の顕微鏡組織	111
第29図	城下町期の土坑 遺構図(5)	34	第79図	羽口・ガラス質滓(含鉄)の顕微鏡組織	112
第30図	宿場町期の掘立柱建物跡遺構図	35	第80図	青銅製品の顕微鏡組織・EPMA 調査結果	113
第31図	宿場町期の井戸遺構図	37	第81図	今回の出土資料による城下町期の土師器皿の変遷図	115
第32図	今回の調査における遺構変遷	38	第82図	今回の出土資料による城下町期の土師器鍋類の変遷図	116
第33図	古代・中世の遺物実測図	39	第83図	遺構別城下町期の瀬戸・美濃窯産陶器の時期別組成グラフ	120
第34図	城下町期の遺物実測図(1)	40	第84図	主要な金属関連遺物の出土分布図(2mグリッド単位)	123
第35図	城下町期の遺物実測図(2)	42	第86図	0643SIおよび0508SP 周辺の金属関連遺物の出土分布	124
第36図	城下町期の遺物実測図(3)	43	第87図	今回の調査における遺構変遷	126
第37図	城下町期の遺物実測図(4)	44	第88図	今回の調査区周辺の地籍図	127
第38図	城下町期の遺物実測図(5)	45	挿表目次		
第39図	城下町期の遺物実測図(6)	46	第1表	石材一覧	84
第40図	城下町期の遺物実測図(7)	47	第2表	樹種構成	95
第41図	城下町期の遺物実測図(8)	49	第3表	木製品の樹種構成	96
第42図	城下町期の遺物実測図(9)	50	第4表	板材・角材の樹種構成	96
第43図	城下町期の遺物実測図(10)	51	第5表	樹種同定結果一覧表(1)	97
第44図	城下町期の遺物実測図(11)	52	第6表	樹種同定結果一覧表(2)	98
第45図	城下町期の遺物実測図(12)	53	第7表	供試材の履歴と調査項目	103
第46図	城下町期の遺物実測図(13)	55	第8表	供試材の化学組成	105
第47図	城下町期の遺物実測図(14)	57	第9表	出土遺物の調査結果のまとめ(1)	106
第48図	城下町期の遺物実測図(15)	58	第10表	出土遺物の調査結果のまとめ(2)	107
第49図	城下町期の遺物実測図(16)	59	第11表	城下町期の瀬戸・美濃窯産陶器の器種組成	118
第50図	城下町期の遺物実測図(17)	61	第12表	城下町期の瀬戸・美濃窯産陶器の調査区別の器類組成	119
		62	第13表	瀬戸・美濃窯産陶器の時期組成からみた遺構の時期区分	121

第1章 調査の概要

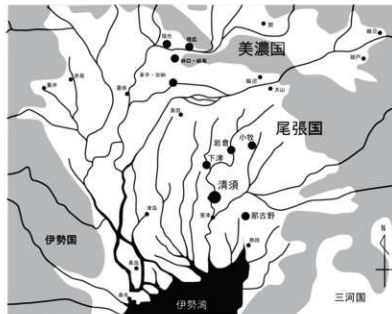
第1節 調査の経緯

今回の清洲城下町遺跡の調査は、県道助七西市場線建設工事に伴う事前調査として、愛知県建設部から愛知県教育委員会を通じた委託事業として行った。工事予定地は『愛知県道跡分布地図1(尾張地区)』(愛知県教育委員会 1994)に記載された清洲城下町遺跡が所在することが認識されており、すでに東側は昭和63年度に清洲町(現清須市)教育委員会によって(高橋 1990)、また西側は平成10年度に愛知県埋蔵文化財センター(当時、財団法人愛知県教育サービスセンター)愛知県埋蔵文化財センター)によって発掘調査が行われている。今回は、県道助七西市場線用地内の未調査区域である旧美濃街道から県道新川清洲線までの区間を調査対象とした。平成22年度に西半部(780㎡)を2区(10A区・10B区)に、平成22年度に東半部(1610㎡)を3区(11A区・11B区・11C区)に分割して発掘調査した。

第2節 調査の方法

発掘調査は、平成22年度では国際文化財株式会社からの支援を受け、10A区→10B区の順に、平成23年度では大成エンジニアリング株式会社の支援を受け、11A区→11B区→11C区の順に実施した(第3図)。調査担当者は平成22年度が樋上昇・奥野絵美、平成23年度が鈴木正貴である。

調査は、はじめにバックホウにより表土を掘削した。



第1図 清須の位置

地点により堆積は異なるが、概ね近代以降の耕作土や盛土などの表土(層厚1.2m前後)を除去し、江戸時代の遺構面となる面まで掘削した。多くの遺構は黄褐色シルトなどの地山面や戦国～江戸時代の盛土から何度も複雑に掘り込まれており、遺構検出は概して難しい。全ての調査区で、表土掘削後の江戸時代遺構面を1面遺構として調査を開始し、その後は若干の掘り下げを繰り返しながら遺構壁面や床面から見られる遺構を調査していく形で行われ、順次2面遺構・3面遺構とした。結果、10A区は3面、10B区は2面、11A区は4面、11B区は5面、11C区は3面調査となっている。

10A区では1面は標高3.9m前後で宿場町期、2面は標高3.5m前後で城下町期後期から宿場町期、3面は標高2.9m前後で城下町期の遺構を検出した。地山は黄褐色中粒砂などである。10B区では1面は標高3.6m前後で城下町期後期から宿場町期、2面は標高3.0m前後で城下町期の遺構を検出した。地山は黄褐色中粒砂などである。11A区では1面は標高4.5m前後で城下町期後期から宿場町期、2面は標高4.2m前後で城下町期後期、3面は標高3.9m前後で城下町期、4面は標高3.7m前後で平安時代から城下町期前期の遺構を検出した。地山は暗灰黄色中粒砂などである。11B区では1面は標高4.5m前後で城下町期後期から宿場町期、2面は標高4.2m前後で城下町期後期、3面は標高3.9m前後で城下町期後期、4面は標高3.7m前後で城下町期前期、5面は標高3.5m前後で鎌倉～室町時代の遺構を検出した。地山は灰黄色細粒砂などである。11C区では1面は標高3.9m前後で城下町期、2面は標高3.5m前後で鎌倉時代から城下町期、3面は標高2.9m前後で古代から鎌倉時代の遺構を検出した。地山は灰黄色細粒砂などである。

このように、遺構や堆積状況が調査区により異なり、調査時点で各面相互の対応関係は合致させることは困難であった。遺構図を理解する際にこの点は注意が必要である。

なお、調査の進展状況で調査方法が

変更された部分も存在する。11A区では、井戸が東西方向に並ぶ遺構配置が確認され、当地点が短冊型地割の町屋が展開していた可能性が考えられた。これを受け、11B・11C区では南北方向に設置された屋敷境の遺構の存在を強く意識して検出作業を行った。この結果、11B区で区画溝4条を検出することができた。また、11B区1面の調査では、自然石を埋設した遺構が確認され、さらに使用痕がよく残存すること

も明らかになったため、その知見を得てからは石材は全て持ち帰り分析することとした。したがって、11A区以前の調査では、発掘調査時点の観察のみで廃棄した石材が多く存在することをあらかじめ断っておきたい。さらに、10A・10B区で金属関連遺物が多量に出土していることから、金属製品加工が当地点で行われていることが予想されたため、具体的な作業工程を想定するために土壌を持ち帰り水洗篩別作業も実施し



第2図 清洲城下町遺跡の位置

た。この結果、多くの鍛造薄片や粒状滓などの微細遺物を検出することができた。この作業により、当初予定していなかった微小な獣骨類が採取されたが、これについては分析を十分に行っていない。

調査区内は、国土交通省告示によって定められた平面直角座標第Ⅶ系に準拠した2mグリッドを設定し、遺物は原則このグリッドごとに取り上げている。部分的に包含層を人力で掘削しながら遺構検出を行い、土坑類は半掘削、溝や堅穴建物跡などは土層観察用ベルトを残して掘削し、必要な記録を採取した後に全掘作業を行った。遺構の実測は電子平板による測量を実施し、成果品は全てデジタルデータで作成した。写真はデジタルカメラによる撮影を各調査補助員が行った。調査途中の平成23年11月5日には現地説明会を開催し、検出された遺構と出土した遺物について説明した。約90人の参加者があった。また、出土した遺物は現地で遺物洗浄までの作業を終え、洗浄が終了した時点で27リットル入りコンテナで253箱に及んだ。

整理・報告書作成作業は平成24年度に鈴木が担当して実施した。遺物は整理補助員の協力を得て接合・選別作業などを実施し、報告書に掲載する遺物の実測については一部をナカシャクリエイティブ株式会社に委託し、残りを鈴木と各分担執筆者が行った。遺物の写真撮影は写真工房遊に、樹種同定などの自然科学的分析をパレオ・ラボ株式会社に、遺物実測図などのトレース・図版作成・報告書編集作業（遺構図作成を含む）はナカシャクリエイティブ株式会社にそれぞれ作業を委託し行った。また印刷はサンメッセ株式会社に委託した。

第3節 地理的・歴史的環境

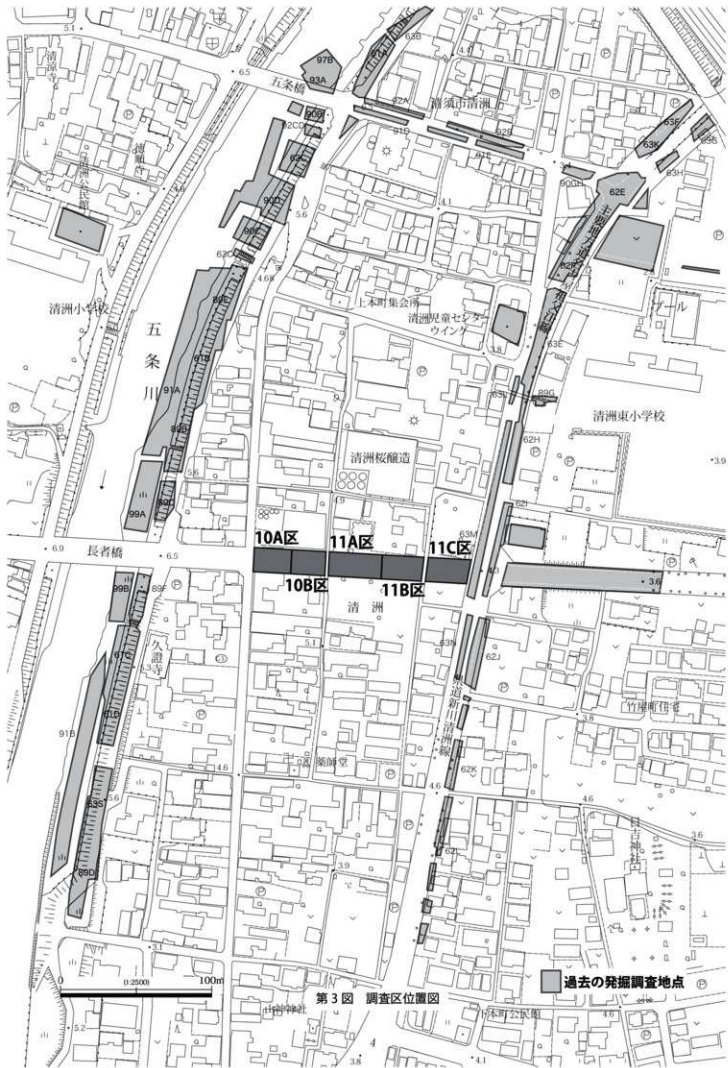
清洲城下町遺跡は、五条川の両岸に展開する広大な遺跡で、自然堤防および後背湿地上に立地する。遺構検出面の標高は2～5mを測る。

遺跡周辺では朝日遺跡で縄文時代後期から遺構・遺物が確認されるが、調査区周辺では、北東に所在する

田中町地区を中心に拡がる古墳時代後期～平安時代の集落遺跡が古い遺跡として認識される。南東には古代にまで伝承が遡る日吉神社が存在する。平安時代後期にはやや離れるが朝日西地区（朝日西遺跡）で集落が認められ、鎌倉時代には田中町地区や土田遺跡などで中世集落が形成された。後述するように、この古代～中世前半にかけては旧五条川が現清洲公園から南南東方向に流れ、その左岸に形成された自然堤防上に田中町地区の古代集落と日吉神社が立地するといえる。

戦国時代には清須城が築城される。応永12(1405)年頃に室町幕府官領で尾張守護職であった斯波義重が下津城の別郭として築城したと伝えられるが、格別な城郭と城下町の形成は文明8(1476)年に守護代織田敏定が清須に守護所を構えてからのことと思われる。弘治元(1555)年、那古野城にあった織田信長は清須城を攻略、織田信友を切腹させ清須城に入城した。信長は、永禄2(1559)年に岩倉織田家も打倒、永禄3(1560)年には桶狭間の戦いで今川勢に勝利、永禄4(1561)年に尾張守護斯波義銀を追放し、尾張一国を統一した。永禄6(1563)年に小牧越しが行われるが、その後も清須城は織田信忠、織田信雄、豊臣秀次、福島正則、松平忠吉、徳川義直が城主となった。天正12(1584)年には清須会議が行われる重要な位置にあり、天正14(1586)年の大改修を経て尾張随一の戦略上の重要な都市として機能し続けた。大改修によって清須城は、天守閣、小天守、書院が築造され、内堀・中堀・外堀の三重の堀を構え、城下町の範囲は南北約2.7km、東西約1.5kmに及ぶ。

慶長15(1610)年に名古屋築城が開始されると、清須城と城下町の移転が進行した（清須越し）。元和2(1616)年には、美濃街道の宿場として清須宿が設置され、清須は尾張三宿として繁栄した。（鈴木正貴）
高橋信明 1990『清洲城下町遺跡』『愛知県埋蔵文化財情報5期和63年度』愛知県教育委員会・財）愛知県埋蔵文化財センター
早野浩二編 2005『清洲城下町遺跡Ⅹ』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第131集



第3図 調査区位置図

山崎社

市町公民館

第2章 遺構

第1節 基本層序と遺構の概要（時期区分）

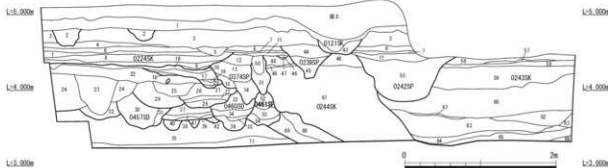
調査地は五条川により形成された自然堤防上に立地し、遺跡の中では比較的高い標高約5mを測る。標高約2.0mの深さで湧水がある灰色中粒砂が堆積し、調査ではこれを最下層と認識した。東部ではその上位に浅黄色シルトが堆積しこれが古墳時代以降の地山となる。さらに上位は整地層や遺構が重複して構築されており、堆積状況は複雑である。ここでは、11A区東壁土層断面（第4図）を用いることにより基本層序を詳説したい。

第4図1層～3層は近代以降の耕作土（10A区と10B区では住宅整地土に相当）となる黄灰色細粒砂の土壌で表土と認識した。表土下位の4層・6層・7層は黄褐色細粒砂を主体とする江戸時代と思われる堆積で、この上位から掘り込まれる遺構を概ね第1面として検出した。16層は乾燥時に白色となる最下層と近似した暗灰色細粒砂層で、地震による液状化によって生じた砂脈に繋がることから噴砂を整地した堆積である可能性が考えられる。16層のような砂層は11A区付近で散見され、その下面が概ね第2面となる。16層上位から掘削された遺構

は城下町期Ⅲ期以降に属することから、諸問題は残るものの16層は1586年1月に発生した天正地震による液状化現象の痕跡と推測される。11層下位にも整地層（22層など）があって遺構も存在することから、天正地震直前にも整地を伴う遺構群が展開したと思われる。その下位は複雑に遺構が重複し、基本層序として調査区全体を通して共通の堆積層と識別できるものは70層までは確認できない。70層と71層は浅黄色シルト（地山）で、その上面で古代の遺構などが検出された。

上記のような堆積状況のため、第2面以下の発掘調査は層位単位に面を把握することができない。したがって、調査は上位の遺構の状態に合わせて順次行方となり、遺構面数は地点により第2～5面まで大きく異なっている。

調査で検出された遺構は1500基にのぼるが、掘削調査の結果欠番となるものもあり、最終的に確認された遺構は全部で1325基である。これらは多様な時期と種類が含まれているが、本書では、既往の次期区分（特に『清洲城下町遺跡』（1995）で整理された遺物様相の時期区分）を踏襲し、若干の修



- 1 3.19.1.10.1 黄褐色細粒砂層(1) 3.19.1.10.1.1.1 黄褐色細粒砂層(1) (中)
- 2 3.19.1.10.1 黄褐色細粒砂層(1) 3.19.1.10.1.1.2 黄褐色細粒砂層(2) (中)
- 3 3.19.1.10.1 黄褐色細粒砂層(1) 3.19.1.10.1.1.3 黄褐色細粒砂層(3) (中)
- 4 3.19.1.10.1 黄褐色細粒砂層(1) 3.19.1.10.1.1.4 黄褐色細粒砂層(4) (中)
- 5 3.19.1.10.1 黄褐色細粒砂層(1) 3.19.1.10.1.1.5 黄褐色細粒砂層(5) (中)
- 6 3.19.1.10.1 黄褐色細粒砂層(1) 3.19.1.10.1.1.6 黄褐色細粒砂層(6) (中)
- 7 3.19.1.10.1 黄褐色細粒砂層(1) 3.19.1.10.1.1.7 黄褐色細粒砂層(7) (中)
- 8 3.19.1.10.1 黄褐色細粒砂層(1) 3.19.1.10.1.1.8 黄褐色細粒砂層(8) (中)
- 9 3.19.1.10.1 黄褐色細粒砂層(1) 3.19.1.10.1.1.9 黄褐色細粒砂層(9) (中)
- 10 3.19.1.10.1 黄褐色細粒砂層(1) 3.19.1.10.1.1.10 黄褐色細粒砂層(10) (中)
- 11 3.19.1.10.1 黄褐色細粒砂層(1) 3.19.1.10.1.1.11 黄褐色細粒砂層(11) (中)
- 12 3.19.1.10.1 黄褐色細粒砂層(1) 3.19.1.10.1.1.12 黄褐色細粒砂層(12) (中)
- 13 3.19.1.10.1 黄褐色細粒砂層(1) 3.19.1.10.1.1.13 黄褐色細粒砂層(13) (中)
- 14 3.19.1.10.1 黄褐色細粒砂層(1) 3.19.1.10.1.1.14 黄褐色細粒砂層(14) (中)
- 15 3.19.1.10.1 黄褐色細粒砂層(1) 3.19.1.10.1.1.15 黄褐色細粒砂層(15) (中)
- 16 3.19.1.10.1 黄褐色細粒砂層(1) 3.19.1.10.1.1.16 黄褐色細粒砂層(16) (中)
- 17 3.19.1.10.1 黄褐色細粒砂層(1) 3.19.1.10.1.1.17 黄褐色細粒砂層(17) (中)
- 18 3.19.1.10.1 黄褐色細粒砂層(1) 3.19.1.10.1.1.18 黄褐色細粒砂層(18) (中)
- 19 3.19.1.10.1 黄褐色細粒砂層(1) 3.19.1.10.1.1.19 黄褐色細粒砂層(19) (中)
- 20 3.19.1.10.1 黄褐色細粒砂層(1) 3.19.1.10.1.1.20 黄褐色細粒砂層(20) (中)
- 21 3.19.1.10.1 黄褐色細粒砂層(1) 3.19.1.10.1.1.21 黄褐色細粒砂層(21) (中)
- 22 3.19.1.10.1 黄褐色細粒砂層(1) 3.19.1.10.1.1.22 黄褐色細粒砂層(22) (中)
- 23 3.19.1.10.1 黄褐色細粒砂層(1) 3.19.1.10.1.1.23 黄褐色細粒砂層(23) (中)
- 24 3.19.1.10.1 黄褐色細粒砂層(1) 3.19.1.10.1.1.24 黄褐色細粒砂層(24) (中)
- 25 3.19.1.10.1 黄褐色細粒砂層(1) 3.19.1.10.1.1.25 黄褐色細粒砂層(25) (中)
- 26 3.19.1.10.1 黄褐色細粒砂層(1) 3.19.1.10.1.1.26 黄褐色細粒砂層(26) (中)
- 27 3.19.1.10.1 黄褐色細粒砂層(1) 3.19.1.10.1.1.27 黄褐色細粒砂層(27) (中)
- 28 3.19.1.10.1 黄褐色細粒砂層(1) 3.19.1.10.1.1.28 黄褐色細粒砂層(28) (中)
- 29 3.19.1.10.1 黄褐色細粒砂層(1) 3.19.1.10.1.1.29 黄褐色細粒砂層(29) (中)
- 30 3.19.1.10.1 黄褐色細粒砂層(1) 3.19.1.10.1.1.30 黄褐色細粒砂層(30) (中)
- 31 3.19.1.10.1 黄褐色細粒砂層(1) 3.19.1.10.1.1.31 黄褐色細粒砂層(31) (中)
- 32 3.19.1.10.1 黄褐色細粒砂層(1) 3.19.1.10.1.1.32 黄褐色細粒砂層(32) (中)
- 33 3.19.1.10.1 黄褐色細粒砂層(1) 3.19.1.10.1.1.33 黄褐色細粒砂層(33) (中)
- 34 3.19.1.10.1 黄褐色細粒砂層(1) 3.19.1.10.1.1.34 黄褐色細粒砂層(34) (中)
- 35 3.19.1.10.1 黄褐色細粒砂層(1) 3.19.1.10.1.1.35 黄褐色細粒砂層(35) (中)
- 36 3.19.1.10.1 黄褐色細粒砂層(1) 3.19.1.10.1.1.36 黄褐色細粒砂層(36) (中)
- 37 3.19.1.10.1 黄褐色細粒砂層(1) 3.19.1.10.1.1.37 黄褐色細粒砂層(37) (中)
- 38 3.19.1.10.1 黄褐色細粒砂層(1) 3.19.1.10.1.1.38 黄褐色細粒砂層(38) (中)
- 39 3.19.1.10.1 黄褐色細粒砂層(1) 3.19.1.10.1.1.39 黄褐色細粒砂層(39) (中)
- 40 3.19.1.10.1 黄褐色細粒砂層(1) 3.19.1.10.1.1.40 黄褐色細粒砂層(40) (中)
- 41 3.19.1.10.1 黄褐色細粒砂層(1) 3.19.1.10.1.1.41 黄褐色細粒砂層(41) (中)
- 42 3.19.1.10.1 黄褐色細粒砂層(1) 3.19.1.10.1.1.42 黄褐色細粒砂層(42) (中)
- 43 3.19.1.10.1 黄褐色細粒砂層(1) 3.19.1.10.1.1.43 黄褐色細粒砂層(43) (中)
- 44 3.19.1.10.1 黄褐色細粒砂層(1) 3.19.1.10.1.1.44 黄褐色細粒砂層(44) (中)
- 45 3.19.1.10.1 黄褐色細粒砂層(1) 3.19.1.10.1.1.45 黄褐色細粒砂層(45) (中)
- 46 3.19.1.10.1 黄褐色細粒砂層(1) 3.19.1.10.1.1.46 黄褐色細粒砂層(46) (中)
- 47 3.19.1.10.1 黄褐色細粒砂層(1) 3.19.1.10.1.1.47 黄褐色細粒砂層(47) (中)
- 48 3.19.1.10.1 黄褐色細粒砂層(1) 3.19.1.10.1.1.48 黄褐色細粒砂層(48) (中)
- 49 3.19.1.10.1 黄褐色細粒砂層(1) 3.19.1.10.1.1.49 黄褐色細粒砂層(49) (中)
- 50 3.19.1.10.1 黄褐色細粒砂層(1) 3.19.1.10.1.1.50 黄褐色細粒砂層(50) (中)
- 51 3.19.1.10.1 黄褐色細粒砂層(1) 3.19.1.10.1.1.51 黄褐色細粒砂層(51) (中)
- 52 3.19.1.10.1 黄褐色細粒砂層(1) 3.19.1.10.1.1.52 黄褐色細粒砂層(52) (中)
- 53 3.19.1.10.1 黄褐色細粒砂層(1) 3.19.1.10.1.1.53 黄褐色細粒砂層(53) (中)
- 54 3.19.1.10.1 黄褐色細粒砂層(1) 3.19.1.10.1.1.54 黄褐色細粒砂層(54) (中)
- 55 3.19.1.10.1 黄褐色細粒砂層(1) 3.19.1.10.1.1.55 黄褐色細粒砂層(55) (中)
- 56 3.19.1.10.1 黄褐色細粒砂層(1) 3.19.1.10.1.1.56 黄褐色細粒砂層(56) (中)
- 57 3.19.1.10.1 黄褐色細粒砂層(1) 3.19.1.10.1.1.57 黄褐色細粒砂層(57) (中)
- 58 3.19.1.10.1 黄褐色細粒砂層(1) 3.19.1.10.1.1.58 黄褐色細粒砂層(58) (中)
- 59 3.19.1.10.1 黄褐色細粒砂層(1) 3.19.1.10.1.1.59 黄褐色細粒砂層(59) (中)
- 60 3.19.1.10.1 黄褐色細粒砂層(1) 3.19.1.10.1.1.60 黄褐色細粒砂層(60) (中)
- 61 3.19.1.10.1 黄褐色細粒砂層(1) 3.19.1.10.1.1.61 黄褐色細粒砂層(61) (中)
- 62 3.19.1.10.1 黄褐色細粒砂層(1) 3.19.1.10.1.1.62 黄褐色細粒砂層(62) (中)
- 63 3.19.1.10.1 黄褐色細粒砂層(1) 3.19.1.10.1.1.63 黄褐色細粒砂層(63) (中)
- 64 3.19.1.10.1 黄褐色細粒砂層(1) 3.19.1.10.1.1.64 黄褐色細粒砂層(64) (中)
- 65 3.19.1.10.1 黄褐色細粒砂層(1) 3.19.1.10.1.1.65 黄褐色細粒砂層(65) (中)
- 66 3.19.1.10.1 黄褐色細粒砂層(1) 3.19.1.10.1.1.66 黄褐色細粒砂層(66) (中)
- 67 3.19.1.10.1 黄褐色細粒砂層(1) 3.19.1.10.1.1.67 黄褐色細粒砂層(67) (中)
- 68 3.19.1.10.1 黄褐色細粒砂層(1) 3.19.1.10.1.1.68 黄褐色細粒砂層(68) (中)
- 69 3.19.1.10.1 黄褐色細粒砂層(1) 3.19.1.10.1.1.69 黄褐色細粒砂層(69) (中)
- 70 3.19.1.10.1 黄褐色細粒砂層(1) 3.19.1.10.1.1.70 黄褐色細粒砂層(70) (中)
- 71 3.19.1.10.1 黄褐色細粒砂層(1) 3.19.1.10.1.1.71 黄褐色細粒砂層(71) (中)

第4図 11A区東壁土層断面図

正を加えながら記述を進めていく。

古代・中世（城下町期以前：奈良時代～1478年）

城下町期（1478年～1613年）

城下町期Ⅰ-1期（1478年～16世紀前葉）

城下町期Ⅰ-2期（16世紀前葉）

城下町期Ⅱ-1期（16世紀中葉）

城下町期Ⅱ-2期（16世紀中葉～1586年）

城下町期Ⅲ-1期（1586年～16世紀末）

城下町期Ⅲ-2期（16世紀末～1613年）

宿場町期（1613年～）

宿場町期Ⅰ-1期（1613年～18世紀中頃）

宿場町期Ⅰ-2期（18世紀中頃～1794年）

宿場町期Ⅱ-1期（1794年～19世紀初）

宿場町期Ⅱ-2期（19世紀初～）

なお、本書での遺構の表記は、数値が3桁の表示は10A区と10B区の遺構、数値が4桁の表示は11A区～11C区の遺構を示している。（鈴木正貴）

第2節 古代の遺構

（1）遺構の概要

奈良時代から室町時代の遺構は東部の調査区（11A区～11C区）で確認された。10B区と11A区の下部で中粒砂が厚く堆積した南北方向に流れる自然河道が確認され、この砂層から灰軸陶器小片が出土している。この旧河道の左岸に浅黄色シルト（地山）で構成される自然堤防が展開し、上部に奈良時代から平安時代の遺構群が展開したと推定される。後世（特に城下町期）の開発により遺構はかなり破壊され、残存状況は不良である。検出された遺構は竪穴建物跡や土坑などがある。

（2）竪穴建物跡

竪穴建物跡は全部で9基確認された。全て平面形は隅丸方形または隅丸長方形を呈すると考えられるが、火処遺構は検出されなかった。

0435SI（第5図） 11A区4面中央部で検出された竪穴建物跡で、東半部の状況は不明である。主軸方位は北でやや西に振れ、深さは0.11mである。壁溝はなく柱穴0481SP～0483SPなどが確認された。遺物はほとんど出土せず詳細な時期は不明だが、柱穴は重複して検出されたことから建て替えが行われたと推測される。

0440SI 11A区4面で南隅部のみが確認された竪穴建物跡と思われる遺構で、多くの遺構に切られる。深さは0.09mを測り、壁溝や柱穴は検出され

ていない。時期は不詳。

0450SI（第5図） 11A区4面東部南端で発見された竪穴建物跡で、南部は調査区外に拡がる。平面形は2.29m×2.23m以上の隅丸方形を呈し、深さは0.16m、主軸方位は北でやや東に振れる。床面に貼床らしき堆積が認められ、柱穴0476SP～0478SPが確認されたが、壁溝は検出されていない。わずかな出土遺物から、時期は平安時代と思われる。

0451SI（第5図） 0450SIに切られる形で検出された竪穴建物跡で、南部は調査区外にある。深さは0.11mを測り、壁溝や柱穴は検出されていない。詳細な時期は不明だが、切り合い関係からみて平安時代と推測される。

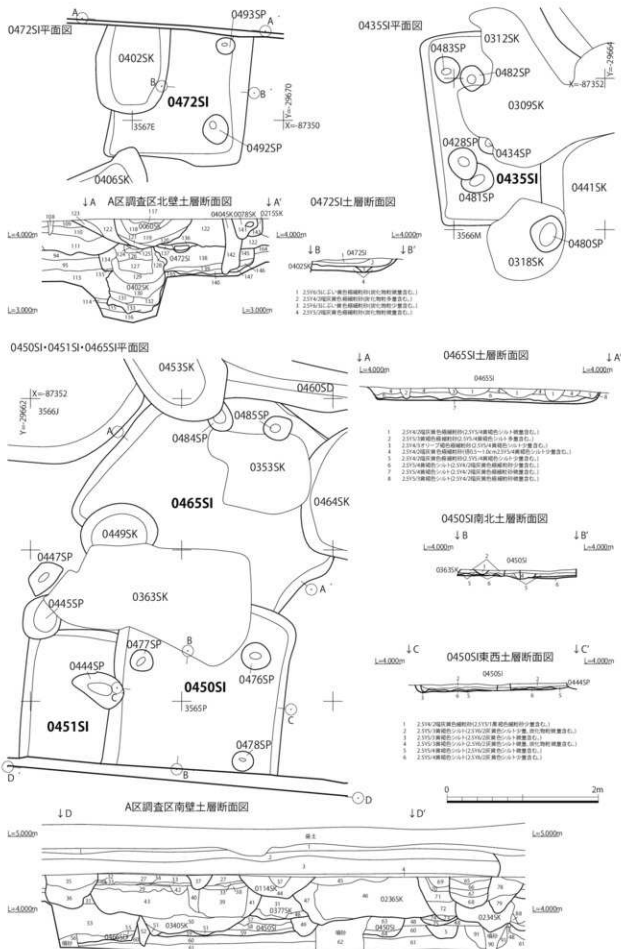
0465SI（第5図） 11A区4面東部中央に所在する竪穴建物跡だが、多くの遺構により切られ全形の把握は容易ではない。平面形は3.23m×2.50m以上の隅丸方形と思われる、深さは0.20mとなる。柱穴0484SP・0485SPが確認されたが、壁溝は確認できない。覆土から灰軸陶器（5）や土鐘（6・7）などが出土し、時期は東山72号窯式期に属する。

0468SI 南隅部のみが確認された竪穴建物跡と思われる遺構で、多くの遺構に切られる。深さは0.16mを測り、壁溝や柱穴は検出されていない。時期は不詳。

0472SI（第5図） 11A区4面中央北部で検出された竪穴建物跡である。北西部の状況は不明だが、方位は南北軸に対してほぼ併行し、深さは0.37mを測る。壁溝は検出されず、柱穴0491SPと0492SPのみが確認された。灰軸陶器（8）が出土しており東山72号窯式期に位置づけられる。

1000SI（第6図） 11C区東部中央3面に所在する竪穴建物跡である。井戸0999SEなどに破壊され多くの部分は不明だが、平面形は4.40m以上×3.67mの隅丸方形とみられる。方位は南北軸に対して約45度振れ、深さは0.12mを測る。壁溝は存在しないが、柱穴1016SP～1020SPが確認された。灰軸陶器などが出土しており平安時代後期と推測される。

1006SI（第6図） 11C区3面南東端部にある竪穴建物跡で、北西隅部のみ確認された。南部は1009SKなどに壊され不明だが、深さは0.10mを測る。方位は南北軸に対してほぼ併行し、壁溝は1025SDが存在する。主柱穴1024SPが確認された。須恵器杯身（1）などが出土しており、時期は8世



第5図 古代の竪穴建物跡遺構図(1)

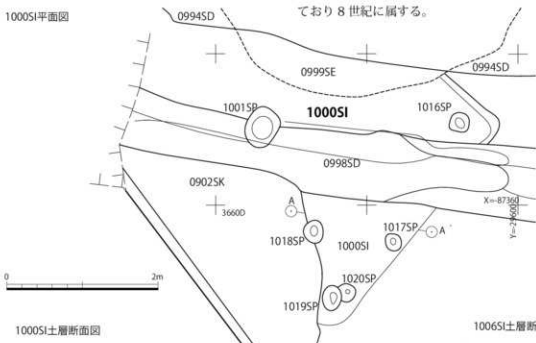
紀頃と推定される。

(3) 土坑

土坑は多数確認されているが、この時期に位置づけられるものは少ない。ここでは以下の2基の事例を紹介する。

0359SK 11A区3面中央部に検出された深さ

1000SI平面図



1000SI土層断面図



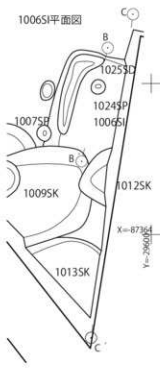
- 1 2.5%ACに土壌シルト(10%AC)4層シルト4層
- 2 2.5%ACに土壌シルト(10%AC)4層シルト4層
- 3 2.5%ACに土壌シルト(10%AC)4層シルト4層
- 4 2.5%ACに土壌シルト(10%AC)4層シルト4層

1006SI土層断面図

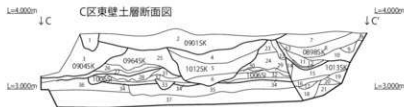


- 1 2.5%ACに土壌シルト(10%AC)4層シルト4層
- 2 2.5%ACに土壌シルト(10%AC)4層シルト4層
- 3 2.5%ACに土壌シルト(10%AC)4層シルト4層
- 4 2.5%ACに土壌シルト(10%AC)4層シルト4層
- 5 2.5%ACに土壌シルト(10%AC)4層シルト4層
- 6 2.5%ACに土壌シルト(10%AC)4層シルト4層

1006SI平面図



C区東壁土層断面図



- 1 2.5%ACに土壌シルト(10%AC)4層シルト4層
- 2 2.5%ACに土壌シルト(10%AC)4層シルト4層
- 3 2.5%ACに土壌シルト(10%AC)4層シルト4層
- 4 2.5%ACに土壌シルト(10%AC)4層シルト4層
- 5 2.5%ACに土壌シルト(10%AC)4層シルト4層
- 6 2.5%ACに土壌シルト(10%AC)4層シルト4層
- 7 2.5%ACに土壌シルト(10%AC)4層シルト4層
- 8 2.5%ACに土壌シルト(10%AC)4層シルト4層
- 9 2.5%ACに土壌シルト(10%AC)4層シルト4層
- 10 2.5%ACに土壌シルト(10%AC)4層シルト4層
- 11 2.5%ACに土壌シルト(10%AC)4層シルト4層
- 12 2.5%ACに土壌シルト(10%AC)4層シルト4層
- 13 2.5%ACに土壌シルト(10%AC)4層シルト4層
- 14 2.5%ACに土壌シルト(10%AC)4層シルト4層
- 15 2.5%ACに土壌シルト(10%AC)4層シルト4層
- 16 2.5%ACに土壌シルト(10%AC)4層シルト4層
- 17 2.5%ACに土壌シルト(10%AC)4層シルト4層
- 18 2.5%ACに土壌シルト(10%AC)4層シルト4層
- 19 2.5%ACに土壌シルト(10%AC)4層シルト4層
- 20 2.5%ACに土壌シルト(10%AC)4層シルト4層
- 21 2.5%ACに土壌シルト(10%AC)4層シルト4層
- 22 2.5%ACに土壌シルト(10%AC)4層シルト4層
- 23 2.5%ACに土壌シルト(10%AC)4層シルト4層
- 24 2.5%ACに土壌シルト(10%AC)4層シルト4層
- 25 2.5%ACに土壌シルト(10%AC)4層シルト4層
- 26 2.5%ACに土壌シルト(10%AC)4層シルト4層
- 27 2.5%ACに土壌シルト(10%AC)4層シルト4層
- 28 2.5%ACに土壌シルト(10%AC)4層シルト4層
- 29 2.5%ACに土壌シルト(10%AC)4層シルト4層
- 30 2.5%ACに土壌シルト(10%AC)4層シルト4層
- 31 2.5%ACに土壌シルト(10%AC)4層シルト4層
- 32 2.5%ACに土壌シルト(10%AC)4層シルト4層
- 33 2.5%ACに土壌シルト(10%AC)4層シルト4層
- 34 2.5%ACに土壌シルト(10%AC)4層シルト4層
- 35 2.5%ACに土壌シルト(10%AC)4層シルト4層
- 36 2.5%ACに土壌シルト(10%AC)4層シルト4層
- 37 2.5%ACに土壌シルト(10%AC)4層シルト4層

第6図 古代の堅い建物跡遺構図(2)

0.43mを測る土坑で、平面形は0.94m × 0.60m以上の楕円形を呈する。灰軸陶器など(9～11)が出土している。

1010SK 11C区3面南東端に所在する深さ0.44mを測る土坑で、平面形は0.69m × 0.50m以上の楕円形を呈する。須恵器杯身(3・4)が出土しており8世紀に属する。

第3節 中世の遺構

(1) 遺構の概要

鎌倉時代から室町時代前期までのいわゆる城下町期よりも前段階の遺構も、東部の調査区(11A区～11C区)で確認された。旧河道の左岸に堆積する浅黄色シルト(地山)上面で検出されるが、残存状況は不良である。検出された遺構は井戸・溝・竪穴状遺構・土坑などがある。

(2) 溝

確実に城下町以前の中世に属する溝は3条のみである。

09965D (第7図) 11B区5面西半部で発見された大溝で、幅2.33m、深さ1.26mを測る。北東から南西方向に流れており、北部は調査区外に拡がり、南部は0631SEなどにより破壊され不明である。また、大形土坑0893SKと重複しており、この部分の形状の特定は難しい状態である。南部は南側にや

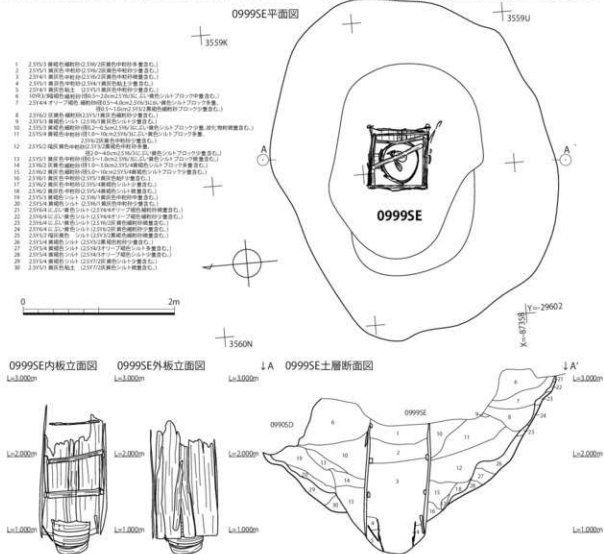
や曲がり、溝の形状は直線的ではない。形状からみて区画溝の可能性は低いとみられる。上位で大窠第1段階の遺物が含まれるが概ね13世紀から14世紀に属すると推測される。

09945D・09985D (第7図) 11C区3面東半部に所在する平行して東西方向に走る溝2条である。南溝09985Dは幅0.94m、深さ0.31mを、北溝09945Dは幅1.32m、深さ0.55mをそれぞれ測る。09985Dからは白土原窯式期～明和窯式期に属する東濃型山茶碗が出土している。一方、09945Dは09995Eを埋積した後に掘削され、その後古瀬戸後IV期の土坑0993SKが存在した。09945Dからは古瀬戸後IV期新段階に属する陶器が含まれるが、遺構の切り合い関係と09985Dとの関連からみて13世紀代に属すると判断したい。

(3) 井戸

中世に属する井戸は1基のみが確認された。

09995E (第8図) 11C区3面東部中央で検出さ



第8図 09995E遺構図

れた井戸である。堀形の平面形は4.50m×3.84mの楕円形を呈し、そのほぼ中央に木製井戸側が設置されていた。方形縦板組横支柱式井戸で、水溜部は直径約0.45mの曲物筒が2段重ねられた状態で設置されていた。井戸側は平面形が約0.80mの方形を呈するもので、ほぼ組みされた材木の外側に最長で1.60mの板材を縦置きに3～5枚並べて構築された。四隅部には斜めに配置された細長い縦板が補助材として設置された部分があり、南東隅と北東隅と東辺中央部には半蔵された竹材が配置されていた。水溜部には折敷底板(1041)が、堀形南部の壁付近で尾張型第6型式に属する山茶碗と小皿がほぼ完形で1点ずつ出土した。構築時期は13世紀中頃と推定される。なお、上位に存在する城下町期の土坑0906SKからは13～14世紀に属する遺物(23～28)も出土しており、この井戸に関連する資料かもしれない。

(4) 竪穴状遺構

今回の調査では竪穴状遺構がいくつか確認されているが、概ね城下町期に属するものばかりであるが、この時期に位置づけられるものが1基存在する。

08685I 11B区4面中央部南端で検出された2.90m以上×1.00m以上の方形プランを持つ深さ0.24mの浅い土坑である。内部に0891SP・0892SD・0893SPなどが存在するが、同時期に位置づけられるかは確定的ではない。大畑大洞窯式期から脇ノ鳥窯式期の山茶碗が出土している。

(5) 土坑

土坑は多数確認されており、この時期に位置づけられるものも存在するとみられるが、確実な遺構を抽出することができなかった。

第4節 城下町期の遺構

(1) 遺構の概要

今回検出された遺構の大部分は、清須城が本格的に機能した城下町期(1478年～1613年)に属する。城下町期の遺構は3期6段階に区分されており、本来は時期ごとに遺構を紹介するのが望ましいが、多くの困難が伴う。ここでは城下町期全体で種別に紹介することとしたい。検出された遺構は多岐にわたり、掘立柱建物跡・溝・井戸・竪穴状遺構・炉跡・土坑などがある。

(2) 掘立柱柵列

柱穴は全時代を含めて全部で735基存在する。

柱根が残存するものはなく、根石を持つものが31基確認された。これらの柱穴は全て掘立柱柵列か掘立柱建物を構成したと思われる。ここでは掘立柱柵列2条と掘立柱建物13棟を想定したが、本来はこの想定以上に建物跡が所在したと想像される。また、掘立柱柵列は掘立柱建物跡の一部である可能性を完全に否定できない。

10285A (第9図) 11A区1面中央部に所在する柵列で、0134SP・0133SP・0049SP・0063SP・0070SP・0067SPで構成される。全長5.50mを測り、0133SP・0049SP・0070SPには根石が据えられていた。出土遺物が少ないため時期は特定できない。

10295A (第9図) 11A区3面中央部にある柵列で、0338SP・0291SP・0308SPで構成される。全長9.10mを測り、0308SPには根石が据えられ、古瀬戸後Ⅳ期新段階の陶器が出土した。検出状況は城下町期Ⅱ期と推測されるが、Ⅰ期の可能性もある。

(3) 掘立柱建物跡

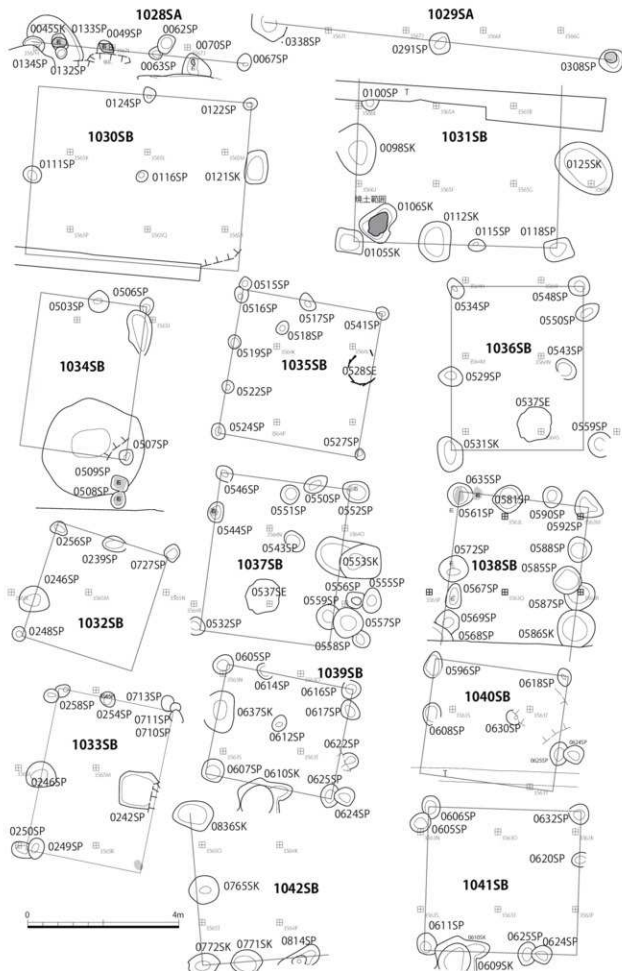
今回推定できた城下町期の掘立柱建物跡は13棟存在する。

10305B (第9図) 11A区1面南東端で検出された2間×1間以上の掘立柱建物跡で、約5.6m×2.3m以上の規模を持つ。柱穴0124SP・0122SP・0121SK・0111SPで構成され、北西隅部と南端部の柱穴は確認されていない。0116SPが棟持柱の可能性がある。出土遺物は少なく、時期は不明である。

10315B (第9図) 11A区1面で検出された東部南端にある3間×2間以上の掘立柱建物跡である。約5.3m×2.5m以上の規模で、柱穴0125SK・0118SP・0115SP・0112SK・0105SK・0098SKで構成され、北部の状況は調査区外に拡がり不明である。南西隅にある0106SPは焼土が確認されており跡である可能性がある。0125SPから出土した遺物から城下町期Ⅲ-1期と推定される。

10325B (第9図) 11A区2面東端に所在する2間×2間の掘立柱建物跡で、規模は約3.2m×約3.1mを測る。柱穴0248SP・0246SP・0256SP・0239SP・0727SPで構成され、南東部の柱穴は確認されていない。各柱穴からの出土遺物は少なく、時期は不明。

10335B (第9図) 11A区2面東端で確認された2間×2間の掘立柱建物跡である。約4.3m×約3.1mの規模を持ち、柱穴0771SP・0242SP・0250SP・0246SP・0258SP・0254SPで構成される。



第9図 城下町期の掘立柱建物跡遺構図

南東隅部には根石らしき石材が確認されるが、対応関係は不明である。出土遺物は少なく、時期は不明である。

10345B (第9図) 11B区1面西端の区画溝0513SD西部で検出された掘立柱建物跡である。重複する遺構が多くプランは不明な部分が多いが南北長は約4.1mを測る。柱穴0503SP・0506SP・0507SPで構成され、建物外南東に埋設石0508SP・0509SPが設置された。検出状況からみて城下町期Ⅲ期に属する。

10355B (第9図) 11B区1面西部で区画溝0513SDと0535SDの間に所在する2間×3間の掘立柱建物跡で、約3.7m×約3.8mの規模を持つ。柱穴0516SP・0517SP・0541SP・0527SP・0524SP・0522SP・0519SPで構成され、柱間はほぼ等間隔である。東端部に井戸0528SEの井戸側が存在する。検出状況からみて城下町期Ⅲ期と思われる。

10365B (第9図) 11B区1面中央部で区画溝0535SDと0571SDの間に所在する1間×2間の掘立柱建物跡で、約3.5m×約4.3mの規模を持つ。柱穴0548SP・0559SP・0531SP・0529SP・0534SPで構成され、0550SP・0543SPも該当するかもしれない。南部に井戸0537SEの井戸側が存在する。0529SP出土遺物と検出状況からみて城下町期Ⅲ期と思われる。

10375B (第9図) 11B区1面中央部で区画溝0535SDと0571SDの間に所在する2間×3間の掘立柱建物跡で、柱穴0546SP・0550SP・0552SP(・0553SK)・0559SP・0532SP・0544SPで構成される。約3.4m×約4.2mの規模で、0543SPが棟持柱の可能性があり。0556SPなどの存在から建て直しが行われた可能性もある。南部に井戸0537SEの井戸側が存在する。検出状況から城下町期Ⅲ期と推定される。

10385B (第9図) 11B区1面東部で区画溝0571SDと0602SDの間に所在する3間×3間以上の掘立柱建物跡で、規模は約3.4m×3.9m以上を測る。柱穴0561SP・0581SP・0590SP・0592SP・0588SP・0587SP・0569SP・0572SPなどで構成される。0561SPは石理設遺構とみられ隅角部の柱穴に相応しくないかもしれない。0590SP・0572SPなどの出土遺物と検出状況からみて城下町期Ⅲ期とみられる。

10395B (第9図) 11B区1面東端で区画溝0602SDの東側に展開する2間×2間の掘立柱建物跡で、約3.0m×約3.3mの規模を持つ。柱穴0605SP・0614SP・0616SP・0622SP・0625SP・0610SK・0607SPなどで構成される。0612SPが棟持柱の可能性があり、西辺中央には整理設遺構0637SKがある。0610SKで大窯第3段階の陶器が出土したが、検出状況からみて城下町期Ⅲ期と考えられる。

10405B (第9図) 11B区1面東端で区画溝0602SDの東側に展開する1間×2間以上の掘立柱建物跡で、柱穴0596SP・0618SP(・0625SP)・0608SPで構成される。約3.5m×2.1m以上を測り、0630SPが棟持柱の可能性があり。0596SPで大窯第3段階の陶器が出土したが、検出状況からみて城下町期Ⅲ期と推定される。

10415B (第9図) 11B区1面東端で区画溝0602SDの東側に展開する2間×2間?の掘立柱建物跡で、約3.8m×約4.0mの規模を持つ。柱穴0606SP・0632SP・0620SP(・0625SP)・0611SPで構成される。0606SPで大窯第3段階の陶器が出土したが、検出状況からみて城下町期Ⅲ期と推測される。

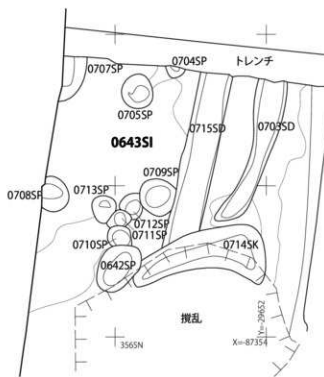
10425B (第9図) 11B区3面南西で検出された2間以上×2間以上の掘立柱建物跡で、北側と東側の状況は不明である。柱穴0836SK・0765SK・0772SK・0771SK・0814SPで構成される。0836SK・0765SKから大窯第3段階の陶器が出土しており、城下町期Ⅱ-2期に属すると思われる。

(4) 竪穴状遺構

城下町期の遺構には、床面を少し下げて内部に溝・柱穴・跡などが構築された施設がある。平面形全体を具体的に知る事例はないが、おそらく方形を呈していたと思われ、ここではこうした遺構を竪穴状遺構と称する。竪穴状遺構は全部で9基確認された。

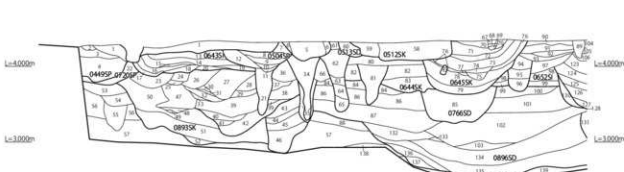
06435I (第10図) 11B区2面北西部で検出された竪穴状遺構である。土坑0893SKが埋積した後には床面が灰黄色細粒砂で整地されて作られたもので、平面プランは不明。床面(第10図)で焼土を含む土坑0708SPなどの遺構が確認され、おそらく東端部では0513SDが共存すると推定した。0708SPの周囲を25cmメッシュで土壌を採取し水洗篩別作業した結果、鍛造剥片や粒状浄などが出土したことから、この部分で鍛錬鍛冶工程が操業

06435I平面図(上面)



06435Iなど土層断面図

Ls.5,000m



- 1 235V(雑草)土層の埋積物(235V)の埋積物(埋積物)の少量を含む。
- 2 235V(雑草)土層の埋積物(235V)の埋積物(埋積物)の少量を含む。
- 3 235V(雑草)土層の埋積物(235V)の埋積物(埋積物)の少量を含む。
- 4 235V(雑草)土層の埋積物(235V)の埋積物(埋積物)の少量を含む。
- 5 235V(雑草)土層の埋積物(235V)の埋積物(埋積物)の少量を含む。
- 6 235V(雑草)土層の埋積物(235V)の埋積物(埋積物)の少量を含む。
- 7 235V(雑草)土層の埋積物(235V)の埋積物(埋積物)の少量を含む。
- 8 235V(雑草)土層の埋積物(235V)の埋積物(埋積物)の少量を含む。
- 9 235V(雑草)土層の埋積物(235V)の埋積物(埋積物)の少量を含む。
- 10 235V(雑草)土層の埋積物(235V)の埋積物(埋積物)の少量を含む。
- 11 235V(雑草)土層の埋積物(235V)の埋積物(埋積物)の少量を含む。
- 12 235V(雑草)土層の埋積物(235V)の埋積物(埋積物)の少量を含む。
- 13 235V(雑草)土層の埋積物(235V)の埋積物(埋積物)の少量を含む。
- 14 235V(雑草)土層の埋積物(235V)の埋積物(埋積物)の少量を含む。
- 15 235V(雑草)土層の埋積物(235V)の埋積物(埋積物)の少量を含む。
- 16 235V(雑草)土層の埋積物(235V)の埋積物(埋積物)の少量を含む。
- 17 235V(雑草)土層の埋積物(235V)の埋積物(埋積物)の少量を含む。
- 18 235V(雑草)土層の埋積物(235V)の埋積物(埋積物)の少量を含む。
- 19 235V(雑草)土層の埋積物(235V)の埋積物(埋積物)の少量を含む。
- 20 235V(雑草)土層の埋積物(235V)の埋積物(埋積物)の少量を含む。
- 21 235V(雑草)土層の埋積物(235V)の埋積物(埋積物)の少量を含む。
- 22 235V(雑草)土層の埋積物(235V)の埋積物(埋積物)の少量を含む。
- 23 235V(雑草)土層の埋積物(235V)の埋積物(埋積物)の少量を含む。
- 24 235V(雑草)土層の埋積物(235V)の埋積物(埋積物)の少量を含む。
- 25 235V(雑草)土層の埋積物(235V)の埋積物(埋積物)の少量を含む。
- 26 235V(雑草)土層の埋積物(235V)の埋積物(埋積物)の少量を含む。
- 27 235V(雑草)土層の埋積物(235V)の埋積物(埋積物)の少量を含む。
- 28 235V(雑草)土層の埋積物(235V)の埋積物(埋積物)の少量を含む。
- 29 235V(雑草)土層の埋積物(235V)の埋積物(埋積物)の少量を含む。
- 30 235V(雑草)土層の埋積物(235V)の埋積物(埋積物)の少量を含む。
- 31 235V(雑草)土層の埋積物(235V)の埋積物(埋積物)の少量を含む。
- 32 235V(雑草)土層の埋積物(235V)の埋積物(埋積物)の少量を含む。
- 33 235V(雑草)土層の埋積物(235V)の埋積物(埋積物)の少量を含む。
- 34 235V(雑草)土層の埋積物(235V)の埋積物(埋積物)の少量を含む。
- 35 235V(雑草)土層の埋積物(235V)の埋積物(埋積物)の少量を含む。
- 36 235V(雑草)土層の埋積物(235V)の埋積物(埋積物)の少量を含む。
- 37 235V(雑草)土層の埋積物(235V)の埋積物(埋積物)の少量を含む。
- 38 235V(雑草)土層の埋積物(235V)の埋積物(埋積物)の少量を含む。
- 39 235V(雑草)土層の埋積物(235V)の埋積物(埋積物)の少量を含む。
- 40 235V(雑草)土層の埋積物(235V)の埋積物(埋積物)の少量を含む。
- 41 235V(雑草)土層の埋積物(235V)の埋積物(埋積物)の少量を含む。
- 42 235V(雑草)土層の埋積物(235V)の埋積物(埋積物)の少量を含む。
- 43 235V(雑草)土層の埋積物(235V)の埋積物(埋積物)の少量を含む。
- 44 235V(雑草)土層の埋積物(235V)の埋積物(埋積物)の少量を含む。
- 45 235V(雑草)土層の埋積物(235V)の埋積物(埋積物)の少量を含む。

- 46 235V(雑草)土層の埋積物(235V)の埋積物(埋積物)の少量を含む。
- 47 235V(雑草)土層の埋積物(235V)の埋積物(埋積物)の少量を含む。
- 48 235V(雑草)土層の埋積物(235V)の埋積物(埋積物)の少量を含む。
- 49 235V(雑草)土層の埋積物(235V)の埋積物(埋積物)の少量を含む。
- 50 235V(雑草)土層の埋積物(235V)の埋積物(埋積物)の少量を含む。
- 51 235V(雑草)土層の埋積物(235V)の埋積物(埋積物)の少量を含む。
- 52 235V(雑草)土層の埋積物(235V)の埋積物(埋積物)の少量を含む。
- 53 235V(雑草)土層の埋積物(235V)の埋積物(埋積物)の少量を含む。
- 54 235V(雑草)土層の埋積物(235V)の埋積物(埋積物)の少量を含む。
- 55 235V(雑草)土層の埋積物(235V)の埋積物(埋積物)の少量を含む。
- 56 235V(雑草)土層の埋積物(235V)の埋積物(埋積物)の少量を含む。
- 57 235V(雑草)土層の埋積物(235V)の埋積物(埋積物)の少量を含む。
- 58 235V(雑草)土層の埋積物(235V)の埋積物(埋積物)の少量を含む。
- 59 235V(雑草)土層の埋積物(235V)の埋積物(埋積物)の少量を含む。
- 60 235V(雑草)土層の埋積物(235V)の埋積物(埋積物)の少量を含む。
- 61 235V(雑草)土層の埋積物(235V)の埋積物(埋積物)の少量を含む。
- 62 235V(雑草)土層の埋積物(235V)の埋積物(埋積物)の少量を含む。
- 63 235V(雑草)土層の埋積物(235V)の埋積物(埋積物)の少量を含む。
- 64 235V(雑草)土層の埋積物(235V)の埋積物(埋積物)の少量を含む。
- 65 235V(雑草)土層の埋積物(235V)の埋積物(埋積物)の少量を含む。
- 66 235V(雑草)土層の埋積物(235V)の埋積物(埋積物)の少量を含む。
- 67 235V(雑草)土層の埋積物(235V)の埋積物(埋積物)の少量を含む。
- 68 235V(雑草)土層の埋積物(235V)の埋積物(埋積物)の少量を含む。
- 69 235V(雑草)土層の埋積物(235V)の埋積物(埋積物)の少量を含む。
- 70 235V(雑草)土層の埋積物(235V)の埋積物(埋積物)の少量を含む。
- 71 235V(雑草)土層の埋積物(235V)の埋積物(埋積物)の少量を含む。
- 72 235V(雑草)土層の埋積物(235V)の埋積物(埋積物)の少量を含む。
- 73 235V(雑草)土層の埋積物(235V)の埋積物(埋積物)の少量を含む。
- 74 235V(雑草)土層の埋積物(235V)の埋積物(埋積物)の少量を含む。
- 75 235V(雑草)土層の埋積物(235V)の埋積物(埋積物)の少量を含む。
- 76 235V(雑草)土層の埋積物(235V)の埋積物(埋積物)の少量を含む。
- 77 235V(雑草)土層の埋積物(235V)の埋積物(埋積物)の少量を含む。
- 78 235V(雑草)土層の埋積物(235V)の埋積物(埋積物)の少量を含む。
- 79 235V(雑草)土層の埋積物(235V)の埋積物(埋積物)の少量を含む。
- 80 235V(雑草)土層の埋積物(235V)の埋積物(埋積物)の少量を含む。
- 81 235V(雑草)土層の埋積物(235V)の埋積物(埋積物)の少量を含む。
- 82 235V(雑草)土層の埋積物(235V)の埋積物(埋積物)の少量を含む。
- 83 235V(雑草)土層の埋積物(235V)の埋積物(埋積物)の少量を含む。
- 84 235V(雑草)土層の埋積物(235V)の埋積物(埋積物)の少量を含む。
- 85 235V(雑草)土層の埋積物(235V)の埋積物(埋積物)の少量を含む。

第10区 城下町期の竪穴状遺構 遺構図(1)

された可能性が考えられる。また、床面の下面で0764SPなどの遺構が確認された(2面遺構図)。下面で大窠第3段階の瀬戸・美濃窯産陶器が出土しており、上面は城下町期Ⅲ-1期、下面は城下町期Ⅱ-2期と推測される。

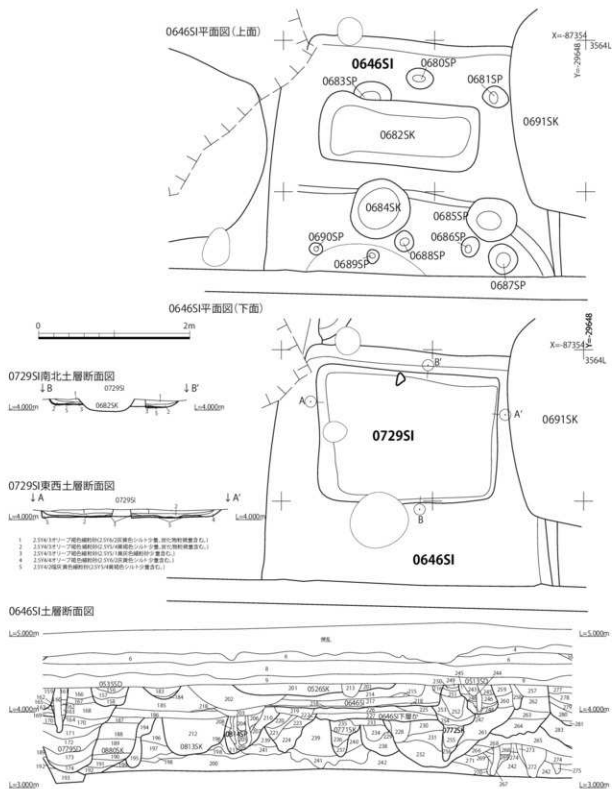
06465I(第11図) 11B区2面南西部で確認された竪穴状遺構である。区画溝0513SDとは土手を挟んで東側に展開する。平面プランは方形を呈すると思われ、床面は細粒砂で整地され、オリーブ褐色細粒砂で埋積されていた。床面は2面存在したとみられ、上面床面(第11図)で長方形土坑0682SKなどの遺構が、下面床面(第11図)で竪穴状遺構0729SIが確認された。大窠第4段階の瀬戸・美濃窯産陶器が出土しており、上面は城下町期Ⅲ期に属する。下面の時期は不明だが、城下町期Ⅱ-2期と推測される。

0652SI(第12図) 11B区2面中央部北端に所在する竪穴状遺構である。西脇は区画溝0535SDに切れ、南辺と東辺の形状は不明である。床面は灰白色細粒砂などで繰り返し整地され、整地面は平坦

ではなく中央部で盛り上がる部分があり、そこに溝0696SDや溝0736SDなどが設置される。床面は3面以上存在したとみられ、上面床面(第12図)で炉跡0679SLなどの遺構が、中面床面(第12図)で溝0696SDなどの遺構が、下面床面(2面遺構図)で溝0736SDなどが確認された。下面床面の溝0736SD周辺にて25cmメッシュで土壌を採取し水

洗篩別作業したが、芳しい結果は得られなかった。大塚第4段階の瀬戸・美濃窯産陶器が出土しており、上面は城下町期Ⅲ期に属する。中下面の時期は不明だが、城下町期Ⅱ期と推測される。

0729SI(第11図) 11B区2面南西部の竪穴状遺構0646SIの下面床面確認された。2.35m×1.73mの隅丸長方形プランで、深さは0.13mを測る。



第11図 城下町期の竪穴状遺構 遺構図(2)

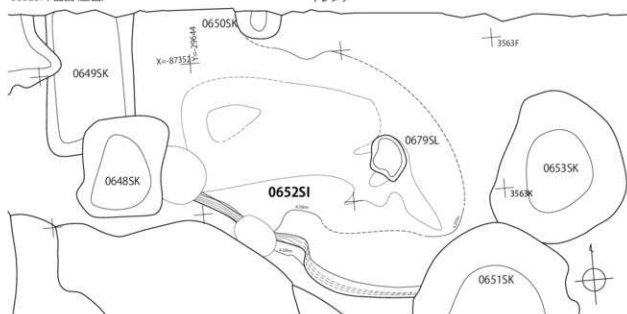
内部施設は特になく、大窠第1段階の瀬戸・美濃窯産陶器が出土した。状況からみて城下町期Ⅱ-2期か。

0730SI 11B区2面南西部で確認された竪穴状遺構で南西端のみを検出した。内部に柱穴0743SP～0745SPがある。大窠第3段階の遺物が出土し城下町期Ⅱ-2期と思われる。

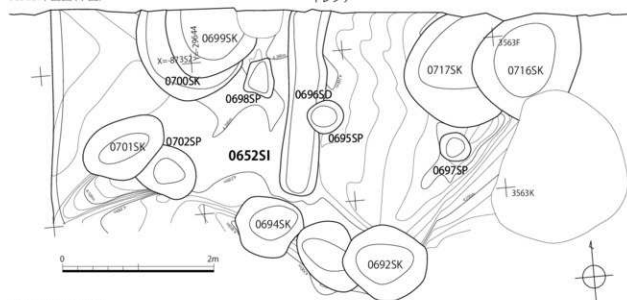
0916SI (第13図) 11C区1面西北端にある

竪穴状遺構である。東西両肩は狭い土手で仕切れられ、東西間は約3.1mを測る。床面は灰白色細粒砂などで繰り返し整地され床面は3面以上存在したとみられる。上面床面(第13図)で溝0928SDと0933SDおよびが跡0939SLなどの遺構が、中面床面(第13図)で土坑0949SKなどの遺構が、下面床面(1面遺構図)で土坑0978SKなどが確認された。

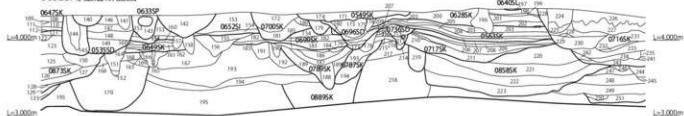
0652SI平面図(上面)



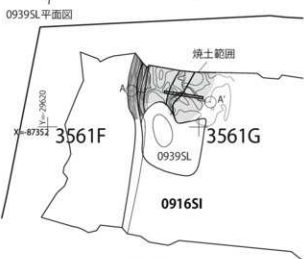
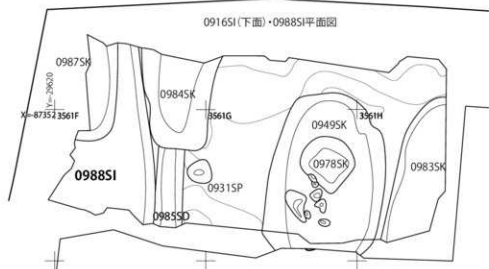
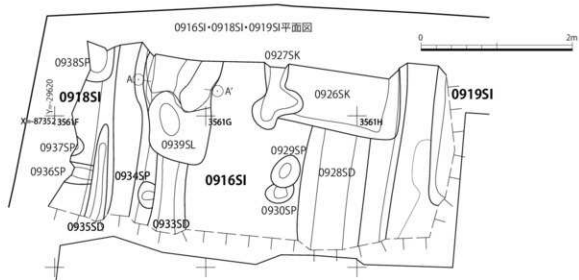
0652SI平面図(下面)



0652SI等土層断面図



第12図 城下町期の竪穴状遺構 遺構図(3)



0989SI土層断面図



0939SI土層断面図



- 1 7.5%Wt%以上の焼土を含む土層(焼土層)の存在を示す。
- 2 10%Wt%以上の焼土を含む土層(焼土層)の存在を示す。
- 3 15%Wt%以上の焼土を含む土層(焼土層)の存在を示す。
- 4 20%Wt%以上の焼土を含む土層(焼土層)の存在を示す。
- 5 25%Wt%以上の焼土を含む土層(焼土層)の存在を示す。
- 6 30%Wt%以上の焼土を含む土層(焼土層)の存在を示す。
- 7 35%Wt%以上の焼土を含む土層(焼土層)の存在を示す。
- 8 40%Wt%以上の焼土を含む土層(焼土層)の存在を示す。
- 9 45%Wt%以上の焼土を含む土層(焼土層)の存在を示す。
- 10 50%Wt%以上の焼土を含む土層(焼土層)の存在を示す。
- 11 55%Wt%以上の焼土を含む土層(焼土層)の存在を示す。
- 12 60%Wt%以上の焼土を含む土層(焼土層)の存在を示す。
- 13 65%Wt%以上の焼土を含む土層(焼土層)の存在を示す。
- 14 70%Wt%以上の焼土を含む土層(焼土層)の存在を示す。
- 15 75%Wt%以上の焼土を含む土層(焼土層)の存在を示す。
- 16 80%Wt%以上の焼土を含む土層(焼土層)の存在を示す。
- 17 85%Wt%以上の焼土を含む土層(焼土層)の存在を示す。
- 18 90%Wt%以上の焼土を含む土層(焼土層)の存在を示す。
- 19 95%Wt%以上の焼土を含む土層(焼土層)の存在を示す。
- 20 100%Wt%以上の焼土を含む土層(焼土層)の存在を示す。
- 21 2.5%Wt%以上の焼土を含む土層(焼土層)の存在を示す。
- 22 2.5%Wt%以上の焼土を含む土層(焼土層)の存在を示す。
- 23 2.5%Wt%以上の焼土を含む土層(焼土層)の存在を示す。
- 24 2.5%Wt%以上の焼土を含む土層(焼土層)の存在を示す。
- 25 2.5%Wt%以上の焼土を含む土層(焼土層)の存在を示す。
- 26 2.5%Wt%以上の焼土を含む土層(焼土層)の存在を示す。
- 27 2.5%Wt%以上の焼土を含む土層(焼土層)の存在を示す。
- 28 2.5%Wt%以上の焼土を含む土層(焼土層)の存在を示す。
- 29 2.5%Wt%以上の焼土を含む土層(焼土層)の存在を示す。
- 30 2.5%Wt%以上の焼土を含む土層(焼土層)の存在を示す。

第13図 城下町期の竪穴状遺構 遺構図(4)

登窯第1小期の瀬戸・美濃窯産陶器が出土しており、概ね城下町期III期に属する。

0918SI (第13図) 0916SIに西接する竪穴状遺構である。大部分は調査区外に拡がり不明な点が多い。下に位に0988SIが存在する。時期は城下町期III期と思われる。

0919SI (第13図) 0916SIに東接する竪穴状遺構である。大部分は調査上のミスで重機により掘削してしまい滅失した。時期は城下町期III期と思われる。

0988SI (第13図) 0918SIの下位に存在する竪穴状遺構である。大部分は調査区外に拡がり不明な点が多い。下に1015SKや0982SPが存在し、これらを整地して構築された。時期は城下町期III期と推定される。

(5) 溝

城下町期の溝にはさまざまな規模のものがあるが、今回の調査では幅が1m以下の小規模な溝が多く確認された。具体的事例を紹介する。

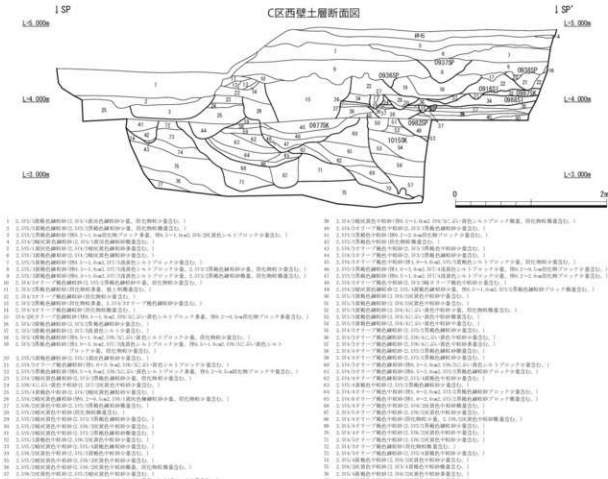
1385D・1425D 10A区2面南東部で検出された南北方向の小規模溝で、幅0.3m前後、深さ0.1m

を測る。1425Dから大窯第4段階の瀬戸・美濃窯産陶器が出土しており、城下町期III期と推測される。

4185D・4195D 10B区1面東半部に所在する平行して南北方向に走る溝2条である。西溝4185Dは幅1.03m、深さ0.62mを、東溝4195Dは幅1.28m、深さ0.58mをそれぞれ測る。登窯第1小期に属する陶器類が出土しており、城下町期III期と考えられるが、443SDの掘り直しである可能性が高い。

443SD 10B区2面南東部で確認された南北方向の小規模溝で、4185D・4195Dよりもやや東側に存在する幅1.2m前後、深さ0.63mを測る。登窯第1小期に属する陶器類が出土しており、城下町期III期と考えられる。アカシの貝殻も出土した。

462NR (第15図) 10B区2面中央部に所在する北北東-南南西方向に走る大溝である。幅は4.0m～6.0mと不定形にやや蛇行することなどから調査時点では自然流路と判断されていた。深さ0.8m以上を測る。大窯第2段階を中心とする陶器類が出土しており、城下町期I～II期と考えられる。調査区北側のエリアでは城下町期I～II期には幅3～5m



第14図 城下町期の竪穴状遺構 遺構図(5)

の規模を持つ堀で囲まれた武家屋敷が展開したと考察されているので、ここでは形状に問題があるものの屋敷を囲む大溝として推定しておく。

0027SD・0031SD・0036SD 11A区1面 西北部で検出された東南東-北北西方向の小規模溝で、0027SDは幅0.42m、深さ0.23mを、0031SDは幅0.14m、深さ0.04mを、0036SDは幅0.15m、深さ0.10mを測る。遺物はほとんど出土していないが、城下町期Ⅲ期と推測される。平行することから道路側溝か区画溝の可能性はある。

0069SD・0090SD 11A区1面中央部で確認された東西方向の小規模溝である。城下町期Ⅲ期と推測され、区画溝の可能性はある。

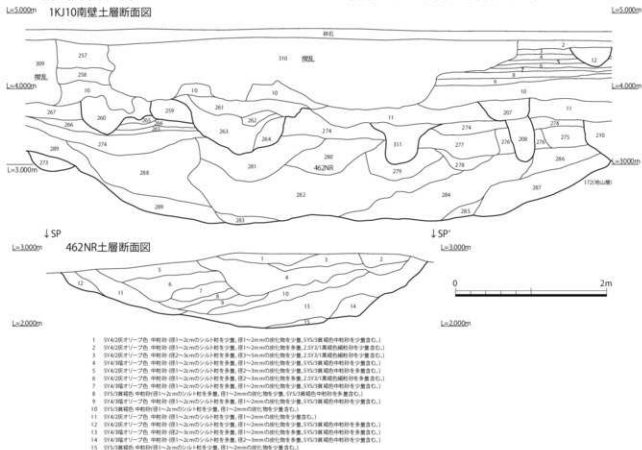
0457SD・0875SD・0460SD・0876SD 11A区4面と11B区4面に所在する東南東-西北西方向の溝である。0457SD・0875SDは幅0.71m、深さ0.20mを、0460SD・0876SDは幅0.83m、深さ0.31mを測り、約0.8m離れている。0457SDは北側に南北溝が接続する。両者とも東端は途中で収束し、西部は0454SKなどに切れ不明となっている。0457SDと0876SDは大竃第1段階、0460SDは大竃第3段階後半の陶器が出土しており、城下町期Ⅰ～Ⅱ期と推測される。

0466SD 11A区4面で確認されたおおむね南北方向に走る溝である。幅0.38m、深さ0.14mを測るが、両端の形状は不明である。0464SKとの重複関係からみて、0460SDと同時に存在した可能性は低い。出土遺物は少ないが、城下町期Ⅰ～Ⅱ期と推測される。

0513SD・0535SD・0571SD・0602SD (第16図)

11B区1面で検出された北北東-南南西方向の小規模溝である。11A区で調査区付近がⅢ期の町屋である可能性が高かったことから、11B区では検出面のやや上位から丁寧に検出を試みた結果確認されたものである。11A区にも同様の溝群が存在した可能性が考えられる。0513SDは幅0.49m、深さ0.29mを、0535SDは幅0.60m、深さ0.19mを、0571SDは幅0.48m、深さ0.11mを、0602SDは幅0.90m、深さ0.18mを測り、それぞれの溝心間距離は約5.6m、約6.2m、約5.2mとなっている。0513SDから大竃第4段階後半の陶器が出土しており、城下町期Ⅲ期と推測される。

0696SD・0736SD 11B区2面で確認された概ね南北方向に走る溝である。北壁土層断面で観察すると、0736SDが埋積され整地された後に0696SDが構築される状況が確認された。0696SDは幅



第15図 城下町期の溝 遺構図(1)

ぼ南北方向に走り、幅0.66m、深さ0.29mを測る。出土遺物は少ないが、検出状況からみて城下町期1期～Ⅱ-1期と思われる。

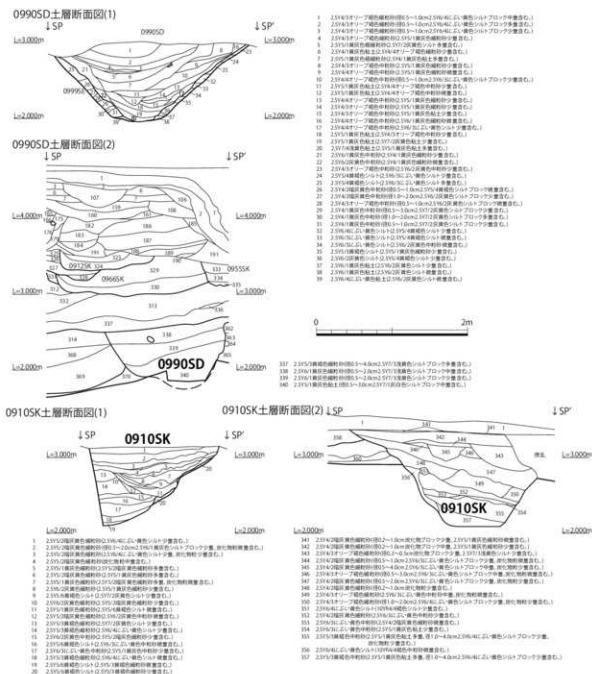
07995D (第16図) 11B区3面中央にある断面形はV字状を呈する南北方向の溝で、幅1.43m、深さ0.98mを測る。大窠第1段階の遺物が出土しており、城下町期1期に位置づけられる。

08155D (第16図) 11B区3面北東隅部で検出された大溝で、西北西-東南東方向に走る。断面形は下半がV字状を呈する南北方向の溝で、検出段階で幅3.40m、深さ0.45mを測るが、実際にはもう少し規模が大きいのと思われる。下部の地山は中粒砂

であるにも関わらず掘形は急傾斜となっており、土層断面の堆積状況を考え合わせると、堀などの施設の基礎構造である可能性も考えられる。大窠第1段階の遺物が出土しており、城下町期1期に位置づけられる。

09285D・09335D 11C区1面北西端に所在する竪穴状遺構09165Iで確認されたおおむね南北方向に走る溝である。09285Dは幅0.85m、深さ0.19mを、09335Dは幅0.41m、深さ0.14mを測る。両者から大窠第4段階後半の瀬戸・美濃製品が出土しており、城下町期Ⅲ期と推定される。

09355D 11C区1面北西端にある竪穴状遺構



第17図 城下町期の溝 遺構図(3)

0918SIで認められた概ね南北方向の溝である。幅0.29m、深さ0.11mを測る。大竈第4段階の陶器が出土しており、城下町期III期と推定される。

0985SD 11C区1面北西端に所在する竪穴状遺構0916SI下層で確認された南北溝で、幅0.36m、深さ0.11mを測る。時期は不明だが、城下町期II期か。

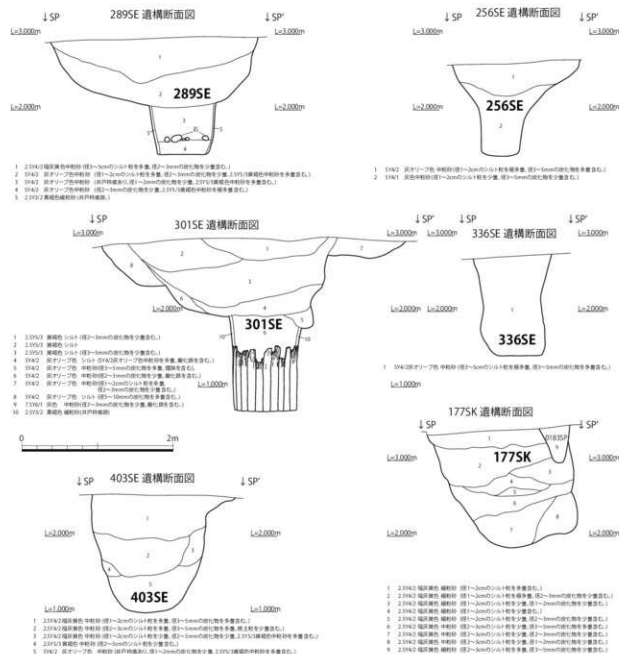
0990SD (第17図) 11C区3面北部で検出された東西溝で、幅2.66m、深さ1.05mを測る。斜面は45度程度を測り、底部の平坦面は幅0.50m以下である。大竈第3段階までの遺物が出土しており、城下町期I～II期に位置づけられる。

(6) 井戸

城下町期に属する井戸は13基が確認された。井戸側構造物が残存するものは全て結物筒が用いられており、井戸側の構造物が残存しないものも本来は結物筒が使用されたものと推察される。

256SE (第18図) 10A区3面東部で検出された井戸である。壺形の平面形は1.80m×1.66mの楕円形を呈し、検出面からの深さは1.23mを測る。井戸側は確認されず、すでに抜き取られたものと思われる。おそらく標高1.5m前後で湧水したのだろう。登竈第1小期の遺物が出土しており、城下町期III期に属する。

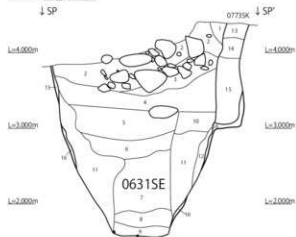
289SE (第18図) 10A区3面西端で確認された



第18図 城下町期の井戸 遺構面図(1)

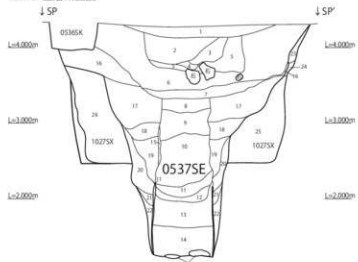
井戸で、堀形の平面形は3.93m × 2.76mの楕円形を呈し、検出面からの深さは1.69mを測る。井戸側は結物筒が腐食した土壌（黒褐色細粒砂）が残っていた。標高1.60m付近で円礫が散在しており、このレベルで湧水したものとみられる。大塚第3段階後半の遺物が出土しており、城下町期Ⅱ-2期かⅢ期に属する。

336SE(第18図) 10A区3面東部にある井戸で、堀形の平面形は1.09m × 1.02mの楕円形、深さは0.631SE土層断面図



- 1 2314(2)暗褐色細粒砂(砂)1.5m(2.0m)厚の層状中砂(中)多量。腐食(焼物残遺物含む)。
- 2 2315(2)暗褐色細粒砂(砂)1.5m(2.0m)厚の層状中砂(中)多量。腐食(焼物残遺物含む)。
- 3 2314(2)暗褐色細粒砂(砂)1.5m(2.0m)厚の層状中砂(中)多量。腐食(焼物残遺物含む)。
- 4 2314(2)暗褐色細粒砂(砂)1.5m(2.0m)厚の層状中砂(中)多量。腐食(焼物残遺物含む)。
- 5 2314(2)暗褐色細粒砂(砂)1.5m(2.0m)厚の層状中砂(中)多量。腐食(焼物残遺物含む)。
- 6 2314(2)暗褐色細粒砂(砂)1.5m(2.0m)厚の層状中砂(中)多量。腐食(焼物残遺物含む)。
- 7 2314(2)暗褐色細粒砂(砂)1.5m(2.0m)厚の層状中砂(中)多量。
- 8 2315(2)暗褐色細粒砂(砂)1.5m(2.0m)厚の層状中砂(中)多量。
- 9 2314(2)暗褐色細粒砂(砂)1.5m(2.0m)厚の層状中砂(中)多量。
- 10 2314(2)暗褐色細粒砂(砂)1.5m(2.0m)厚の層状中砂(中)多量。
- 11 2314(2)暗褐色細粒砂(砂)1.5m(2.0m)厚の層状中砂(中)多量。
- 12 2314(2)暗褐色細粒砂(砂)1.5m(2.0m)厚の層状中砂(中)多量。
- 13 2314(2)暗褐色細粒砂(砂)1.5m(2.0m)厚の層状中砂(中)多量。
- 14 2314(2)暗褐色細粒砂(砂)1.5m(2.0m)厚の層状中砂(中)多量。腐食(焼物残遺物含む)。
- 15 2314(2)暗褐色細粒砂(砂)1.5m(2.0m)厚の層状中砂(中)多量。
- 16 2315(2)暗褐色細粒砂(砂)1.5m(2.0m)厚の層状中砂(中)多量。

0537SE土層断面図



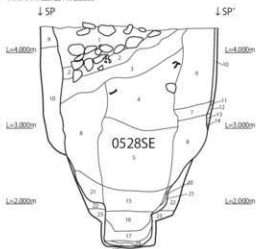
- 1 2314(2)暗褐色細粒砂(砂)1.5m(2.0m)厚の層状中砂(中)多量。腐食(焼物残遺物含む)。
- 2 2315(2)暗褐色細粒砂(砂)1.5m(2.0m)厚の層状中砂(中)多量。腐食(焼物残遺物含む)。
- 3 2315(2)暗褐色細粒砂(砂)1.5m(2.0m)厚の層状中砂(中)多量。腐食(焼物残遺物含む)。
- 4 2315(2)暗褐色細粒砂(砂)1.5m(2.0m)厚の層状中砂(中)多量。腐食(焼物残遺物含む)。
- 5 2315(2)暗褐色細粒砂(砂)1.5m(2.0m)厚の層状中砂(中)多量。
- 6 2315(2)暗褐色細粒砂(砂)1.5m(2.0m)厚の層状中砂(中)多量。
- 7 2315(2)暗褐色細粒砂(砂)1.5m(2.0m)厚の層状中砂(中)多量。
- 8 2314(2)暗褐色細粒砂(砂)1.5m(2.0m)厚の層状中砂(中)多量。腐食(焼物残遺物含む)。
- 9 2314(2)暗褐色細粒砂(砂)1.5m(2.0m)厚の層状中砂(中)多量。
- 10 2314(2)暗褐色細粒砂(砂)1.5m(2.0m)厚の層状中砂(中)多量。
- 11 2314(2)暗褐色細粒砂(砂)1.5m(2.0m)厚の層状中砂(中)多量。
- 12 2314(2)暗褐色細粒砂(砂)1.5m(2.0m)厚の層状中砂(中)多量。
- 13 2314(2)暗褐色細粒砂(砂)1.5m(2.0m)厚の層状中砂(中)多量。
- 14 2314(2)暗褐色細粒砂(砂)1.5m(2.0m)厚の層状中砂(中)多量。
- 15 2314(2)暗褐色細粒砂(砂)1.5m(2.0m)厚の層状中砂(中)多量。
- 16 2314(2)暗褐色細粒砂(砂)1.5m(2.0m)厚の層状中砂(中)多量。
- 17 2314(2)暗褐色細粒砂(砂)1.5m(2.0m)厚の層状中砂(中)多量。
- 18 2314(2)暗褐色細粒砂(砂)1.5m(2.0m)厚の層状中砂(中)多量。
- 19 2314(2)暗褐色細粒砂(砂)1.5m(2.0m)厚の層状中砂(中)多量。
- 20 2314(2)暗褐色細粒砂(砂)1.5m(2.0m)厚の層状中砂(中)多量。
- 21 2314(2)暗褐色細粒砂(砂)1.5m(2.0m)厚の層状中砂(中)多量。
- 22 2314(2)暗褐色細粒砂(砂)1.5m(2.0m)厚の層状中砂(中)多量。
- 23 2314(2)暗褐色細粒砂(砂)1.5m(2.0m)厚の層状中砂(中)多量。
- 24 2314(2)暗褐色細粒砂(砂)1.5m(2.0m)厚の層状中砂(中)多量。
- 25 2314(2)暗褐色細粒砂(砂)1.5m(2.0m)厚の層状中砂(中)多量。
- 26 2314(2)暗褐色細粒砂(砂)1.5m(2.0m)厚の層状中砂(中)多量。
- 27 2314(2)暗褐色細粒砂(砂)1.5m(2.0m)厚の層状中砂(中)多量。
- 28 2314(2)暗褐色細粒砂(砂)1.5m(2.0m)厚の層状中砂(中)多量。

1.22mを測る。井戸側は確認されず、すでに抜き取られたものと思われる。おそらく標高1.5m前後で湧水したのだろう。大塚第4段階前半の遺物が出土しており、城下町期Ⅲ-1期に属する。

177SK(第18図) 10A区2面西端に位置する土坑で、標高2.0m付近までしか掘削されていない。下位の289SEと同一遺構の可能性が考えられる。

403SE(第18図) 10B区1面北西部で検出された井戸で、堀形の平面形は2.56m × 1.82mの楕円

0528SE土層断面図



- 1 2314(2)暗褐色細粒砂(砂)1.5m(2.0m)厚の層状中砂(中)多量。腐食(焼物残遺物含む)。
- 2 2315(2)暗褐色細粒砂(砂)1.5m(2.0m)厚の層状中砂(中)多量。腐食(焼物残遺物含む)。
- 3 2315(2)暗褐色細粒砂(砂)1.5m(2.0m)厚の層状中砂(中)多量。腐食(焼物残遺物含む)。
- 4 2314(2)暗褐色細粒砂(砂)1.5m(2.0m)厚の層状中砂(中)多量。腐食(焼物残遺物含む)。
- 5 2314(2)暗褐色細粒砂(砂)1.5m(2.0m)厚の層状中砂(中)多量。
- 6 2314(2)暗褐色細粒砂(砂)1.5m(2.0m)厚の層状中砂(中)多量。
- 7 2314(2)暗褐色細粒砂(砂)1.5m(2.0m)厚の層状中砂(中)多量。
- 8 2314(2)暗褐色細粒砂(砂)1.5m(2.0m)厚の層状中砂(中)多量。
- 9 2314(2)暗褐色細粒砂(砂)1.5m(2.0m)厚の層状中砂(中)多量。
- 10 2314(2)暗褐色細粒砂(砂)1.5m(2.0m)厚の層状中砂(中)多量。
- 11 2314(2)暗褐色細粒砂(砂)1.5m(2.0m)厚の層状中砂(中)多量。
- 12 2314(2)暗褐色細粒砂(砂)1.5m(2.0m)厚の層状中砂(中)多量。
- 13 2314(2)暗褐色細粒砂(砂)1.5m(2.0m)厚の層状中砂(中)多量。
- 14 2314(2)暗褐色細粒砂(砂)1.5m(2.0m)厚の層状中砂(中)多量。
- 15 2314(2)暗褐色細粒砂(砂)1.5m(2.0m)厚の層状中砂(中)多量。
- 16 2314(2)暗褐色細粒砂(砂)1.5m(2.0m)厚の層状中砂(中)多量。
- 17 2314(2)暗褐色細粒砂(砂)1.5m(2.0m)厚の層状中砂(中)多量。
- 18 2314(2)暗褐色細粒砂(砂)1.5m(2.0m)厚の層状中砂(中)多量。
- 19 2314(2)暗褐色細粒砂(砂)1.5m(2.0m)厚の層状中砂(中)多量。
- 20 2314(2)暗褐色細粒砂(砂)1.5m(2.0m)厚の層状中砂(中)多量。
- 21 2314(2)暗褐色細粒砂(砂)1.5m(2.0m)厚の層状中砂(中)多量。
- 22 2314(2)暗褐色細粒砂(砂)1.5m(2.0m)厚の層状中砂(中)多量。

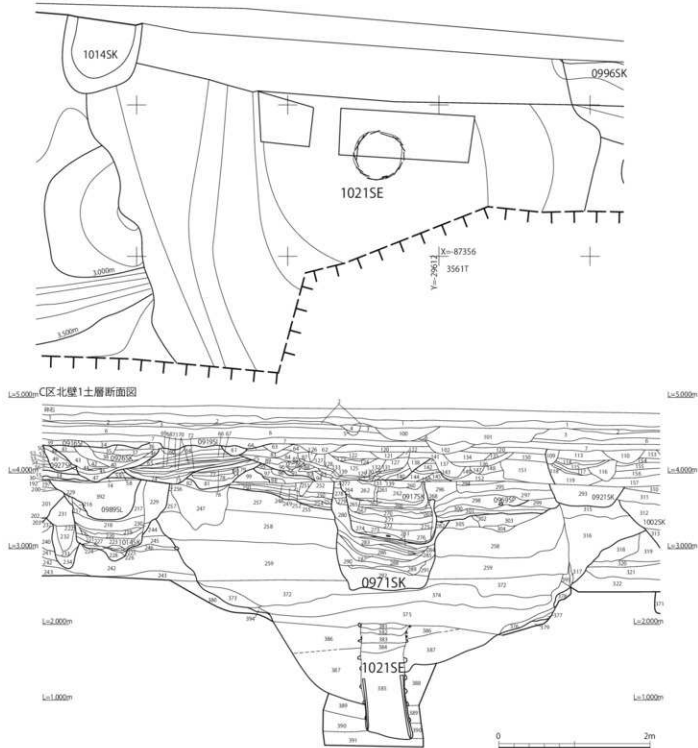
第20図 城下町期の井戸 遺構図(3)

形、深さは1.65mを測る。最下部で井戸側の痕跡(おそらく籬の痕跡)が確認され、井戸側自体はすでに抜き取られたものと思われる。標高1.0m前後で湧水したとみられ、登窯第1小期の遺物が出土しており、城下町期Ⅲ期に属する。

0194SE (第19図) 11A区2面中央部で確認された井戸で、堀形の平面形は2.49m×2.10mの楕円形、最下端の標高は約1.3mを測る。土層断面か1021SE平面図

らみて、円形井戸側(おそらく結物筒)の痕跡が確認され、井戸側自体はすでに抜き取られたものと推定される。その上位には円礫が多数投棄されていた。登窯第1小期の遺物が出土しており、城下町期Ⅲ期に属する。

0315SE (第19図) 11A区3面中央部南端に位置する井戸で、堀形の平面形は4.82m以上の楕円形と思われ、最下端の標高は約1.5mを測る。南壁



第21図 城下町期の井戸 遺構図(4)

付近で検出されたため最下部は重機で掘削調査したが、結物筒の一部が残存していることが確認された。井戸側の大部分はすでに抜き取られたものと考えられる。登窯第1小期の遺物が出土しており、城下町期Ⅲ期に属する。

03565E (第19図) 11A区3面中央部南端にあり、0315SEに西接する。屈形の平面形は2.90m以上の楕円形と思われる、最下端の標高は約1.5mを測る。井戸側は結物筒が腐食した状態で残存していた。登窯第1小期の遺物が出土しており、城下町期Ⅲ期に属する。

04945E (第19図) 11A区4面西部で確認された井戸で土坑0278SKの下位に所在する。検出時の屈形の平面形は1.40m×1.25mの楕円形で、最下端の標高は約1.2mを測る。井戸側は結物筒が腐食した状態で残存していた。大窯第3段階前半の遺物が出土しており、城下町期Ⅱ-2期に属する。

05285E (第20図) 11B区1面西部南端で検出された2.35m×1.96mの楕円形プランの井戸である。最下端の標高は約1.4mを測る。井戸側は木材が腐食した状態が確認され、構造は結物筒と思われる。土層断面の観察から上位の井戸側は抜き取られたと思われる、さらに上位に円礫が多量に投棄されていた。大窯第4段階後半の遺物が出土しており、城下町期Ⅲ期に属する。

05375E (第20図) 11B区1面中央部で確認された3.36m×2.51mの楕円形プランの井戸で、深さは3.11mを測る。最下端は標高約1.2mで、井戸側は結物筒が1段残存していた。土層断面の観察からもう1段残されていたと思われるが腐食して遺存しない。さらにその上位の井戸側は抜き取られたと思われる、円礫が多量に投棄されていた。大窯第4段階後半の遺物が出土しており、城下町期Ⅲ期に属する。

06315E (第20図) 11B区1面南西端に所在する2.76m×2.61mの楕円形プランの井戸で、深さは2.85mを測る。最下端は標高約1.6mで、井戸側は結物筒のタガが1段残存していたのみである。井戸側は抜き取られたと思われる、円礫が多量に投棄されていた。登窯第1小期の遺物が出土しており、城下町期Ⅲ期に属する。

10215E (第21図) 11C区3面中央に位置する6.44m×3.80m以上の楕円形プランの井戸である。地表面からの深さは約4.4m、最下端は標高約0.4m

で、井戸側は結物筒が1段と結物筒のタガが1段分残存していた。その上位は大きく土坑が掘られ井戸側は抜き取られた後に整地されたと思われる。上位には土坑0971SKなどが掘削された。大窯第3段階前半の遺物が出土しており、城下町期Ⅲ期に属する。

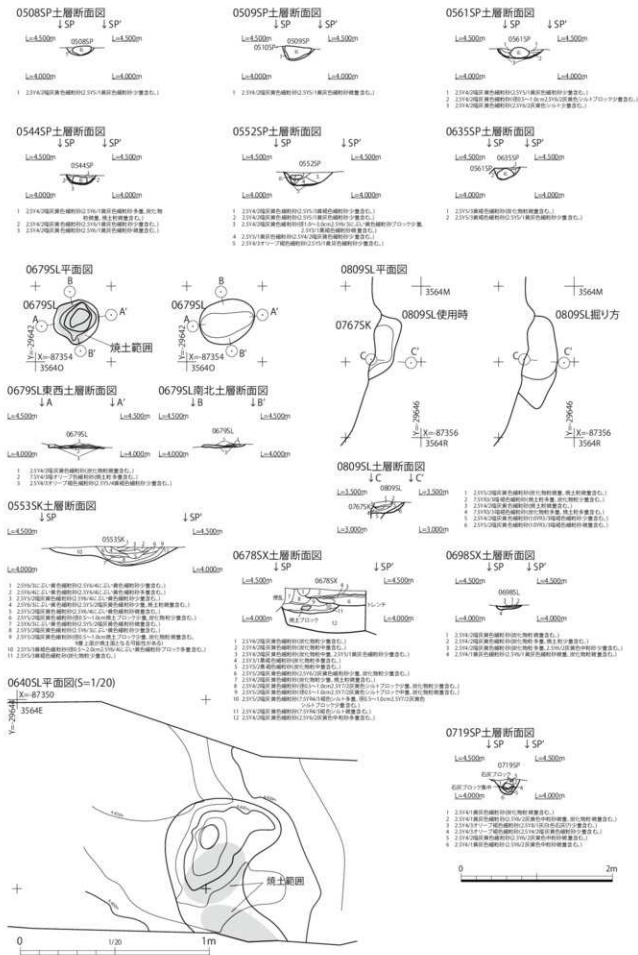
(7) 石埋設遺構

今回の調査では、建物跡の礎石や根石と単純に断定できない人工的に埋設された小土坑が発見されている。多くの場合2基が接して検出されており1組として機能したと考えられる。後述するような特徴から、鍛錬鍛冶工程に伴う金床石かその土台施設の可能性も想定される遺構である。なお、第22図には0552SPも紹介しているが、ここでは0552SPは根石が据えられた柱穴と推定したい。

0508SP・0509SP (第22図) 11B区1面南西部で検出された南北に併設された2基の石埋設遺構である。0508SPは0.48m×0.41mの楕円形プランで深さ0.11m、0509SPは0.47m×0.37mの隅丸方形プランで深さ0.16mを測る浅い土坑で、ほぼ掘形全体に上面を扁平にした状態で埋設されていた。0509SPに埋設された石材は直方体の濃飛流紋岩で表面に線状の紫褐色付着物が認められる。0508SPに埋設された石材はホルンフェルスで僅かに被熱されていた。区画溝0513SDに近接しており、0508SPでは大窯第4段階に属する小片が出土していることから、時期は城下町期Ⅲ期に比定される。

0533SP・0544SP (第22図) 11B区1面中央部で発見された東西に併設された2基の石埋設遺構である。0544SPは1037SBの束柱とも想定されている。0533SPは0.58m×0.45mの楕円形プランで深さ0.15m、0544SPは0.55m×0.43mの楕円形プランで深さ0.11mを測る浅い土坑である。0533SPでは小規模な角石が埋設され、0544SPでは直方体の凝灰質砂岩が設置されていた。区画溝0535SDに接しており、城下町期Ⅲ-2期と推定される。

0561SP・0635SP (第22図) 11B区1面中央部で発見された東西に併設された2基の石埋設遺構である。0561SPは0.68m×0.64mの楕円形プランで深さ0.14mを測る。0635SPはうまく検出できなかったものであるが、0.42m×0.38mの楕円形プランで深さ0.22mを測る。ともに濃飛流紋岩の円礫が設置されていた。区画溝0571SDに近接して所在し、城下町期Ⅲ期と思われる。



第 22 図 城下町期の石埋設遺構・炉跡・土坑など遺構図

06335S・06345S 11B区1面西部にある区画溝0513SD内で発見された南北に併設された2個の石埋設遺構である。埋設した掘形を検出できていない。ともに濃飛流紋岩の円礫が設置されていた。区画溝0513SDの内部施設であるため、城下町期Ⅲ期と考えられる。

06365P 11B区1面北東端に所在する1基の石埋設遺構である。0.86m×0.34mの長楕円形プランで深さ0.20mを測る。濃飛流紋岩の自然石(円礫)が設置されていた。時期は特定できないが、おそらく城下町期Ⅲ期と思われる。

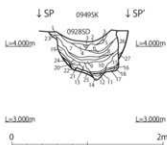
(8) 炉跡

地面が焼けて赤変した遺構および焼土ブロックが薄く堆積する遺構は8基確認されており、炉跡と推定する。焼土ブロックが互層状に堆積するものや塊状に出土した遺構はこれに含めない。

01065K 11A区1面東部中央に所在する炉跡である。北東-南西方向に伸びる1.01m×0.85mの09495K第1面平面図

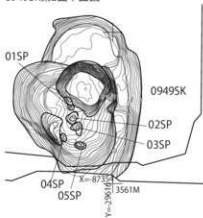


09495K土層断面図

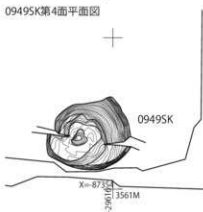


- 1 2372(河原)黄赤土層(約2.5164m)に、焼土中粒砂少量含む。
- 2 2372(河原)黄赤土層(約2.5164m)に、焼土中粒砂少量含む。
- 3 2374(北)土層(約2.5174m)に、焼土中粒砂少量含む。
- 4 2374(河原)黄赤土層(約2.5164m)に、焼土中粒砂少量含む。
- 5 2374(河原)黄赤土層(約2.5164m)に、焼土中粒砂少量含む。
- 6 2374(河原)黄赤土層(約2.5164m)に、焼土中粒砂少量含む。
- 7 2374(河原)黄赤土層(約2.5164m)に、焼土中粒砂少量含む。
- 8 2374(河原)黄赤土層(約2.5164m)に、焼土中粒砂少量含む。
- 9 2374(河原)黄赤土層(約2.5164m)に、焼土中粒砂少量含む。
- 10 2374(河原)黄赤土層(約2.5164m)に、焼土中粒砂少量含む。
- 11 2374(河原)黄赤土層(約2.5164m)に、焼土中粒砂少量含む。
- 12 2374(河原)黄赤土層(約2.5164m)に、焼土中粒砂少量含む。
- 13 2374(河原)黄赤土層(約2.5164m)に、焼土中粒砂少量含む。
- 14 2374(河原)黄赤土層(約2.5164m)に、焼土中粒砂少量含む。

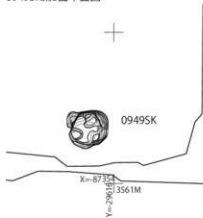
09495K第2面平面図



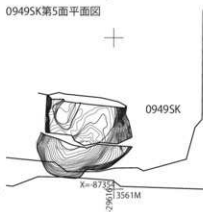
09495K第4面平面図



09495K第3面平面図



09495K第5面平面図



- 15 2374(河原)黄赤土層(約2.5164m)に、焼土中粒砂少量含む。
- 16 2374(河原)黄赤土層(約2.5164m)に、焼土中粒砂少量含む。
- 17 2374(河原)黄赤土層(約2.5164m)に、焼土中粒砂少量含む。
- 18 2374(河原)黄赤土層(約2.5164m)に、焼土中粒砂少量含む。
- 19 2374(河原)黄赤土層(約2.5164m)に、焼土中粒砂少量含む。
- 20 2374(河原)黄赤土層(約2.5164m)に、焼土中粒砂少量含む。
- 21 2374(河原)黄赤土層(約2.5164m)に、焼土中粒砂少量含む。
- 22 2374(河原)黄赤土層(約2.5164m)に、焼土中粒砂少量含む。
- 23 2374(河原)黄赤土層(約2.5164m)に、焼土中粒砂少量含む。
- 24 2374(河原)黄赤土層(約2.5164m)に、焼土中粒砂少量含む。
- 25 2374(河原)黄赤土層(約2.5164m)に、焼土中粒砂少量含む。
- 26 2374(河原)黄赤土層(約2.5164m)に、焼土中粒砂少量含む。
- 27 2374(河原)黄赤土層(約2.5164m)に、焼土中粒砂少量含む。
- 28 2374(河原)黄赤土層(約2.5164m)に、焼土中粒砂少量含む。
- 29 2374(河原)黄赤土層(約2.5164m)に、焼土中粒砂少量含む。
- 30 2374(河原)黄赤土層(約2.5164m)に、焼土中粒砂少量含む。
- 31 2374(河原)黄赤土層(約2.5164m)に、焼土中粒砂少量含む。
- 32 2374(河原)黄赤土層(約2.5164m)に、焼土中粒砂少量含む。
- 33 2374(河原)黄赤土層(約2.5164m)に、焼土中粒砂少量含む。
- 34 2374(河原)黄赤土層(約2.5164m)に、焼土中粒砂少量含む。
- 35 2374(河原)黄赤土層(約2.5164m)に、焼土中粒砂少量含む。
- 36 2374(河原)黄赤土層(約2.5164m)に、焼土中粒砂少量含む。
- 37 2374(河原)黄赤土層(約2.5164m)に、焼土中粒砂少量含む。
- 38 2374(河原)黄赤土層(約2.5164m)に、焼土中粒砂少量含む。
- 39 2374(河原)黄赤土層(約2.5164m)に、焼土中粒砂少量含む。
- 40 2374(河原)黄赤土層(約2.5164m)に、焼土中粒砂少量含む。
- 41 2374(河原)黄赤土層(約2.5164m)に、焼土中粒砂少量含む。
- 42 2374(河原)黄赤土層(約2.5164m)に、焼土中粒砂少量含む。
- 43 2374(河原)黄赤土層(約2.5164m)に、焼土中粒砂少量含む。
- 44 2374(河原)黄赤土層(約2.5164m)に、焼土中粒砂少量含む。
- 45 2374(河原)黄赤土層(約2.5164m)に、焼土中粒砂少量含む。
- 46 2374(河原)黄赤土層(約2.5164m)に、焼土中粒砂少量含む。
- 47 2374(河原)黄赤土層(約2.5164m)に、焼土中粒砂少量含む。
- 48 2374(河原)黄赤土層(約2.5164m)に、焼土中粒砂少量含む。
- 49 2374(河原)黄赤土層(約2.5164m)に、焼土中粒砂少量含む。
- 50 2374(河原)黄赤土層(約2.5164m)に、焼土中粒砂少量含む。

不定形な楕円形プランを呈し、深さ0.20mを測る。床面のみが被熱し赤変していた。大窠第4段階前半に属する小片が出土していることから城下町期Ⅲ期と思われる。

03465P 11A区3面北東端で確認された炉跡である。0.79m×0.62mの隅丸方形プランで深さ0.40mを測る。土坑底部に焼土ブロックが薄く堆積するもので、正しく炉跡となるかやや疑問がある。大窠第3段階後半の小片が出土しており、城下町期Ⅱ-2期かⅢ-1期と思われる。

05535K 11B区1面中央で発見された炉跡である。1.79m×1.00mの楕円形プランで深さ0.26mを測る。土坑埋土は細粒砂が層状に堆積する中に焼土が薄く存在する部分が確認された。大窠第3段階後半の小片が出土しているが、城下町期Ⅲ期と思われる。

06405L (第22図) 11B区1面北端(トレンチ外側)で検出された炉跡である。灰黄色シルトの整

第23図 城下町期の粘土貼土坑遺構図

地層上に設けられた0.80m以上×0.64mの瓢箪形を呈する深さ0.03mの極めて浅い落ち込みで、焼けて赤変した地面が確認された。整地層上天正地震以降の堆積と推定されることから城下町期Ⅲ期に位置づけられ、周辺で採取された遺物から鍛冶がと想定された。遺構はスタジオオ三十に委託して遺構の剥ぎ取りを実施した。なお、炉跡直上には黄褐色細粒砂が堆積し、その土壌を水洗篩別作業したが金属加工に伴う微細遺物は検出できなかった。

06795L (第22図) 11B区2面にある0652SI上面床面で検出された炉跡である。整地層上に0.63m×0.49mを測る極めて浅い楕円形土坑が掘削されオリブ褐色細粒砂が堆積したのちにその表面が被熱・赤変した遺構である。城下町期Ⅲ期。

06985L (第22図) 11B区2面にある0652SI下面床面で検出された炉跡である。0.52m×0.46mの楕円形土坑で深さは0.03mと浅く表面が被熱・赤変していた。城下町期Ⅱ期。

08095L (第22図) 11B区3面の中央で確認された炉跡で、07675Kに切られる。整地層上に掘られた1.23m×0.40m以上の楕円形土坑で深さは0.2mを測り、暗灰黄色細粒砂が充填された後に表面が被熱・赤変していた。上部から大窯第4段階後半に属する小片が出土していることから城下町期Ⅱ期と位置づけられる。

09395L (第13図) 11C区1面北西端に存在する竪穴状遺構0916SIの上面北西部で確認された炉跡である。北半部が浅い凹みで表面が被熱・赤変しており、南半部が土坑となる。全体に1.4m以上×0.92mの規模を持つ。大窯第4段階後半の陶器片が出土したので城下町期Ⅱ期と考えられる。

(9) 粘土貼付土坑

09495K・09785K・09895K (第13・23図) 11C区1面北西にある竪穴状遺構0916SIの下面南東部で重複する形で確認された土坑群である。09495Kは幅1.54mを測る楕円形土坑で、土坑床面や壁面に厚さ約1cm程度の褐色極細粒砂などが段階的に貼付され、部分的に小ピットが設置され被熱した部分も存在した。特に南半部は合計で5段階の床面が設定されたとみられる。09495Kの下位にも平面プランを若干相違して同様の土坑09785K・09895Kが構築された。出土遺物や検出状態からみて、これらの遺構は城下町期Ⅱ-2期からⅢ期にかけて掘削され続けたと考えられる。

(10) 糞埋設遺構

06375K (第24図) 11B区1面東部中央に所在する平面形が1.03m×0.79mの楕円形を呈する土坑である。遺構検出時では複数の遺構が重複するとみだが、最終的には0596SPと06375Kのみが重複したものと理解できた。深さは0.8m以上を測り、内部に常滑窯産陶器製の破片が積み重なった状態で出土した。破損した裏の破片を丁寧に埋めたものと考えられる。17世紀前半(初頭)に位置づけられる。

06575K (第24図) 11B区2面南東部で確認された土坑で、平面形は2.03m×1.80m以上の楕円形を呈すると思われる。その内部に設置された小規模な土坑に裏下半部の破片が正位置の状態に埋設されていた。裏内部には銭貨(判読不明)が錆着して出土している。状況からみて城下町期Ⅲ期に属するだろう。

(11) 土坑A類

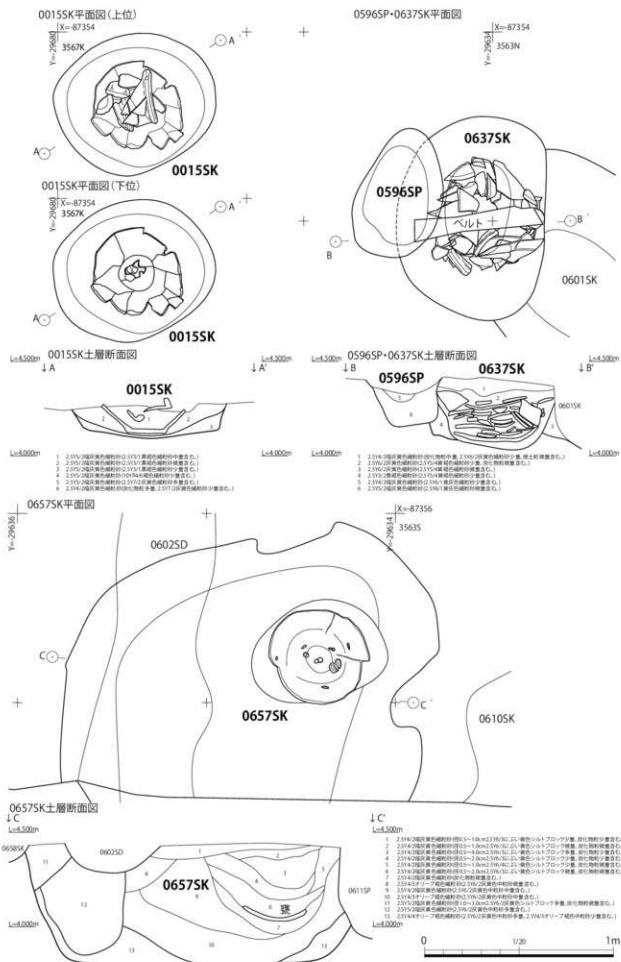
柱穴や井戸などこれまで紹介したものの以外の土坑をこの項以下で報告する。この土坑にはさまざまな形状や特徴がみられるが、大きく以下の4類に大別される。土坑A類は平面形が概ね隅丸長方形を呈し本来は箱掘状であったと思われるもの、土坑B類は平面形が概ね楕円形を呈し底部は丸底に近いもの、土坑C類は大型で平面形が不定形なもの、土坑D類はその他のものである。

まずは、土坑A類を紹介する。土坑A類は隅丸長方形を呈し本来は箱掘状であったと思われるもので、全ての遺構を大雑把に区分すると174基存在する計算となる。規模は大小さまざまであるが、埋土に焼土や炭化物が集中して堆積する部分が認められるものが目立つ。ここでは代表的な事例を取り上げる。

01415K (第26図) 11A区1面南西端にある幅1.03mを測る土坑A類である。中位で炭化物が多量に含む土層が存在する。登窯第1小期の遺物が含まれ城下町期Ⅲ期である。

01765K (第26図) 11A区2面南寄りで検出された幅1.08mを測る土坑A類である。掘形は箱形に近く、中位で炭化物が多量に含まれていた。大窯第4段階後半の遺物が出土し城下町期Ⅲ期と思われる。

01875K (第25図) 11A区2面中央北端に所在する平面形が1.22m×0.94mの隅丸長方形を呈す



第 24 図 城下町期・宿場町期の寝埋設遺構 遺構図

後半の遺物が含まれる。城下町期Ⅱ-2期か。

0363SK (第26図) 11A区3面東部で確認された1.60m×1.12mの方形土坑で深さは0.79mを測る。掘形は直立するが、炭化物や焼土はやや少ない。登窯第1小期の遺物が含まれ、城下町期Ⅲ期に相当する。

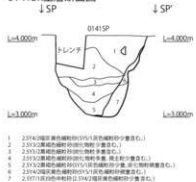
0692SK (第26図) 11B区2面中央に存在する2.65m×1.00m以上の土坑A類で深さは0.86mを測る。掘形は直立するが、炭化物や焼土はやや少ない。ハマグリの日貝が出土した。登窯第1小期の遺

物が出土し城下町期Ⅲ期に相当する。

0732SK (第26図) 11B区2面中央北端に所在する1.28m×1.23mの隅丸方形土坑で深さは0.81mを測る。掘形はやや開くが、炭化物を多量に含む土層がみられる。登窯第1小期の遺物が出土し城下町期Ⅲ期に相当する。

0767SK (第27図) 11B区3面中央で検出された5.16m×4.90mの大形隅丸方形土坑で深さは1.62mを測る。掘形はやや開くが、炭化物はほとんど含まれていない。登窯第1小期の遺物が認められ、

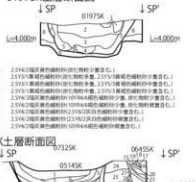
0141SK土層断面図



0176SK土層断面図



0197SK土層断面図



0226SK土層断面図



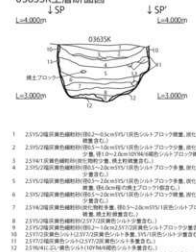
0280SK土層断面図



0732SK土層断面図



0363SK土層断面図



0353SK土層断面図



0692SK土層断面図



0 2m

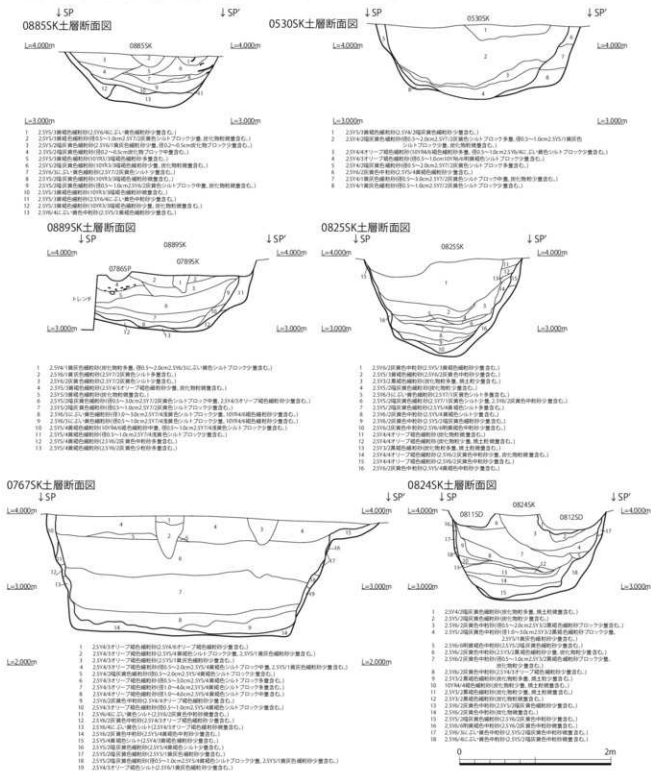
第26図 城下町期の土坑 構構図(2)

城下町期Ⅲ期に位置づけられる。

0824SK (第27・28図) 11B区3面東部で確認された4.20m以上×2.46mの大形隅丸長方形土坑で深さは1.32mを測る。理土には炭化物や粘土塊を多量に含む部分が見られる。この堆積物を水洗篩別作業した結果、流動滓や鋳型片などが多数検出され、鋳造工程で排出された廃棄物を投棄した遺構と推定された。大塚第4段階の遺物が認められるが、

遺構の重複関係からみて城下町期Ⅱ-2期と推定したい。

0825SK (第27図) 11B区3面東部で発見された4.08m×4.08mの大形隅丸長方形土坑で深さは1.32mを測る。炭化物を多量に含む土層(3層など)が見られる。大塚第1段階までの遺物しか認められないが、状況からみて城下町期Ⅰ期かⅡ期に属するとみられる。



第27図 城下町期の土坑 遺構図(3)

0860SK (第28図) 11B区3面東部に所在する1.75m × 1.30m以上の楕円形を呈する土坑で深さは0.93mを測る。埋土には炭化物や粘土塊を多量に含む部分が見られる。遺構の重複関係からみて城下町期Ⅱ-Ⅱ期と推定したい。

0885SK (第27図) 11B区4面中央部北半に位置する2.65m × 2.11mの土坑で深さは0.58mを測る。炭化物を微量に含む土層が連続する。大窠第3段階を中心とした遺物が出土し、状況からみて城下町期Ⅰ期かⅡ期に属するとみられる。

0889SK (第27図) 11B区4面中央部北半で0885SKに接する形で検出された1.94m × 1.92mの土坑で深さは1.08mを測る。大窠第1段階を中心とした遺物が出土しているが、状況からみて城下町期Ⅱ期に属するとみられる。

0914SK (第28図) 11C区1面中央部に位置する0.64m × 0.60m以上の土坑で深さは0.76mを測る。下位に炭化物を多量に含む土層(8・9・12・13層)がみられ、大窠第4段階後半の遺物が出土している。城下町期Ⅲ期。

0966SK (第29図) 11C区2面中央で確認され

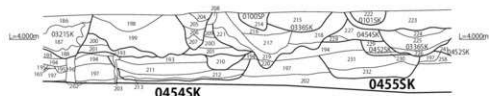
0966SK出土状況図



0966SK土層断面図



11A区北壁土層断面図



第29図 城下町期の土坑 遺構図(5)

た2.63m × 2.2m以上の土坑で深さは0.56mを測る。土層断面は逆台形で、西辺に石材が2個設置されていた。薄い炭化物を多量に含む土層(5層)が確認される。登窯第1小期の遺物が含まれ城下町期Ⅲ期である。

0967SK (第28図) 11C区2面中央で検出された1.40m以上 × 1.28mの土坑で深さは0.78mを測る。土層断面で直立する細い土層が確認され、木製枠が設置されていたと思われる。大窠第2段階の遺物が出土しており、城下町期Ⅱ期に属するとみられる。

0971SK (第21図) 11C区2面中央北端に所在する1.40m × 0.80m以上の土坑で、上位には同様の土坑0917SKが存在する。炭化物を多量に含む土層がみられ、登窯第1小期の遺物が含まれることから城下町期Ⅲ期と考えられる。

442SK (第29図) 10B区2面東端で確認された長さ3.29mを測る土坑A類で深さは0.99mを測る。炭化物を多量に含む土層(2・3層)が確認される。登窯第1小期の遺物が含まれ城下町期Ⅲ期である。

442SK土層断面図



- 1 314(2)の土層(厚1.2m)のシルトが少量、砂1-3mmの粒が散在する層(厚0.1m)
- 2 237(1)の土層(厚0.1m)のシルトが少量、砂1-3mmの粒が散在する層(厚0.1m)
- 3 237(1)の土層(厚0.1m)のシルトが少量、砂1-3mmの粒が散在する層(厚0.1m)
- 4 317(1)の土層(厚0.1m)のシルトが少量、砂1-3mmの粒が散在する層(厚0.1m)

- 1 237(1)の土層(厚0.1m)のシルトが少量、砂1-3mmの粒が散在する層(厚0.1m)
- 2 237(1)の土層(厚0.1m)のシルトが少量、砂1-3mmの粒が散在する層(厚0.1m)
- 3 237(1)の土層(厚0.1m)のシルトが少量、砂1-3mmの粒が散在する層(厚0.1m)
- 4 237(1)の土層(厚0.1m)のシルトが少量、砂1-3mmの粒が散在する層(厚0.1m)
- 5 237(1)の土層(厚0.1m)のシルトが少量、砂1-3mmの粒が散在する層(厚0.1m)
- 6 237(1)の土層(厚0.1m)のシルトが少量、砂1-3mmの粒が散在する層(厚0.1m)
- 7 237(1)の土層(厚0.1m)のシルトが少量、砂1-3mmの粒が散在する層(厚0.1m)
- 8 237(1)の土層(厚0.1m)のシルトが少量、砂1-3mmの粒が散在する層(厚0.1m)
- 9 237(1)の土層(厚0.1m)のシルトが少量、砂1-3mmの粒が散在する層(厚0.1m)
- 10 237(1)の土層(厚0.1m)のシルトが少量、砂1-3mmの粒が散在する層(厚0.1m)

(12) 土坑B類

土坑B類は平面形が概ね楕円形を呈し底部は丸底に近いものである。今回の調査でも多数確認されたが、ここでは代表的な事例を取り上げる。

2105K 10A区2面北東部にある2.3m以上×1.6m以上を測る楕円形土坑である。深さは0.42mを測り、埋土から登窯第1小期の瀬戸・美濃窯産陶器や瓦片などが出土した。

2595K 10A区3面東部で確認された1.73m×1.48mを測る楕円形土坑である。深さは0.74mを測り、瀬戸・美濃窯産陶器や土師器火鉢などが出土した。城下町期Ⅱ期。

2655K 10A区3面南東端で確認された2.99m×2.97mを測る楕円形土坑である。深さは0.78mを測り、登窯第1小期の遺物などが出土した。

02385K 11A区2面東部に所在する1.4m以上×1.1m以上を測る楕円形土坑である。深さは0.45mを測り、中から大窯第4段階の瀬戸・美濃窯産陶器や土師器が出土した。

02835K 11A区3面中央南端で検出された2.12m×1.89mを測る楕円形土坑。深さは0.75mを測り、非ロクロ調整土師器皿などが出土した。

04535K 11A区4面北東部に位置する2.19m×1.27mの楕円形を呈する土坑で、深さは0.25mを測る。埋土から土師器内耳鍋や釜などが出土し、城下町期Ⅰ期に属する。

07985K 11B区3面東部に所在する0.73m×0.66mの楕円形土坑で、深さは0.18mを測る。埋土から土師器内耳鍋が多数出土し、城下町期Ⅰ期に属する。

09205K (第28図) 11C区1面中央に所在する1.27m×0.8m以上の楕円形土坑で、底部は船底となり深さは0.44mを測る。城下町期Ⅲ期に属する。

09595K 11C区2面東半部に所在する1.38m×0.5m以上の楕円形土坑で、深さは0.39mを測る。瀬戸・美濃窯産陶器鉢鉢や鉄製品などが出土した。

(13) 土坑C類

土坑C類は大形で平面形が不定形なもので、今回の調査でも40基あまりが検出された。代表的な事例を取り上げる。

03865K 11A区4面北西端で検出された4.6m以上×4.5m以上を測る不定形大形土坑である。南東部にやや深い部分があり、ここを中心に土師器釜などが出土した。登窯第1小期の遺物が含まれ

下町期Ⅲ期である。

05305K (第27図) 11B区1面で検出された3.37m×2.73mを測る不定形大形土坑である。井戸0528SEと井戸0537SEに挟まれて検出され下部を0538SKとして掘削した。当初井戸が想定されたが、最終的には性格は不明なままである。上部で礫や陶磁器が集中して出土しており、登窯第1小期の遺物が含まれていることから、城下町期Ⅲ期と思われる。

07775K 11B区3面で発見された3.28m×3.21mを測る不定形大形土坑で、土坑A類0767SKと井戸0631SEに挟まれて検出され全形は不明。深さは0.27mと浅く竪穴状遺構の可能性もあるが、最終的には性格は不明である。大窯第3段階の遺物などが出土した。

08105K 11B区3面で確認された全長10mを超える大形土坑で、平面形は隅丸長方形を呈すとみられる。0824SK・0825SK・0834SK・0860SKなどと重複し正確な形状は不明。深さは1.5m以上を測り、地下室や粘土採掘坑などが想定されるが、性格は不明といわざるを得ない。登窯第1小期の遺物が含まれている。

08585K 11B区4面中央部に所在する3.03m×1.47mを測る概ね楕円形を呈する土坑で、深さは0.69mを測る。大窯第1段階の遺物とともに土師器皿や内耳鍋などが出土した。

(14) 土坑D類

土坑A類～土坑C類に属さない特殊な事例を土坑D類と一括する。

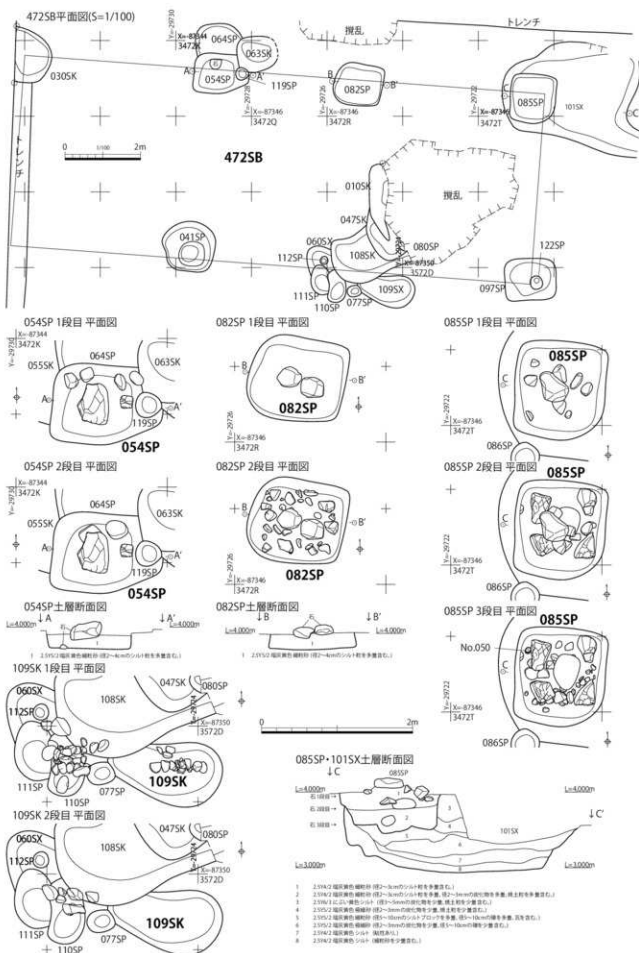
06785K (第22図) 11B区2面東端に存在する土坑群。床面が平坦な土坑が少なくとも2基重複する形状が確認されたが、竪穴状遺構とするにはその規模が小さすぎる。検出状況から城下町期Ⅲ期と推定される。

07195P (第22図) 11B区2面東端で確認された0.38m×0.29mの規模を持つ小土坑である。埋土で石灰質の塊が数点含まれていた。城下町期Ⅲ期と推定される。

第5節 宿場町期の遺構

(1) 遺構の概要

宿場町期は清須城が廃城となった1613年以降を指し、今回検出された該期の遺構の多くは10A区と10B区で検出された。これまで宿場町期は大きく2期に大別されてきたが、大半は宿場町期Ⅱ期に



第30図 宿場町期の掘立柱建物跡遺構図

た。2～3段に積み重ねられた部分もあり、強固に地固めされたものとみられる。調査区外にも柱穴が展開していた可能性が高く、正確な建物規模を特定することができない。柱穴から出土した遺物から、時期は宿場町期Ⅱ期と推定される。

(3) 井戸

宿場町期に属する井戸は5基が確認された。

0655E (第31図) 10A区1面東部で検出された井戸である。堀形の平面形は2.31m×1.61mの楕円形を呈し、検出面からの深さは1.80mを測る。井戸側は中位で互製の井戸側専用材を積み重ねて構築されたことが確認されるが、すでに大半は破壊された状態であった。おそらく標高1.8m前後で湧水したものとみられる。登窯第10小期の遺物が出土しており、宿場町期Ⅱ-2期に属する。

2275E (第31図) 10A区2面中央北端で確認された井戸で、堀形の平面形は直径約2mの楕円形を呈し、検出面からの深さは1.82mを測る。井戸側は上位に井戸側専用材で製作された常滑窯産筒が2段設置され、その下位には井戸側は残存していなかった。最下段の井戸側は結物筒が腐食したものと想定される。堀形の最下部は標高約1.30mを測りこのレベルで湧水したものとみられる。時期は宿場町期Ⅱ-2期と思われる。

3015E (第18図) 10A区3面西部にある井戸で、堀形の平面形は4.57m×2.48mの楕円形、深さは1.42mを測る。井戸側は結物筒が1段確認された。その上位は大きく土坑が掘り直された堆積状況が確認されたので、井戸側はすでに抜き取られたものと思われる。最下部は標高0.7m前後となっている。大窯第4段階後半の遺物が出土しているが、井戸側

が節を多く持つ粗悪なスギ材で表面に縦焼き鋸痕が観察されたことから、宿場町期Ⅱ期と推定したい。

00075E (第31図) 11A区1面西北部で検出された井戸である。堀形の平面形は1.84m×1.82mの円形を呈し、検出面からの深さは3.30mを測る。井戸側は最下部で木製結物筒が確認された。堆積状況から上部の井戸側はすでに抜き取られていると思われる。標高0.8m前後で湧水したものとみられ、宿場町期Ⅱ-2期に属する。

02615E (第31図) 11A区3面西端で確認された井戸で、調査区外に拡がる。堀形の平面形は直径約2.7mの楕円形を呈するものと思われる。上部に02615Eの跡地を活用した土坑0004SKと0145SKなどが展開している。最下部は土層断面で標高1.9mを測るが、調査区外でさらに深くなる可能性を持つ。現況で井戸側は残存していない。時期は宿場町期Ⅱ-2期と思われる。

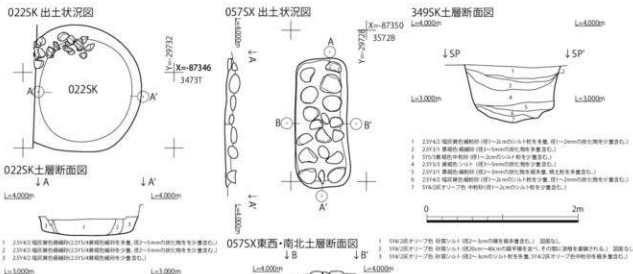
(4) 土坑

宿場町期に属する土坑類は多数存在するが、ここでは特徴的な事例を紹介する。

0225K (第32図) 10A区1面西部で検出された1.74m×1.7m以上の円形土坑で、一部の外周部に礫が集中していた。

0575K (第32図) 10A区1面中央で確認された1.71m×0.70mの隅丸方形土坑で、礫が漆喰で固められて敷き詰められた状態で出土した。

00155K (第24図) 11A区1面南西端に位置する裏理設遺構である0.86m×0.72mの円形土坑で、常滑窯産甕？底部片が正位置で設置されていた。内部に肥前窯産磁器などが出土しており、時期は宿場町期Ⅱ-2期と思われる。(鈴木正貴)



第32図 宿場町期の土坑遺構図

第3章 遺物

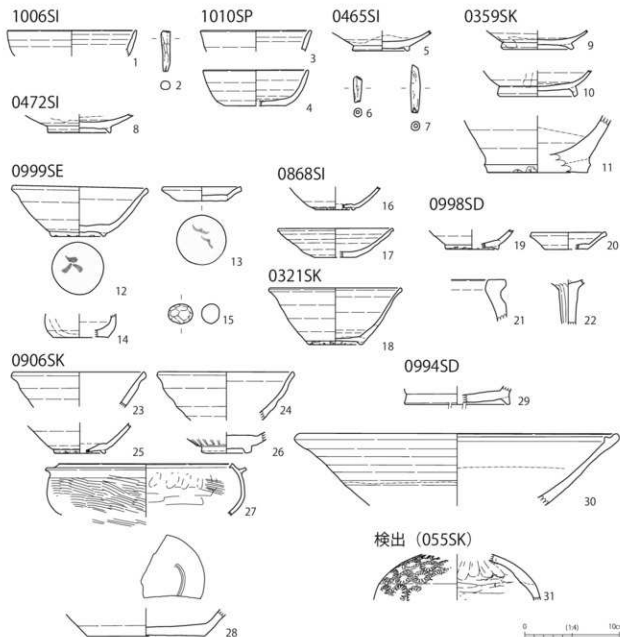
第1節 資料の採取方法と概要

今回の発掘調査では、多くの出土資料は調査中に目視で発見された土器陶磁器類・石製品・木製品・金属製品と金属関連遺物・貝殻などの自然遺体などである。石材については、10AB区と11A区では加工痕或使用痕などを観察した上で人工遺物と認められなかった（特に大形の）石材については発掘調査時点で廃棄していた。ところが、11A区の調査で当地点が金属加工に関連する遺構や遺物が多数遺存していることが明らかになり、金属加工に関連した部材として大形石材も十分な観察を必要とする

考えられるに至った。11B区と11C区では全ての石材を採取し整理作業を行った。

また、10AB区では鉄滓などが多く出土していたことから、この付近で鍛錬鍛冶工程が行われていたことが想定され、11ABC区では炭化物や焼土を多く含む土坑の土壌を採取した。さらに11B区と11C区では炉跡や石埋設遺構の周囲および綺麗に整地された窪状遺構の床面を任意の25cm四方の極小グリッドを設置して層厚1～5cmの土壌を採取した。採取した土壌（土嚢袋で約200袋）の大部分は、パレオラボ株式会社に依頼して水洗篩別作業を行い、着磁の有無で区分して鍛造剥片や粒状滓などの微細遺物の検出を試みた。

上記のような調査経過であるため、資料は採取方



第33図 古代・中世の遺物実測図

法で大きく通常採取資料、大形石材群、水洗篩別資料の3種に分けられる。本書作成に向けての整理作業に限りがあり全資料の分析はできていないため、ここでは資料採取別に出土量を報告することとなっていることをあらかじめ断っておきたい。

本書では、まず土器陶磁器類・石製品・木製品・金属製品と金属関連遺物・貝殻などの自然遺体に大別し、土器陶磁器類など必要に応じて時期ごとに細別して報告する。

第2節 土器・陶磁器類

(1) 古代

10065I 出土遺物 (第33図1・2) 須恵器杯身(1)・製塩土器(2)などが出土した。今回の調査で出土した須恵器・灰釉陶器類は全て猿投窯系製品で、1は8世紀代のものと思われる。

10105P 出土遺物 (第33図3・4) 須恵器杯身(3・4)などがあり、4は鳴海32号窯式期に属する。

04655I 出土遺物 (第33図5～7) 灰釉陶器椀(5)と土錘(6・7)などが出土し、5は東山72号窯式期に位置づけられる。

04725I 出土遺物 (第33図8) 8は東山72号窯式期に属する灰釉陶器椀である。

(2) 中世

03595K 出土遺物 (第33図9～11) 灰釉陶器椀(10)や灰釉陶器壺類(11)の他に山茶碗(9)も出土した。9は第4型式に位置づけられる。

09995E 出土遺物 (第33図12～15) 尾張型第6型式に属する山茶碗(12)と小皿(13)、灰釉陶器小瓶(14)、陶丸(15)などが存在する。12と13にはそれぞれ墨書が認められる。

08685I 出土遺物 (第33図16・17) 東濃型山茶碗が出土しており、16は大畑大洞窯式期に、17は脇ノ鳥窯式期に属する。

03215K 出土遺物 (第33図18) 明和窯式期に属する東濃型山茶碗が出土した。

09985D 出土遺物 (第33図19～22) 白土原窯式期に属する東濃型山茶碗(19)と明和窯式期に属する東濃型小皿(20)の他に、清郷型鍋の口縁部片(21)や製塩土器(22)など古代の遺物も含まれていた。

09065K 出土遺物 (第33図23～28) 尾張型第7型式(23)、東濃型白土原窯式期(24)、東濃型明和窯式期(25)に属する山茶碗の他に、龍泉窯系青磁

碗(26)や土師器内彎型羽付鍋(27)、古瀬戸中期前半に推定される折縁深皿(28)などが出土した。

09945D 出土遺物 (第33図29・30) 29は東濃産陶器灰釉四耳壺の底部片で13世紀のものと推定される。

遺構以外の出土遺物 (第33図31) 31は古瀬戸中1期か中2期の鉄軸水注の肩部片である。

(3) 城下町期

00795K 出土遺物 (第34図32・33) 32は瀬戸・美濃窯産陶器灰釉折縁皿、33は同鉄軸緒桶で、前者は大窯第4段階後半に位置づけられる。

00845D 出土遺物 (第34図34・35) 34は古瀬戸後IV期新段階に属する天目茶碗、35は大窯第1段階に属する灰釉端反皿である。

00855K 出土遺物 (第34図36) 36は瀬戸・美濃窯産陶器灰釉大皿で、外面下半は釉を拭き取って露胎とし碁笥底となっている。大窯第4段階に属する。

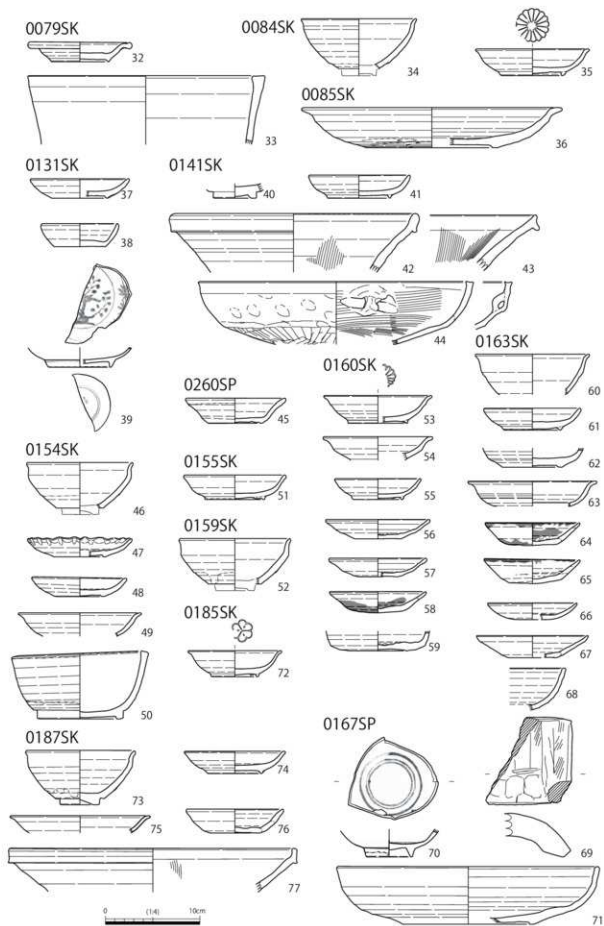
01315K 出土遺物 (第34図37～39) 大窯第3段階後半の灰釉丸皿(37)と口縁部が内彎するロケ口調整土師器皿(38)と景徳鎮窯系青花皿(39)などがある。

01415K 出土遺物 (第34図40～44) 40は登窯第1中期に属する鉄軸丸碗で灰釉を流し掛けている。41は灰釉丸皿、42と43は播鉢でいずれも大窯第3段階後半に属する。44は土師器焙烙で底部からわずかに屈曲して立ち上がる体部が直線的に伸びるもので、焙烙としては古いものと考えられる。

01545K 出土遺物 (第34図46～50) 瀬戸・美濃窯産陶器には天目茶碗(46)や内壳皿(47・48)など大窯第3段階に属するものがある。47は鉄軸製品で口縁部がひだ状になり、48は灰釉製品で底部に輪トチン跡が残る。50は口縁端面が露胎となる鉄軸小鉢である。49は景徳鎮窯系白磁端反皿でやや古く位置づけられる。

01605K 出土遺物 (第34図53～59) 瀬戸・美濃窯産陶器と土師器皿(58)などが出土した。瀬戸・美濃窯産陶器には灰釉端反皿(53・54)、鉄軸丸皿(55)、無釉焼締灯明皿(56・57)、エングロ(59)があり、大窯第1段階から第4段階のものまで認められる。

01635K 出土遺物 (第34図60～69) 瀬戸・美濃窯産陶器、土師器皿、輪違瓦(69)などが出土した。瀬戸・美濃窯産陶器には天目茶碗(60)、付高台の灰釉丸皿(61)、碁笥底の鉄軸丸皿(62)、内



第 34 図 城下町期の遺物実測図 (1)

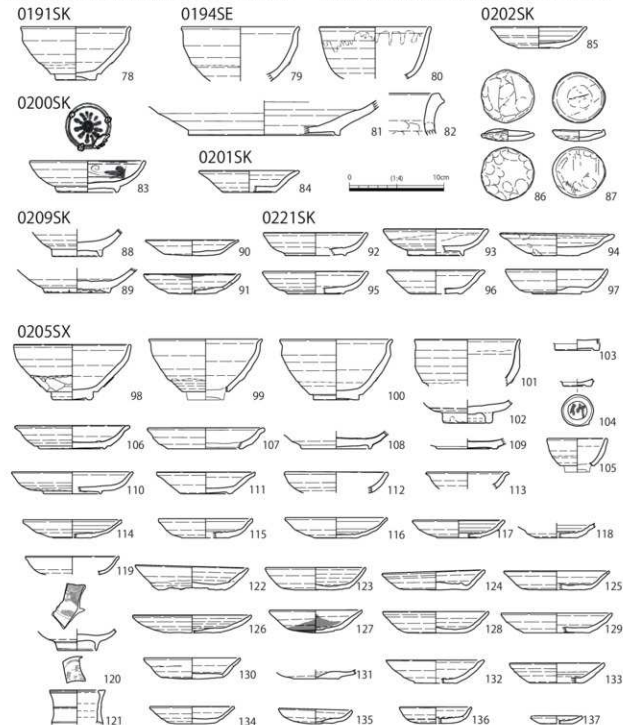
面に沈線を持つ無軸焼締中皿(63)、無軸焼締大皿(68)があり、大窯第3段階に属するものが多い。土師器にはロクロ調整皿(64~67)があり、直線的に体部が開き口縁部で僅かに外反するもので、城下町期Ⅱ-2期に属すると考えられる。64と65には口縁部にタールが付着する。69の内側にはコピキAの痕跡が残存する。

0187SK 出土遺物 (第34図73~77) 瀬戸・美濃窯産陶器天目茶碗(73)・灰軸丸皿(74)・播鉢(77)、中国産白磁端反皿(75)、土師器ロクロ調整皿

(76)などが出土した。瀬戸・美濃窯産陶器の最新資料は大窯第3段階後半に比定される73と77である。

0194SE 出土遺物 (第35図79~82) 瀬戸・美濃窯産陶器には大窯第4段階前半の天目茶碗(79)・大窯第3段階後半の鉄軸灰流し丸碗(80)・大窯第3段階の焼締大皿(81)などがあり、12型式に属する常滑窯産陶器壺(82)が伴う。

0202SK 出土遺物 (第35図85~87) 瀬戸・美濃窯産陶器焼締灯明皿(85)と土師器非ロクロ調整



第35図 城下町期の遺物実測図(2)

皿(86・87)がある。土師器皿は口縁部を立ち上げるような明瞭な横ナデ調整は認められないが、内面には外周をめぐるナデ調整が施されている。

0209SK 出土遺物 (第35図88～91) 瀬戸・美濃窯産陶器灰釉丸碗(88)や土師器ロクロ調整皿(90・91)などがある。土師器皿はロクロ調整のものとしては規模が小さめで口縁部は直線的に開く。城下町期1期に属する。

0221SK 出土遺物 (第35図92～97) 皿類が目立つ一括資料である。瀬戸・美濃窯産陶器では、鉄軸丸皿(92)、下半に錆軸が施される灰釉丸皿(93)、鉄軸緑釉はさみ皿(94)、鉄軸内壳皿(95)、鉄軸稜皿(96)があり、94を除き大窯第3段階前半に属する。土師器ロクロ調整皿(97)は体部下半が丸みを帯びるC類で16世紀第3四半期と推定される。

0205SX 出土遺物 (第35・36図98～170) 瀬戸・美濃窯産陶器、常滑窯産陶器(163)、中国産磁器(119・120)、土師器などがある。瀬戸・美濃窯産陶器には、天目茶碗(98～100)、長石袖掛け分け天目茶碗(101)、鉄軸灰流し筒形碗(102)、志野丸碗(103)、灰釉小碗(104・105)、志野丸皿(106～109)、鉄軸丸皿(110)、鉄軸稜皿(111)、灰釉丸皿(112)、灰釉端反皿(113)、焼締灯明皿(114～118)、灰釉筒形香炉(121)、灰釉四耳壺(158)、錆軸小壺(160)、播鉢(161・162)などがある。最新資料は登窯第1小期に属する103である。土師器には、ロクロ調整皿(122～137)、非ロクロ調整皿(138～157)、火掬斗(164)、羽付鍋(165・166)、内耳鍋(167・168)、釜(170)、焙烙(169)がある。ロクロ調整皿は、断面形が逆台形を呈するもの(B類:122～125)、僅かに口縁部が内彎するもの(C類:126)、体部上位で少し外折れるもの(E類:127～133)、小形製品(134～137)に分けることができる。非ロクロ調整皿は口縁部を立ち上げるような明瞭な横ナデ調整は認められず、内外面ともに外周をめぐる形で連続する指オサエ調整が施されている。羽付鍋と内耳鍋は口縁部が内傾化して、口縁端部に明瞭な面が形成される。釜は直立する口縁部と肩部の屈折角度がやや緩い。全体として16世紀末葉～17世紀初頭の遺物様相を呈する。

0238SK 出土遺物 (第37図171～182) 瀬戸・美濃窯産陶器と中国産磁器と土師器などがある。瀬戸・美濃窯産陶器は天目茶碗(171・172)、鉄軸丸皿(173)、灰釉丸皿(174)、錆軸土瓶か釜(179)

があり、概ね大窯第3段階に属する。土師器は非ロクロ調整皿(177・178)、羽付鍋(180)、内耳鍋(182)、釜(181)があり、177は口縁部を立ち上げるナデ調整が認められるなどやや古い特徴が残っている。中国産磁器には十字花紋が描かれた碁笥底の青花皿(175)がある。

0261SE 出土遺物 (第37図183～192) 瀬戸・美濃窯産陶器と中国産磁器と土師器などがある。瀬戸・美濃窯産陶器は天目茶碗(183～185)、錆軸灯明皿(186)、志野中皿(187)、播鉢(190・191)があり、186と187と191が大窯第4段階後半に属する最新資料である。土師器は直線的に体部が開くロクロ調整皿(188)と上半部が内彎する羽付鍋(192)が存在する。中国産磁器には外面に蓮弁紋が描かれた碁笥底の青花皿(189)がある。

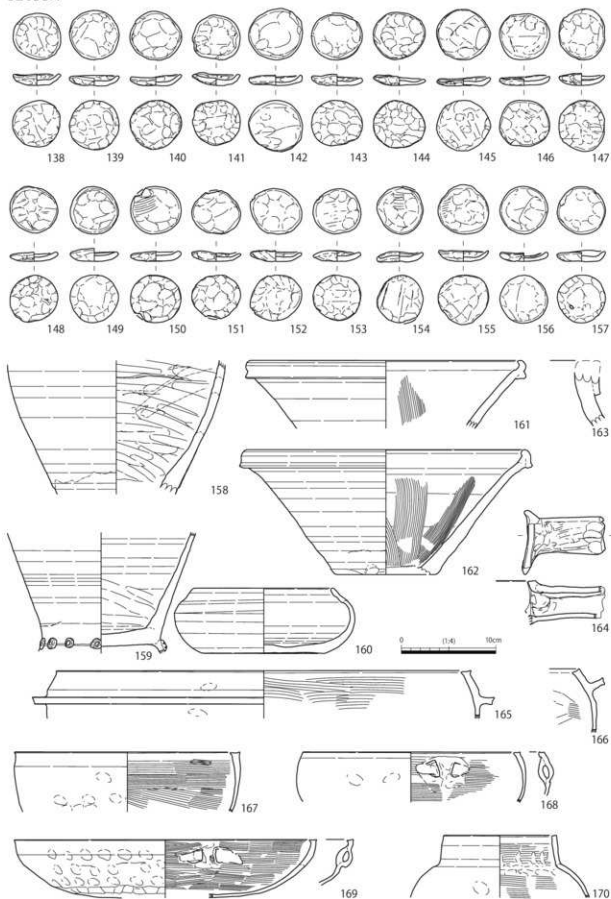
0262SK 出土遺物 (第37図193～200) 瀬戸・美濃窯産陶器と土師器ロクロ調整皿(198)などがある。前者は天目茶碗(193～195)、鉄軸(凸た)丸皿(196)、焼締灯明皿(197)、鉄軸筒形容器(199)、播鉢(200)があり、195が大窯第4段階後半に属する最新資料である。後者は小形で直線的に体部が開く。

0277SK 出土遺物 (第37図201～209) 瀬戸・美濃窯産陶器には、天目茶碗(201)、錆軸短頸壺(202)、焼締灯明皿(203)、鉄軸甕(206)、播鉢(207)があり、播鉢が大窯第4段階後半に位置づけられる。土師器には、ロクロ調整皿と火掬斗体部(208)と焙烙(209)があり、ロクロ調整皿は体部から口縁部がやや外反するもの(E類:204)とやや内彎するもの(C類:205)に区別できる。

0280SK 出土遺物 (第38図210～214) 瀬戸・美濃窯産陶器天目茶碗(210・211)、甕(212)と中国産白磁小杯(213)と常滑窯産甕(214)などがある。210は鉄軸に灰釉を流し掛けした製品で登窯第1小期に属する。

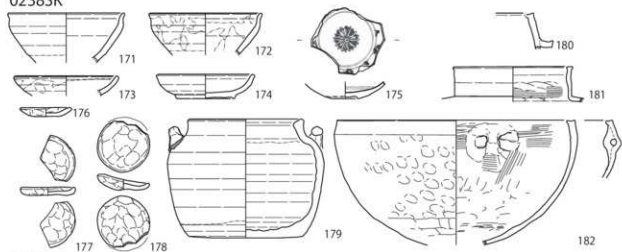
0194SE 下層出土遺物 (第38図215～221) 調査時点では0282SEとして掘削した資料である。瀬戸・美濃窯産陶器には、天目茶碗(215)、錆軸灯明皿(216)、焼締大皿(217)、播鉢(218)、徳利(220)、狛犬(221)がある。215・216・218が大窯第4段階後半で最新資料となる。221は胴部下半のみが残存する鉄軸狛犬で、両後脚と尾は粘土を貼付けて造形している。清洲城下町遺跡で出土した狛犬は3例目で、いずれも現長者橋に比較的近い

0205SX

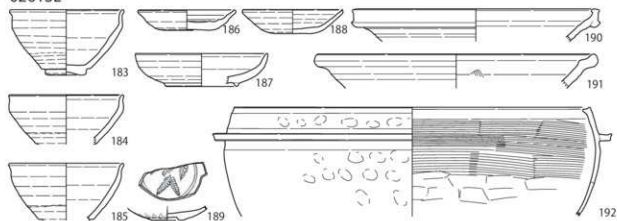


第 36 図 城下町期の遺物実測図 (3)

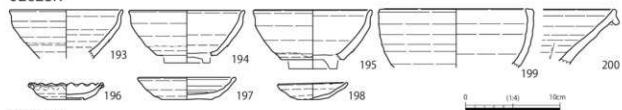
0238SK



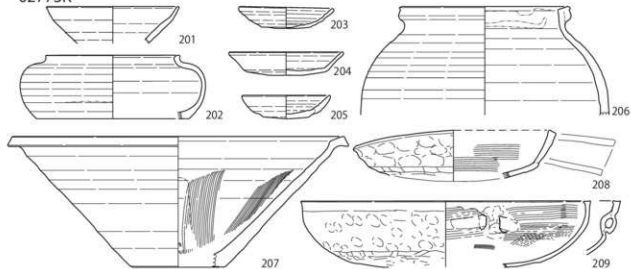
0261SE



0262SK



0277SK

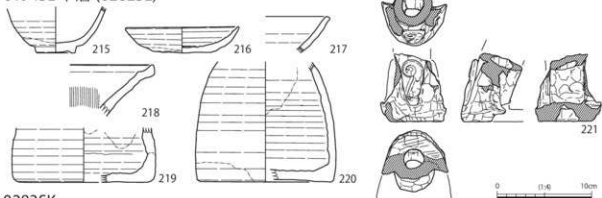


第 37 図 城下町期の遺物実測図 (4)

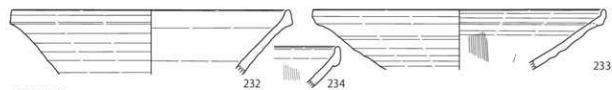
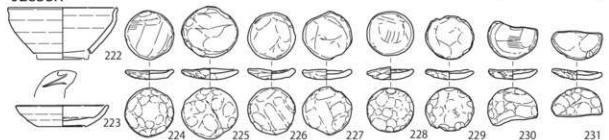
0280SK



0194SE 下層 (0282SE)



0283SK



0286SK



0288SK



0315SE



第 38 図 城下町期の遺物実測図 (5)

部分から出土している。

02835K 出土遺物 (第 38 図 222～234) 調査時点では 02845K として取り上げた資料である。瀬戸・美濃窯産陶器天目茶碗 (222)、焼成後内面に刻書が施された灰軸内禿皿 (223)、播鉢 (232～234) および土師器非ロクロ調整皿がある。瀬戸・美濃窯産陶器は大窯第 3 段階後半までのもの (223) が認められる。非ロクロ調整皿は口縁部を立ち上げるような明瞭な横ナデ調整は認められず、内外面ともに外周をめぐる形で連続する指オサエ調整が施されているもの (229 など)、内面外周部を横ナデ調整するもの (230 など)、内面を大きく一方にナデ調整するもの (224 など) などに区分できる。

02865K 出土遺物 (第 38 図 235～239) 瀬戸・美濃窯産陶器天目茶碗 (235)、灰軸緑釉はさみ皿 (236)、焼締灯明皿 (237)、播鉢 (239)、土師器非ロクロ調整皿 (238) などがある。陶器類は大窯第 2 段階までに属する資料で、城下町期Ⅱ期である。

02885K 出土遺物 (第 38 図 240～243) 瀬戸・美濃窯産陶器焼締灯明皿 (240)、播鉢 (241・243)、土師器羽付鍋 (243) などがあり、陶器類は大窯第 4 段階前半に属する資料群である。

03155E 出土遺物 (第 38 図 244～249) 瀬戸・美濃窯産陶器天目茶碗 (244)、志野菊皿 (245)、灰軸折縁ひだ皿 (246)、播鉢 (247)、祖母懐茶壺 (248)、土師器非ロクロ調整皿 (249) などがあり、245 が登窯第 1 小期に属する。

03265K 出土遺物 (第 39 図 250～268) 瀬戸・美濃窯産陶器天目茶碗 (250～252)、灰軸端反皿 (253)、灰軸丸皿 (254)、焼締灯明皿 (255・256)、鉄軸小壺 (261)、鉄軸筒形容器 (262)、播鉢 (265～267)、土師器ロクロ調整皿 (257・258)、非ロクロ調整皿 (259・260)、南伊勢系鍋 (263)、土鈴 (264)、内耳鍋 (268) などがあり、250 が登窯第 1 小期に属する。

03345K 出土遺物 (第 39 図 269～278) 瀬戸・美濃窯産陶器には灰軸丸皿 (270)、鉄軸棧皿 (271)、錆輪灯明皿 (269) などがあり、269 が大窯第 4 段階後半に比定される土師器にはロクロ調整皿 (272・273) 非ロクロ調整皿 (274・275)、焙烙 (276)、羽付鍋 (277)、羽付釜 (278) などがある。ロクロ調整皿は体部から口縁部にかけて緩やかに外反する。

03395K 出土遺物 (第 39 図 281～284) 瀬戸・美濃窯産陶器鉄軸袴履形香炉 (283)、鉄軸徳利

(284)、中国産白磁皿などがある。281 は景德鎮窯系端反皿で、高台内が匏削りされる。282 が漳州窯系輪禿皿で、削出高台部は露胎となっている。

03565E 出土遺物 (第 39 図 285～294) 瀬戸・美濃窯産陶器には、鉄軸丸碗 (285)、鉄軸小碗 (286)、灰軸丸皿 (287)、灰軸折縁ひだ皿 (288)、播鉢 (292)、焼締大皿 (293) などがあり、285・286 が登窯第 1 小期か第 2 小期に属する。土師器には口縁部が内彎気味になるロクロ調整皿 C 類 (289) と羽無釜 (294) がある。294 は肩に取り付く外耳が縦紐状粘土を貼付けるタイプであり、比較的古い様相を呈する。縦紐状外耳で罍 (羽) を持たない釜は小牧城下町関連の遺跡で多く出土するが、清洲城下町遺跡では希少な事例である。1560 年代に位置づけたい。この他に灰軸陶器類 (290・291) も出土した。

03635K 出土遺物 (第 40 図 298～308) 瀬戸・美濃窯産陶器には灰軸折縁そぎ皿 (298)、志野丸皿 (299)、焼締灯明皿 (301・303)、錆輪灯明皿 (302)、鉄軸筒形容器 (307) などがあり、半数は大窯第 4 段階後半に属する。300 は龍泉窯系青磁菊花皿で、見込みに劃花紋が施され高台内が露胎となる。308 は 12 型式に比定される常滑窯産陶器壺で、外面に刻線がみられる。

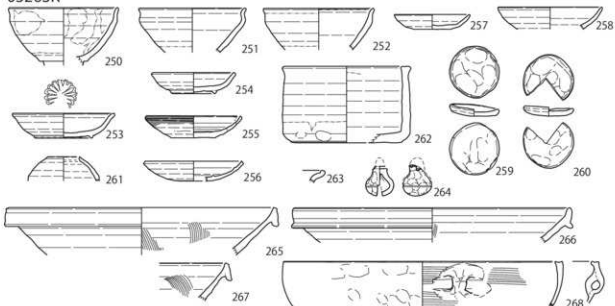
03785K 出土遺物 (第 40 図 314～319) 大窯第 4 段階後半の瀬戸・美濃窯産陶器天目茶碗 (314)、10 型式の常滑窯産陶器甕片 (315)、土師器内耳鍋 (317～319) および釜 (316) などが出土した。内耳鍋は全て半球形で、317 は体部から口縁部にかけて直立気味に立ち上がり、318 と 319 は口縁部が内傾するものである。316 の直立する口縁部がやや低いことから 16 世紀後半の資料と考えられる。

03865K 出土遺物 (第 40 図 320～325) 大窯第 3 段階前半の瀬戸・美濃窯産陶器天目茶碗 (320)、土師器ロクロ調整皿、内耳鍋 (323)、羽付鍋 (324)、および羽付釜 (325) などが出土した。土師器ロクロ調整皿は逆ハの字状に直線的に開くもの (321) とやや内彎するもの (322) がある。

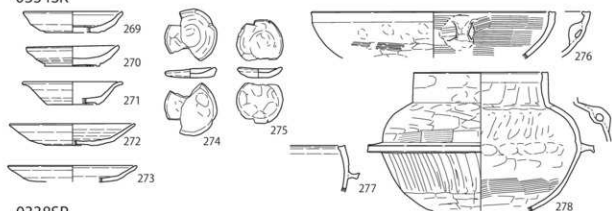
03875K 出土遺物 (第 40 図 326～329) 大窯第 2 段階の天目茶碗 (326)、大窯第 4 段階前半の焼締灯明皿 (327)、大窯段階のエンゴロ (329)、中国漳州窯系白磁輪禿皿 (328) などがある。

04525K 出土遺物 (第 40 図 334～337) 大窯第 1 段階の天目茶碗 (334)、土師器非ロクロ調整皿

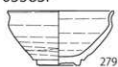
0326SK



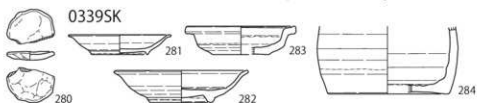
0334SK



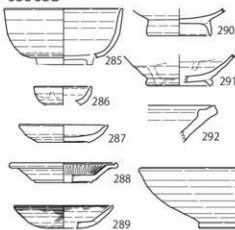
0338SP



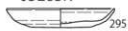
0339SK



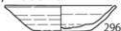
0356SE



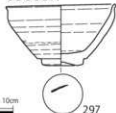
0328SK



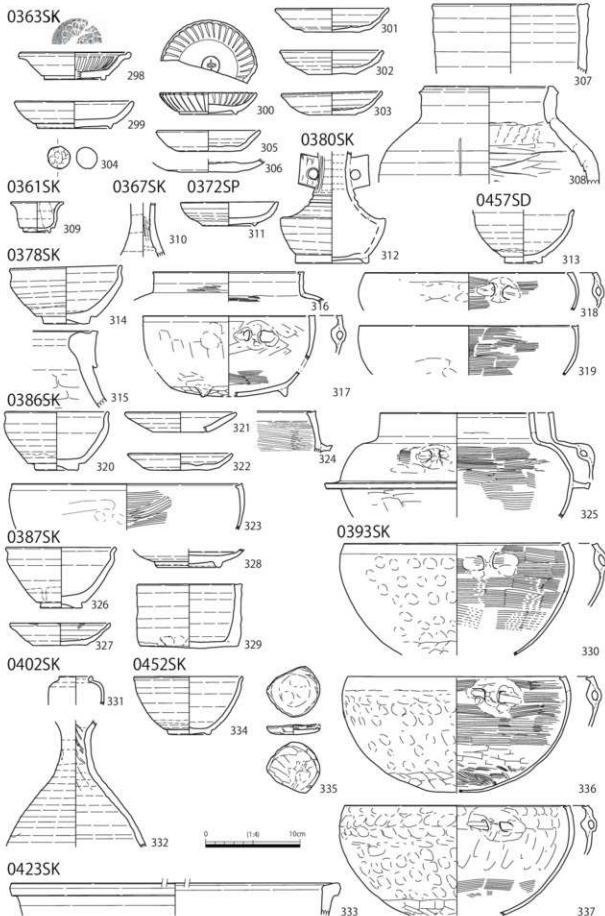
0357SP



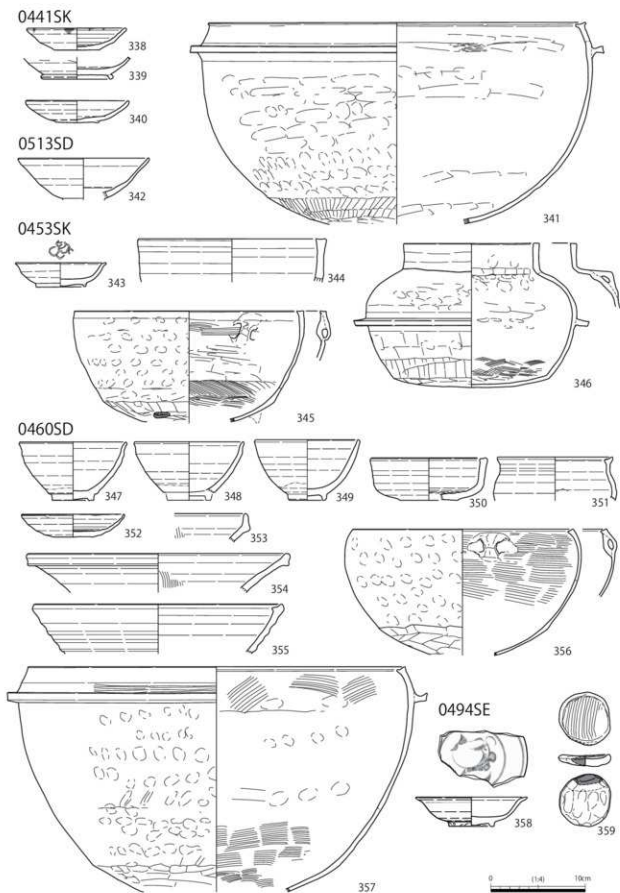
0360SK



第 39 図 城下町期の遺物実測図 (6)

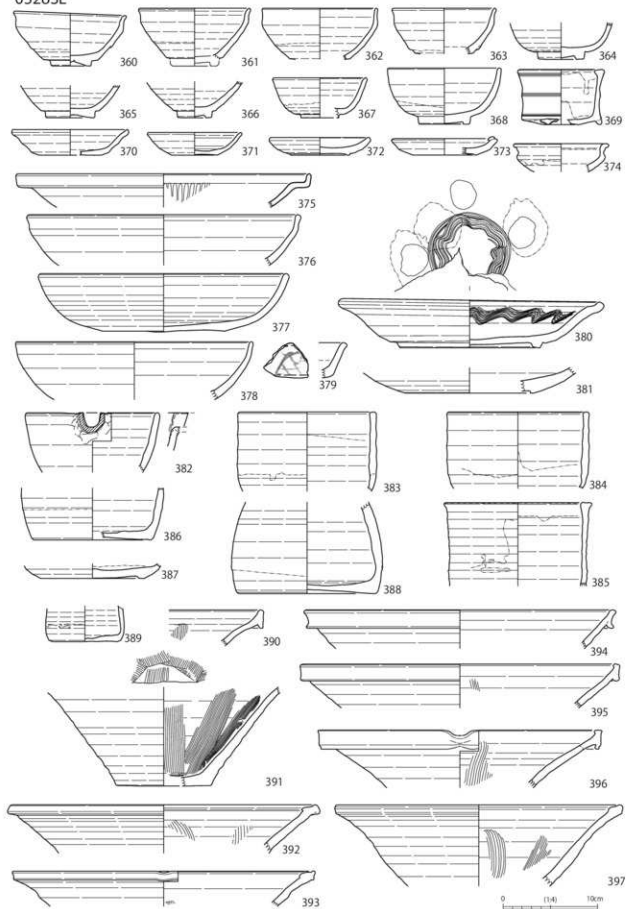


第40図 城下町期の遺物実測図(7)



第41図 城下町期の遺物実測図(8)

0528SE



第 42 図 城下町期の遺物実測図 (9)

(335)、内耳鍋 (336・337) などがある。土師器内耳鍋は全体に半球状を呈し口縁部が内傾するもので、口縁端面のナデ調整はやや弱くその断面形は方形に近い。非ロクロ調整皿も口縁部をやや立ち上げるもので、全体として概ね 16 世紀前葉に位置づけられる資料群である。

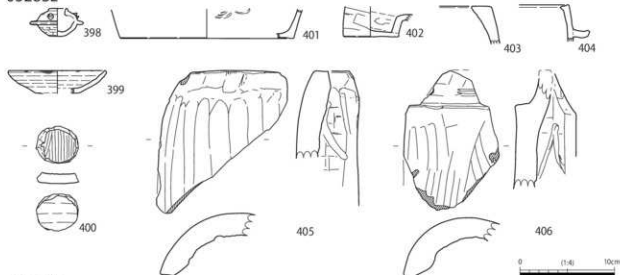
0441SK 出土遺物 (第 41 図 338～341) 大窯第 2 段階の焼締灯明皿 (338)、口縁部が僅かに内彎化する土師器ロクロ調整皿 (339)、口縁部が内傾する

土師器羽付鍋 (341) などがある。16 世紀中葉に位置づけられる。

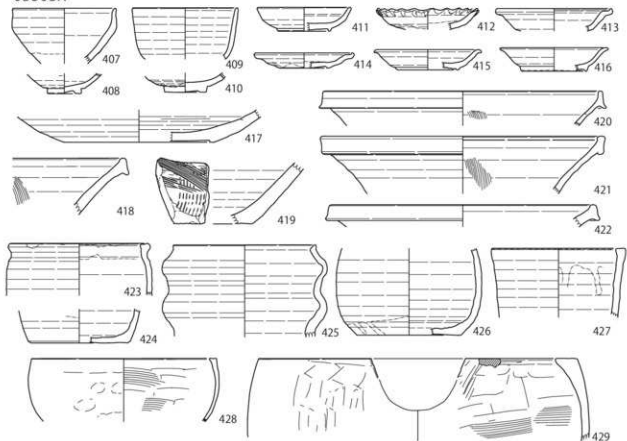
0513SD 出土遺物 (第 41 図 342) 城下町期 III 期の瀬戸・美濃窯産陶器の他に、朝鮮王朝産平碗 (342) が出土した。透明釉 (雑釉) が施され、体部が内側に僅かに屈曲する特徴を持つ。

0453SK 出土遺物 (第 41 図 343～346) 大窯第 1 段階の灰軸端反皿 (343)、大窯段階のエンゴロ (344)、底部と体部の境界部が屈曲し口縁部がやや

0528SE



0530SK



第 43 図 城下町期の遺物実測図 (10)

直立する土師器内耳鍋(345)、底部が平底状を呈する土師器羽付釜(346)などがある。これらは15世紀末から16世紀前半に位置づけられるものである。

0460SD 出土遺物 (第41図347~357) 瀬戸・美濃窯産陶器には天目茶碗(347・348)、灰軸丸碗(349)、エンゴロ(350)、鉄軸口広有耳壺(351)、焼締灯明皿(352)、播鉢(353・354)、錆軸内耳鍋(355)などがある。これらは概ね古瀬戸後Ⅳ期新段階から大窯第2段階に属するが、349のみが大窯第3段階後半に属する。土師器は底部と体部の境界部が屈曲しないほぼ半球形となる内耳鍋(356)と、口縁部が内傾する羽付鍋(357)などがあり、これらは16世紀中葉の所産と考えられる。

0494SE 出土遺物 (第41図358・359) 景徳鎮窯系青花端反皿(358)と土師器非ロクロ調整皿(359)がある。後者は口縁部の一部が著しく被熱し黒褐色化した部分も認められた。金属加工に使用された可能性が考えられる。

0528SE 出土遺物 (第42・43図360~406) 瀬戸・美濃窯産陶器、土師器、瓦器、朝鮮王朝産陶器などが存在する。瀬戸・美濃窯産陶器には天目茶碗(360~363・365・366)、鉄軸丸碗(364)、灰軸丸碗(368)、志野茶碗(379)、志野小碗(367)、灰軸筒形香炉(369)、鉄軸袴腰形香炉(374)、焼締灯明皿(371)、志野丸皿(372・373)、焼締大皿(376~378・381)、黄瀬戸折縁鉢(380)、鉄軸片口(382~385)、鉄軸徳利(386・388)、鉄軸筒形容器(387)、鉄軸小瓶(389)、播鉢(390~397)などがある。これらは概ね大窯第3段階から大窯第4段階に属するが、366が登窯第1小期に比定される。土器類は少なく土師器はロクロ調整皿(399)と羽付鍋(404)、瓦器はミアテア釜(398)と風炉(402・403)などがある程度で、この他に朝鮮王朝産徳利(401)や瓦類(405・406)が伴う。城下町期Ⅲ-1期の遺物様相を示すといえる。

0530SK 出土遺物 (第43図407~429) 0530SK 出土遺物のうち、上層で取り上げた遺物をここで紹介する。瀬戸・美濃窯産陶器、土師器、瓦器などが存在する。瀬戸・美濃窯産陶器には天目茶碗(407)、小天目茶碗(408)、黄瀬戸丸碗(409)、鉄軸丸碗(410)、灰軸丸皿(411)、灰軸内壳皿(412)、灰軸折縁皿(413・414)、志野丸皿(415)、焼締大皿(417)、播鉢(418~422)、鉄軸筒形容器(423)、鉄軸徳利(424・426)、焼締建水(425)、鉄

軸片口(427)などがある。これらは概ね大窯第3段階から大窯第4段階に属する。土器類は少なく土師器内耳鍋(428)、瓦器風炉(429)などがある程度で、この他に景徳鎮窯系白磁端反皿(416)や備前窯産陶器播鉢(419)が共存する。城下町期Ⅲ-1期に属する。

0537SE 出土遺物 (第44図430~449) 瀬戸・美濃窯産陶器、常滑窯産陶器、中国産磁器、土師器などが存在する。瀬戸・美濃窯産陶器には志野丸碗(431)、志野丸皿(432)、灰軸折縁皿(433)、灰軸丸皿(434)、錆軸灯明皿(436)、焼締灯明皿(437)、エンゴロ(441)、鉄軸袴腰形香炉(442)、鉄軸筒形容器(443)、鉄軸徳利(444)、播鉢(445~447)などがある。これらのうち大半が大窯第4段階後半に位置づけられる。中国産磁器には、景徳鎮窯系の青花碗(430)と白磁端反皿(435)および龍泉窯系青磁盤の口縁部(438)がある。土師器は内面を一方に横ナデ調整される非ロクロ調整皿(439・440)と内耳鍋(449)などがあり、常滑窯産陶器には平底で浅い鉢が認められる。城下町期Ⅲ-1期。

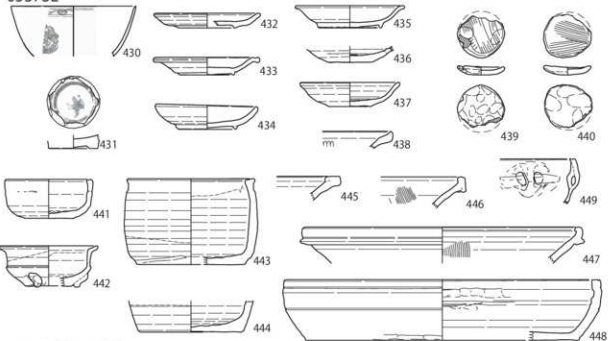
0530SK 下層 (0538SK) 出土遺物 (第44図450~485) 0530SK 出土遺物のうち、下層(0538SK)として取り上げた遺物をここで紹介する。瀬戸・美濃窯産陶器、常滑窯産陶器、中国産磁器、土師器などが出土した。瀬戸・美濃窯産陶器には天目茶碗(450・451)、鉄軸椀皿(452)、鉄軸折縁鉢(454)、焼締大皿(453)、鉄軸筒形容器(457)、鉄軸片口(458)、鉄軸徳利(459)、鉄軸甕(460)、播鉢(462~465)などがある。大半は大窯第3段階から大窯第4段階に属するが、450が登窯第1小期に属する。土師器は少なく釜(461)などがある程度で、この他に常滑窯産陶器盤(453)、中国産龍泉窯系青磁盤(455)などが含まれる。

0651SK 出土遺物 (第44図467~471) 灰軸端反皿(467)と灰軸丸皿(468)、鉄軸袴腰形香炉(469)、土師器釜の直立する口縁部片(470)がある。瀬戸・美濃窯産陶器の多くは大窯前半に属することから城下町期Ⅰ~Ⅱ-1期と想定される。

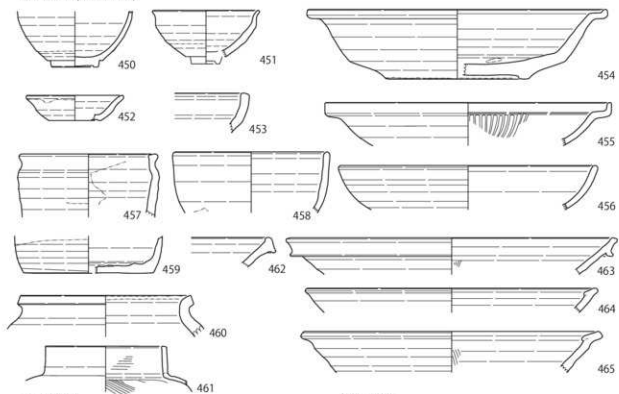
0653SK 出土遺物 (第44図472~479) ロクロ調整皿(473~479)が多く、他に大窯第4段階の灰軸折縁そぎ皿(472)が含まれている。

0631SE 出土遺物 (第45図480~496) 瀬戸・美濃窯産陶器、常滑窯産陶器、中国産磁器、土師器などが出土した。瀬戸・美濃窯産陶器には天目

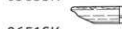
0537SE



0530SK(0538SK)

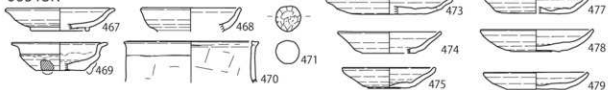


0583SK



0653SK

0651SK



第 44 図 城下町期の遺物実測図 (11)

茶碗(480)、志野丸碗(481)、口縁部にひだを持つ灰釉反り皿(483)、灰釉折縁皿(485)、志野向付(486)、焼締大皿(490)、鉄軸緒桶(488)、鉄軸片口(487)、鉄軸徳利(489)、播鉢(491～495)などがある。この中で最新資料は大窯第4段階後半に属する486と492である。この他に常滑窯産陶器盤(496)と中国産漳州窯系青花輪壳碗(482)などが伴う。496は448に比べると口縁部がやや内傾する。

0655SK 出土遺物 (第45図497～502) 瀬戸・美濃窯産陶器天目茶碗(497)、鉄軸丸碗(498)、志野丸皿(499)、黄瀬戸鉢(501)、常滑窯産陶器壺(500)、甕(502)がある。502は17世紀前半に位置づけられるが、瀬戸・美濃窯産陶器は概ね大窯第4段階後半の資料である。

0669SK 出土遺物 (第45図507～513) 瀬戸・美濃窯産陶器鉄軸丸碗(507)、灰釉梅花皿(508)、灰釉折縁皿(509)、播鉢(510)、鉄軸徳利(512)、焼締大皿(513)などがあり、大窯第4段階前後の資料ばかりである。8世紀代に属する須恵器杯蓋(511)も出土した。

0676SK 出土遺物 (第45図516～520) 瀬戸・美濃窯産陶器天目茶碗(516・517)と播鉢(518・519)、および常滑窯産陶器鉢(520)などがあり、城下町期Ⅲ期に位置づけられる。

0692SK 出土遺物 (第46図521～527) 大窯第4段階後半に属する瀬戸・美濃窯産陶器志野丸皿(521)と焼締灯明皿(522)に土師器ロクロ調整皿が多く伴う一括資料である。土師器皿は、体部が途中で僅かに折れるE類(523・525～527)と口縁部にかけて内彎するC類(524)に区分でき、城下町期Ⅲ期に比定される。

0725SK 出土遺物 (第46図530～536) 瀬戸・美濃窯産陶器には天目茶碗(530)、小天目茶碗(531)、灰軸丸皿(532)と焼締灯明皿(533)、播鉢(534)、エンゴロ(536)があり、536を除く全てが大窯第2段階に属する資料である。土師器は土犬(犬形土製品:535)が存在し、目を穴で表現するなど比較的精巧に製作されたものである。共存関係が正しいとすれば、この土犬は16世紀中頃に位置づけられるものである。

0652SI 下層出土遺物 (第46図537～539) 0733SKとして取り上げた0652SI下層に相当する資料である。大窯第1段階の鉄軸口広有耳壺(537)

と大窯第2段階の灰軸丸皿(538)に伴い、片口を有する土師器無頸小壺(539)が出土した。底部に回転系切痕が残存するもので、特に使用痕は確認できなかった。

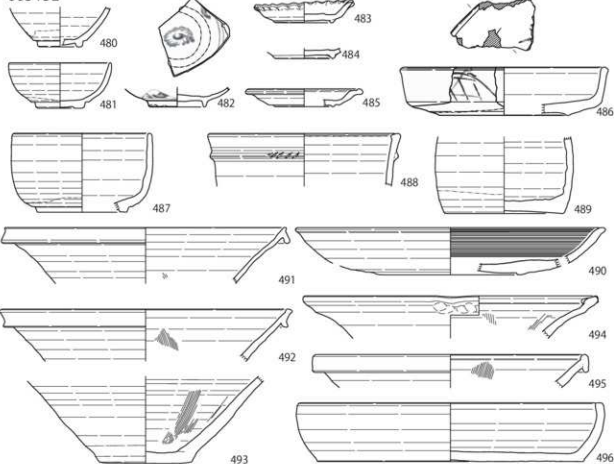
0732SK 出土遺物 (第46図540～567) 瀬戸・美濃窯産陶器、常滑窯産陶器、唐津窯産陶器、中国産磁器、土師器などが存在する。瀬戸・美濃窯産陶器には志野茶碗(541)、志野丸碗(540・542)、志野小碗(543)、志野小杯(546)、志野丸皿(552・553)と焼締灯明皿(555)、鎗軸灯明皿(554・556)、焼締大皿(562)、鉄軸小壺(563)、黄瀬戸菊皿(564)、播鉢(565)などがあり、登窯第1小期に属する540と563を除く大部分が大窯第4段階に位置づけられる。常滑窯産陶器には上端面が平坦となる赤物火鉢(567)、唐津窯産陶器には藁灰軸丸碗(547)があり、17世紀初頭のものと思われる。中国産磁器には龍泉窯系青磁皿(551)、景德鎮窯系青磁碗(548)・青花碗(544)・青花端反皿(549・550)、五彩丸碗(545)がある。545は内面に花菱や圏線がコハルトで描かれ外面が黄色や緑色などの上絵付が施されている。土師器にはロクロ調整皿と焙烙(566)が認められる。土師器皿は体部が途中で僅かに折れるE類(557・558)と口縁部にかけて内彎するC類(559～561)に区分できる。

0734SK 出土遺物 (第46図568～574) 大窯第1段階の天目茶碗(568)と大窯第3段階の焼締灯明皿(569)などに伴い、さまざまな土師器が出土した。ロクロ調整皿(570・571)は体部下半で僅かに折れ逆ハの字状に開くE類で比較深いものである。非ロクロ調整皿(573・574)は口縁部を上方に立ち上げないが、外周部に横ナデ調整が施されている。土師器無頸小壺は口縁部内面が直立して先端がやや尖るもの、焙烙は口縁部が直立気味になるもので、全体に城下町期Ⅲ期よりも古い特徴を有する。

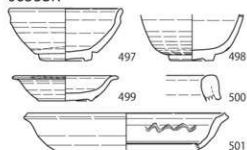
0758SK 出土遺物 (第47図576～579) 大窯後半の灰軸丸碗(576)と大窯第1段階の灰軸縁軸はさみ皿(577)に伴い、土師器内耳鍋(578)と釜(579)が存在する。578は体部上方外面に沈線を持つ。

0767SK 出土遺物 (第47図580～591) 瀬戸・美濃窯産陶器には鉄軸丸碗(580)、志野丸碗(581)、鉄軸端反皿(582)、灰軸丸皿(583)、鉄軸片口(586)、鉄軸筒形容器(587)、播鉢(588～591)などがあり、583の口縁部にはターレが付着する。登窯第1小期に属する586を除くと概ね大窯第2～

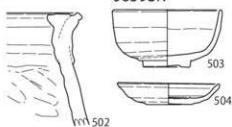
0631SE



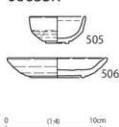
0655SK



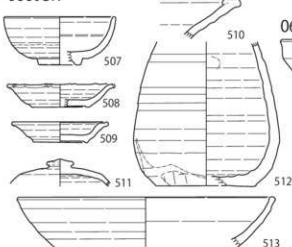
0659SK



0663SK



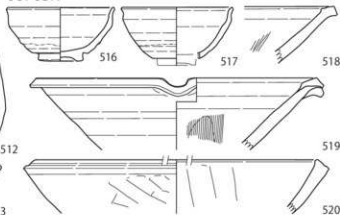
0669SK



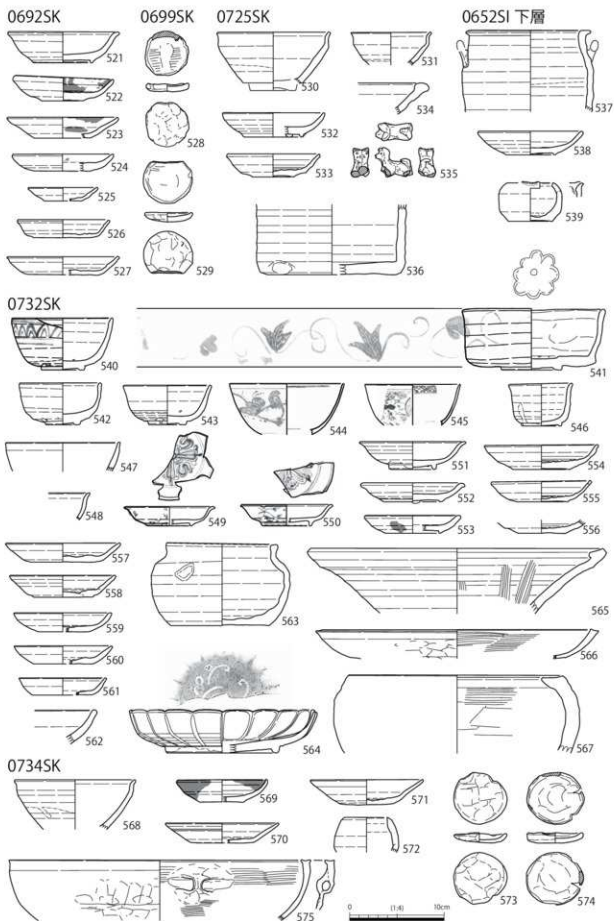
0673SK



0676SK

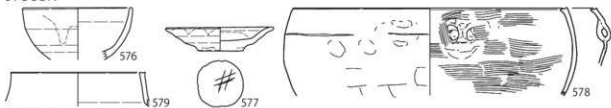


第45図 城下町期の遺物実測図(12)

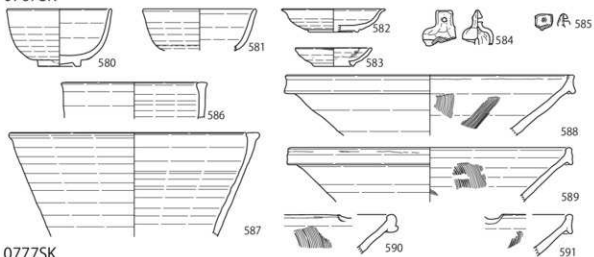


第 46 図 城下町期の遺物実測図 (13)

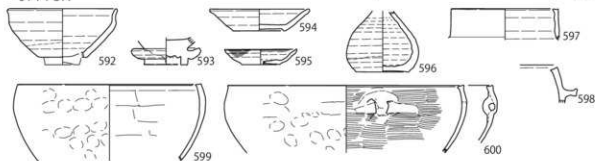
0758SK



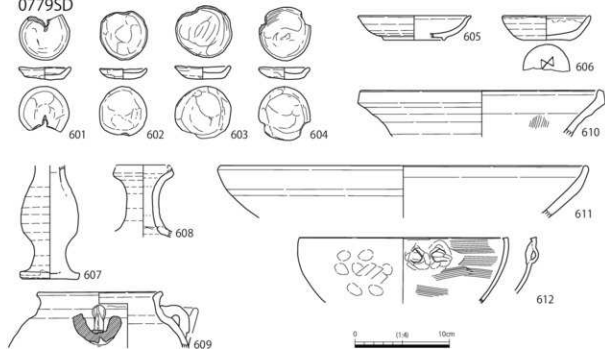
0767SK



0777SK



0779SD



0 1.6 10cm

第 47 図 城下町期の遺物実測図 (14)

4段階に位置づけられる。土師器には土師が2点出土した。584は胴部中央に沈線が巡る。

07775K 出土遺物 (第47図592～600) 瀬戸・美濃窯産陶器には天目茶碗(592)、鉄軸仏蘭具(593)、鉄軸棧皿(594)、鉄軸小瓶(596)などがあり、所属時期はバラバラである。土師器にはロクロ調整皿(595)、釜(597)、羽付鍋(598)、内耳鍋(599・600)などがある。

07795D 出土遺物 (第47図601～612) 瀬戸・美濃窯産陶器には灰軸端反皿(605)、灰軸緑釉小皿(606)、鉄軸仏花瓶(607・608)、錆軸釜(609)、播鉢(610)、鉄軸大皿(611)などがある。611は大窯第4段階、610は大窯第2段階に属する他は古瀬戸後Ⅳ期新段階を中心とした時期なので、610と611は上層からの混入の可能性も考えられる。土師器には非ロクロ調整皿(595)で横ナデ調整が施されて口縁部が立ち上がるもので、城下町期Ⅰ期に相当する資料である。

07985K 出土遺物 (第48図613～618) 大窯第4段階の天目茶碗(613)、古瀬戸後Ⅳ期新段階の鉄軸袴腰形香炉(614)と播鉢(615)に伴い、土師器半球形内耳鍋が3個体以上出土した。616と617は底部と体部の境界がやや明瞭で僅かに内彎しながら口縁部に至るもので、体部外面上方に焼成前の沈線が施される。618は底部と体部の境界が不明瞭となり、若干内彎化が強く体部外面上方の沈線は認められない。前者は後者より古く位置づけられよう。

08105X 出土遺物 (第48図619～629) 瀬戸・美濃窯産陶器には大窯第4段階の鉄軸筒形碗(619)と大窯第4段階後半の播鉢(628・629)、中国産磁器には景德鎮窯系青花皿(626・627)がある。土師器は口縁部が内彎するロクロ調整皿(620～622)と口縁部を立ち上げないが外周部をナデ調整する非ロクロ調整皿(623～625)がある。

08155D 出土遺物 (第48図630～648) 瀬戸・美濃窯産陶器には天目茶碗(630・631)、無釉灯明皿(632～634)、鉄軸丸皿(635)、志野丸碗(637)、錆軸大皿(638)、黄瀬戸向付(639)、鉄軸筒形香炉(642)、鉄軸筒形容器(643)、鉄軸口広有耳壺(644)など多様な製品があり、大窯第1段階に属するもの(630～634など)と大窯第4段階後半に位置づけられるもの(637～639など)に大別される。上位面で遺構検出が十分でなく複数の遺構の遺物が含有してしまった可能性が考えられ、大窯第1段

階に属するものが本来の08155Dの遺物と想定される。この他に10型式に属する常滑窯産陶器(648)、景德鎮窯系青花皿(636)、土師器ロクロ調整皿(640)、非ロクロ調整皿(641)、内耳鍋(645・646)、羽付鍋(647)などが存在する。土師器鍋類は体部から口縁部にかけて直線的に開くので、大窯第1段階に併行するものとみられる。

08585K 出土遺物 (第49図649～665) 土師器皿と鍋類が主体となる資料である。土師器皿は体部から口縁部にかけて内彎するロクロ調整皿(651～653)と口縁部を短く立ち上げ横ナデ調整が施される非ロクロ調整皿(655～661)がある。土師器内耳鍋は体部が直線的に開くもの(662)、口縁部でやや内彎するもの(663・664)、大きく内彎するもの(665)があり、663は体部上方に沈線が施される。瀬戸・美濃窯産陶器には大窯第1段階の播鉢(654)などがあり、鉄軸壺底部片(650)には墨書が記されていた。景德鎮窯系青花碗(649)も存在する。

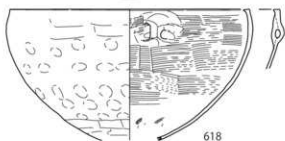
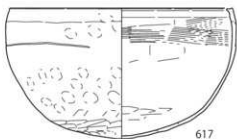
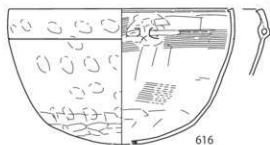
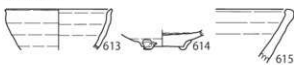
08095L 出土遺物 (第49図666・667) 667は瀬戸・美濃窯産陶器灰軸菊皿で、削出高台を持ち高台内に重ね焼き痕が認められる。天目茶碗(666)は、大窯第4段階後半に比定される。

08735K 出土遺物 (第49図668～673) 瀬戸・美濃窯産陶器には、古瀬戸後Ⅳ期新段階に属する天目茶碗(668)と大窯第1段階に属する仏蘭具(669)と播鉢(670)がある。一方、土師器には、口縁部を短く立ち上げ横ナデ調整が施される非ロクロ調整皿(672)と羽付内耳鍋片(671)と沈線を持つ内耳鍋(673)がある。城下町期Ⅰ期に比定される資料と評価できる。671は羽付鍋に内耳が付くもので出土事例は少ない。

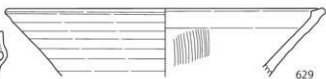
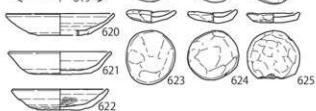
08895K 出土遺物 (第49図674～681) 瀬戸・美濃窯産陶器には古瀬戸後Ⅱ期の灰軸平碗(674)、古瀬戸後Ⅳ期の鉄軸筒形香炉(675)、大窯第1段階の天目茶碗(676)と大窯後半の播鉢(681)がある。一方、土師器には、口縁部を短く立ち上げ横ナデ調整が施される非ロクロ調整皿(677～679)と羽付釜(680)がある。概ね城下町期Ⅰ期に比定されるが、681のみが新しい。

08855K 出土遺物 (第50図688～729) 瀬戸・美濃窯産陶器と土師器が大部分を占め、若干の中国産磁器と常滑窯産陶器を含む資料である。瀬戸・美濃窯産陶器には天目茶碗(688)、志野丸碗(689)、灰軸腰折皿(690)、播鉢(698)などがあり、690を

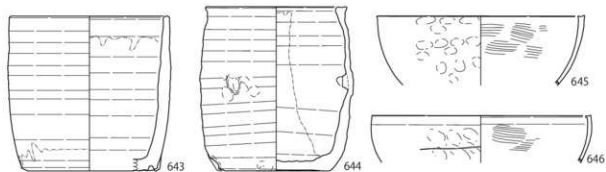
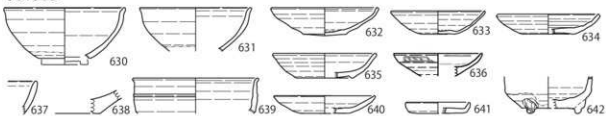
0798SK



0810SX

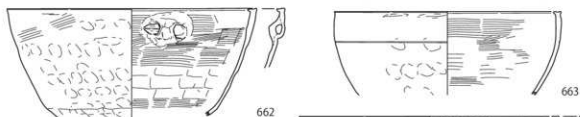
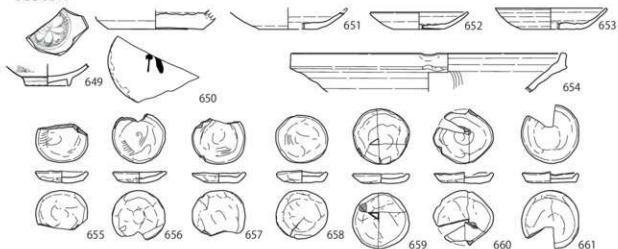


0815SD

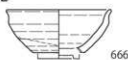


第 48 図 城下町期の遺物実測図 (15)

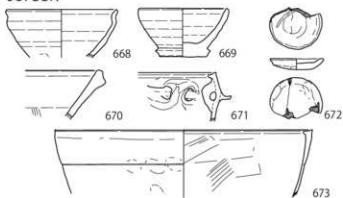
0858SK



0809SL



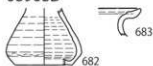
0873SK



0889SK



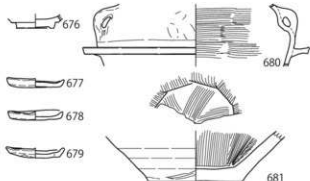
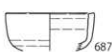
0896SD



0920SK



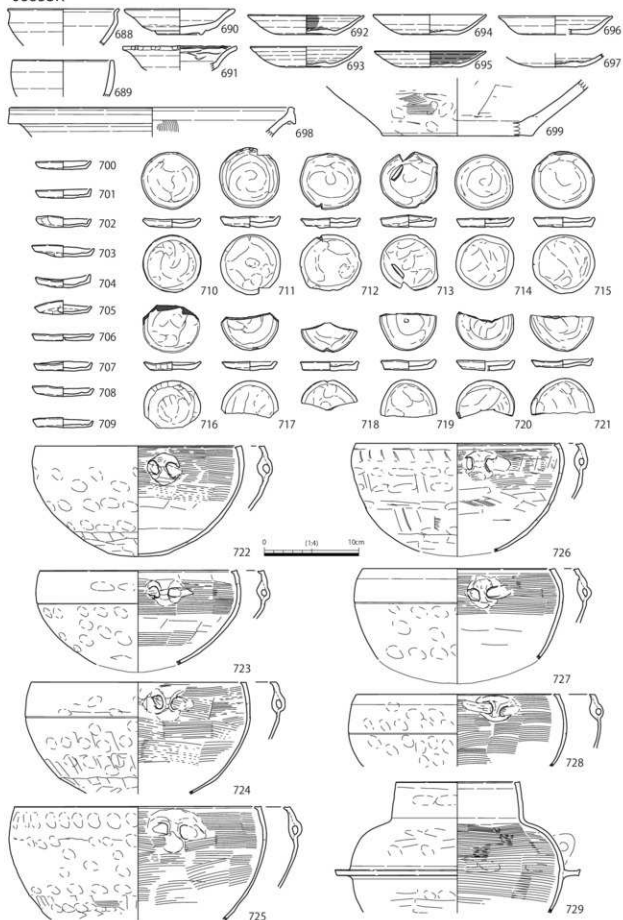
0939SL



0 1:4 10cm

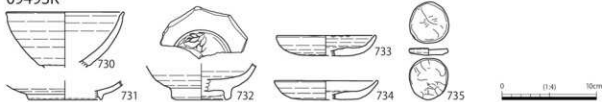
第 49 図 城下町期の遺物実測図 (16)

0885SK

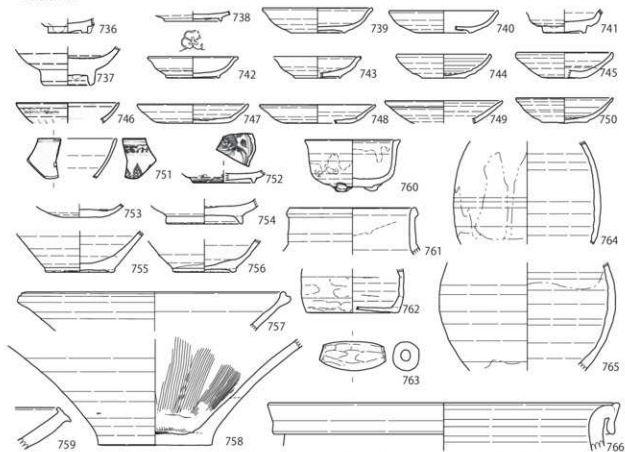


第50図 城下町期の遺物実測図(17)

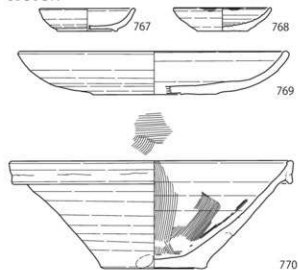
0949SK



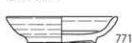
0955SK



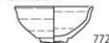
0959SK



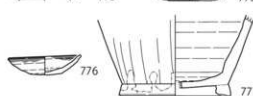
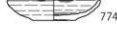
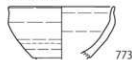
0965SK



0968SK



0966SK



第 51 図 城下町期の遺物実測図 (18)

除くと概ね大窯後半に属するものである。土師器には体部が直線的に開くロクロ調整皿B類(692～697)、口縁部が短く立ち上がり横ナ調整が施される非ロクロ調整皿(700～721)、底部から体部は半球状を呈し口縁部が内傾する内耳鍋(722～728)および羽釜(729)などが存在する。これらの土師器は城下町期Ⅰ期～Ⅱ期に位置づけられるもので、瀬戸・美濃窯産陶器とは时期的に合わない。この他に9か10型式に属する常滑窯産陶器の底部片(699)と龍泉窯系青磁棧花皿(691)などがある。

0949SK 出土遺物 (第51図730～735) 瀬戸・美濃窯産陶器には大窯第1段階に属する天目茶碗(730)と大窯第4段階前半の灰志野丸皿(731)がある。土師器には、体部から口縁部が大きく内彎するロクロ調整皿C類(733・734)と口縁部を立ち上げない非ロクロ調整皿(735)がある。この他に龍泉窯系青磁劃花紋碗があり、730と732を除くと概ね城下町期Ⅲ期に比定される。

0955SK 出土遺物 (第51図736～766) 瀬戸・美濃窯産陶器には、天目茶碗(736)、鉄軸丸皿(738～740)、灰軸腰折皿(741)、灰軸端反皿(742・743)、焼締灯明皿(744・745・750)、播鉢(757・758)、鉄軸筒形香炉(760)、灰軸口広根来型瓶子(761)、鉄軸徳利(764・765)などがあり、ほぼ大窯第2段階までに属するものである。739の鉄軸丸皿には灰軸が流し掛けられている。中国産磁器には、龍泉窯系青磁碗(737)、漳州窯系青花蓮弁紋皿(746)、景德鎮窯系青花碗(751)と青花皿(752)がある。この他に、常滑窯産陶器の10型式の鉢(759)と8型式の甕(766)、備前窯産陶器徳利底部片(762)、ロクロ調整土師器皿E類(747～749)、山茶碗(754～756)、須恵器(753)、土鍾(763)などが出土した。

0959SK 出土遺物 (第51図767～770) 瀬戸・美濃窯産陶器には大窯第3段階に属する灰軸丸皿(767)、焼締灯明皿(768)、焼締大皿(769)と播鉢(770)があり、このうち767と770は大窯第3段階前半に位置づけられる。

0966SK 出土遺物 (第51図773～778) 瀬戸・美濃窯産陶器には大窯第4段階前半に属する天目茶碗(773)と焼締灯明皿(775)、大窯第2段階の焼締灯明皿(774)、古瀬戸後ⅠかⅡ期の灰軸四耳壺(777)、鉄軸大皿(778)などがある。778は内面に櫛描き線紋が施され、削出高台部のみ鉄軸を拭き取

って露胎とする大皿で、内外面ともに灰軸を流し掛けて唐草風の紋様としている。いわゆる笠原鉢の釉薬を反転させたような製品(写真図版15を参照)で、登窯第1小期に属する。

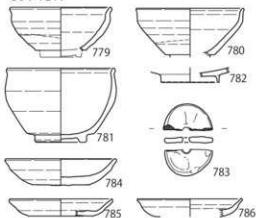
09715K 出土遺物 (第52図779～786) 瀬戸・美濃窯産陶器には大窯第4段階後半に属する天目茶碗(779・780)と登窯第1小期に属する灰軸皿(782)、土師器には体部から口縁部が大きく内彎するロクロ調整皿C類(784・786)や底部中央が焼成後に穿孔された非ロクロ調整皿(783)などがある。本資料で特色的な製品は楽系軟質陶器天目茶碗(781)であり、ロクロで成形した後に透明釉を掛けた白色を呈するものである。胴部がやや張る形状で16世紀末～17世紀初頭のものと思われる。

0974SK 出土遺物 (第52図789～809) 瀬戸・美濃窯産陶器には天目茶碗(789)、志野丸皿(790)、志野丸皿(791～793)、灰軸棧皿(794)、志野向付(804)、鉄軸肩衝茶入(805)、鉄軸鉢(807)、播鉢(808)などがあり、概ね大窯第4段階後半に属する。常滑窯産陶器には12型式に属する鉢(809)と器種や時期は不明の小片を円盤状に加工したもの(加工円盤806)がある。土師器は底部に指圧痕が残る非ロクロ調整皿(796～800)などがあり、802は内面にミガキ調整が施されて黒色に焼されたもので、時期と器種はともに不明である。

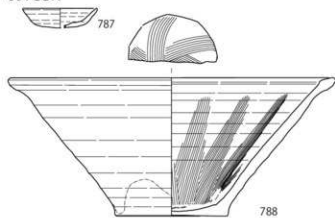
1021SE 出土遺物 (第52図813～818) 瀬戸・美濃窯産陶器には天目茶碗(813)、鉄軸丸皿(814)、焼締灯明皿(815)、鉄軸徳利(818)、播鉢(817)などがあり、大窯第3段階前半までに属する。常滑窯産陶器には9型式に属する甕(816)が存在する。

0990SD 出土遺物 (第53図819～855) 瀬戸・美濃窯産陶器には天目茶碗(819～821)、灰軸丸皿(822・823)、鉄軸仏蘭具(824)、灰軸腰折皿(827)、灰軸端反皿(829)、灰軸丸皿(828・830)、鉄軸徳利(835)、鉄軸耳付徳利(836)、鉄軸口広有耳壺(837)、エンゴロ(838)、銷軸茶釜(839)、鉄軸甕(840)、播鉢(841～844)などがあり、大窯第3段階までに属する。常滑窯産陶器には9型式の鉢(845)、11型式の甕(846)および6a型式の甕(847)が存在する。土師器には体部が直線的に開くロクロ調整皿B類(831)と体部を短く立ち上げる非ロクロ調整皿(832～834)、口縁部が内傾する内耳鍋(854・855)、羽釜(849)、土鈴(850)、土鍾(851)、製壺土器(852)などがある。848は産地不

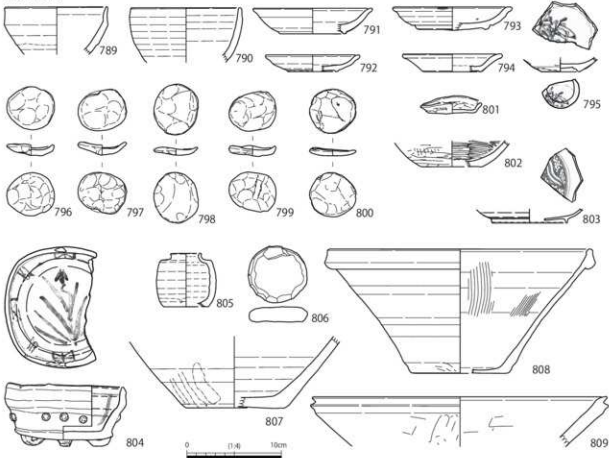
0971SK



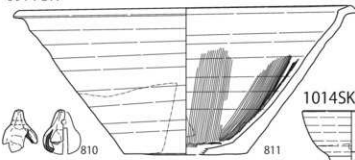
0973SK



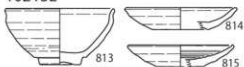
0974SK



0977SK



1021SE

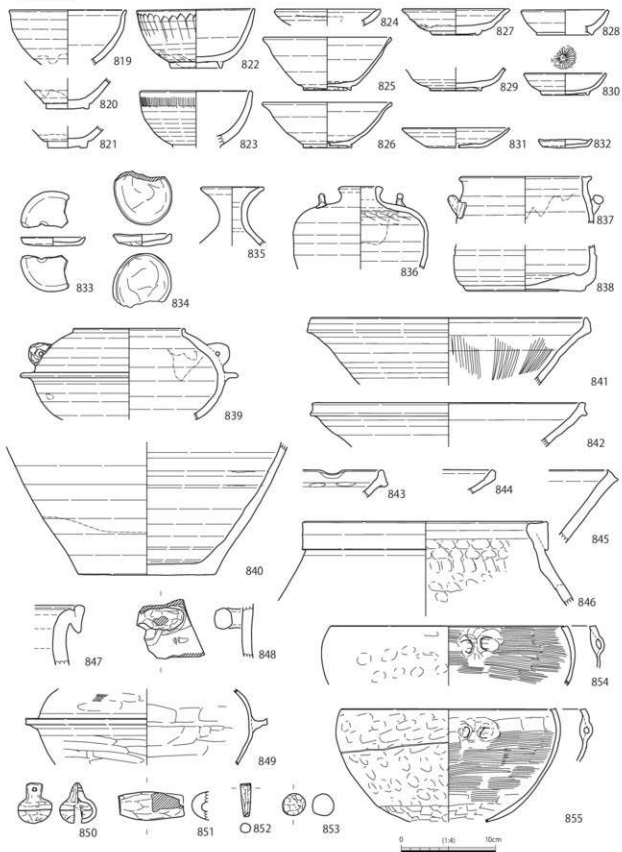


1014SK



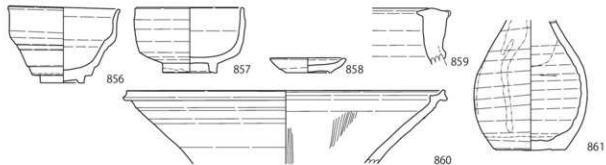
第 52 図 城下町期の遺物実測図 (19)

0990SD

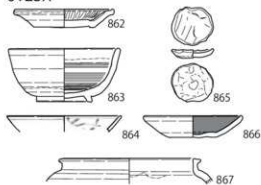


第 53 図 城下町期の遺物実測図 (20)

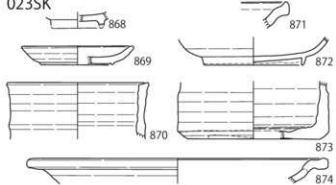
010SK



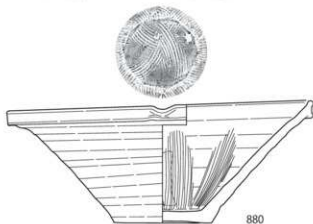
012SX



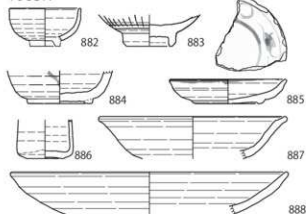
023SK



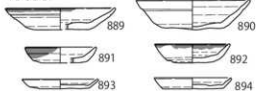
097SP



108SK



138SD



083SK



第 54 図 城下町期の遺物実測図 (21)

明焼締陶器体部片で、横方向に粘土紐を貼付けて把手とする製品である。

0105K 出土遺物 (第54図856～861) 瓦を多く含む資料で遺構の時期は宿場町期の可能性が高いものである。瀬戸・美濃窯産陶器には大窯第4段階前半に属する鉄軸筒形碗(857)と灰軸丸皿(858)、登窯第1小期に属する白天目茶碗(856)と長石釉に銅緑釉を流し掛けた徳利(861)、登窯第2小期に属する播鉢(860)がある。

0125K 出土遺物 (第54図862～867) 瀬戸・美濃窯産陶器には大窯第4段階前半に属する灰軸折縁そぎ皿(862)の他に、内面に柳描き圏線が施された上半部に鉄軸を掛ける焼締片口(863)がある。土師器皿には体部が僅かに内彎するロクロ調整皿(866)と非ロクロ調整皿(865)があり、他に景徳鎮窯系青花皿(864)と志戸呂産陶器短頸壺(867)がある。志戸呂産陶器短頸壺は鉄軸が施された製品で大窯第4段階に位置づけられる。

0235K 出土遺物 (第54図868～874)

宿場町期の遺物を多量に含む資料であるが、この中で城下町期に属する資料を一部紹介する。868は唐津窯産陶器丸碗で蓋灰軸が塗布され削出高台となっている。871は登窯第4小期に属する瀬戸・美濃窯産陶器播鉢である。

0975P 出土遺物 (第54図875～881) 瀬戸・美濃窯産陶器には鉄軸丸碗(875)、灰軸丸碗(876)、焼締灯明皿(877)、灰軸反り皿(878)、鉄軸大皿(879)、播鉢(880・881)などがあり、大窯第3段階～登窯第1小期に属する前半に属する。879は外面下半の釉葉が拭き取られて露胎となる碁笥底の製品で、内外面とも鉄軸の上に灰軸を用いて唐草紋が描かれている。大窯第4段階に位置づけられよう。

1085K 出土遺物 (第54図882～888) 宿場町期の遺物を多量に含む資料であるが、この中で城下町期に属する資料を一部紹介する。883は龍泉窯系青磁碗で見込み部が露胎となる。887と888は瀬戸・美濃窯産陶器焼締大皿で、前者は口縁部が外反し、後者は口縁部が直線的に開くものである。今回の調査区では大皿類が多く確認される特徴を持っている。

0835K 出土遺物 (第54図895) 宿場町期の遺物を含む資料だが、志戸呂産陶器を紹介する。895は志戸呂産陶器鉄軸香炉で、内面体部下半は露胎となる。登窯第1か2小期に比定される。

1385D 出土遺物 (第54図889～894) 僅かな陶器片とともに土師器皿がまとまって出土した。全てロクロ調整皿で、体部で僅かに折れ彎曲する比較的大形のもの(889・890)と、僅かに内彎する比較的中形のもの(891・892)と、器高が低く直線的に開くもの(893・894)に区分できる。城下町期Ⅲ期に位置づけられよう。

1775K 出土遺物 (第55図896～906) 瀬戸・美濃窯産陶器には志野丸碗(896)、志野丸皿(897)、織部香合蓋(901)、鉄軸花瓶(902)、銷軸大皿(903)、焼締大皿(904)、織部浅鉢(905)、播鉢(906)などがあり、概ね大窯第4段階～登窯第1小期に属する。

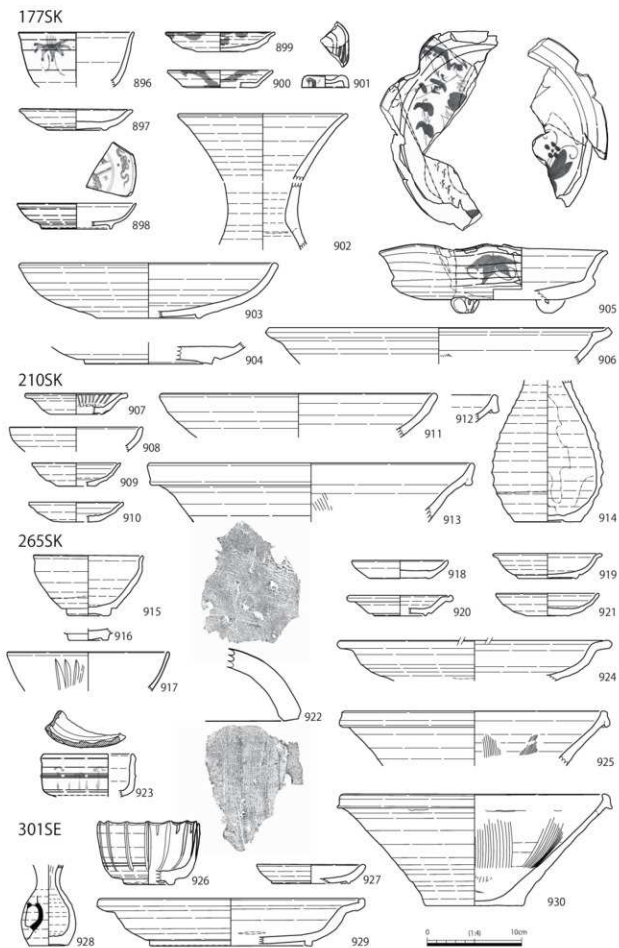
2105K 出土遺物 (第55図907～914) 瀬戸・美濃窯産陶器には灰軸折縁皿(907)、志野丸皿(908)、焼締灯明皿(909・910)、銷軸大皿(911)、鉄軸徳利(914)、播鉢(912・913)などがあり、概ね大窯第3段階～大窯第4段階に属する。

2655K 出土遺物 (第55図915～925) 登窯第1小期に属する志野向付(923)と鉄軸大皿(924)以外は概ね大窯第3段階～大窯第4段階に属する資料である。922は内面に布目痕、外面に縄目タタキ痕が残存する丸瓦で古代に属する。

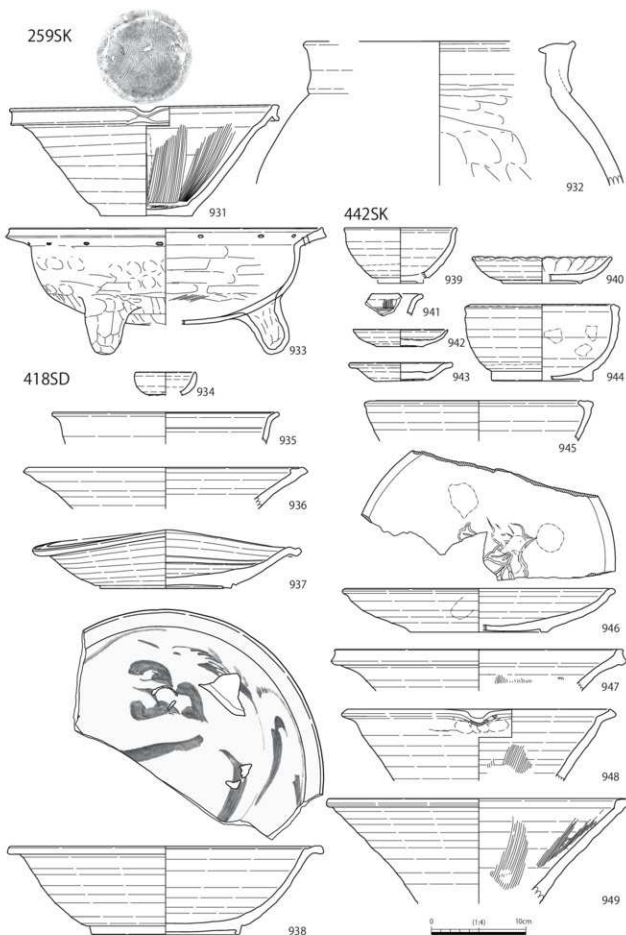
3015E 出土遺物 (第55図926～930) 瀬戸・美濃窯産陶器の灰軸向付(926)、志野丸皿(927)、志野小瓶(928)、黄瀬戸折縁鉢(929)、播鉢(930)などがあり、概ね大窯第3段階～登窯第1小期に比定される。

2595K 出土遺物 (第56図931～933) 大窯第3段階後半の瀬戸・美濃窯産陶器播鉢(931)、12型式に属する常滑窯産陶器裏(932)、および土師器火鉢(933)などがある。933は中空の三足を持つ浅鉢で、屈曲して開く口縁部に連続して穿孔が施されている。体部外面に被熱痕が確認される。

4185D 出土遺物 (第56図934～938) 瀬戸・美濃窯産陶器には志野丸碗(934)、播鉢(936)、焼締大皿(937)、鉄絵鉢(笠原鉢:938)などがある。938は登窯第2小期か第3小期に比定されるが、他は大窯第3段階～大窯第4段階に属する。935はくすんだ緑釉が掛かる華南三彩と思われる盤である。短く屈曲する口縁部を持ち、体部内面に沈線が施されている。華南三彩盤は今回の調査で小破片が数点確認されており、これらは同一個体である可能性もある。



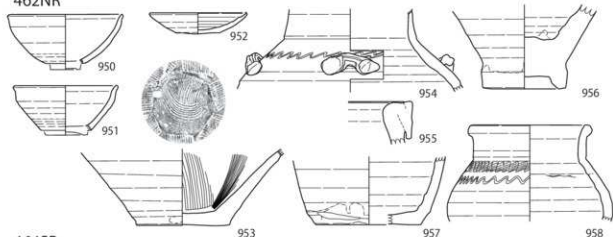
第 55 図 城下町期の遺物実測図 (22)



第56図 城下町期の遺物実測図(23)

442SK 出土遺物 (第56図939～949) 瀬戸・美濃窯産陶器には天目茶碗(939)、志野菊皿(940)、焼締灯明皿(942)、灰軸折縁皿(943)、鉄軸片口(944)、鉄軸鉢(945)、黄瀬戸大皿(946)、播鉢(947～949)などがある。948が登窯第1小期に比定されるが、他は大窯第3段階～大窯第4段階に属する。941は華南三彩と思われる盤で、緑釉が施されている。

462NR



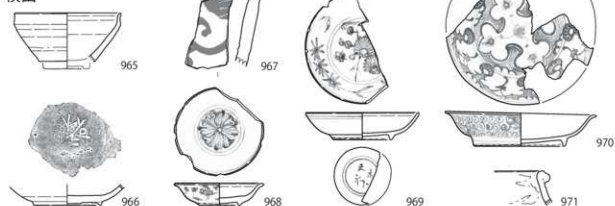
464SP



446SK



検出



462NR 出土遺物 (第57図950～958) 瀬戸・美濃窯産陶器には天目茶碗(950・951)、無軸灯明皿(952)、播鉢(953)、鉄軸四耳壺(954)、鉄軸壺か瓶の底部(957)、鉄軸有耳壺(958)などがあり、この他に10型式古段階の常滑窯産陶器裏(955)と白磁瓶子(956)が存在する。瀬戸・美濃窯産陶器は概ね大窯第1段階～大窯第2段階に属する。

464SP 出土遺物 (第57図959～963) 瀬戸・

第57図 城下町期の遺物実測図(24)

美濃窯産陶器焼締灯明皿(959)、鉄軸徳利(961)、掃鉢(962)、土師器口クロ調整皿(960)、羽付鍋(963)などがある。959・960は口縁部にタールが付着する。

遺構以外の出土遺物(第57図965～970) 965は志戸呂窯産陶器天目茶碗で大竈第4段階に属する。966は10A区3面遺構検出時に出土した瀬戸・美濃窯産陶器灰軸皿で見込みに施された草花紋の印花が珍しい。967は11C区3面遺構検出時に出土した裏体部片で、露胎となった部分に鉄軸で唐草紋が描かれている。968～970は中国景德鎮窯系青花皿で、清洲城下町遺跡の中では残存状況が比較的良好なものである。968と969は10A区、970は10B区から出土した。971は中国産と思われる褐釉壺(いわゆる呂宋壺か)の口縁部である。

(4) 宿場町期

本報告では整理期間と紙数に制約があるため、代表的な事例を一部紹介するに止めたい。

443SD 出土遺物(第58図972～984) 肥前窯産磁器染付丸碗(976)、染付丸皿(979)、瀬戸窯産陶器鉄軸半胴(984)などが出土しており、宿場町期Ⅱ期に属する資料である。この他に大竈第4段階の黄瀬戸鉢(972)、登窯第3か4小期の笠原鉢(973)や志野丸皿(977・978)などが含まれている。また、常滑窯産陶器では12型式に属する裏(981～983)がやや多くあり、982は赤物製品である。

448SK 出土遺物(第59図985～1004) 美濃窯産陶器拳骨茶碗(992)、瀬戸窯産陶器拳骨茶碗(993)と灰軸銅流し丸碗(994)と汁次(1000)、肥前窯産陶器京焼風丸碗(995)と刷毛目碗(996)、土師器焙烙(1004)などが出土しており、宿場町期Ⅱ期に属する資料である。この他に景德鎮窯系青花棧花皿(988)や大窯製品(985～987・989・990)などが含まれている。1001は備前窯産陶器徳利で肩部に刻印が認められる。

遺構以外の出土遺物(第59図1005～1008) 1005は透明釉鉄絵茶碗で体部に荒々しい筆致で宝珠紋が3個描かれ、底部に「秋二」と記されていた。体部下半は大きく膨れ口縁端部に口紅(鉄絵)が施されている。本品は津島の大橋秋二が創設した「秋二焼」の量産品と推定される。1008は美濃窯産陶器と思われる徳利で外面に「キヨス 柴藤 □ 二六」と鉄絵で記されていた。柴藤は現清洲桜酒造の前身の酒屋の屋号であり、これに関連するものと

推定される。

第3節 木製品

木製品は限られた環境でしか残存しない遺物であり、今回の調査では井戸の最下部と0990SDの最下層から出土した。時期別に遺構単位で報告したい。

(1) 中世

古代に属する木製品は発見されなかった。中世に所属する資料としては0999SE出土資料が存在する。

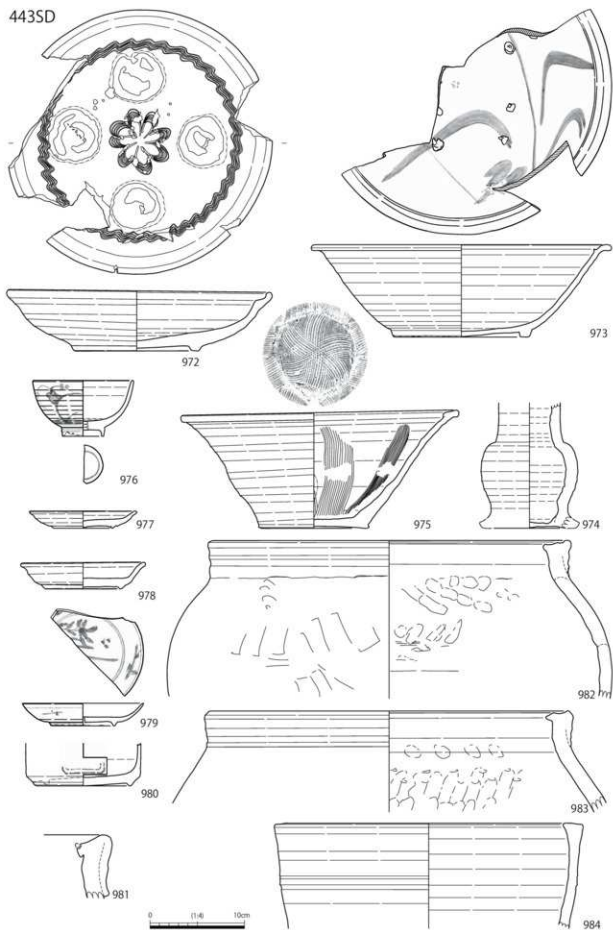
0999SE 出土遺物(第60～62図1011～1030・1041) 木製品としては、井戸側に使用された部材と井戸側内に投棄された木製品がある。0999SEは井戸側構造から方形縦板組横棧支柱式井戸と分類される。井戸側の部材としては縦板(1018～1025・1027・1028)と横棧(1011～1017)と支柱(1026)、水溜の部材としては曲物筒(1029・1030)がある。井壁の主要部を構成する縦板(1018～1021)は幅約30cm、厚さ約2cmの大形のヒノキ材が使用されており、表面は表裏ともにチョウナなどの工具で丁寧に加工されている。下端は表裏両面から削り先端を尖らせていた。一方、大形の縦板の隙間を埋める形で補強された細い縦板(1022～1024)は、割製法による製材後に必要な部分のみをチョウナなどの工具で削る痕跡が確認された。先端を尖らせる工夫もあまり認められない。

1011～1013は最下部の横棧の棧木、1014～1017は下から2段目の横棧の棧木である。両端部は木組のためのほぞ加工が施され、端部中央を突出させるもの(1013・1016・1017)と端部中央を凹ませるもの(1011・1012・1014・1015)がある。1013は全長約84cm、1011・1012は全長約80cm、1014～1017は全長約76cmを測る。棧木は割製法により製材されたヒノキ材で、主に井戸側の内側に向けた面にチョウナなどの工具で削る痕跡が確認された。

水溜部の曲物筒は2個存在する。1029は薄く製材されたヒノキ材を一重に巻き、樹皮により縦じま合されていた。内面に縦方向に浅い切れ込みを入れるケビキは確認されず、直径は約43cmを測る。1030は薄く製材されたヒノキ材を一重に巻き、その外側に一重巻きの曲物筒によるタガが上下2段に設置されていた。全て樹皮により縦じま合されており、直径は約48cmを測る。本体の曲物筒にはケビキが確認される。

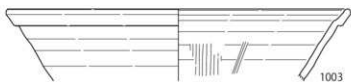
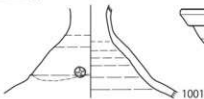
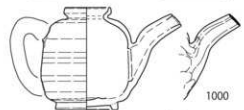
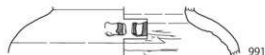
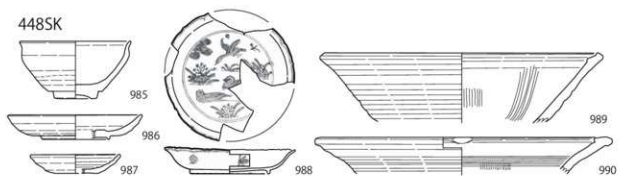
0999SE 井戸側内部から出土した木製品には膳底板(1041)がある。隅角部を内側に切り取って花弁状に造り出し、外周部上面には低い突帯部を削り出していた。下面には細かい傷が確認される。

443SD



第 58 図 宿場町期の遺物実測図 (1)

448SK



検出

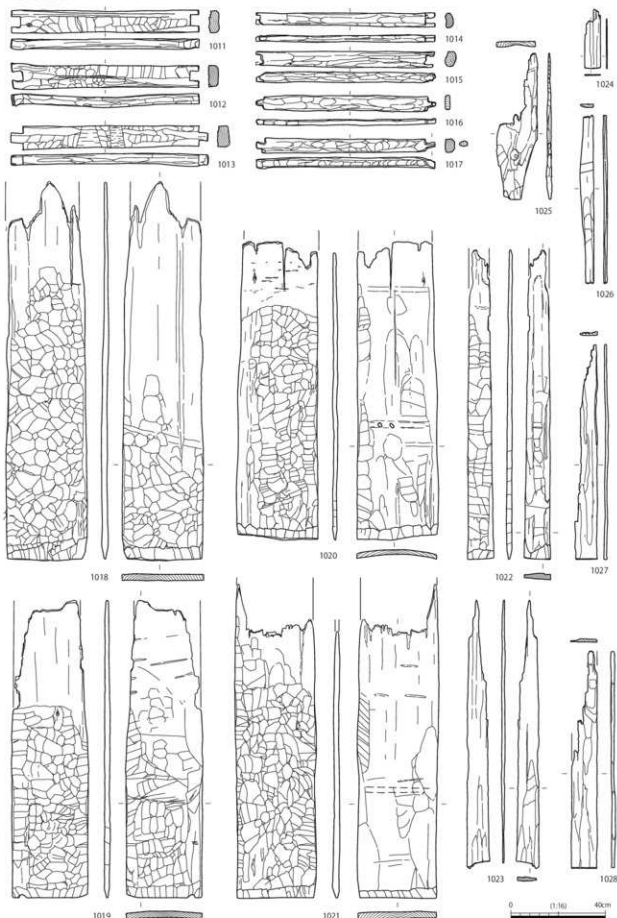


0 (1:4) 10cm

1008

第 59 図 宿場町期の遺物実測図 (2)

0999SE



第60図 木製品実測図(1)

(2) 城下町期

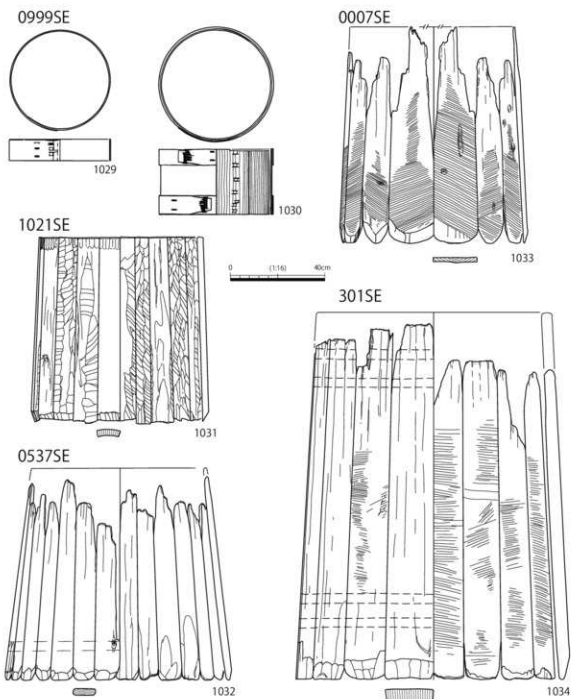
城下町期に属する木製品は 0494SE・0537SE・1021SE と 0990SD の各出土資料が存在する。

1021SE 出土遺物 (第 61 図 1031) 井戸側に使用された結物筒 (1031) がある。厚さ 2.4 ~ 3.0cm のヒノキ材の側板を円形に並べ竹製タガで結び合わされていた。側板は内面がヤリガンナなど、外面はチョウナなどで削られ、横断面形は弧状を呈する。

0537SE 出土遺物 (第 61 図 1032) 井戸側に使用された結物筒 (1032) がある。厚さ 2.5 ~ 3.0cm のヒノキ材の側板を円形に並べ竹製タガで結び合わされてい

た。側板は内外面ともにヤリガンナなどの切削痕や鋸痕などが確認できなかった。製材は割製法によるものと推定したい。横断面形は長方形を呈しており、側板側面に傷が残るものもある。側板下端の両側を斜めに切り取り、さらに外面のみ削って先端を尖らせている。後述する 0007SE 井戸側 1033 と形状は近似していることから、陶磁器土器類から推定する遺構の年代よりもやや新しい可能性が考えられる。

0494SE 出土遺物 (第 62 図 1040) 井戸側に使用された結物筒が出土しているが、1040 はそれを構成する側板の 1 枚である。大部分は腐食して滅失したと



第 61 図 木製品実測図 (2)

思われ、下端部のみが残存していた。厚さ 1.0cm 強のヒノキ材が割製法による製材のまま使用されたものと推定できる。横断面形は長方形を呈しており、側板下端は外面のみを短く削って僅かに先端を尖らせている。

0990SD 出土遺物 (第 62 図 1035 ~ 1039) 木胎漆器碗が 5 点出土した。1035 は高台が低い椀 B 類で内面に赤色漆、外面に黒色漆が塗布され、外面に赤色漆による施紋がみられる。紋様は桐紋と草紋? の組み合わせが全部で 2 単位確認された。1036 は高台が低い椀 B 類で内面に赤色漆、外面に黒色漆が塗布され、外面に赤色漆による施紋がみられるがその内容は不明。1037 は内面に赤色漆、外面に黒色漆が塗布され、外面に 1035 と同様の赤色漆による桐紋が施される。下半が残存しないが、高台が低い椀 B 類と推測される。1038 は内面に赤色漆、外面に黒色漆が塗布され、外面に赤色漆による施紋がみられる椀の体部である。紋様ははっきりしないが、雲紋と竹紋の可能性がある。1039 は高台が高い椀 A 類で内面に赤色漆、外面に黒色漆が塗布されているが、施紋は確認できない。

(3) 宿場町期

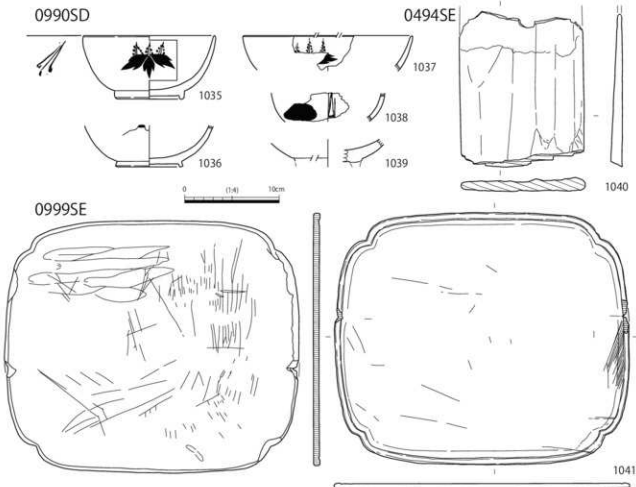
宿場期に属する木製品は 0007SE と 301SE 各井戸出土資料がある。

0007SE 出土遺物 (第 61 図 1033) 井戸側に使用された結物筒 (1033) がある。厚さ 2.0cm 前後のスギ材の側板を円形に並べ竹製タガで結び合わされていた。側板は内外面ともに縦挽き鋸による切断痕が確認される。横断面形は長方形で節を多く持つ板材である。側板下端の両側を斜めに切り取り、さらに外面のみ削って先端を尖らせている。

301SE 出土遺物 (第 61 図 1034) 井戸側に使用された結物筒 (1034) がある。厚さ 5.0cm を超えるヒノキ材の側板を円形に並べ竹製タガで結び合わされていた。側板は内外面ともに縦挽き鋸による切断痕が確認され、下端は外面のみ削って先端を尖らせている。横断面形は長方形を呈する。

第 4 節 石製品・石材

今回の調査では、石製品は城下町期以降のものが確認された。ここでは種別に報告したい。また、井戸 0528SE 上層と 0631SE 上層に大量に廃棄された石材も項目をかえて報告する。



第 62 図 木製品実測図 (3)

(1) 石製品

石臼(挽臼) (第63図1042～1044) 今回の調査では挽臼が約10点出土したが、茶臼は発見されていない。1042と1043は上臼、1044は下臼と思われ、全て花崗岩である。いずれも小破片のため溝の区画に関する詳細な情報は明らかにできなかった。1042は382SK、1043は0145SK、1044は0538SKから出土した。

摺石 (第63図1045) 1045は砂岩の自然石を割って平坦面をつくり上下両面に使用痕が観察されるものである。自然石の面は中央のやや凹む部分を中心によく摩耗しており、つるつるの状態となっている。割れた面中央には敲打痕が多数認められる。

石塔 (第63図1046) 1046は五輪塔の水輪部である。花崗岩製。

切石 (第63図1047～1049) 今回の調査では直方体を呈する切石が数点出土している。材質は凝灰質砂礫岩で、表面には成形する際の鑿痕が至るところに残存しており、被熱して風化が激しい部分やスが多量に付着した部分もみられる。榑拵など火処遺構を構成する構築材の一部と推定される。

砥石 (第64図1051～1076) 砥石は形状と使用痕から8類に分類できる。A類は厚手の直方体の砥石が使用の結果として縦断面が変形となるもの(1050)である。B類は厚手の直方体の砥石が結果として縦断面が山形となるもの(1051・1054)でA類に近似する。C類は厚手の直方体砥石の使用面中央が凹むもの(1057・1058)である。D類は厚手のバチ形の砥石(1056・1061)である。E類は薄手の直方体の砥石が片面を主に使用した結果として縦断面が三角形となるもの(1062・1063・1067・1069)である。F類は薄手の直方体の砥石の使用面中央が凹むもの(1064・1065・1068)である。G類は非常に小規模なもの(1072)である。A～G類は凝灰岩を中心とした石材(凝灰質砂岩・砂質凝灰岩・凝灰質泥岩・泥質凝灰岩を含む)である。H類は非常に薄い黒灰色を呈するもの(1073～1075)で泥岩または頁岩が用いられている。

硯 (第64図1076) 1076は硯の小破片で凝灰質泥岩が用いられている。

バンドコ (第64図1077) 1077はいわゆる笄谷石製のバンドコ(小型行火)の蓋で、上面に線刻で紋様が描かれている。小破片で全体の形状は不明だが、少なくとも2ヶ所以上は穿孔されていた。10A

区で出土した。

被熱石材・叩き石(第64図1078～1080)

1078は濃飛流紋岩の自然石で側面が被熱しススが付着していた。1079は花崗岩の自然石で先端部に敲打痕が認められる。1080は砂岩の先端が尖る自然石で、その端部が著しく被熱し赤変していた。(鈴木正貴)

(2) 井戸0528SE、0631SE出土の石材

出土状況 石材は井戸0528SEと0631SEに廃棄された状態で出土したものである。発掘調査時点でも多数の石材が被熱や破損していることが確認された。

出土量 石材は0528SEと0631SEから合わせて482点出土している。この石材について観察表を作成した。観察表の項目については第1表を参照。計測値の「-」表記は残存値を示す。なお、全資料の観察表は付録CD-Rに掲載した。

石材 主な材質は濃飛流紋岩、ホルンフェルス、チャート、砂岩でその他の材質はわずかしかない。被熱しているものは、濃飛流紋岩、ホルンフェルスが多く、砂岩、チャートは少数である。

石材の分類 石材の使用痕跡により分類を行った。被熱の有無により、被熱しているものを「A」、被熱が見られないものを「B」とした。摩滅・剥離等の作業痕跡の有無により、摩滅や剥離の痕跡のあるものを「a」、無いものを「b」とし、4種に分類した。

ただし、石材の色調によっては、赤変などの顕著な痕跡が無い場合、被熱痕を見分けることが困難な場合があり、今回の分類では顕著な痕跡のあるものを「A」に分類した。そのため、今後被熱痕跡について詳細な分析が行われた場合、A類が増加する可能性がある。分類は以下のように行った。

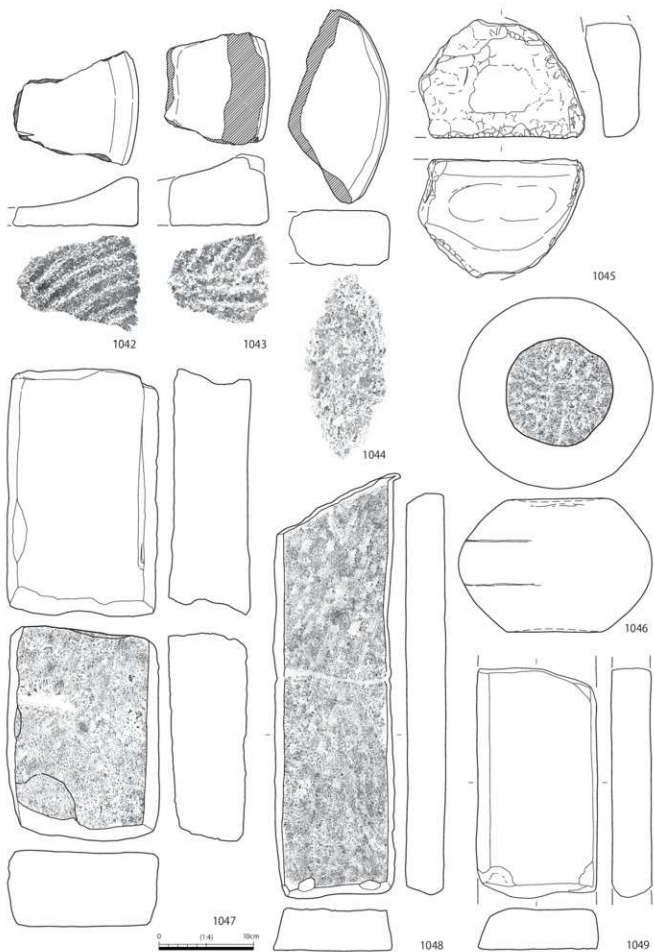
Aa類は被熱(赤変・煤付着等)痕跡があり、摩滅・剥離などの痕跡を伴うもの。

Ab類は被熱(赤変・煤付着等)痕跡があり、摩滅・剥離などの痕跡が確認できないもの。

Ba類は被熱(赤変・煤付着等)痕跡が無く、摩滅・剥離などの痕跡を伴うもの。

Bb類は被熱(赤変・煤付着等)痕跡が無く、摩滅・剥離などの痕跡が確認できないもの。

Aa類は、被熱と摩滅・剥離などの使用痕が共にみられる個体で、使用方法としては被熱を伴う作業台、金床石が考えられよう。ただし、摩滅・剥離を伴う作業を行った後、^甲の構築材などの再利用を受けたものも含まれる可能性がある。



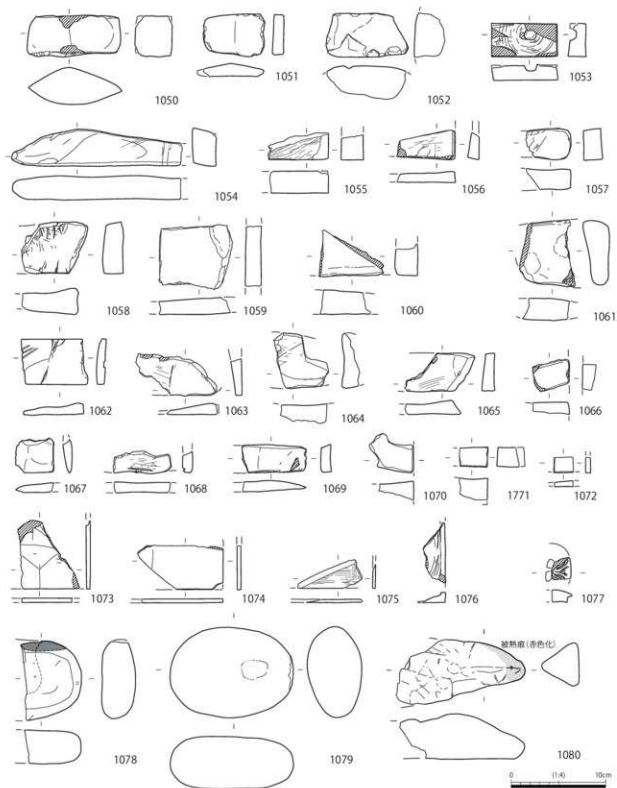
第63图 石製品実測図(1)

Ab類は、被熱はしているが、摩滅・剥離の痕跡が見えない個体で、杵の構築材として用いた可能性がある。破片の場合はAa類の一部で摩滅・剥離の痕跡が無い部分の可能性もある。

Ba類は、被熱が確認できず、摩滅・剥離痕跡のあるもので、砥石、表面の一部を砥石として利用された砂岩、表面が摩滅しているチャートはこの分類に入る。

一部はAa類の個体の破片（熱を受けていない部位）と接合することが確認できている。

Bb類は、被熱、摩滅・剥離ともに見えない個体であり、未使用の石材はこれに分類される。ただしBb類の個体で破損しているものにはAa類やAb類、Ba類の一部が含まれている可能性がある。

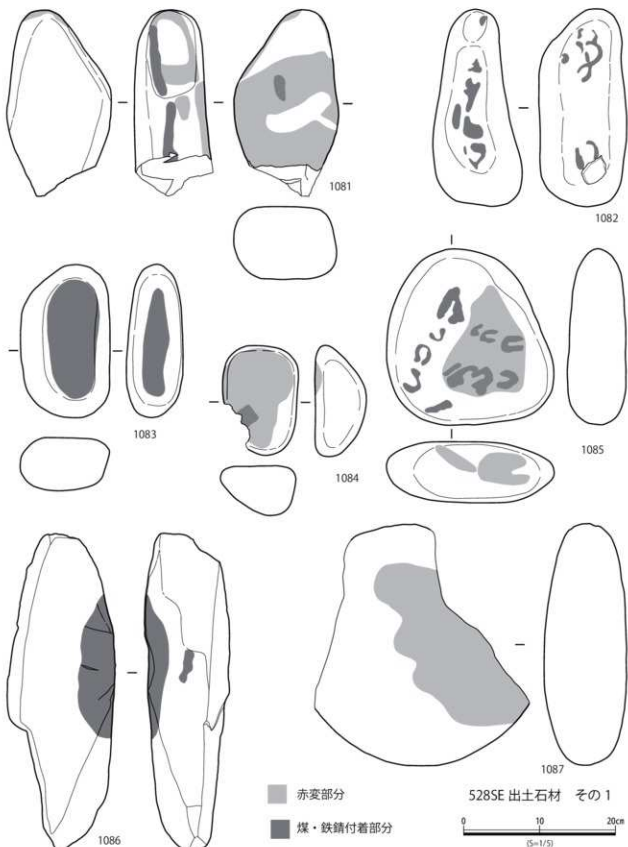


第64図 石製品実測図(2)

0528SE 出土の石材 (第 65・66 図 1081 ~ 1089)

1081 ~ 1086・1088 は Aa 類, 1087 は Ab 類, 1089 は Ba 類である。1082 と 1085 は、表面に U 字型の鉄錆のような付着物が痕跡として残る。1083 は

平滑面が発達している。1086 は砂岩で被熱の痕跡が強く残るが表面の欠損後に被熱していると思われる。1088 はチャートで平滑面が複数みられるが端部の被熱と部位が異なる。1089 は砂岩で砥石である。



第 65 図 石製品実測図 (3)

0631SE 出土の石材 (第66図 1090～1093)
 1090・1091はAa類で被熱しており、1090は先端部が剥離している。1092・1093はBa類で砥石。表面に擦痕がみられる。

金床石としての可能性 金床石の定義については、安間拓巳(安間 2007)が、鍛冶関連遺構・遺物の共伴、表面の鍛打痕や赤変といった変化、鉄錆や鍛造剥片の付着などの条件をあげている。

また、吉川金次は礮(かなしき)について使用実験を行い、感想をまとめている(吉川 1991)。実際に金属器(氏は鋳鍛冶であった)を製作した経験から、礮の使用について弱点も指摘している。吉川は「礮」の語を用い、安間は「金床石」の語を用いる。ここでは金床石の語を主に用い、引用の場合は原文のまま用いている。以下は抜粋。

- (1) 鍛造面の平滑度がまったく鉄に劣る。すぐに凹凸ができる。
- (2) 火造り(成形)には、はなはだまずい。角が欠ける。
- (3) 礮は重量のある大礮の連続的打撃には耐えられま

い。これは「鍛え」が不完全になること、大型鉄器を作るのは困難なことを意味する。

(4) 石はどこにでももあるが、選択して選ぶのに手間がかかる。

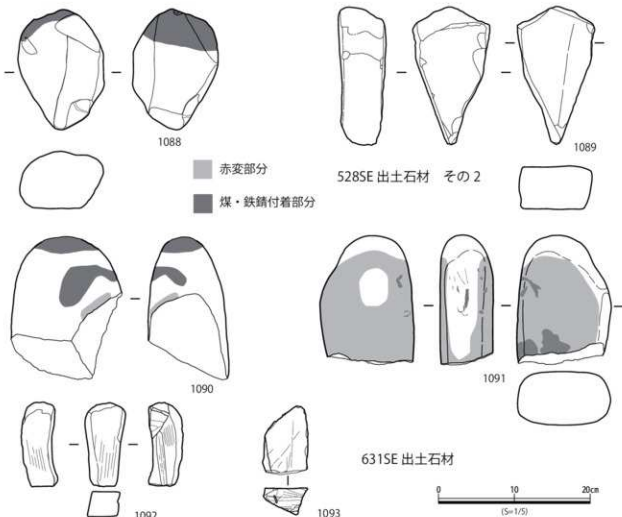
(5) 礮は耐久性がない、一種の消耗品と考えられる。

(6) 礮を修理して再生させるのは困難だろう。

礮の利用については概ね否定的な見解であり、特に「効率」「完成度」「耐久性」については否定的である。また、礮については大型の金床石を想定している。

金床石の使用される年代については、吉川は出土する鉄器の状態などから3世紀の終わり頃から鉄敷の使用が始まり、遅れた地域では金床石の使用もありえたとし、歴史時代での使用についての言及は無い。一方、安間は近世の大鍛冶場においても金床石が使用されていることを指摘している。

以上の指摘を踏まえて、今回掲載した出土石材の内、金床石の可能性が高いものは、0528SEでは1081～1085、0631SEでは1090・1091と考えられる。1086～1088については強い被熱などが見られるも



第66図 石製品実測図(4)

番号	遺構	最大長	厚み	被熱	作業面	種別	材質	備考
1080	0528SE	-24	10	A	a	金床	ホルンフェルス	破面に被熱
1081	0528SE	26	10	A	a	金床	濃飛流紋岩	完形 多面に平滑化
1082	0528SE	-20	-12	A?	a	金床	濃飛流紋岩	完形 多面に平滑化
1083	0528SE	-14	-7	A	a	金床	濃飛流紋岩	一部欠損
1084	0528SE	23	7	A	a	金床	濃飛流紋岩	
1085	0528SE	42	13	A	a	炉材?	砂岩	側面に被熱
1086	0528SE	-32	9	A	b	炉材?	濃飛流紋岩	平面2面被熱
1087	0528SE	15	7	A	a	炉材?	チャート	完 タガネ痕?
1088	0528SE	18	5	B	a	砥石	砂岩	
1089	0631SE	-19	14	A	a	金床	濃飛流紋岩	端部と平坦面にス入付着
1090	0631SE	-16	7	A	a	金床	濃飛流紋岩	被熱強い
1091	0631SE	11	4	B	a	砥石	凝灰岩	長辺の4面全て使用
1092	0631SE	-8	-4	B	a	砥石	凝灰岩	

第1表 石材一覧

の、1086は材質が軟質の砂岩であり剥離・摩滅の痕跡が顕著でないこと、1087は剥離・摩滅が見られないこと、1088は被熱痕と剥離・摩滅痕が重複しないことという理由から金床石の可能性は低いものと思われる。

まとめ 清洲城下町遺跡での石材は、周辺に普遍的に存在しているものではなく、別の場所からの搬入品である。石材は重く、運搬することのコストを考えれば需要に基づいて搬入された可能性を考えるべきであり、採取段階において石材の選択がすでに行われた可能性がある。当然ながら清須城下において既に使用された礎石、井戸枠の石などの再利用も考えられるが、当遺構に廃棄されていた石材は、鍛冶関連作業に用いることを意図して、再度選別を受けたものと考えたい。その用途は炉の構築材、砥石、被熱を伴わない作業台、金床石としての使用を目的としているものと思われる。また、清洲城下町遺跡が軟弱な地盤に立地していることを考えれば、鉄製金床を用いる際に必要となる地固めに用いる可能性もあり、使用痕跡の無い石材についても用途を想定された上で搬入された可能性は否定できない。(鈴木恵介)

第5節 金属製品・金属関連遺物

今回の調査では、城下町明期に属する金属製品・金属関連遺物が多量に出土した。通常の掘削調査中に出土した金属製品・金属関連遺物は全部で3857点を数える。また、土壌の水洗篩別作業によって検出された金属製品・金属関連遺物は長径約1cmを超える資料に限定しても約1700点におよぶ。ここでは代表的な資料について種別に報告し、詳細な資料

紹介は将来に期したい。

(1) 鉄製品

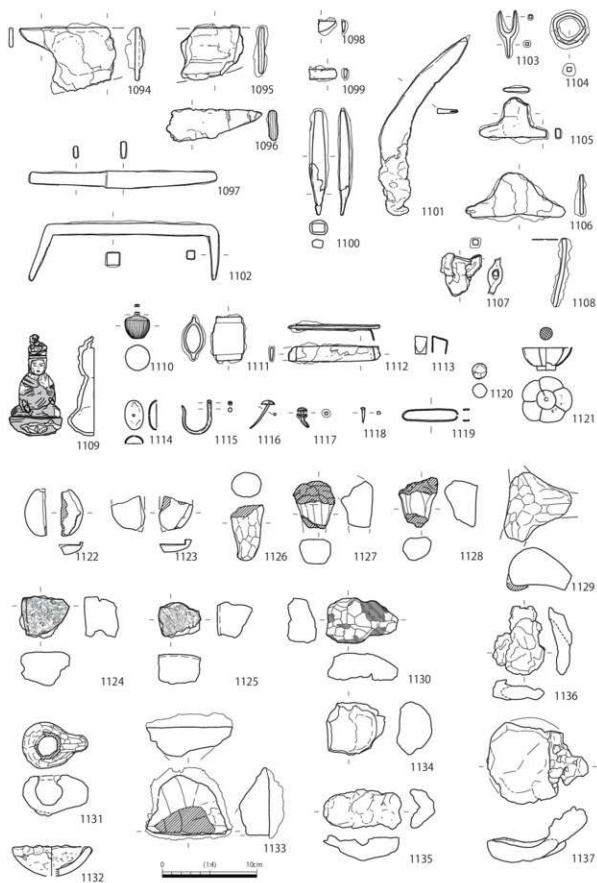
刃物類 (第67図1094～1101) 1094と1095は同一個体と思われ刃部の幅が広い製品で包丁と推測される。1096は刃部の幅がやや狭くなる刃物で背は直線となる。1097～1099は刀子と思われる鉄製品で、1097は先端部のみが欠損している。1098と1099は同一個体か。1100は平面形が柳葉状を呈するものだが、刃部の特に断面形状ははっきりしない。ヤリガンナの可能性が考えられる。1101は鈍角に屈曲する刃部の先端がわずかに彎曲する刃鎌である。東部の子が鉤の手状に折れ、柄と刃部が鈍角になるものとみられる。

釘・鋸類 (第67～68図1102・1163・1164・1172・1173・1181) 釘(1163・1164・1172・1173・1181)は横断面形が方形で先端が尖るもので、頭部を扁平に潰した後に折り返している。今回の調査でも多数出土した。1102は大形の鋸で横断面は方形となる。

刺突具類 (第67図1103) 1103は刃部が二股に分岐した小形の刺突具である。

火打金 (第67図1105・1106) 火打金は全形が山形を呈するものばかりである。1105は刃部が直線的になっており、東部(山形部)が台形状に伸びるものである。1106は刃部の中央部がやや凹み、東部(山形部)が弧状に彎曲しながら伸びるものである。両者とも透かしは認められない。

リング状製品 (第67図1104・1007) 1104はリング状の鉄製品で、先端は完全には接合していないよ



第 67 図 金属製品・金属関連遺物実測図(1)

うである。1107は土師器内耳鍋の内耳にリング状の鉄製品が付くもので、鉄製品自体は半分欠損している。土師器内耳鍋の吊り方を知る重要な資料である。

鉄鍋類 (第67図1108) 1108は扁平な鉄板片であるが、わずかに彎曲する外面にスガが付着していることから鉄鍋類と推測される。これまでに記述した鉄製品は鍛造製品で錆化したために鉄本体部分が剥がれるように破壊してしまう場合があるが、1108はそのような兆候は感じられないことから鍛造製品の可能性が考えられる。

(2) 銅製品

仏像 (第67図1109) 1109は高さ10.4cmを測る座像の懸仏で、211SKから出土した。光背は残存しない。現状ではまだ十分なクリーニングを行っていないので、詳細な形状は不明である。台座部分の一部で錆を落とした結果、繊細な線刻による蓮弁紋様が露出したことから、本来は精巧に製作されたものと思われる。像は柔和な顔立ちで眉間に白毫が観察されないことなどから菩薩像と思われる。また、頭部は頂上に突起を持ち、頭部周縁部に数個の盛り上がりが存在していることから、十一面観音菩薩像の可能性が考えられる。銅を主成分とした鉛の合金とみられ、暫定的な蛍光X線分析の結果ではCu(銅)32%、Pb(鉛)29%、Fe(鉄)13%となる。

分銅 (第67図1110) 1110は10A区で出土した分銅である。重量は59.3gを測る。暫定的な蛍光X線分析の結果ではCu>Pb>Si(ケイ素)、P(リン)、Al(アルミニウム)、K(カリウム)、Ca(カルシウム)となる。

刃物類 (第67図1111・1112) 1111は刀装具の「はばき」とみられる製品で上下に突帯が存在する。銅と亜鉛の合金とみられる。1112は刀子東部に内部に鉄製の中子が残存する。暫定的な蛍光X線分析の結果ではCu71%、P、Si、Al、As(ヒ素)、Fe、Caとなる。ともに10A区で出土した資料である。

鈎形銅製品 (第67図1115) 1115は177SKから出土した鈎形を呈する銅製品である。基部に穿孔が認められ、針先部は外側に反る形状となっている。暫定的な蛍光X線分析の結果でCu>Zn、Fe>Siとなる。

鉋形銅製品 (第67図1116～1118) 1116は頭部が半球形の笠状になるもので、10B区から出土した。大部分は銅であった。1117は頭部が2段の笠を持つもので、065SEから出土した。暫定的な蛍光X線分析の結果ではCu70%、Fe16%、Al、Si、K、Ca、Pbとなる。1118は釘(針)状の銅製品で0692SKから出土した。

毛抜き (第67図1119) 1119は0363SKから出土した銅製毛抜きである。

球形銅製品 (第67図1120) 1120は径1.5cmの球形を呈する銅製品であるが、用途は不明である。

(3) 銀製品

椀形銀製品 (第67図1121) 1121は高さ2.4cmを測る椀形容器で、平面形は五弁花紋を呈する。お歯黒用化粧道具の童子の可能性もある。見込みが半球状に盛り上がり格子紋が施されている。暫定的な蛍光X線分析の結果では、Ag(銀)、Cu、Au(金)、Pbが検出された。

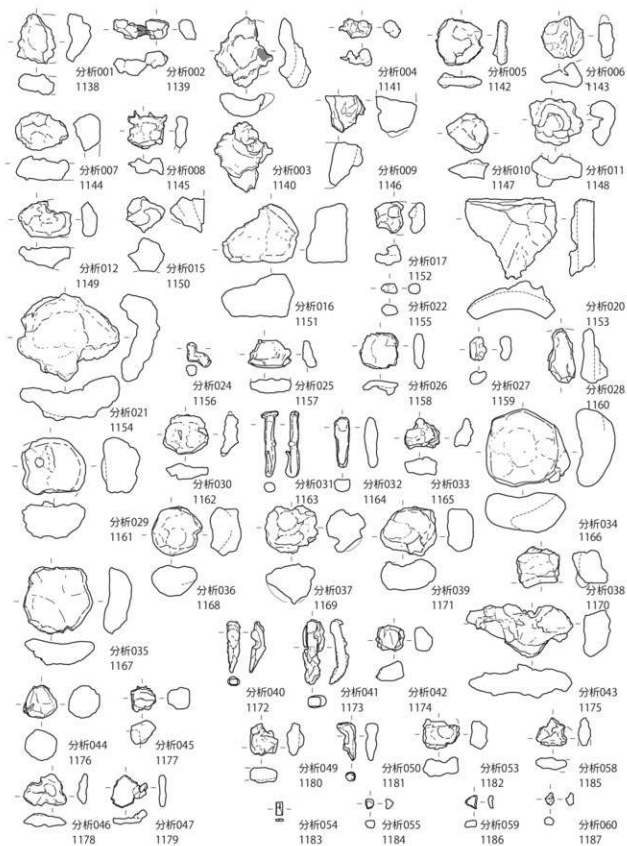
(4) 金属関連遺物

金属関連遺物としては、加工時に発生する金属滓(椀型滓・流動滓・鍛造剥片・粒状滓など)、材料や道具類(炉壁・羽口・取銅・鋳型など)、原材料(含鉄遺物・鉄塊系遺物など)などがある。その多くは細かく破損し廃棄されたもので、全ての資料を厳密に分類することは難しい。特に粘土塊の状態出土した遺物については、部位を特定し炉壁・羽口・鋳型などに明確に区分することができなかった。ここでは、まず、粘土塊の分類を説明したい。

今回の調査で確認された粘土塊は状態から次の6類に区分できる。粘土塊A類は胎土がやや細かい焼成不良の粘土塊である。スラットの繊維質が内部に入るものがある。粘土塊B類は砂礫粒を含む粗い胎土で比較的焼成は良好で、表面が赤変するものもある。粘土塊C類は砂礫粒を含む粗い胎土で焼成は良く、表面が灰色を呈するものである。粘土塊D類はやや細かい胎土で焼成は良く、表面が灰色を呈するものである。粘土塊E類は砂粒を含む粗めの胎土で焼成は良く、表面に熔融したガラス質が付着するものである。粘土塊F類は砂粒を含む粗めの胎土で焼成は良く、ガラス質が付着するものうち赤変が激しいものである。

これらのうち、粘土塊D類は概ね鋳型(外型)、粘土塊C類は概ね鋳型(中子)、粘土塊F類で薄いものは概ね羽口、粘土塊B類とE類は羽口が炉壁と暫定的に推定しておきたい。今後の調査によりこの推定は変更される可能性が高いが、ここでは上記の推定に基づき説明を行う。

鋳型(外型) (第67図1122・1123) 今回の調査で、真土が施されて明確に鋳型と判別できるものは数十点確認されたが、全て小破片で全形を知るものは存在しない。概ね共通する形状を持っており、本資料群は多様な種類の製品を製作した鋳型ではないように感



第 68 図 金属製品・金属関連遺物実測図 (2)

じられる。粘土を焼成して製作されており、胎土にはぶい黄色から明黄褐色で、外表面にはぶい橙色を呈する。内表面すなわち製品が接する面はやや肌理の細かい粘土（真土）で薄く貼付けられ、灰色となっている。ここでは1122・1123を代表的な事例として紹介する。平面形が半截した楕円形を呈し、底部は丸底となっているが、直線的な辺端部は斜めに截断されたような形となる。上面は約0.3cm段差で製品の形状が作られており、真土が塗布されている。真土面は平坦であり、板状の製品が製作されたものと考えられる。製品の平面形は菱形の鈍角部に張り出しを持ち、各辺に段差が設けられる形状で、鋳金具の一種とみられる。

鋳型（中子）（第67図1124～1130）全形を知れるものは存在しない。1124・1125は粘土塊B類で上端部が激しく被熱し橙色を呈する。表面に人工的な凹凸が認められるが、真土は確認できない。ここでは鋳型（中子）とした。1126～1129は粘土塊C類で残存する表面は灰色を呈し一部に灰白色を呈する薄い付着物が確認される。鋳型焼成用支脚とする文献もある（小田木2008）。1126～1128は多角錐形の先端が丸くなる脚状をなし、基部は欠損する。1129は3方向に脚が伸びるような塊であるが、それぞれの脚の先端部は欠落する。1130は粘土塊C類で、残存する表面は灰色から灰白色を呈する薄い付着物が確認される。不定形な曲面をつくり緩やかな凹凸が確認される。

取鍋（第67図1131・1132）取鍋は小型丸底皿の形状（1132）と把手が付く無頸壺の形状（1131）の2種がある。1132は内面全面に黒色滓が付着し口縁部付近で紫色を呈する。部分的に緑青が浮いており、鋳銅に使用されたものと思われる。1131は外面の一部にガラス質の黒灰色滓が付着するもので、一部欠損する口縁部は被熱して赤変している。

炉壁（第67図1133）炉壁は形状が判明するものは少なく、ここでは通有にみられるタイプを特に紹介しない。1133は上端部と外面に平坦面を持つもので、外面に多量のガラス質化した滓が付着する。上端部は滓の状態から、本来はさらに上部に別の炉壁が接続したと推測できる。内面下半は曲面をつくり上部のみ欠損していた。この内面にはガラス質化した滓が付着しない。

椀型滓（第67図1134～1136）椀型滓は全部で603点出土した。遺構や地区ごとに形状が異なることが予測されるが、ここでは代表的な事例を紹介するに止めたい。1134は0671SKから出土した椀型滓で、

外周部が欠損するが平面形はほぼ円形を呈する。厚手で質感は重いもので、表面には土砂が固着している。上・下面の表面にはあまり凹凸はみられない。1135は11B区3面調査で出土した椀型滓で、平面形は長楕円形を呈して中央部がやや凹む。それほど厚くはないが質感が重く、上面でやや大きめの気孔が10個程度空く。表面には土砂があまり固着せず上面の凹凸は激しい。白い小石の付着は確認できない。1136は191SKから出土した重複椀型滓で、平面形はだるま形を呈する。薄く質感はやや軽い。気孔があまり確認されず表面の凹凸は少ない。また、白い小石の付着は確認できない。固着した土砂に伴い微細な滓片が付き、全体として茶褐色を呈する。1137は467NRから出土した椀型滓で、羽口から落下したガラス質滓が上端の一部に多量に付着している。椀型滓自体はほぼ完形で、比較的薄く重い質感を持つ。土砂の固着は激しく、中央は大きく凹むものの細かい凹凸はあまりみられない。上部に付着した滓は黒色を呈して質感が軽く、白い小石を多量に含有するものである。凹凸は激しい。

（5）自然科学的分析調査の資料

発掘調査終了直後に自然科学的分析調査を九州テックリサーチに依頼することとなり、十分な整理作業を実施する前に分析用試料60点を選別した。選別は発掘調査時点で金属生産に関連する可能性が高いと認識した遺構出土資料を中心に簡易な観察のもと実施した。分析試料を提出する前に鈴木が実測図作成と肉眼観察を行っており、その観察結果の詳細は貼付CD-Rに搭載した。

191SK 出土資料（分析番号1～5：第68図1138～1142）椀型鉄滓2点（1138・1140）と流動滓2点（1139・1141）と鉄塊系遺物1点（1142）である。黒褐色のガラス質で表面が紫色を呈し微細遺物が多量に固着するパターンで観察して選出した。凹凸が案外激しい。

10A区出土資料（分析番号6～10：第68図1143～1147）椀型鉄滓2点（1143・1144）と流動滓1点（1145）と羽口2点（1146・1147）を選出した。1146は炉壁の可能性もある。光沢のある灰褐色～黒灰色のガラス質を特徴とする滓群で、固着が少ないのも特徴である。遺構一括ではないがこの地区の特徴を示す資料として提示した。

0197SK 出土資料（分析番号11～14：第68図1148・1149）椀型鉄滓2点（1148・1149）と籠造剥片35点、粒状滓3点を選出した。上面中央に植物

質痕を残す滓群である。鍛造剥片と粒状滓は遺構埋土を水洗篩別作業して検出された資料である。

02765K 出土資料（分析番号 15：第 68 図 1150）
羽口 1 点 (1150) を選出した。

0280SK 出土資料（分析番号 16～19：第 68 図 1151・1152）
鉄塊系遺物 1 点 (1151) と梔型鉄滓 1 点 (1152) と鍛造剥片 30 点、粒状滓 4 点を選出した。鍛造剥片と粒状滓は遺構埋土を水洗篩別作業して検出された資料である。

03945K 出土資料（分析番号 20：第 68 図 1153）
羽口 1 点 (1153) を選出した。

04525K 出土資料（分析番号 21：第 68 図 1154）
梔型鉄滓 1 点 (1154) を選出した。今回の資料では大形のものである。

0508SP・0509SP 出土資料（分析番号 22・23：第 68 図 1155）
含鉄遺物 1 点 (1155) と鍛造剥片 12 点を選出した。鍛造剥片は遺構埋土を水洗篩別作業して検出された資料である。

05055K 出土資料（分析番号 24：第 68 図 1156）
流動滓 1 点 (1156) を選出した。

0513SD 出土資料（分析番号 25・26：第 68 図 1157・1158）
梔型鉄滓 2 点 (1157・1158) を選出した。いずれも小形の梔型鉄滓である。0508SP・0509SP に近い部分で出土した資料で、分析番号 22・23 と関連するものと思われる。分析番号 22～26 で薄い小型梔型鉄滓と流動滓・微細遺物の組み合わせが確認される一括資料と認識したい。

0528SE 出土資料（分析番号 27～30：第 68 図 1159～1162）
梔型鉄滓 3 点 (1159・1161・1162) と含鉄遺物 1 点 (1160) がある。茶褐色で厚手の梔型鉄滓と鉄製品の組み合わせとして選出した。

0631SE 出土資料（分析番号 31・32：第 68 図 1163・1164）
鉄製品 1 点 (1163) と含鉄遺物 1 点 (1164) を選出した。0508SP・0509SP に接する遺構で、これに關係する製品群の可能性が考えられる。

07675K 出土資料（分析番号 33・34：第 68 図 1165・1166）
梔型鉄滓 2 点 (1165・1166) を選出した。大小の梔型鉄滓が伴う資料である。

0810SK 出土資料（分析番号 35～43：第 68 図 1167～1175）
梔型鉄滓 4 点 (1167・1168・1171・1175)、羽口 2 点 (1169・1170)、鉄製品 2 点 (1172・1173)、鉄塊系遺物 1 点 (1174) を選出した。大小の梔型鉄滓が伴う資料である。一括資料としては複数の異なる工程が混在する可能性も否定できな

い。質感の重い梔型滓 (1167・1168) と、軽いもの (1171・1175) がある。

08245K 出土資料（分析番号 44～48：第 68 図 1176～1179）
小形梔型鉄滓 2 点 (1176・1177)、鉄塊系遺物 2 点 (1178・1179)、鍛造剥片 5 点を選出した。薄い小型梔型鉄滓と鉄塊系遺物・微細遺物・鋳型などの粘土塊の組み合わせが確認される資料である。鍛造剥片は遺構埋土を水洗篩別作業して検出された資料である。

09155K 出土資料（分析番号 49～52：第 68 図 1180・1181）
梔型鉄滓 1 点 (1180)、含鉄遺物 1 点 (1181)、鍛造剥片 5 点、粒状滓 3 点を選出した。やや厚手の小型梔型鉄滓と微小鉄片や鍛造剥片の組み合わせが確認された。

09495K 出土資料（分析番号 53～57：第 68 図 1182～1184）
梔型鉄滓 1 点 (1182)、銅製品 1 点 (1183)、流動滓 1 点 (1184)、微小鉄片 5 点、鍛造剥片 5 点を選出した。粘土貼付土坑から出土した資料で、石灰なども出土した。微小鉄片と鍛造剥片は遺構埋土を水洗篩別作業して検出された資料である。

09795K 出土資料（分析番号 58～60：第 68 図 1185～1187）
梔型鉄滓 1 点 (1185)、微小鉄片 1 点 (1186)、流動滓 1 点 (1187) を選出した。全て遺構埋土を水洗篩別作業して検出された資料である。(鈴木正貴)

第 6 節 ガラス製品

今回の調査では、全部で 29 点のガラス製品が出土した。このうち、器種などある程度確認出来る資料 20 点 (1188～1207) について紹介する。なお、1191・1192・1197・1204・1207 は 11A 区で出土したものの、それ以外は 10A・10B 区で出土したものである。資料はいずれも表土掘削時に見つかった。

1188～1190 は小型瓶で一般用薬瓶と推定される。1190 は底部外面に「SANKYO」と陽刻されている。1191 はクリーム瓶と思われる。1192～1195 は目盛り入り薬瓶である。1192 には体部の外面に「清洲林調薬所」と陽刻されており、同形のもがこの他にもう 1 点出土している。1196 および 1197 は小型の清涼飲料瓶だと思われる。1198～1201 は化粧瓶と推定されるものである。1198 は底部に「桃と蜻蛉」の陽刻があり、大正 3 年 (1914) 発売の桃谷順天館の「白色美顔水」と思われるものである。1199 には底部に「AECD N0844955 3400」の陽刻がある。1201 は底部に資生堂の商標である花椿マークが施されて

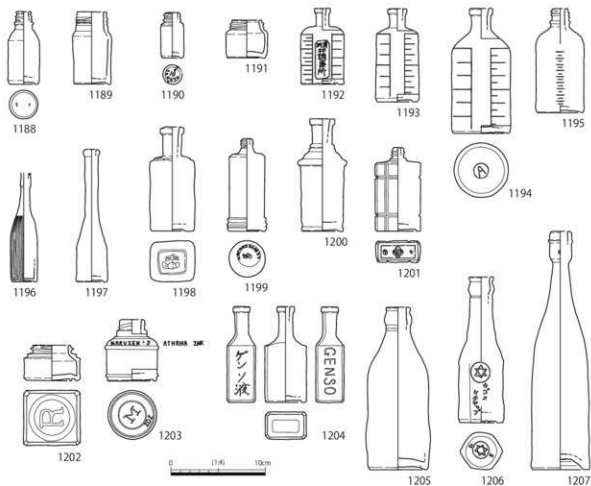
おり、形状は整髪料瓶のものに近い。1202と1203はいずれもインク瓶と思われる。1202は底部に「R」と陽刻されている。1203は底部に「M」、胴部に「MARUZEN'S ATHENA INK」と陽刻されており、丸善のインク瓶であると思われる。1204は松本薬品の美白美容液「ゲンソ液」のものである。1205は細口でなで肩の瓶の形態をとり、桜井(桜井2009)の形態分類で4類に属するガラス瓶である。1206は「カゴメトマトケチャップ」のものであり、体部にカゴメ株式会社で1917～1963年にかけて商標として用いられていた六芒星と、「カゴメケチャップ」の文字が陽刻されている。1207は機械栓のガラス瓶で、酒瓶と思われる。

以上出土点数は少ないがまとめると、今回の調査でガラス瓶は、文具瓶2点、薬瓶7点、化粧瓶5点、酒瓶1点、調味料瓶1点、清涼飲料瓶2点、その他

2点という組成となった。薬瓶と化粧瓶が突出して多い結果となったが、こうした組成のあり方は、桜井が分析した結果では都市近郊農村である南広間遺跡や南葛野遺跡での分析結果に近く、近代以降住宅地として利用されていた本遺跡の性格を反映するものであると考えられる。(奥野絵美)

引用文献

- 安間拓巳 2007 『日本古代鉄器生産の考古学的研究』 淡水社
 小田木富慈美 2008 『菊田4丁目所在遺跡発掘調査報告Ⅱ』
 財団法人大阪市文化財協会
 桜井準也 2006 『ガラス瓶の考古学』 六一書房
 吉川金次 1991 『鍛冶道具考 実験考古学ノート』 神奈川大学日本常民文化叢書2 平凡社



第69図 ガラス製品実測図

第4章 自然科学的分析

第1節 清洲城下町遺跡周辺の地形解析と五条川の流路について

鬼頭 剛

1 はじめに

清洲城下町遺跡が位置する地形環境を調べるため地形解析を行ない、清洲城下町遺跡の立地環境と五条川の流路について検討したので報告する。

2 分析方法

清洲城下町遺跡の今回の調査地点も含めた広域的な周辺地形を解析するため、1/2500スケールで等高線図を作成した。等高線図の作成にあたり愛知県清須市発行の「清須市都市計画図(1/2500)」および名古屋市発行の「名古屋都市計画基本図(1/2500)」にプロットされた標高値を基にした。清須市発行の都市計画図は平成18年(2006年)に測量されたとの記載がある。名古屋市発行のものは昭和46年(1971年)10月に現地調査されたものを用いた。なお、現在の河川堤防や高速道路といった人工的に築造されたことが明らかな標高値は除外して等高線を描画した。

3 分析結果

(1) 遺跡周辺の等高線図

東西約2.8km、南北約3.0kmの範囲全体では等高線間隔0.2mで標高1.6mから標高5.0mまでの等高線が描かれ、解析範囲全体では北で標高が相対的に高く、南側に低い傾向がある(第70図)。解析範囲の現在の状況は、図の中央を北から南へ五条川が流下し、鉄道では東から順に東海道本線、東海道新幹線、名古屋鉄道名古屋本線が南東から北西へ向かい通る。道路は東西方向に東名阪自動車道とその下を国道302号線が、また南東から北へ国道22号線とその上を名古屋高速16号一宮線が通っている。

等高線図を概観してもわかるように解析範囲全体には複雑な地形の起伏がよみ取れる。解析図全体では図の南西にある清須市上条織部に標高1.6~2.0mの標高2.0mよりも低いところがあり、それはさらに北の土田角田の周辺までつづく。いっぽう、標高の相対的に高いところは図の北西の清須市一場に標高5.0mを超えるところがみられ、その東側縁辺を県道尾西清洲線が通っている。

さらに詳しく地形要素をみてみると、舌状あるいは鳥状に相対的に標高の高いところや、谷地形のみられる低いところがある。標高の高いところを北から南へ順に列記する。

1. 北の清須市大嶋から一場にかけて標高4.0~5.0mにみられる南北距離約700m以上、東西の幅約170mの等高線が南側で閉じた舌状地形がある。
2. その東、下之郷から朝日にかけて標高3.8~4.6mにみられる南北距離約1.0km以上、東西の幅約350mで等高線が南側で閉じた舌状地形がある。
3. 北の一場から西市場、廻間を通り土田へ向かう標高2.2~3.2mの長軸約1.4km、幅約370mの北東から南西方向にみられる尾根地形。
4. その尾根地形の東に、北の清須市清洲にある清洲城および清洲古城跡公園からその南の五条橋、長者橋を通り鍋方に至る標高3.0~4.8mの南北距離約1.9km以上、東西幅約700mの南北方向に長い尾根状の地形がみられる。清洲城下町遺跡の調査地点はこの尾根地形の上にある。
5. その西に、新清洲や土田郷前にかけての標高2.6~2.8mに南北距離最大約800m、東西距離約450mの閉曲線からなる鳥状地形がみられる。以上のように、現在の五条川流域には5つの相対的に標高の高い場所が認められた。

次に等高線図からよみ取れる谷地形についても同様に北から南へ順に述べる。

1. 北の清須市落合から一場にかけて標高3.0~3.8mに南北距離約700m、東西幅約100mの、南北方向に長く、東西方向に狭い谷地形が認められる。
2. この谷地形の西側に、大嶋から一場で認められた相対的に標高の高い舌状の地形を挟んで、北の稲沢市日下部東町から日下部花ノ木町を通り、清須市西市場に至る標高1.8~3.4mで、南北距離約1.7km以上、東西幅約1.0km以上の緩傾斜で幅の広い谷地形がある。
3. 清須市清洲から鍋方までみられた尾根地形を分岐点として、南東と南西にそれぞれ分かれる谷

地形があり、南東側には清須市田中町から寺野、助七に至る南北距離約1.5km、東西幅約700mの南東方向に開口した谷地形がある。

4. 清洲から鍋方の尾根地形の南西側には、清須市清洲から土田五反地に至る標高1.6～2.8mに南北距離約1.0km、東西最大幅約300mの北東から南西方向に開口した谷地形がある。

5. 新清洲と土田郷前にみられた鳥状地形の南には新清洲に標高2.4～2.6mで南北距離約200m、東西の幅約100mの谷地形がある。

6. 清洲から鍋方でみられた尾根地形の南端にも標高3.0～3.4mで長さ約200m、幅約150mの谷地形が刻まれる。

7. 西端には土田角田から上条織部に至る標高1.8mよりも低く、南北距離約1.0km、東西幅約250mの南北方向に長い谷地形がみられる。この谷には稲沢市日下部東町から清須市市場までにみられた谷と、清洲から土田五反地までにみられた谷が合流する。

以上の7つの谷地形が認められた。

(2) 調査地点の立地環境

五条川流域の等高線図には、図の西端の清須市土田角田から上条織部までに標高1.6～2.0mと相対的に標高の低いところがみられ、図の北西にある清須市一場には標高5.0m以上の高い場所がみられた。さらに詳しく地形要素をみると、尾根状あるいは鳥状に相対的に標高の高い5つの場所と、7つの谷地形が認められた。これらの起伏のうち調査地点（清須市清洲）は、清洲にある現在の復元された清洲城および清洲古城跡公園からその南約300mの五条橋、さらに南約300mの長者橋を通り鍋方に至る、標高3.0～4.8mの等高線がつくる東西幅約700mで南北距離約1.9km以上の、南北方向に長軸をもつ尾根地形の上にあることがわかった。

この地形をさらに詳しくみることにする。標高3.0～4.8mの尾根地形は現在の清洲城と清洲古城跡公園のある清洲から東へ朝日城屋敷、清洲弁天、清洲田中町までで閉じており、北へ向かって凸の地形をなしている。また、この尾根地形上のさらに相対的に標高の高いところは、同じく清洲城あるいは清洲古城跡公園を北端として、その南約1.1kmの鍋方まで南北方向に長く、とくに清洲城から長者橋の南まで南北距離約750mは、こ

の尾根地形のもっとも標高が高い場所にあたる。

今回の清洲城下町遺跡の調査地点は標高4.8m以上の、標高が相対的に高く、堤防状に南北に長い場所の上にあっている。長者橋の東で東西方向に設定された調査区は、その西半分（10A区）は標高4.8m以上で標高が相対的に高い場所にあっており、東へ向かうにつれて標高を減じる緩斜面となっている。この緩斜面に関して、清洲田中町、清洲弁天付近を谷頭として、そこから南東方向へ寺野池端、寺野中園、助七に至る標高2.2～2.8mで長軸約1.5kmの谷地形が認められる。その方向はちょうど東海道新幹線や東海道本線の線路方向と一致している。現在の地図上にはこの範囲を流下する河川や水路などはみられないが、上流域で降水があった場合、雨水はこの谷地形を目指して流下し、この谷地形の内部は河川の流路や湿地のように滞水していた場所であった可能性がある。清洲城下町遺跡の今回の発掘調査では井戸が検出されている。井戸を地形的に考えたとき、井戸の上部はヒトが利用できるように地表に露出し大気中にさらされ、対する井戸の底部は地下水面まで達する必要がある。この両方を効率的に同時に満たす場所としては、相対的に標高の高い場所と被圧地下水面をもつような標高の低い場所との境界に井戸を掘削するのが適当であろう。五条川流域における地形解析からよみ取れる標高3.0～4.8mの尾根地形の東側には、標高2.2～2.8mの谷地形が認められ、調査区は標高の高い場所から次第に標高の低くなる緩傾斜面の上にあった。また、検出される井戸遺構は東西方向に長い調査区において、より東方（11A区）で多く検出されており、考古学的な所見とも調和的であった。

(3) 五条川の流路について

現在の五条川の流路は解析範囲において、北の神明付近から南の清洲橋までの約1.0kmの区間で東へ凸でゆるく屈曲する。清洲橋から清洲城・清洲古城跡公園までの南北距離約250mが流路の振幅の変換点となり、五条川と東海道新幹線・東海道本線との交差点から南へ約1.3km隔たった巡礼橋あたりまでで振幅方向が変わり、西へ凸でゆるく蛇行する。以下では、現在の輪の五条川の流路と等高線図からよみ取れる地形との対応関係を北から順にみていく。

地形解析では北の神明から清洲橋までの五条川の西方に、清須市落合から一場にかけての標高3.0～3.8mに南北距離約700m、東西幅約100mで、南北方向に長く東西に狭小な谷地形が明瞭に認められた。これは、等高線パターンから判断するとかつての河川の流路跡を示すものと考えられる。この谷地形の左岸に御霊神明社がある。さらに南の、清須市清洲の東名阪自動車道と北から県道尾西清洲線、南から主要地方道名古屋祖父江線とが交差する地点の西側約150mで流路は南へ開口している。本地点から南側の広い範囲においては、現在の五条川の流路と等高線図から読み取れる地形との特徴がほとんど調和しなくなる。清洲城・清洲古城跡公園付近で等高線が北に閉じ、舌状地形を形成するが、先の流路跡はこの舌状部分で南西と南東方向に分けられる。南西方向には清須市清洲から土田互反地に至る標高1.6～2.8mで南北距離約1.0kmの北東から南西に開口した谷地形が明瞭に現われる。ここにもかつて河川の流路があったものと思われる。いっぽう、南東側に分けられる谷地形は朝日城屋敷から清洲弁天にかけて標高3.0mの等高線が北西から南東方向に平行するだけで水平に近い場所がつづくが、さらにその南東には清須市田中町から寺野池端、寺野中園、助七に至る南北距離約1.5km、東西幅約700mの大きな谷地形が認められ、南東方向に分岐した谷地形がこの大きな谷に合流していた可能性もある。

ところで、清洲城・清洲古城跡公園を北端とする相対的に標高の高い舌状地形に関して、とくに清洲城・清洲古城跡公園を起点としてさらに南へ約900mの船杖橋にかけては、標高3.0～4.8mの尾根地形の中を現在の五条川が流下している。相対的に高い尾根地形の上を、周りよりも低いところを流下するのがふつうである河川が流れており、地形との対応関係から考えて不自然な場所となっている。さらに、長者橋のある清須市清洲から南でも明瞭な谷地形は現われてこない。例えば、新清洲と土田郷前にみられる標高2.6mの閉曲線で囲まれる鳥状地形との間や、その縁辺に小規模な谷地形がみられるのみである。新清洲の名古屋鉄道名古屋本線の新清洲駅を北端として、その南の巡礼橋の西までには標高2.6mの等高線2本が向かいあって南北方向に平行するが、これは軽微

な谷地形をみているのかも知れない。同様に、新清洲の標高2.8mの相対的に標高の高い鳥状地形と、土田郷前の標高2.8mの鳥状地形との間にも、北と南の縁に軽微な谷地形が認められ、かつてこの間に流路があった可能性もある。

以上のように、等高線図から読み取れる地形と五条川の流路とは現在の清洲城・清洲古城跡公園付近を境として、その北と南で調和関係に大きな差異がみられた。北側の清須市落合から一場にかけては明瞭な谷地形が認められ、谷地形の方向は現在の五条川の流路と平行していた。いっぽう、そこよりも南側では等高線図から読み取れる尾根状地形や谷地形と現在の五条川の流路とは斜交し、非調和的であった。なかでも清洲城・清洲古城跡公園から鍋方までには、認められる標高3.0～4.8mの尾根地形の中を現在の五条川が流下しており、きわめて不自然な関係にあった。また、船杖橋付近では標高3.0～4.8mで南西方向に凸の舌状地形を示すと同時に、船杖橋の南では現在河川流路などが確認されないにも関わらず、等高線が東西方向から南北方向にほぼ直角に大きく曲がっていた。このような特徴から推察すると、清洲城・清洲古城跡公園から鍋方までみられる地形は人工的に大きく改変されていると考えざるを得ない。現在の五条川の流路に関して、歴史学的には1794年(寛政6年)の五条川の瀬違いにより、それまで清須市清洲にある清洲小学校のあたりから大きく西へ湾曲していたものを、五条橋から巡礼橋まで最短距離になるように掘り起こしたといわれる(石黒, 1969)。事実と等高線図から読み取れた人工的に改変されたと考えられる地形との対応関係をさらに詳しく検討する必要があり、今後の課題である。

謝辞 本論を作成するにあたり、等高線図の作成で国際文化財株式会社にお世話になった。試料の整理・保管と図面の作成で整理補助員の鈴木好美氏・前田弘子氏にお手伝いいただいた。記して厚くお礼申し上げます。

文献

石黒昭昭, 1969, 尾根張のもとに、清洲町史, 清洲町, 219-290.



第70図 清洲城下町遺跡周辺の等高線図
図の中央部に今回の調査区を配置。

第2節 清洲城下町遺跡出土木製品の樹種同定

黒沼保子 (パレオ・ラボ)

1 はじめに

清洲城下町遺跡は清須市清洲地内に所在し、五条川中流域に形成された自然堤防と後背湿地上に立地する古代から中世の複合遺跡である。井戸に使用されていた木材と、井戸や堀から出土した木製品の樹種同定結果を報告する。

2 試料と方法

試料は、井戸 301SE、0007SE、0356SE、0494SE、0537SE、0999SE、1021SE から出土した板材と、堀 0990SD や土坑 0995SK などから出土した漆器や板材など 207 点である。これらの試料から、剃刀を用いて 3 断面 (横断面・接線断面・放射断面) の切片を採取し、ガムクロラールで封入してプレパラートを作製した。これを光学顕微鏡で観察・同定し、写真撮影を行った。

3 結果

針葉樹はモミ属、マツ属複維管束亜属、コウヤマキ、スギ、ヒノキの 5 分類群、広葉樹はハンノキ属ヤシヤブシ亜属 (以下ヤシヤブシ亜属と呼ぶ)、カツラ属、モモ、トチノキの 4 分類群の、計 9 分類群が確認された。樹種構成を第 2 表、結果の一覧を第 5・6 表に示す。

以下に、同定根拠となった木材組織の特徴を記載し、光学顕微鏡写真を図に示す。

(1) モミ属 *Abies* マツ科 第 71 図

1a-1c(No.108-8)

仮道管および放射組織からなる針葉樹である。早材から晩材への移行は比較的緩やかである。放射組織でじゅず状末端壁がみられる。分野壁孔はスギ型で、1 分野に 1～4 個存在する。

モミ属は暖帯から温帯の山地に生育する常緑高木で、ウラジロモミ・シラベ・トドマツなど約 5 種ある。材は柔軟で加工容易であるが、割れや狂いが出やすく、保存性が低い。

(2) マツ属複維管束亜属 *Pinus* subgen. *Diploxylon* マツ科 第 71 図 2a-2c(No.111-9)

仮道管、垂直・水平樹脂道、放射組織、放射仮道管からなる針葉樹である。早材から晩材への移行はやや急で、晩材部は広い。大型の樹脂道を薄壁のエピセリウム細胞が囲んでいる。分野壁孔は窓状で、放射仮道

管の水平壁は内側向きに鋸歯状に肥厚する。

マツ属複維管束亜属は暖帯から温帯下部に分布する常緑高木で、アカマツとクロマツがある。材は油気が多く、靱性は大である。

(3) コウヤマキ *Sciadopitys verticillata* (Thunb.) Siebold et Zucc. コウヤマキ科 第 71 図 3c(No.99-1)

放射断面の観察のみである。仮道管と放射組織からなる針葉樹である。分野壁孔はやや小型の窓状となる。

コウヤマキは、福島県以南の温帯から暖帯上部に生育する常緑針葉高木である。耐朽性・耐湿性が強く、強靱で、微香がある。

(4) スギ *Cryptomeria japonica* (L.f.) D.Don スギ科 第 71 図 4a-4c(No.5)、5c(No.12)

仮道管、放射組織、樹脂細胞からなる針葉樹である。早材から晩材への移行はやや急で、晩材部の幅は広い。樹脂細胞は主に晩材部に接線状に配列する。分野壁孔は大型のスギ型で、1 分野に通常 2 個並ぶ。

スギは、暖帯・温帯下部に生育する常緑高木である。材は比較的軽軟で切削加工は容易、割裂性は大きい。

(5) ヒノキ *Chamaecyparis obtusa* (Siebold et Zucc.) Endl. ヒノキ科 第 71・72 図 6a-6c(No.73-2)、7a-7c(No.78)、8a-8c(No.101)

仮道管、放射組織、樹脂細胞からなる針葉樹である。早材から晩材への移行は緩やかである。樹脂細胞は主に晩材部に散在する。分野壁孔はトウヒ型～ヒノキ型で、1 分野に 2 個存在する。

ヒノキは、福島県以南の温帯から暖帯に分布する常緑高木である。材は加工容易で割裂性は大きく、耐朽性・耐湿性は著しく高く、狂いが少ない。

分類群	計
モミ属	3
マツ属複維管束亜属	1
コウヤマキ	1
スギ	10
ヒノキ	183
ハンノキ属ヤシヤブシ亜属	2
カツラ属	2
モモ	3
トチノキ	2
計	207

第 2 表 樹種構成

(6) ハンノキ属 ヤシャブシ亜属 *Alnus* subgen. *Alnaster* カバノキ科 第72図 9a-9c(No.137-1)

小型の道管が放射方向に数個複合して分布する散孔材である。軸方向柔組織は短接線状となる。道管の穿孔は10～20段程度の階段状である。放射組織は単列同性である。

ヤシャブシ亜属は主に温帯に分布する落葉高木または低木で、ミヤマハンノキ、ヤシャブシなど4種がある。材は、硬さ・重さともに中庸である。

(7) カツラ属 *Cercidiphyllum japonicum* Siebold et Zucc. ex Hoffm. et Schult. カツラ科 第72図 10a-10c(No.139)

角張った道管が、ほぼ単独で年輪内で均等に分布する散孔材である。道管の穿孔は階段状で、30段程度となる。放射組織は1～3列幅で、平伏細胞と方形細胞からなる異性である。

カツラ属はカツラとヒロハカツラの2種があり、落葉高木である。カツラは温帯から暖帯、ヒロハカツラは亜高山帯に分布する。材は軽軟で靱性があり、加工は容易である。

(8) モモ *Prunus persica* Betschiバラ科 第72図 11a-11c(No.98)

半環孔性の散孔材で、年輪のはじめにやや大きな道管が1～3列程度並ぶ。晩材部では道管が単独で散在する。道管に着色物質を含むものがあり、穿孔は単一である。放射組織は1～7列幅の異性である。

モモは、温帯に分布する落葉高木である。材は重く、やや強度もある。

(9) トチノキ *Aesculus turbinata* Blume トチノキ科 第72図 12a-12c(No.141)

やや小型の道管が単独もしくは数個放射方向に複合して分布する散孔材である。道管の穿孔は単一で、道管内壁にはらせん肥厚がみられる。放射組織は単列で、すべて平伏細胞で構成される同性である。接線断面において放射組織が層状に配列する。

トチノキは温帯から暖帯に分布する落葉高木で、やや湿り気のある肥沃な土地の深い谷間や中腹の緩傾斜地によく生育する。材は柔らかく緻密であるが、保存性はない。

4 考察

全試料207点中、ヒノキが183点と圧倒的に多く利用されていた。その他は、針葉樹ではスギが10点、モミ属が3点、マツ属複雑管束亜属とコウヤマキが各1点で、広葉樹ではモモが3点、ヤシャブシ亜属、カツラ属、トチノキが各2点であった。ヒノキを主とする針葉樹は、板材や木製品に幅広く使用されており、広葉樹は漆器類と0990SDおよび0990SEから出土した板材で確認された。以下に、遺構と器種別の木材利用をまとめる。

曲物や漆器など木製品の樹種構成を第3表に示す。0990SDから出土した漆塗り材はヤシャブシ亜属、漆椀は2点ともトチノキ、0995SKから出土した漆椀は

分類群	地区		11C								計			
	遺構		0990SD		0995SK		0990SE		1021SE					
	器種		漆塗り材	漆椀 底版?	漆椀	桶底	曲物	曲物底版	箸?	曲物破片?		底版?	箸?	
モミ属							1						1	
ヒノキ			1			2	3	2	1	1	2	1	13	
ハンノキ属ヤシャブシ亜属		1											1	
カツラ属				1									1	
トチノキ			2										2	
計			1	2	1	1	2	3	3	1	1	2	1	18

第3表 木製品の樹種構成

分類群	地区		11A				11B		11C						計							
	遺構		301SE		0007SE		0356SE		0494SE		0537SE		0990SD (下層)			(上層)		0999SE		1021SE		検3
	器種		板材	板材	板材	板材	板材	板材	板材	板材	板材	角材	板材	角材		板材	角材	板材	板材	板材	板材	
モミ属																	2					2
マツ属複雑管束亜属																				1		1
コウヤマキ																			1			1
スギ				10																		10
ヒノキ			26		5	22	28	2	1				9	45	2	29	1					170
ハンノキ属ヤシャブシ亜属										1												1
カツラ属												1										1
モモ																	3					3
計			26	10	5	22	28	3	1	1	1	9	51	2	30	1						189

第4表 板材・角材の樹種構成

カツラ属であった。そのほかの曲物、底板、箸?などにはヒノキが多用されていた。一般に、中世以降の漆器にはブナ属やケヤキ、トチノキを中心とする広葉樹が用いられる。クリやケヤキなどの堅硬で強靱な材は木皿などの薄手材に適しており、ブナ属やトチノキなどは軽軟で加工容易なため大量に使用される傾向がある(北野 2005)。清洲城下町遺跡の以前の調査で行われた樹種同定では、漆器にトチノキとブナ属を中心とした多様な広葉樹が使用されていた。今回の漆碗はトチノキとカツラ属で、いずれも軽軟な材である。点数が少ないため一概に言えないが、以前の調査結果とも傾向が一致すると考えられる。

板材・角材の樹種構成を第4表に示す。ヒノキが大多数を占めており、スギが10点確認された他は、針葉樹のモミ属が2点、マツ属複雑管束亜属が1点、コウヤマキが1点、広葉樹のヤシャブシ亜属が2点、カツラ属が1点、モモ3点であった。遺構別にみると、301SEの板材はすべてヒノキであった。0007SEの板材はスギ、0356SEと0494SEと0537SEの板材はヒノキであった。0990SDの板材はヒノキとヤシャブシ亜属、0990SD下層の板材はヒノキ、上層の板材はカツラ属、0999SEの角材はすべてヒノキ、板材ではヒノキが多いがモミ属、コウヤマキ、モモがみられた。

1021SEは角材がヒノキ、板材ではヒノキが多いが、マツ属複雑管束亜属が1点みられた。スギは007SEのみ、0990SDおよび0999SEでモミ属、コウヤマキ、ヤシャブシ亜属、カツラ属、モモ、1021SEでマツ属複雑管束亜属がみられたが、その他はすべてヒノキであった。

清洲城下町遺跡では、過去の分析においても、漆器以外の木製品にヒノキが圧倒的に多く利用されている(植田・堀木 2002)。また、井戸材は時代によって板の製材方法と樹種が異なることがわかっており、17世紀初頭以前は主に節のないヒノキ材、18世紀末～19世紀は節の多いスギ材に変化している(鈴木 2000)。今回の分析でも遺構によって樹種構成の違いが見られるため、遺構の時期や木材の加工痕等との比較検討により、時代による傾向との関係が把握できると期待される。

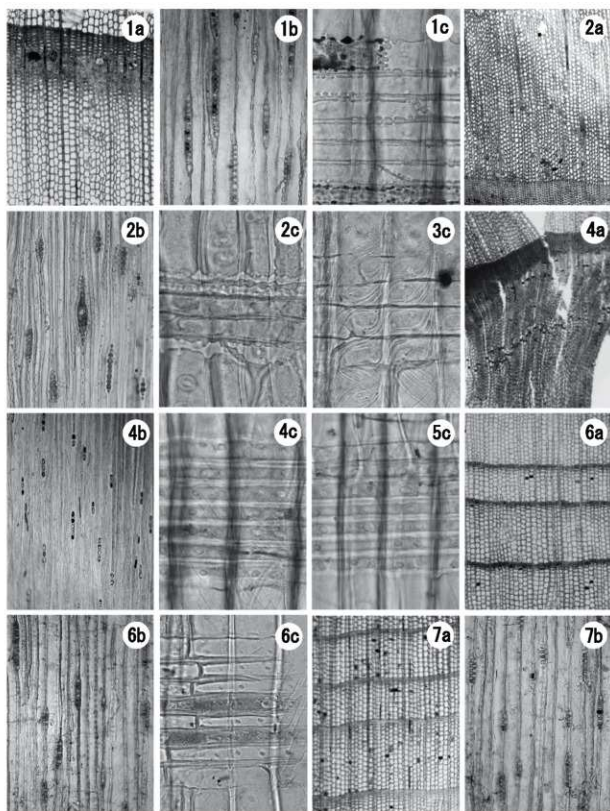
引用文献


- 北野信彦(2005) 近世出土漆器の研究. 394p, 吉川弘文館.
 鈴木正貴(2000) 井戸井枠と早桶. 小泉和子編『桶と樽—脇役の日本史』: 208-226, 法政大学出版局.
 植田弥生・堀木真美子(2002) 清洲城下町遺跡出土木製品の樹種同定. 『清洲城下町遺跡』: 302-322, 愛知県埋蔵文化財センター.

番号	保存区	遺構	記載事項	長	幅	厚	器種	樹種	木取り	番号	保存区	遺構	記載事項	長	幅	厚	器種	樹種	木取り		
1034-1-1	10A	301SE	-	76	10.2	3.3	結節材	ヒノキ	板目	13-1	11A	0356SE	-	50.2	7.5	2.5	結節材	ヒノキ	板目		
1034-1-2	10A	301SE	-	73.6	10	3.1	結節材	ヒノキ	板目	13-2	11A	0356SE	-	42	10.2	2.6	結節材	ヒノキ	板目		
1034-1-3	10A	301SE	-	72.8	10.5	3	結節材	ヒノキ	板目	13-3	11A	0356SE (2点)	-	52.4	10.6	2.8	結節材	ヒノキ	板目		
1034-1-4	10A	301SE	-	72.3	11	2.8	結節材	ヒノキ	板目	13-4	11A	0356SE	-	45.7	6	2.8	結節材	ヒノキ	板目		
1034-1-5	10A	301SE	-	70.1	9.8	2.7	結節材	ヒノキ	板目	13-5	11A	0356SE	-	29.2	8.3	2.3	結節材	ヒノキ	板目		
1034-1-6	10A	301SE	-	69.1	10.2	2.5	結節材	ヒノキ	板目	14	11A	0494SE	板1	30.5	13.2	1.3	結節材	ヒノキ	板目		
1034-1-7	10A	301SE	-	70.6	9.8	2.9	結節材	ヒノキ	板目	15	11A	0494SE	板2	42.6	13.8	1	結節材	ヒノキ	板目		
1034-1-8	10A	301SE	-	68	8	3.3	結節材	ヒノキ	板目	16	11A	0494SE	板3	28.4	7.1	0.8	結節材	ヒノキ	板目		
1034-1-9	10A	301SE	-	66.7	9.7	2.5	結節材	ヒノキ	板目	17	11A	0494SE	板4-2点	33	4.7	1.5	結節材	ヒノキ	板目		
1034-1-10	10A	301SE	-	69.2	9.7	1.8	結節材	ヒノキ	板目	18	11A	0494SE	板5-4点	35.1	8.3	1.3	結節材	ヒノキ	板目		
1034-1-11	10A	301SE	-	67.8	8.9	3.7	結節材	ヒノキ	板目	19	11A	0494SE	板6-3点	34.3	8.7	1.5	結節材	ヒノキ	板目		
1034-1-12	10A	301SE	-	65.7	9.5	3.1	結節材	ヒノキ	板目	20	11A	0494SE	板7	28.5	8.9	1.4	結節材	ヒノキ	板目		
1034-1-13	10A	301SE	-	64.5	7.3	3.2	結節材	ヒノキ	板目	21	11A	0494SE	板8-3点	19.3	9.8	1.2	結節材	ヒノキ	板目		
1034-1-14	10A	301SE	-	62.9	9.6	3.1	結節材	ヒノキ	板目	22	11A	0494SE	板9	34.4	8.9	1.3	結節材	ヒノキ	板目		
1034-1-15	10A	301SE	-	65.7	10	2.5	結節材	ヒノキ	板目	23	11A	0494SE	板10	28	11.4	1.2	結節材	ヒノキ	板目		
1034-1-16	10A	301SE	-	62.3	10.8	3.7	結節材	ヒノキ	板目	24	11A	0494SE	板11-7点	35.5	10.7	1.2	結節材	ヒノキ	板目		
1034-1-17	10A	301SE	-	63.8	9.7	2.7	結節材	ヒノキ	板目	25	11A	0494SE	板12-3点	29.2	14.4	1	結節材	ヒノキ	板目		
1034-1-18	10A	301SE	-	60.7	10.3	2	結節材	ヒノキ	板目	1040	26	11A	0494SE	板13-2点	32.1	13.2	1.5	結節材	ヒノキ	板目	
1034-1-19	10A	301SE	-	60	9.5	3.4	結節材	ヒノキ	板目	27	11A	0494SE	板14-3点	34.7	13.3	1.1	結節材	ヒノキ	板目		
1034-1-20	10A	301SE (2点)	-	58.7	8.7	2	結節材	ヒノキ	板目	28	11A	0494SE	板15-2点	28	11.8	1.8	結節材	ヒノキ	板目		
1034-1-21	10A	301SE	-	59.2	11	3.2	結節材	ヒノキ	板目	29	11A	0494SE	板16-2点	30.9	11.8	1.2	結節材	ヒノキ	板目		
1034-1-22	10A	301SE	-	51	6.7	3.1	結節材	ヒノキ	板目	30-1	11A	0494SE	板17-2点	33.5	8.6	1.7	結節材	ヒノキ	板目		
1034-1-23	10A	301SE	-	52.2	9.7	2.4	結節材	ヒノキ	板目	30-2	11A	0494SE	板17	26.8	3.9	1.9	結節材	ヒノキ	板目		
1034-1-24	10A	301SE	-	50	8.7	2.7	結節材	ヒノキ	板目	31	11A	0494SE	板18-4点	20.5	9.4	1.8	結節材	ヒノキ	板目		
1034-1-25	10A	301SE	-	48.2	10.2	3.5	結節材	ヒノキ	板目	32	11A	0494SE	板19-5点	38.6	14.2	2	結節材	ヒノキ	板目		
1034-1-26	10A	301SE	-	43.5	9	3.2	結節材	ヒノキ	板目	33	11A	0494SE	板20-2点	3.9	12.1	2	結節材	ヒノキ	板目		
1033	3	11A	0007SE	板1	81	14	2	結節材	ヒノキ	板目	34	11A	0494SE	-	65.3	3.8	0.9	結節材	ヒノキ	板目	
1033	4	11A	0007SE	板2	76.2	17.5	2.5	結節材	スギ	板目	1032	35	11B	0537SE	板1	67.2	12	2.8	結節材	ヒノキ	板目
1033	5	11A	0007SE	板3	58.5	14.7	2.1	結節材	スギ	板目	1032	36	11B	0537SE	板2	76.5	9.3	3.5	結節材	ヒノキ	板目
1033	6	11A	0007SE	板4	61.2	13.1	2.3	結節材	スギ	板目	1032	37	11B	0537SE	板3	80	11.3	3.8	結節材	ヒノキ	板目
1033	7	11A	0007SE	板5	65.2	11.3	2.2	結節材	スギ	板目	1032	38	11B	0537SE	板4	76.5	9	3.4	結節材	ヒノキ	板目
1033	8	11A	0007SE	板6	81.7	17.5	2	結節材	スギ	板目	1032	39	11B	0537SE	板5	78.5	9.7	3.3	結節材	ヒノキ	板目
1033	9	11A	0007SE	板7-3点	96.5	19.5	2.5	結節材	スギ	板目	1032	40	11B	0537SE	板6	77.6	9	3	結節材	ヒノキ	板目
1033	10	11A	0007SE	板8	81.4	15.8	2	結節材	スギ	板目	1032	41	11B	0537SE	板7	82.2	16.6	3.7	結節材	ヒノキ	板目
1033	11	11A	0007SE	板9	76.8	15.2	2.1	結節材	スギ	板目	1032	42	11B	0537SE	板8	74.8	10	3.2	結節材	ヒノキ	板目
1033	12	11A	0007SE	板10	81.1	14.6	2.1	結節材	スギ	板目	1032	43	11B	0537SE	板9	87.3	11.3	3.1	結節材	ヒノキ	板目

第5表 樹種同定結果一覧表(1)

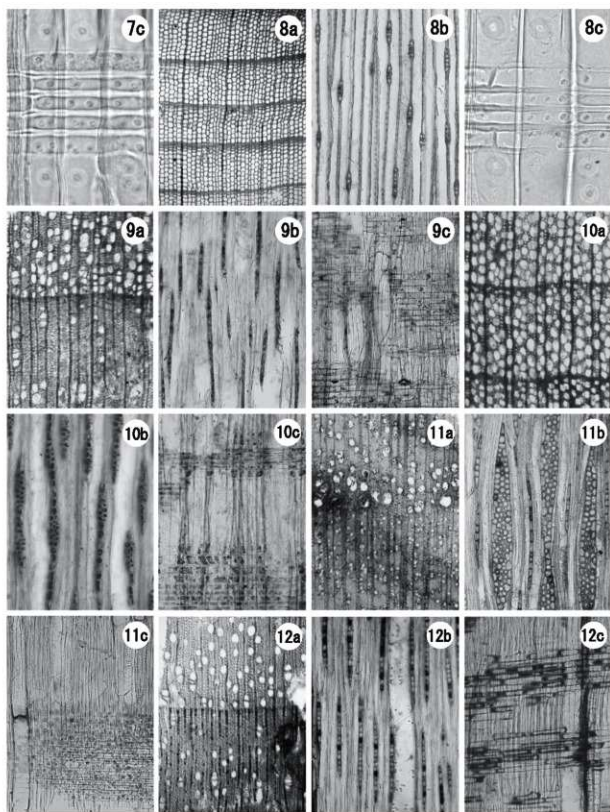
番号	保存区	区	遺構	記載事項	高	幅	厚	素材	種類	木取り	番号	保存区	区	遺構	記載事項	高	幅	厚	素材	種類	木取り
1032	44	11B	05375E	櫛10	83.2	11.9	3.4	粘土	ヒノキ	板目	102	11C	09995E	遺物付2点	21.8	4	0.4	赤土	ヒノキ	板目	
1032	45	11B	05375E	櫛11	73.6	10.2	2.7	粘土	ヒノキ	板目	103	11C	09995E	遺物内No.1	19.2	10.7	0.5	赤土	ヒノキ	板目	
1032	46	11B	05375E	櫛12	74.5	9.6	3.2	粘土	ヒノキ	板目	104	11C	09995E	遺物内No.2	9.9	1.7	0.4	赤土	ヒノキ	板目	
1032	47	11B	05375E	櫛13	74.6	7.8	3.1	粘土	ヒノキ	板目	105	11C	09995E	遺物内No.3	9.9	2.7	0.5	赤土	ヒノキ	板目	
1032	48	11B	05375E	櫛14	81	10.1	3.5	粘土	ヒノキ	板目	1040	106-1	11C	09995E	2点	31	26.6	0.7	赤土	ヒノキ	板目
1032	49	11B	05375E	櫛15	82	8.4	3.8	粘土	ヒノキ	板目	106-2	11C	09995E	2点	16.2	1.9	0.5	赤土	ヒノキ	板目	
1032	50	11B	05375E	櫛16	82	10.6	3.5	粘土	ヒノキ	板目	107	11C	09995E	-	23.8	3.1	0.3	赤土	ヒノキ	板目	
1032	51	11B	05375E	櫛17	74.8	9.4	2.9	粘土	ヒノキ	板目	106-1	11C	09995E	-	24.5	12.1	2	板材	ヒノキ	板目	
1032	52	11B	05375E	櫛18	84.7	10.6	3.2	粘土	ヒノキ	板目	106-2	11C	09995E	-	2.7	2.7	0.5	板材	ヒノキ	板目	
1032	53	11B	05375E	櫛19	76.5	10.8	2.7	粘土	ヒノキ	板目	106-3	11C	09995E	-	22.3	3.3	0.7	板材	ヒノキ	板目	
1032	54	11B	05375E	櫛20	75	8	3.6	粘土	ヒノキ	板目	106-4	11C	09995E	-	20.3	5	0.7	板材	ヒノキ	板目	
1032	55	11B	05375E	櫛21	75.3	10.1	2.8	粘土	ヒノキ	板目	106-5	11C	09995E	-	20.1	3.7	0.7	板材	ヒノキ	板目	
1032	56	11B	05375E	櫛22	76	11.8	2.8	粘土	ヒノキ	板目	106-6	11C	09995E	-	20.1	3.2	0.3	板材	ヒノキ	板目	
1032	57	11B	05375E	櫛23	72.8	9.5	3	粘土	ヒノキ	板目	106-7	11C	09995E	-	10.2	2.4	0.3	板材	ヒノキ	板目	
1032	58	11B	05375E	櫛24	82.8	9.2	3.5	粘土	ヒノキ	板目	106-8	11C	09995E	-	8.7	1.8	0.3	板材	ヒノキ	板目	
1032	59	11B	05375E	櫛25	78	11.5	3.3	粘土	ヒノキ	板目	106-9	11C	09995E	-	10.7	0.5	0.3	葉	ヒノキ	板目	
1032	60	11B	05375E	櫛26	76	9	3	粘土	ヒノキ	板目	109-1	11C	09995E	-	4.4	4	1	板材	ヒノキ	板目	
1032	61	11B	05375E	櫛27	87	10.7	3.5	粘土	ヒノキ	板目	109-2	11C	09995E	-	44.3	4.5	1	板材	ヒノキ	板目	
1032	62	11B	05375E	櫛28	77.7	7.9	3.5	粘土	ヒノキ	板目	109-3	11C	09995E	-	35.2	3.5		板材	ヒノキ	板目	
1032	63	11C	09995E	櫛1	162.2	34.5	2.7	粘土	ヒノキ	板目	110	11C	10215E	-	13.6	3.8	1	板材	ヒノキ	板目	
1032	64	11C	09995E	櫛2	126.5	15.7	2.5	粘土	ヒノキ	板目	111-1	11C	10215E	櫛7点	18.3	1.7	0.1	赤土	ヒノキ	板目	
1032	65	11C	09995E	櫛3	133.5	3.4	2.5	粘土	ヒノキ	板目	111-2	11C	10215E	-	10.6	3.5	0.4	赤土	ヒノキ	板目	
1014	66	11C	09995E	東院南柱木	71.6	5.6	2.3	凝灰	ヒノキ	板目	111-3	11C	10215E	2点	11.6	1.2	0.3	赤土	ヒノキ	板目	
103	67	11C	09995E	東院南柱木	80.8	8	4.4	凝灰	ヒノキ	板目	111-4	11C	10215E	-	8.7	0.6	0.3	板材	ヒノキ	不明	
103	68	11C	09995E	東院外柱	47	5.7	0.7	凝灰	ヒノキ	板目	111-5	11C	10215E	-	20.4	0.6	0.6	葉	ヒノキ	板目	
103	69	11C	09995E	東院外柱	47.9	5.2	3.4	凝灰	ヒノキ	板目	111-6	11C	10215E	-	9.4	4.3	1	板材	ヒノキ	板目	
1028	70-1	11C	09995E	東院外側角	92.6	11	0.8	角材	ヒノキ	角材	111-7	11C	10215E	-	6.7	2.8	0.7	板材	ヒノキ	板目	
1039	70-1	11C	09995E	東院2点	127.9	33.2	2.4	凝灰	ヒノキ	板目	111-8	11C	10215E	-	7.7	4.1	1	板材	ヒノキ	板目	
1029	71	11C	09995E	東院2点	61.7	16.3	2.3	凝灰	ヒノキ	板目	111-9	11C	10215E	-	9.8	1.5	0.8	板材	ヒノキ	不明	
103	75-1	11C	09995E	櫛1	128.8	12.5	2.8	凝灰	ヒノキ	板目	111-10	11C	10215E	-	5.8	3.2	2.8	角材	ヒノキ	板目	
103	75-2	11C	09995E	櫛2	47	11.2		凝灰	ヒノキ	板目	112	11C	10215E	-	13.7	0.7	0.5	角材	ヒノキ	角材	
103	75-3	11C	09995E	櫛3	66.5	5.5	1	凝灰	ヒノキ	板目	1031	113	11C	10215E	櫛1	7.8	9.5	2.3	粘物	ヒノキ	板目
74	11C	09995E	櫛4	126	17.9	2.6	凝灰	ヒノキ	板目	1031	114	11C	10215E	櫛2	78.9	10.8	2.6	粘物	ヒノキ	板目	
75	11C	09995E	櫛5	126.5	16.4	2.5	凝灰	ヒノキ	板目	1031	115	11C	10215E	櫛3	77.8	11.9	2.4	粘物	ヒノキ	板目	
1016	76	11C	09995E	東院西柱木	76.3	6.5	2.3	凝灰	ヒノキ	板目	1031	116	11C	10215E	櫛4	7.7	11.2	2.2	粘物	ヒノキ	板目
1012	77	11C	09995E	東院西柱木	80	9.7	4.5	角材	ヒノキ	板目	1031	117	11C	10215E	櫛5	78.4	8.3	3.2	粘物	ヒノキ	板目
103	78	11C	09995E	東院外側角	48.5	5.1	2.3	角材	ヒノキ	板目	1031	118	11C	10215E	櫛6	78.3	9.3	2.8	粘物	ヒノキ	板目
1018	79-1	11C	09995E	西1	110.5	34.6	2.5	凝灰	ヒノキ	板目	1031	119	11C	10215E	櫛7	78.6	16.3	2.6	粘物	ヒノキ	板目
1023	79-2	11C	09995E	西1	164.2	9.7	1	凝灰	ヒノキ	板目	1031	120	11C	10215E	櫛8	76.6	11.7	2.5	粘物	ヒノキ	板目
1027	80	11C	09995E	西1-2	91.8	9.2	0.8	凝灰	ヒノキ	板目	1031	121	11C	10215E	櫛9	76.3	9.2	2.3	粘物	ヒノキ	板目
1020	81	11C	09995E	西2	126	14.8	2.8	凝灰	ヒノキ	板目	1031	122	11C	10215E	櫛10	78.3	9.8	2.7	粘物	ヒノキ	板目
82	11C	09995E	西3	125	34.5	2.5	凝灰	ヒノキ	板目	1031	123	11C	10215E	櫛11	77.8	7.5	2.4	粘物	ヒノキ	板目	
1015	83	11C	09995E	西院西柱木	76	6.6	4.1	角材	ヒノキ	板目	1031	124	11C	10215E	櫛12	77.8	9.5	2.5	粘物	ヒノキ	板目
1033	84	11C	09995E	西院西柱木	79.8	10	4.3	角材	ヒノキ	板目	1031	125	11C	10215E	櫛13	79.2	7.1	2.9	粘物	ヒノキ	板目
1026	85	11C	09995E	西院東柱	56.7	5.7	4.4	角材	ヒノキ	角材	1031	126	11C	10215E	櫛14	77.7	12	2.9	粘物	ヒノキ	板目
1031	86	11C	09995E	西院2点	123	34.2	2.5	凝灰	ヒノキ	板目	1031	127	11C	10215E	櫛15	77.9	5.8	2.5	粘物	ヒノキ	板目
87	11C	09995E	西2	131.3	14.2	3.2	凝灰	ヒノキ	板目	1031	128	11C	10215E	櫛16	78.1	11.2	2.1	粘物	ヒノキ	板目	
1022	88	11C	09995E	西3	131.8	11.3	2.6	凝灰	ヒノキ	板目	1031	129	11C	10215E	櫛17	77.7	8.2	2.3	粘物	ヒノキ	板目
89	11C	09995E	西4-2点	134.2	24.5	2.4	凝灰	ヒノキ	板目	1031	130	11C	10215E	櫛18	77	12	2.2	粘物	ヒノキ	板目	
1024	90	11C	09995E	西1-2の内側	71.5	5.9	1	凝灰	ヒノキ	板目	1031	131	11C	10215E	櫛19	77.8	10.9	2.7	粘物	ヒノキ	板目
91-1	11C	09995E	西1-2の内側	24.8	6.7	0.3	凝灰	ヒノキ	板目	1031	132	11C	10215E	櫛20	78.9	8.3	2.3	粘物	ヒノキ	板目	
91-2	11C	09995E	西1-2の内側	17.4	6.7	0.3	凝灰	ヒノキ	板目	1031	133	11C	10215E	櫛21	77.3	10.4	2.2	粘物	ヒノキ	板目	
91-3	11C	09995E	西1-2の内側	7.7	4.3	0.5	凝灰	ヒノキ	板目	1031	134	11C	10215E	櫛22	78.7	7.5	2.2	粘物	ヒノキ	板目	
1017	92	11C	09995E	北院西柱木	77	6	3.9	角材	ヒノキ	角材	1031	135	11C	10215E	櫛23	77.4	8.3	2.8	粘物	ヒノキ	板目
1011	93	11C	09995E	北院西柱木	80	30	4.3	角材	ヒノキ	板目	1031	136	11C	10215E	櫛24	76.5	9.8	2.7	粘物	ヒノキ	板目
94	11C	09995E	北院南側	70.4	4.9	1.7	凝灰	ヒノキ	板目	1039	137-1	11C	09995D	遺	4.7	3.2	1.2	漆	ヤシロシ	不明	
95-1	11C	09995E	北院外側	101.5	10.1	0.9	凝灰	ヒノキ	板目	137-2	11C	09995D	櫛	4	2.1	1.3	板材	ヤシロシ	不明		
95-2	11C	09995E	北院外側	90.4	2.3	1.2	凝灰	ヒノキ	板目	137-3	11C	09995D	櫛	15.2	7.4	0.3	板材	ヒノキ	板目		
96	11C	09995E	北院東柱	47.8	4	3.3	角材	ヒノキ	角材	137-4	11C	09995D	櫛	20.1	5.7	0.2	板材	ヒノキ	板目		
97-1	11C	09995E	北院東側角	67.5	7.5	0.8	凝灰	ヒノキ	板目	1035	138	11C	09995D	-	14.5	12.6	6.8	漆	トナリ	漆木版	
97-2	11C	09995E	北院東側角	42.1	5.8	0.7	凝灰	ヒノキ	板目	139	11C	09995D	上層	3.4	2.3	0.6	板材	ヒノキ	不明		
97-3	11C	09995E	北院東側角	32.2	3.1	0.6	凝灰	ヒノキ	板目	140	11C	09995D	上層	16.5	6.7	0.3	漆	ヒノキ	板目		
98	11C	09995E	北院西中柱	75.2	5.5	5	角材	ヒノキ	漆板	1036	141-1	11C	09995D	下層2点	12.1	7.3	3.3	漆	トナリ	漆木版	
99-1	11C	09995E	北院の内側	60.1	3.3	1.4	凝灰	ヒノキ	漆板	1037	141-2	11C	09995D	下層	-	-	-	漆	トナリ	漆木版	
99-2	11C	09995E	北院の内側	13.8	13.8	1.5	凝灰	ヒノキ	漆板	1038	141-3	11C	09995D	下層	-	-	-	漆	トナリ	漆木版	
99-3	11C	09995E	北院の内側	22.7	4.6	3	凝灰	ヒノキ	漆板	142	11C	09995D	下層	10.6	2.5	0.4	板材	ヒノキ	板目		
1030	100-1	11C	09995E	上	48.5	44	2.7	粘物	ヒノキ	板目	143	11C	09995K	-	4.2	2	1.1	漆	カワラ	不明	
100-2	11C	09995E	下	33.1	8.5	0.3	凝灰	ヒノキ	板目	144	11C	櫛	-	8	2.7	1.4	板材	ヒノキ	角材		
1029	101	11C	09995E	下																	



スケール： 

1a-1c. モミ属 (Na108-8)、2a-2c. マツ属複雑管束亜属 (Na111-9)、3c. コウヤマキ (Na99-1)、4a-4c. スギ (Na5)、5c. スギ (Na12)、6a-6c. ヒノキ (Na73-2)、7a-7b. ヒノキ (Na78)
 a: 横断面 (スケール=250 μ m)、b: 接線断面 (スケール=100 μ m)、c: 放射断面 (スケール=25 μ m)

第71図 清洲城下町遺跡出土木製品の光学顕微鏡写真(1)



スケール： 

7c. ヒノキ (No.78)、8a-8c. ヒノキ (No.101)、9a-9c. ハンノキ属ヤシャブシ亜属 (No.137-1)、10a-10c. カツラ属 (No.139)、11a-11c. モモ (No.98)、12a-12c. トチノキ (No.141)

a: 横断面 (スケール=250 μm)、b: 接線断面 (スケール=100 μm)、c: 放射断面 (スケール=7c-8c: 25 μm 、9c-11c: 100 μm)

第 72 図 清洲城下町遺跡出土木製品の光学顕微鏡写真 (2)

第3節 清洲城下町遺跡出土鍛冶・铸造関連遺物の分析調査

大澤正己・鈴木瑞穂

(九州テクノリサーチ・TACセンター)

1 いきさつ

清洲城下町遺跡は愛知県清須市清洲地内に所在する。10AB区および11ABC区からは鍛冶・铸造関連遺物が多数出土した。11B区では金床石を伴う炉遺構も検出されており、金属器生産に関連する作業が行われていたと推定されている。周辺地域での金属器生産の実態を検討する目的から、分析調査を実施する運びとなった。

2 調査方法

2-1 供試材

第7表に示す。出土鍛冶・铸造関連遺物60点の調査を行った。

2-2 調査項目

(1) 肉眼観察

分析調査を実施する遺物の外観の特徴など、調査前の観察所見を記載した。

(2) マクロ組織

本来は肉眼またはルーペで観察した組織であるが、本稿では顕微鏡埋込み試料の断面を、低倍率で撮影したものを指す。当調査は顕微鏡検査よりも、広範囲で組織の分布状態、形状、大きさなどが観察できる利点がある。

(3) 顕微鏡組織

鉍滓の鉍物組成や金属部の組織観察、非金属介在物の調査などを目的とする。

試料観察面を設定・切り出し後、試験片は樹脂に埋込み、エメリー研磨紙の#150、#240、#320、#600、#1000、及びダイヤモンド粒子の3 μ と1 μ で鏡面研磨した。

また観察には金属反射顕微鏡を用い、特徴的・代表的な視野を選択して写真撮影を行った。金属鉄の調査では3% ナイタル(硝酸アルコール液)、青銅製品の調査では酢酸・硝酸・アセトン混合液を腐食(Etching)に用いた。

(4) EPMA (Electron Probe Micro Analyzer) 調査

試料面(顕微鏡試料併用)に真空中で電子線を照射し、発生する特性X線を分光後に画像化し定性的な結果を得る。更に標準試料とX線強度との対比から元素定量値をコンピューター処理してデータ解析を行う

方法である。

反射電子像(COMP)は、調査面の組成の違いを明瞭で表示するものである。重い元素で構成される個所ほど明るく、軽い元素で構成される個所ほど暗い色調で示される。これを利用して、各相の組成の違いを確認後、定量分析を実施している。

また元素の分布状態を把握するため、反射電子像に加え、特性X線像の撮影も適宜行った。

(5) 化学組成分析

出土遺物の性状を調査するため、構成成分の定量分析を実施した。

①鉄滓

全鉄分(Total Fe)、金属鉄(Metallic Fe)、酸化第一鉄(FeO):容量法。

炭素(C)、硫黄(S):燃焼容量法、燃焼赤外吸収法

二酸化珪素(SiO₂)、酸化アルミニウム(Al₂O₃)、酸化カルシウム(CaO)、酸化マグネシウム(MgO)、酸化カリウム(K₂O)、酸化ナトリウム(Na₂O)、酸化マンガン(MnO)、二酸化チタン(TiO₂)、酸化クロム(Cr₂O₃)、五酸化磷(P₂O₅)、バナジウム(V)、銅(Cu)、二酸化ジルコニウム(ZrO₂):ICP (Inductively Coupled Plasma Emission Spectrometer) 法:誘導結合プラズマ発光分光分析。

②鉄塊系遺物

珪素(Si)、マンガン(Mn)、磷(P)、銅(Cu)、クロム(Cr)、チタン(Ti)、バナジウム(V)、砒素(As)、コバルト(Co):ICP法。

炭素(C)、硫黄(S):燃焼容量法、燃焼赤外吸収法

③青銅製品:銅(Cu)、錫(Sn)、鉛(Pb)、鉄(Fe)、砒素(As)、アンチモン(Sb)、コバルト(Co)、銀(Ag) ICP法。

3 調査結果

化学分析結果を第8表、調査対象とした遺物60点の調査結果を第9表に示す。

また鍛冶・铸造関連遺物の特徴と、そこから想定される作業内容の詳細は以下のとおりである。

3-1 鍛冶関連遺物

出土遺物の調査結果から、清洲城下町では熱間で鉄素材を鍛打加工して鉄器を製作する、鍛錬鍛冶(小鍛冶)作業が行われたと推定される。

〈1〉分析調査を実施した出土鉄滓は、いずれも鉄酸化物と炉材粘土または鍛接剤（粘土汁・薬灰）の溶融物（ SiO_2 主成分）主体の滓であった。鉄素材を熱間で鍛打加工した時に生じる鍛錬鍛冶滓に分類される。断面の顕微鏡観察結果の一部を第75図（KYS-34）、第76図（KYS-3）上段に示す。ともに滓中には白色粒状・樹枝状結晶ウスタイト（Wustite: FeO ）、淡灰色柱状結晶ファヤライト（Fayalite: $2\text{FeO} \cdot \text{SiO}_2$ ）が晶出する。

〈2〉椀形鍛冶滓（KYS-34）中には、重共析組織～共析組織を呈する金属鉄部が確認された。EPMAを用いて鉄中非金属介在物の組成を調査した。調査個所の反射電子像と特性X線像および定量分析値は第75図下段に示す。非金属介在物はチタン（ TiO_2 ）を10%前後含む。この特徴から、清洲城下町遺跡には砂鉄（含チタン鉄鉱）を始発原料とする鉄素材が搬入されていたと推定される。

なお、第73図に示すように、出土鉄塊系遺物はほぼ鑄鉄塊（KYS-16、42、44、45）であった。その一部の断面顕微鏡観察結果を第78図に示す。これらは後述する鉄鑄物製作に伴う遺物の可能性も高いが、こうした鑄鉄塊または鑄造鉄器片などを鍛冶炉で脱炭処理した後に、鍛造鉄器を製作する原料の存在も否定できない。鑄造鉄器片（KYS-5）の顕微鏡観察結果は第77図下段に示している。全体が錆化しているが斑鑄鉄組織痕跡を残す。この鑄鉄片は複数の鍛冶滓（KYS-1～3）とともに出土していることから、鍛冶原料鉄であった可能性が指摘できる。

〈3〉椀形鍛冶滓（KYS-3）の表層には、微細な粒状滓⁽¹⁾、や鍛造剥片⁽²⁾が確認された。第76図②は粒状滓の拡大である。内部には灰褐色多角形結晶マグネタイト（Magnetite: Fe_3O_4 ）が晶出する。第76図③は滓中で分解・滓化しかけた状態の鍛造剥片の拡大である。これらは鉄素材を熱間で鍛打加工したことを示す微細遺物である。

鉄滓に付着した粒状滓・鍛造剥片だけでなく、覆土を水洗して選別した微細遺物（粒状滓・鍛造剥片様遺物）の調査も実施した。第76図下段は粒状滓（KYS-52-3）、鍛造剥片（KYS-23(5)-1）の断面顕微鏡写真である。

また紙面の構成上断面写真は割愛（添付CD中の顕微鏡写真に掲載）したが、今回調査では水洗して得られたサンプルの内容を広く確認するため、確実な粒状滓・鍛造剥片以外の微細遺物も調査の対象とした。そ

の結果、微細な木炭や鍛冶滓破片等の鍛冶関連遺物も検出された。さらに錆化鉄片（特に鑄鉄組織の痕跡を残すもの）も多数混在していた。これらは鑄鉄製品の錆化、剥離に伴って生じたものである。

〈4〉出土鍛造鉄器の調査も実施した。断面の顕微鏡観察結果の一部を第77図上段（KYS-31）に示す。先端が曲がった釘の横断面で、3%ナイタルで腐食したところ、低炭素域（白色部）と高炭素域（黒色部）が互層をなしている状態が確認できた。折り返し線近傍の局部脱炭は鍛錬後に鍛打成形された鍛造製品の特徴を示す。

3-2 鑄造関連遺物

清洲城下町遺跡では、鍛造鉄器製作と共に、鉄鑄物の製造もなされている。

〈1〉清洲城下町遺跡では、鑄造用溶解炉の羽口先端部と推定される大口径羽口（KYS-20）が出土した。断面の顕微鏡観察結果の一部を第79図上段に示す。①の写真左側は付着滓部分で、②はその拡大である。灰褐色多角形結晶マグネタイト（Magnetite: Fe_3O_4 ）が晶出する。鑄鉄の溶解時に表層の一部が酸化して生じた鉱物相と推定される。また外面表層は強い熱影響を受けており、黒色ガラス質化している。③はその拡大で、内部に点在する微細な明白色粒は金属鉄粒である。（紙面の構成上割愛したが、EPMAを用いて付着滓と溶着金属粒の組成調査を実施した。添付CD中の顕微鏡写真に掲載している。）

以上の調査結果から、当遺跡では鑄鉄溶解から鉄鑄物の製作が推定される。

〈2〉当遺跡からはごく小形のガラス質滓が多数出土した。ガラス質滓中には炉材粘土に混和された砂粒が多数散在している。炉材粘土溶融物と推測される。

また滓中にはごく微細な金属鉄粒が多く含まれる。第73図に示すように、その多くが鑄鉄であった（KYS-7、9、37、38、39、43、47、58）。断面の顕微鏡観察結果の一部（KYS-37）を第79図下段に示す。重共晶組成白鑄鉄組織（ $C < 4.26\%$ ）の金属鉄粒が溶着している。これらは鉄鑄物の鑄造に用いた溶解炉⁽¹⁾の内部が溶融して生じたガラス質滓と推測される。

〈3〉上述したように、今回調査を実施した鉄塊系遺物の大半が鑄鉄塊であった。鑄造用原料または溶解～鑄込み時の湯こぼれ等の鑄造関連遺物と推測される。ただし少なくとも一部は鍛冶原料として利用されていた可能性が高い。

3-3 青銅製品

分析番号	区	遺構名	遺物名称	推定年代	計測値		メタル度	調査項目				備考			
					大きさ(mm)	重量(g)		マ ク ロ 組 織	顕 微 鏡 組 織	E P 分 析	化 学 分 析				
KYS-1	10A	1915K	柳形鋳治滓	16c後半	52×40×24	43.2	錆化(△)	○	○	○					
KYS-2			鋳治滓(流動状)		58×25×21	21.2	なし	○	○	○					
KYS-3			柳形鋳治滓		74×61×32	83.8	錆化(△)	○	○	○					
KYS-4			鋳治滓		34×21×17	5.1	なし	○	○	○					
KYS-5			鋳造鉄片		50×49×14	40.8	錆化(△)	○	○	○					
KYS-6			♯ 52質滓(炉壁溶融)		45×44×26	30.3	なし	○	○	○					
KYS-7			♯ 52質滓		56×40×28	37.8	なし	○	○	○					
KYS-8			♯ 52質滓		41×40×17	17.9	なし	○	○	○					
KYS-9			炉壁? (♯ 52質滓)		46×43×39	40.1	なし	○	○	○					
KYS-10			羽口		44×42×19	23.0	なし	○	○	○					
KYS-11	11A	01975K	柳形鋳治滓	16c後半	56×50×32	78.2	なし	○	○	○					
KYS-12			柳形鋳治滓		55×39×23	46.9	なし	○	○	○					
KYS-13			鋳造剥片様遺物		—	—	なし	○	○	○		*5点調査			
KYS-14			粒状滓?		—	—	なし	○	○	○		*2点調査			
KYS-15			02765K		羽口	16c	40×38×36	27.3	なし	○	○	○			
KYS-16			鉄塊系遺物		80×61×45		42.7	特L(☆)	○	○	○				
KYS-17			02805K		柳形鋳治滓? (♯ 52質)		第3四半期	34×30×21	13.7	なし	○	○	○		
KYS-18			鋳造剥片様遺物		—			—	なし	○	○	○		*5点調査	
KYS-19			粒状滓?		—			—	なし	○	○	○		*2点調査	
KYS-20			03945K		羽口			16c前半	97×86×30	178	なし	○	○	○	
KYS-21	04525K	柳形鋳治滓(含鉄)	107×93×42	215	錆化(△)				○	○	○				
KYS-22	05085P	鉄塊系遺物	17×12×10	2.2	錆化(△)				○	○	○				
KYS-23 (1)	05095P	鋳造剥片様遺物(粒状滓?) (2)のうち1点	16c末~	—	—				なし	○	○	○		*2点調査	
KYS-23 (2)				—	—				なし	○	○	○		*3点調査	
KYS-23 (3)				—	—	なし			○	○	○		*1点調査		
KYS-23 (4)				—	—	なし			○	○	○		*1点調査		
KYS-23 (5)				—	—	なし	○		○	○		*3点調査			
KYS-23 (6)				—	—	なし	○		○	○		*2点調査			
KYS-24	11B	05055K	鋳治滓(流動状)	17c初期	26×25×10	6.0	なし		○	○	○				
KYS-25			柳形鋳治滓		45×29×15	25.3	なし	○	○	○					
KYS-26			柳形鋳治滓		40×38×13	21.8	なし	○	○	○					
KYS-27			鋳治滓		24×18×13	2.4	なし	○	○	○					
KYS-28			05285E		鉄製品	58×29×28	34.3	錆化(△)	○	○	○				
KYS-29			柳形鋳治滓		68×60×40	185	なし	○	○	○					
KYS-30			柳形鋳治滓		48×42×18	42.1	なし	○	○	○					
KYS-31			06315E		鉄製品(釘)	70×18×15	13.2	L(●)	○	○	○				
KYS-32			鉄製品(棒状)		53×16×14	16.0	L(●)	○	○	○					
KYS-33			07675K		柳形鋳治滓	36×32×19	17.1	なし	○	○	○				
KYS-34	柳形鋳治滓(含鉄)	88×83×31	470	特L(☆)	○	○	○								
KYS-35	08105K	柳形鋳治滓	16c中頃	72×71×27	226	なし	○	○	○						
KYS-36				柳形鋳治滓	53×52×32	92.9	なし	○	○	○					
KYS-37				♯ 52質滓(含鉄)	56×51×43	75.1	なし	○	○	○					
KYS-38				♯ 52質滓(含鉄)	45×43×37	50.3	なし	○	○	○					
KYS-39				♯ 52質滓	58×53×32	63.3	なし	○	○	○					
KYS-40				08105X	鉄製品(釘)	55×14×15	8.4	錆化(△)	○	○	○				
KYS-41				鉄製品(釘)	69×23×14	16.8	錆化(△)	○	○	○					
KYS-42				鉄塊系遺物	30×27×20	32.5	L(●)	○	○	○					
KYS-43				♯ 52質滓(含鉄)	112×50×32	105.0	なし	○	○	○					
KYS-44				鉄塊系遺物	35×35×33	53.1	L(●)	○	○	○					
KYS-45	鉄塊系遺物	27×26×25	21.3	L(●)	○	○	○								
KYS-46	08245K	♯ 52質滓	16c末~	46×33×14	14.5	なし	○	○	○						
KYS-47				♯ 52質滓	38×34×8	7.2	なし	○	○	○					
KYS-48				鋳造剥片様遺物	—	—	なし	○	○	○		*2点選択			
KYS-49				柳形鋳治滓	34×29×16	19.5	なし	○	○	○					
KYS-50				09155K	鉄製品(棒状)	40×20×14	6.5	錆化(△)	○	○	○				
KYS-51				鋳造剥片様遺物	—	—	なし	○	○	○		*4点調査			
KYS-52				粒状滓	—	—	なし	○	○	○		*3点調査			
KYS-53				柳形鋳治滓	38×32×18	35.2	なし	○	○	○					
KYS-54				09495K	青銅製品	14×7×2	0.9	L(●)	○	○	○				
KYS-55				♯ 52質滓	10×9×8	0.9	なし	○	○	○		*最大破片を用いた			
KYS-56	鉄片	—	—	なし	○	○	○								
KYS-57	鉄片	—	—	なし	○	○	○		*5点調査						
KYS-58	09795K	♯ 52質滓	16c前半	32×30×12	10.6	なし	○	○	○						
KYS-59	09925K	砂鉄塊結塊?		14×12×5	0.5	なし	○	○	○		*小礫の可能性あり				
KYS-60	♯ 52質滓	13×9×8		0.5	なし	○	○	○							

*顕微鏡観察後、調査試料を決定・実施

第7表 供試材の履歴と調査項目

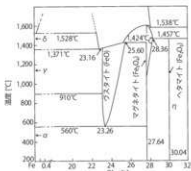
ごく小形で板状の青銅製品 (KYS-54) の調査を実施した。第 8 表にみられるように高錫青銅 (Cu: 84.6%, Sn: 23.2%) である。他の鉛や鉄、砒素などの元素はいずれもごく少量である (Pb: 0.10%, Fe: 0.14%, 砒素: 0.05%)。断面の顕微鏡観察結果を第 80 図に示す。白色部は α 相で、内部に焼なまし双晶が観察される。また暗色部は β マルテンサイト相と推測される。熱間で鍛造後に焼入れを施した高錫青銅製品^(註3)と判別がつく。

中世後半の銅 (青銅) 製品の組成について、国内模倣銭を対象とした研究では、銅と鉛の二つを主要元素とするもの、銅がほとんどを占めるもの、鉄・砒素・アンチモン割合が高いものなどの存在が判明している。国内では錫原料の入手が困難だったことの影響である^(註4)。こうした状況と 16 世紀末の年代を勘案するとこの青銅製品は国外輸入製品の一部破片の可能性も考えられよう。

(注)

(1) 粒状性は鍛冶作業において凹凸を持つ鉄素材が鍛冶炉の中で赤熱状態に加熱されて、突起部が溶け落ちて酸化され、表面張力の関係から球状化したり、赤熱鉄塊に酸化防止を目的に塗布された粘土汁が酸化膜と反応して、これが鍛打の折に飛散して球状化した微細な遺物である。

(2) 鍛造剥片とは鉄素材を大気中で加熱、鍛打したとき、表面酸化膜が剥離、飛散したものを指す。俗に鉄肌 (金肌) やスケールとも呼ばれる。鍛造剥片の酸化膜相は、外層は微厚のヘマタイト (Hematite: Fe_2O_3)、中間層マグネタイト (Magnetite: Fe_3O_4)、大部分は内層ウスタイト (Wustite: FeO) の 3 層から構成される。このうちのヘマタイト相は 1450°C を越えたと存在しなく、ウスタイト相は 570°C 以上で生成されるのは Fe-O 系平衡状態図から説明される^(註5)。



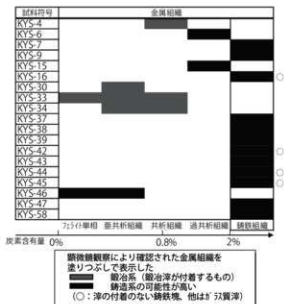
第 74 図 FeO 系平衡状態図、および鍛造剥片 3 層分離型模式図

鍛造剥片の酸化膜相は、外層は微厚のヘマタイト (Hematite: Fe_2O_3)、中間層マグネタイト (Magnetite: Fe_3O_4)、大部分は内層ウスタイト (Wustite: FeO) の 3 層から構成される。このうちのヘマタイト相は 1450°C を越えたと存在しなく、ウスタイト相は 570°C 以上で生成されるのは Fe-O 系平衡状態図から説明される^(註5)。

(3) 三船温尚・清水康二・長柄毅一編『アジアの高錫青銅器—製作技術と地域性—平成 22 年度日本学術振興会—国際研究集会』富山大学芸術文化学部 2010

(4) 佐々木稔「近世以前の青銅銭貨の原材料と化学組成」『わが国における銭貨生産—出土銭貨研究会 第 4 回大会発表要旨—』出土銭貨研究会 1997

(5) 森岡進ら『鉄鋼腐食科学』『鉄鋼工学講座』11 朝倉書店 1975



第 73 図 清洲城下町遺跡出土鉄塊系遺物・含鉄鉄滓の断面金属組織観察結果



符号	遺構名	遺物名称	全鉄分 (Total Fe)	金属鉄 (Metallic Fe)	酸化 第1鉄 (FeO)	酸化 第2鉄 (Fe ₂ O ₃)	二酸化 珪素 (SiO ₂)	酸化珪 酸 (Al ₂ O ₃)	酸化加 納 (CaO)	酸化マ グネ (MgO)	酸化チ タン (TiO ₂)	酸化ナ トリウム (Na ₂ O)	酸化マ グネ (MnO)
KYS-1		椀形鋳治滓	52.39	0.08	42.80	27.23	17.84	2.90	0.62	0.27	1.49	0.35	0.05
KYS-2		鋳治滓 (流動状)	39.37	0.17	40.36	11.19	32.29	5.97	1.96	0.64	2.99	0.74	0.08
KYS-3	1915K	椀形鋳治滓	49.48	0.24	51.46	13.21	23.37	3.97	0.83	0.30	1.52	0.46	0.05
KYS-7		ｶﾞｽ質滓	20.06	0.30	3.39	21.15	51.38	8.01	1.35	0.40	2.43	1.09	0.08
KYS-8		ｶﾞｽ質滓	4.07	0.59	1.22	3.62	64.10	12.68	5.15	1.21	6.24	1.82	0.18
KYS-11		椀形鋳治滓	39.21	0.13	34.55	17.48	34.93	4.12	0.98	0.37	1.80	0.65	0.07
KYS-12	01975K	椀形鋳治滓	44.54	0.09	43.97	14.69	28.87	3.66	0.89	0.31	1.52	0.50	0.07
KYS-17		椀形鋳治滓 (ｶﾞｽ質)	11.65	0.40	7.19	8.09	58.86	10.08	2.85	0.67	5.33	1.79	0.13
KYS-21	04525K	椀形鋳治滓 (含鉄)	46.29	0.08	9.27	55.77	16.30	3.27	0.59	0.21	1.10	0.38	0.05
KYS-25		椀形鋳治滓	48.28	0.04	50.13	13.26	24.56	3.01	1.07	0.35	1.37	0.48	0.08
KYS-26		椀形鋳治滓	57.27	0.05	54.32	21.44	14.41	2.07	0.43	0.24	0.90	0.57	0.05
KYS-29	05135D	椀形鋳治滓	46.22	0.05	47.70	13.00	28.16	4.22	0.77	0.29	1.48	0.66	0.04
KYS-30		椀形鋳治滓	47.66	0.47	52.24	9.41	25.37	5.05	1.66	0.48	1.82	0.46	0.07
KYS-33		椀形鋳治滓	31.94	0.32	29.88	12.00	39.88	5.34	3.21	0.54	3.26	0.67	0.11
KYS-34	07675K	椀形鋳治滓 (含鉄)	44.07	0.18	21.56	38.79	20.02	3.63	0.68	0.30	1.52	0.34	0.07
KYS-35		椀形鋳治滓	60.48	0.05	43.77	37.76	14.03	2.31	0.85	0.30	0.87	0.37	0.06
KYS-36	08105K	椀形鋳治滓	39.00	0.08	22.41	30.74	33.59	5.75	1.05	0.40	1.86	0.97	0.05
KYS-37		ｶﾞｽ質滓 (含鉄)	10.53	0.57	3.16	10.73	64.23	11.42	1.74	0.48	3.27	1.39	0.12
KYS-39	08105X	ｶﾞｽ質滓	13.69	0.15	1.87	17.28	50.00	9.36	4.62	0.85	2.61	1.37	0.21
KYS-43		ｶﾞｽ質滓 (含鉄)	16.69	0.17	3.47	19.76	44.13	9.17	8.29	1.33	2.29	0.96	0.22
KYS-46	08245K	ｶﾞｽ質滓	27.97	0.38	4.70	34.22	35.18	6.46	0.84	0.31	2.69	0.82	0.26
KYS-49	09155K	椀形鋳治滓	47.70	0.03	51.81	10.58	25.50	3.99	1.42	0.48	1.85	0.65	0.08
KYS-53	09495K	椀形鋳治滓	62.38	0.02	59.85	22.65	11.77	2.18	1.13	0.27	0.92	0.27	0.04
KYS-58	09795K	ｶﾞｽ質滓	6.59	0.23	1.22	7.74	66.17	13.02	2.91	0.71	3.40	1.30	0.16

符号	遺構名	遺物名称	二酸化 珪素 (TiO ₂)	酸化 加 (Cr ₂ O ₃)	硫黄 (S)	五酸化 磷 (P ₂ O ₅)	炭素 (C)	バツナ (V)	銅 (Cu)	二酸化 チタン (ZrO ₂)	造滓 成分 Total Fe	造滓 成分 Total Fe	TiO ₂
KYS-1		椀形鋳治滓	0.09	0.02	0.030	0.20	0.24	0.01	<0.01	<0.01	23.47	0.448	0.002
KYS-2		鋳治滓 (流動状)	0.20	0.02	0.018	0.39	0.05	<0.01	0.01	0.01	44.59	1.133	0.005
KYS-3	1915K	椀形鋳治滓	0.15	0.02	0.024	0.18	0.23	<0.01	0.01	<0.01	30.45	0.615	0.003
KYS-7		ｶﾞｽ質滓	0.24	0.02	0.040	0.20	0.60	0.01	0.01	0.01	64.66	3.223	0.012
KYS-8		ｶﾞｽ質滓	0.42	0.02	0.014	0.11	0.05	<0.01	0.01	0.01	91.20	22.408	0.103
KYS-11		椀形鋳治滓	0.12	0.03	0.042	0.33	0.09	0.01	<0.01	<0.01	42.85	1.093	0.003
KYS-12	01975K	椀形鋳治滓	0.11	0.02	0.032	0.30	0.12	<0.01	0.01	<0.01	35.75	0.803	0.002
KYS-17		椀形鋳治滓 (ｶﾞｽ質)	0.20	0.04	0.018	0.56	0.10	<0.01	0.01	<0.01	79.58	6.831	0.017
KYS-21	04525K	椀形鋳治滓 (含鉄)	0.10	0.02	0.13	0.90	0.51	<0.01	0.01	0.01	21.85	0.472	0.002
KYS-25		椀形鋳治滓	0.09	0.02	0.020	0.72	0.21	<0.01	0.01	<0.01	30.84	0.639	0.002
KYS-26		椀形鋳治滓	0.08	0.02	0.020	0.76	0.13	<0.01	0.01	<0.01	18.62	0.325	0.001
KYS-29	05135D	椀形鋳治滓	0.20	0.03	0.026	0.30	0.07	0.02	<0.01	0.02	35.58	0.770	0.004
KYS-30		椀形鋳治滓	0.22	0.03	0.014	0.38	0.09	0.01	<0.01	0.02	34.84	0.731	0.005
KYS-33		椀形鋳治滓	0.12	0.03	-	1.11	0.15	0.01	<0.01	0.02	52.90	1.656	0.004
KYS-34	07675K	椀形鋳治滓 (含鉄)	0.12	0.02	0.052	1.33	0.35	0.01	0.01	<0.01	26.49	0.601	0.003
KYS-35		椀形鋳治滓	0.09	0.04	0.016	0.19	0.03	0.01	<0.01	0.02	18.73	0.310	0.001
KYS-36	08105K	椀形鋳治滓	0.19	0.03	0.022	0.42	0.16	0.01	<0.01	0.02	43.62	1.118	0.005
KYS-37		ｶﾞｽ質滓 (含鉄)	0.39	0.03	0.012	0.20	0.20	0.02	<0.01	0.04	82.53	7.838	0.037
KYS-39	08105X	ｶﾞｽ質滓	1.15	0.03	0.020	0.82	2.88	0.04	<0.01	0.05	68.81	5.026	0.084
KYS-43		ｶﾞｽ質滓 (含鉄)	0.42	0.02	0.046	0.58	1.93	0.02	<0.01	0.02	66.17	3.965	0.025
KYS-46	08245K	ｶﾞｽ質滓	0.21	0.03	-	0.82	0.56	0.01	0.02	0.02	46.30	1.655	0.008
KYS-49	09155K	椀形鋳治滓	0.18	0.03	0.022	0.41	0.06	0.01	<0.01	0.02	33.89	0.710	0.004
KYS-53	09495K	椀形鋳治滓	0.06	0.03	0.012	0.25	0.06	0.01	<0.01	0.01	16.54	0.265	0.001
KYS-58	09795K	ｶﾞｽ質滓	0.55	0.03	-	0.21	0.13	0.01	<0.01	0.03	87.51	13.279	0.083

符号	遺構名	遺物名称	炭素 (C)	珪素 (Si)	マンガン (Mn)	磷 (P)	硫黄 (S)	銅 (Cu)	加 (Cr)	チタン (Ti)	バツナ (V)	砒素 (As)	鉛 (Co)
KYS-16	02805K	鉄塊系遺物	3.06	0.02	<0.01	0.070	0.048	0.005	0.004	<0.001	0.002	0.012	0.009

符号	遺構名	遺物名称	銅 (Cu)	錫 (Sn)	鉛 (Pb)	鉄 (Fe)	砒素 (As)	マンガン (Mn)	加 (Co)	銀 (Ag)
KYS-54	09495K	青銅製品	84.6	23.2	0.10	0.14	0.05	0.05	0.01	0.07

第8表 供試材の化学組成

符号	遺構名	遺物名称	顕微鏡組織	化学組成 (%)							所見			
				Total	塩基性		造洋			Cu				
				Fe	Fe2O3	成分	SiO2	V	MnO			成分		
KYS-1	1915K	焼形鍛冶洋	洋部-W-F、表面鍛造剥片付着	52.39	27.23	0.89	0.09	0.01	0.05	23.47	<0.01	鍛練鍛冶洋		
KYS-2		鍛冶洋（流動状）	洋部-M-F	39.37	11.19	2.60	0.20	<0.01	0.08	44.59	0.01	鍛練鍛冶洋		
KYS-3		焼形鍛冶洋	洋部-W-F、表面粒状洋（M）・鍛造剥片付着	49.48	13.21	1.13	0.15	<0.01	0.05	30.45	0.01	鍛練鍛冶洋		
KYS-4		鍛冶洋	δ'β'質洋、洋部-W、微小金属鉄粒共析組織	-	-	-	-	-	-	-	-	-	鍛練鍛冶洋（材料粘土溶融物δ'β'質洋の割合が高い）	
KYS-5		鍛造鉄器片	鍛造鉄器片・炭素鉄組織痕跡、鍛造剥片付着	-	-	-	-	-	-	-	-	-	鍛造鉄器破片（鍛冶原料鉄か）	
KYS-6		N/F	δ'β'質洋（如壁溶融物）	δ'β'質洋（石英・長石類混在）、微小金属鉄・過共析組織	-	-	-	-	-	-	-	-	-	如壁溶融物（δ'β'質洋）、鉄鑄物製作に伴う遺物の可能性がある
KYS-7			δ'β'質洋	δ'β'質洋、金属鉄・錳化鉄粒・過共析組成白錆組織	20.06	21.15	1.75	0.24	0.01	0.08	64.66	0.01	如壁溶融物（δ'β'質洋）、鉄鑄物製作に伴う遺物の可能性がある	
KYS-8			δ'β'質洋	δ'β'質洋（石英・長石類混在）、微小金属鉄	4.07	3.62	6.36	0.42	<0.01	0.18	91.20	0.01	如壁溶融物（δ'β'質洋）、鉄鑄物製作に伴う遺物の可能性がある	
KYS-9			α'β'質洋	δ'β'質洋、錳化鉄粒・わずかに鉄組織痕跡	-	-	-	-	-	-	-	-	-	如壁溶融物（δ'β'質洋）、鉄鑄物製作に伴う遺物の可能性がある
KYS-10			非口	δ'β'質洋（M）、被熱粘土	-	-	-	-	-	-	-	-	-	鉄鑄物製作に関連する材料の小破片の可能性あり
KYS-11	焼形鍛冶洋		洋部-W-F、微小錳化鉄	39.21	17.48	1.35	0.12	0.01	0.07	42.85	<0.01	鍛練鍛冶洋		
KYS-12	焼形鍛冶洋		洋部-W-F、木炭硬片・正稜樹材	44.54	14.69	1.20	0.11	<0.01	0.07	35.75	0.01	鍛練鍛冶洋		
KYS-13	01975K		鍛造剥片様遺物	α鍛造剥片（He-M-W）、1.3.5-木炭、2.錳化鉄（わずかに錳鉄）	-	-	-	-	-	-	-	-	-	熱間での鍛冶作業に伴う微細遺物（一部鍛造鉄器片を含む）
KYS-14			粒状洋？	1.熱熱粘土、2.粒状洋（W）	-	-	-	-	-	-	-	-	-	熱間での鍛冶作業に伴う微細遺物（一部鍛造鉄器片を含む）
KYS-15	02765K		非口	δ'β'質洋、金属鉄・錳化鉄粒・過共析組織	-	-	-	-	-	-	-	-	-	鉄鑄物製作用いた溶融炉の材料破片の可能性が考えられる
KYS-16	02805K	鉄塊系遺物	金属鉄部・炭素鉄組織	-	-	-	-	-	-	-	-	-	ままとりの良い錳鉄塊（鉄）、鍛造・鍛冶原料双方の可能性がある	
KYS-17		焼形鍛冶洋？（δ'β'質洋）	洋部-W・M・b-F、被熱粘土～δ'β'質洋	11.65	8.09	3.52	0.20	<0.01	0.13	79.58	0.01	鍛練鍛冶洋（材料粘土溶融物δ'β'質洋の割合が高い）		
KYS-18		鍛造剥片様遺物	1.3.4.5.錳化鉄片（一部錳鉄組織残存）、2.鍛冶洋片（W）	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2.熱間での鍛冶加工に伴う微細遺物（鍛練鍛冶洋）、他は錳化鉄片	
KYS-19		粒状洋？	1.錳化鉄粒？金属組織痕跡不明瞭、2.岩石片	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	錳化鉄塊の脱炭に伴う微細遺物の可能性がある
KYS-20		03945K	非口	付着洋-M、δ'β'質洋（石英・長石類混在）、微小金属鉄	-	-	-	-	-	-	-	-	-	鉄鑄物製作用いた溶融炉の非口破片
KYS-21	04525K	焼形鍛冶洋（含鉄）	洋部-W、錳化鉄・金属組織痕跡不明瞭、鍛造剥片	46.29	55.77	0.80	0.10	<0.01	0.05	21.85	0.01	鍛練鍛冶洋		
KYS-22	05085P	鉄塊系遺物	錳化鉄部・金属組織痕跡不明瞭	-	-	-	-	-	-	-	-	-	鍛冶作業中に取り残された、ごく小形の金属粒	
KYS-23 (1)	05095P	鍛造剥片	1.2.錳化鉄片（1.むずみ錳鉄組織、2.金属組織痕跡不明瞭）	-	-	-	-	-	-	-	-	-	錳化鉄片（鍛冶関連遺物ではなく、廃棄後の剥離片の可能性が高い）	
KYS-23 (2)		種遺物	1.鍛冶洋片（He-W）、2.鍛造剥片（He-M-W）、3.粘土塊	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1.2.熱間での鍛冶作業に伴う微細遺物	
KYS-23 (3)		（粒状洋？）	錳化鉄片・金属組織痕跡不明瞭	-	-	-	-	-	-	-	-	-	錳化鉄片（鍛冶関連遺物ではなく、廃棄後の剥離片の可能性が高い）	
KYS-23 (4)			錳化鉄片・金属組織痕跡不明瞭	-	-	-	-	-	-	-	-	-	錳化鉄片（鍛冶関連遺物ではなく、廃棄後の剥離片の可能性が高い）	
KYS-23 (5)			1.鍛造剥片（He-M-W）、2.3.錳化鉄片（2.むずみ錳鉄）	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1.熱間での鍛冶作業に伴う微細遺物
KYS-23 (6)			1.2.錳化鉄片（金属組織痕跡不明瞭）	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	錳化鉄片（鍛冶関連遺物ではなく、廃棄後の剥離片の可能性が高い）
KYS-24	05055K	鍛冶洋（流動状）	洋部-W-F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	鍛練鍛冶洋	
KYS-25	05135D	焼形鍛冶洋	洋部-W-F、微小金属鉄・錳化鉄粒	48.28	13.26	1.42	0.09	<0.01	0.08	30.84	0.01	鍛練鍛冶洋		
KYS-26		焼形鍛冶洋	洋部-W-F、微小金属鉄粒	57.27	21.44	0.67	0.08	<0.01	0.05	18.62	0.01	鍛練鍛冶洋		
KYS-27		鍛冶洋	洋部-W-F、微小金属鉄粒、鍛造剥片付着	-	-	-	-	-	-	-	-	-	鍛練鍛冶洋	
KYS-28	05285E	鉄製品	錳化鉄・金属組織痕跡不明瞭、屈伸状非金属介在物剥落	-	-	-	-	-	-	-	-	-	折返し鍛練後、鍛冶成形された鍛造品	
KYS-29		焼形鍛冶洋	洋部-W-F、微小金属鉄	46.22	13.00	1.06	0.20	0.02	0.04	35.58	<0.01	鍛練鍛冶洋		
KYS-30		焼形鍛冶洋	洋部-W-F、錳化鉄部・共析組織痕跡	47.66	9.41	2.14	0.22	0.01	0.07	34.84	<0.01	鍛練鍛冶洋		

番号	遺構名	遺物名称	顕微鏡組織	化学組成 (%)								所見		
				Total	塩基性			造形		Cu				
				Fe	Fe2O3	成分	TiO2	V	MnO		成分			
KYS-31	0631SE	鉄製品 (釘)	金属鉄部のみ半相～亜共析組織、介在物:W+非晶質貝殻	-	-	-	-	-	-	-	-	-	折返し鍛錬後、鍛打成形された鍛造品	
KYS-32		鉄製品 (棒状)	金属鉄部～共析組織、介在物:非晶質貝殻	-	-	-	-	-	-	-	-	-	折返し鍛錬後、鍛打成形された鍛造品	
KYS-33	0767SK	椀形鍛冶洋	浮部F、金属鉄部～共析組織～共析組織	31.94	12.00	3.75	0.12	0.01	0.11	52.90	-0.01	-	鍛錬鍛冶洋	
KYS-34		椀形鍛冶洋 (含鉄)	浮部W-F、金属鉄部～共析組織 (非金属介在物:木炭)	44.07	38.79	0.98	0.12	0.01	0.07	26.49	0.01	-	鍛錬鍛冶洋 (鉄素材の始発原料砂鉄)	
KYS-35		椀形鍛冶洋	浮部W-F	60.48	37.76	1.15	0.09	0.01	0.06	18.73	-0.01	-	鍛錬鍛冶洋	
KYS-36		椀形鍛冶洋	浮部W-F、微小金属鉄、木炭広葉樹散孔材	39.00	30.74	1.45	0.19	0.01	0.05	43.62	-0.01	-	鍛錬鍛冶洋	
KYS-37	0810SK	釘	釘	釘	釘	釘	釘	釘	釘	釘	釘	釘	釘	釘
KYS-38		釘	釘	釘	釘	釘	釘	釘	釘	釘	釘	釘	釘	釘
KYS-39		釘	釘	釘	釘	釘	釘	釘	釘	釘	釘	釘	釘	釘
KYS-40		鉄製品 (釘)	鍛化鉄～共析組織粗筋	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	折返し鍛錬後、鍛打成形された鍛造品
KYS-41		鉄製品 (釘)	鍛化鉄～共析組織粗筋	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	折返し鍛錬後、鍛打成形された鍛造品
KYS-42		鉄塊系遺物	金属鉄部塊鉄組織	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	まとまりの良い塊鉄塊 (鉄)、鍛造原料のまたは鍛造関連遺物の可能性がある
KYS-43		釘	釘	釘	釘	釘	釘	釘	釘	釘	釘	釘	釘	釘
KYS-44		鉄塊系遺物	金属鉄部～共析組織～白鉄組織	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	まとまりの良い塊鉄塊 (鉄)、鍛造原料のまたは鍛造関連遺物の可能性がある
KYS-45	鉄塊系遺物	金属鉄部～共析組織～白鉄組織	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	まとまりの良い塊鉄塊 (鉄)、鍛造原料のまたは鍛造関連遺物の可能性がある	
KYS-46	0824SK	釘	釘	釘	釘	釘	釘	釘	釘	釘	釘	釘	釘	
KYS-47		釘	釘	釘	釘	釘	釘	釘	釘	釘	釘	釘	釘	
KYS-48	0915SK	鍛造銅片様遺物	1.釘	釘	釘	釘	釘	釘	釘	釘	釘	釘	釘	
KYS-49		椀形鍛冶洋	浮部W-F、木炭破片広葉樹散孔材、釘	47.70	10.58	1.90	0.18	0.01	0.08	33.89	-0.01	-	鍛錬鍛冶洋	
KYS-50	0915SK	鉄製品 (棒状)	鍛化鉄～金属組織粗筋不明瞭	-	-	-	-	-	-	-	-	-	折返し鍛錬後、鍛打成形された鍛造品	
KYS-51		鍛造銅片様遺物	1-3.鍛化鉄片 (亜共析組織粗筋)、2.鍛冶洋片 (W)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2.熱間での鍛打作業に伴う微細遺物 (鍛錬鍛冶洋)、他は鍛化鉄片	
KYS-52		粒状洋	1-3.W、2-W-F	-	-	-	-	-	-	-	-	-	熱間での鍛打加工に伴う微細遺物 (粒状洋)	
KYS-53	0949SK	椀形鍛冶洋	浮部W-F、微小金属鉄粒	62.38	22.65	1.40	0.06	0.01	0.04	16.54	-0.01	-	鍛錬鍛冶洋	
KYS-54		青銅製品	金属組織 a相 (焼きままし双晶) + b相 (75%)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	高銅青銅製品 (熱間鍛造後焼入れ) の小破片	
KYS-55		釘	釘	釘	釘	釘	釘	釘	釘	釘	釘	釘	釘	
KYS-56		鉄片	鍛化鉄 (1-2.5.わずらみ鉄鉄、3-4.5.鍛鉄組織粗筋)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	鍛化鉄片 (鍛冶関連遺物ではなく、廃棄後の銅片の可能性が高い)
KYS-57	0979SK	鉄片	鍛化鉄 (1.白鉄組織粗筋、2.～4.金属組織粗筋不明瞭)、5.鍛冶洋片 (W)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	鍛化鉄片、5.熱間での鍛打作業に伴う微細遺物 (鍛錬鍛冶洋)	
KYS-58		釘	釘	釘	釘	釘	釘	釘	釘	釘	釘	釘	釘	
KYS-59	0992SK	砂鉄塊結塊?	塊鉄砂鉄 (分解・浮化進行)、微小金属鉄粒	-	-	-	-	-	-	-	-	-	砂鉄塊結塊に伴う関連遺物か (鍛冶・鍛造原料の混入品の可能性が高い)	
KYS-60		釘	釘	釘	釘	釘	釘	釘	釘	釘	釘	釘	釘	

W:Wustite (FeO)、F: Fayalite (2FeO・SiO2)、M:Magnetite (Fe3O4)、Is: Iscorite (3FeO・Fe2O3・SiO10)、He: Hematite (Fe2O3)

第 10 表 出土遺物の調査結果のまとめ (2)

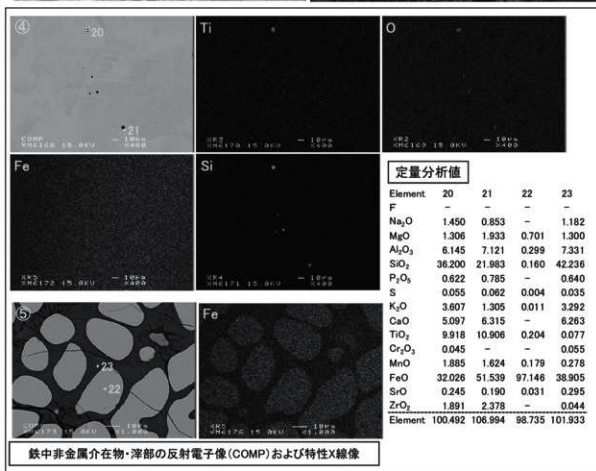
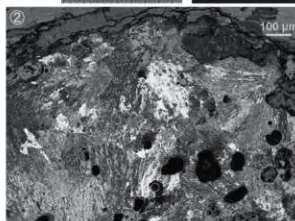
KYS-34

椀形鉄冶滓(含鉄)

①マクロ組織

②③滓部:カスタイト・ファキライト、金属鉄部、ナイトルetch

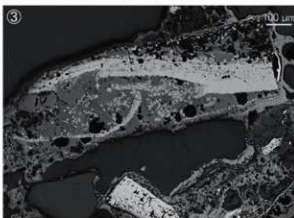
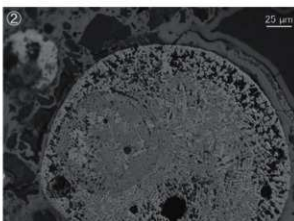
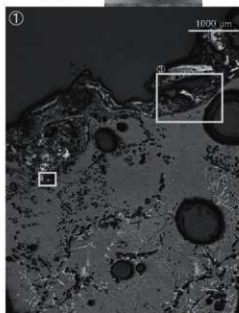
④共析組織、亜共析組



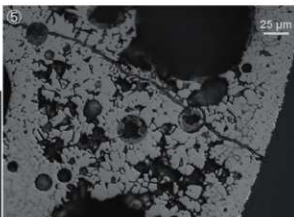
鉄中非金属介在物・滓部の反射電子像(COMP)および特性X線像

第 75 図 椀形鉄冶滓の顕微鏡組織・EPMA 調査結果

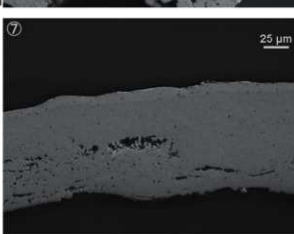
KYS-3
 梲形鍛冶滓
 ①滓部:カスタイト・ファヤライト
 ②表面粒状滓附着、マグネ
 タイト晶出。
 ③滓部表層:鍛造剥片分



KYS-52-3
 粒状滓
 ④マクロ組織
 ⑤滓部:カスタイト

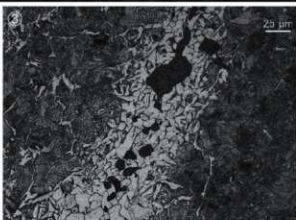


KYS-23(5)-1
 鍛造剥片
 ⑥マクロ組織
 ⑦明白色層:ヘマタイト
 灰褐色層:マグネタイト
 灰色層:カスタイト

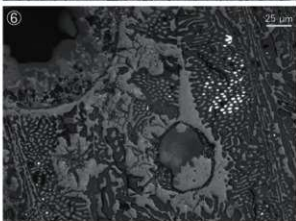
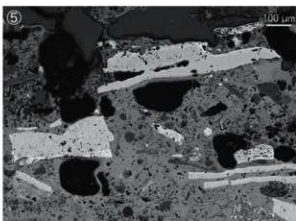


第 76 図 梲形鍛冶滓・粒状滓の顕微鏡組織

KYS-31
鉄製品(釘)
①マクロ組織
②③フェライト単相～亜共析組織

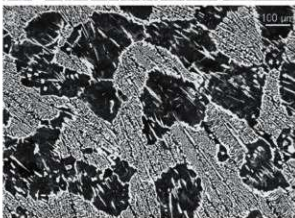


KYS-5
鉄製品(鑄造鉄器片)
④マクロ組織
⑤表面付着土砂中の鍛造剥片
⑥錆化鉄部拡大鑄鉄

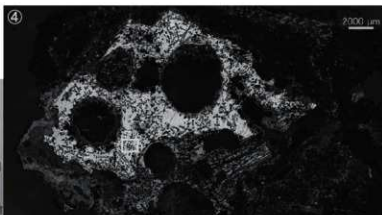


第 77 図 鉄製品(釘・鑄造鉄器片)の顕微鏡組織

KYS-16
 鉄塊系遺物
 ①マクロ組織、ナイタルetch
 ②斑鉄組織
 ③ねずみ鑄鉄組織
 ④亜共晶組成白鑄鉄組



KYS-44
 鉄塊系遺物
 ④マクロ組織
 ⑤⑥亜共晶組成白鑄鉄組織

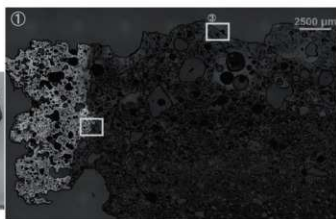
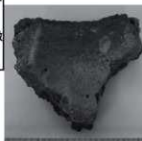


第 78 図 鉄塊系遺物の顕微鏡組織

KYS-20

羽口 (大口径)

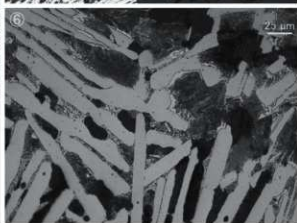
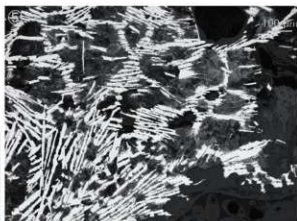
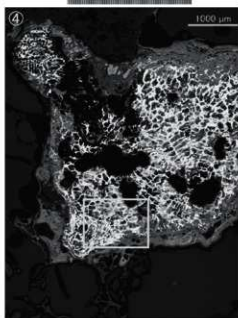
- ①マクロ組織
- ②先端付着滓部拡大マク
ネット
- ③外面表層ガラス質滓、微
小金属鉄粒散在



KYS-37

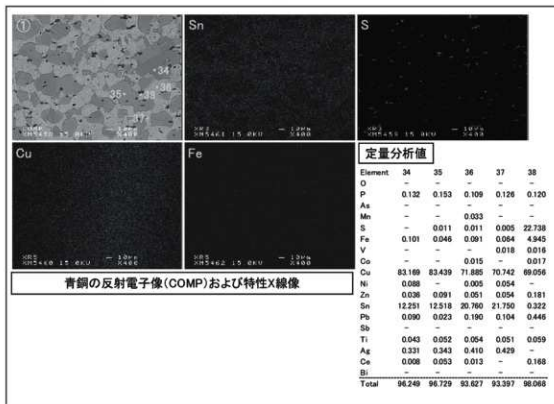
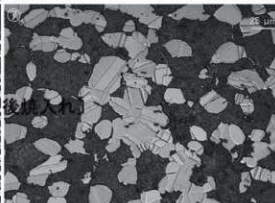
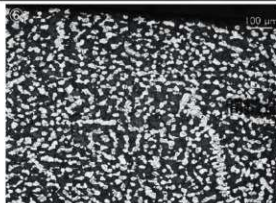
ガラス質滓 (含鉄)

- ④暗色部ガラス質滓、被
熱砂粒散在、明色部金属
鉄粒、ナイタルetch 亜共晶
組成白鑄鉄



第 79 図 羽口・ガラス質滓 (含鉄) の顕微鏡組織

KYS-54
青銅製品
④マクロ組織、
⑤～⑦明色部:α相(焼き
なまし双晶)、暗色部:β'
マルテンサイト、〔高錫青銅熱
間鍛造後焼入れ〕



第 80 図 青銅製品の顕微鏡組織・EPMA 調査結果

第5章 考察・総括

第1節 城下町期における土師器の編年

まず、始めに、土師器皿類と鍋類の変遷を把握し、今回の調査区における城下町期の段階区分を行う。本遺跡における城下町期の土師器編年についてはすでにいくつかの考察がなされているが、それらの土台となる編年案は『清洲城下町遺跡Ⅴ』に掲載された「清須城下町の遺物様相(鈴木1995a)」である。ここでも、これをベースに記述を進めたい。

(1) 土師器皿のこれまでの編年

清洲城下町遺跡における土師器皿は、底部に回転系切り痕を持つロクロ調整土師器皿と回転系切り痕を持たない非ロクロ調整土師器皿に大別される。ロクロ調整土師器皿は、大形で口縁部が外反するA類、大形で口縁部が直線状に開くB類、大形で口縁部が内彎するC類、小形で口縁部が外反するD類、B類に類似し口縁端部がつままれるE類、小形で口縁部が直線状に開くF類、器高が著しく低いG類に細分される。非ロクロ調整土師器皿は、体部を上方につまみ上げ横ナデ調整されたA類、体部外面のみを上方につまみ上げ横ナデ調整されたB類、体部を指オサエで上方につまみ上げたC類、体部の横ナデ調整が無く底部と体部の境界が不明瞭なD類、大形で口縁部が肥厚するE類に細分される。

これまで清須の土師器皿の様相は以下の3期に大別されてきた。清須Ⅰ期は、ロクロ調整土師器皿A類・B類・D類・F類と非ロクロ調整土師器皿A類・B類・C類・E類で構成される。清須Ⅱ期は、ロクロ調整土師器皿A類・B類・D類がなくなり新たにC類・E類が出現する。非ロクロ調整土師器皿はA類・B類の他にD類が加わる。清須Ⅲ期は、ロクロ調整土師器皿C類・E類・F類・G類と非ロクロ調整土師器皿D類で構成される。

概ね、清須Ⅰ期はロクロ調整土師器皿A類・B類・非ロクロ調整土師器皿A類が主体、清須Ⅱ期はロクロ調整土師器皿C類・E類・非ロクロ調整土師器皿D類が主体となり、清須Ⅲ期はその過渡的な状況を呈しているとまとめることができる。

(2) 土師器皿の分類

今回の調査では、主にロクロ調整土師器皿B類・

C類・E類・非ロクロ調整土師器皿A類・D類が出土した。これを細分する。

ロクロ調整土師器皿C類は、粘土柱からの切り離しに伴う突出部(底部と体部の境界に稜線ができる)が明瞭に残存し口縁部にかけてやや開く1類(340)、切り離しに伴う突出部が明瞭に残存し口縁部に向けてやや直立する2類(97)、切り離しに伴う突出部がやや不明瞭になるが口縁部はまだ逆ハの字状に開く3類(322・640)、切り離しに伴う突出部がやや不明瞭になり口縁部に向けてやや直立する4類(205)、底部がやや丸底風で体部が緩く屈曲して口縁部に向けてやや直立する5類(136・123)に細分される。

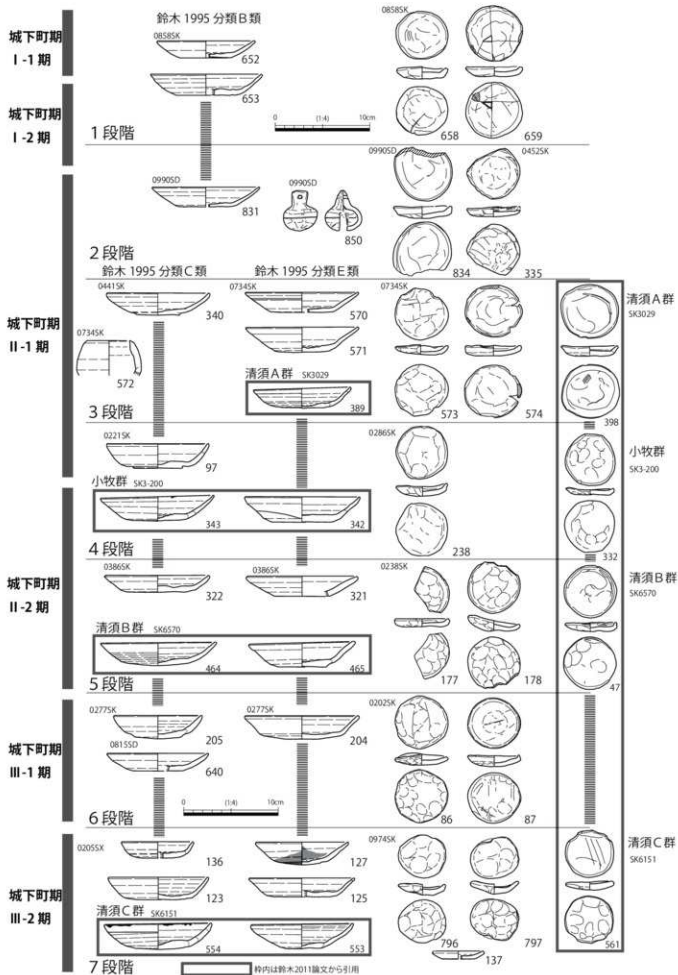
ロクロ調整土師器皿E類は、体部中位で外折し口縁部にかけてやや開く1類(570・571)、体部やや上位で短く外折し口縁部にかけてやや開く2類(321)、底部から体部にかけて内折し口縁部にかけて外反する3類(204・125)、底部がやや丸底風で口縁部にかけて外反する4類(127)に細分される。

非ロクロ調整土師器皿については、早野浩二の分類に依拠しながら下記のように区分した。A類は口縁部を指による押圧で立ち上げヨコナデを施して口縁部と底部の境界が明瞭となるもので、5類に細分される。B類はヨコナデによって口縁部を彎曲させるように立ち上げ口縁部と底部の境界は不明瞭となるもので、4類に細分される。C類は明確なヨコナデを施さないものである。口縁部と体部(底部)の境界はみられない。なお、分類の詳細は『清洲城下町遺跡Ⅴ』(早野編2005)を参照されたい。

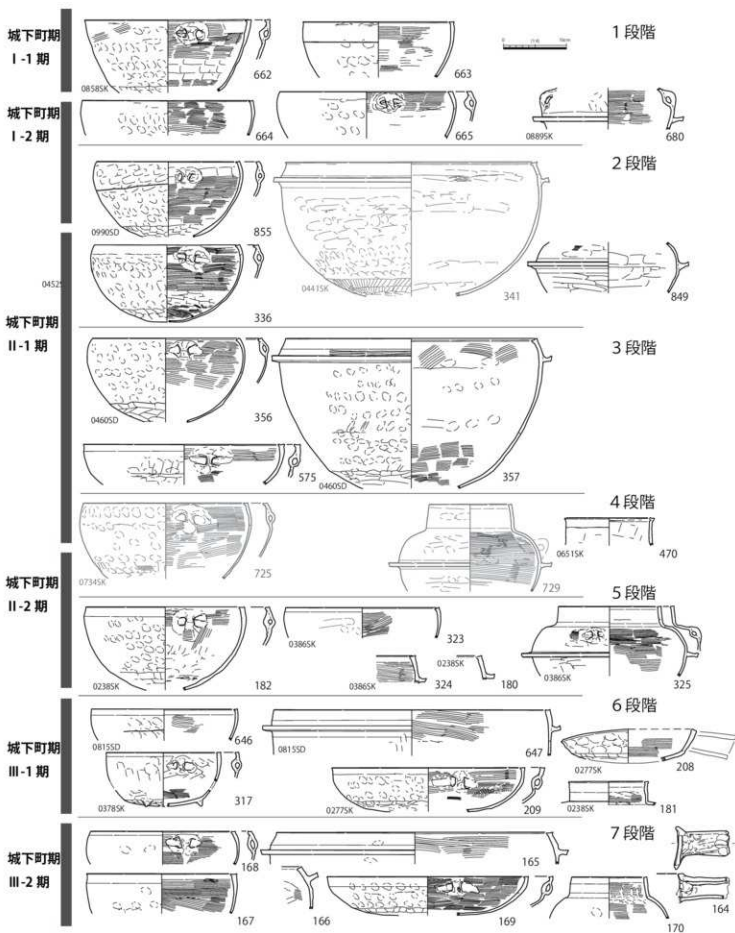
(3) 土師器鍋類の分類

今回の調査では、主に半球形内耳鍋・羽付鍋・焙烙・釜が出土した。このうち半球形内耳鍋を細分する。

内耳鍋1類は、体部が直線的に開いて口縁部に至る1類(662・663)、口縁部が直線的にわずかに内傾する2類(664・665)、口縁部が内彎気味にわずかに内傾し底部のヘラケズリの範囲がやや狭い3類(855・336)、口縁部が内彎気味に内傾し底部のヘラケズリの範囲がやや広い4類(356)、口縁部が肥厚して直立気味になる5類(182・323)、底部と体部が緩やかに直角気味折れて口縁部に至る6類(317)に区分できる。



第 81 図 今回の出土資料による城下町期の土師器皿の変遷図



第 82 図 今回の出土資料による城下町期の土師器鍋類の変遷図

(4) 今回出土した土師器の段階区分

上記の分類に基づき検討した結果、今回の調査で出土した土師器は下記の7段階に区分できる(第81・82図)。

1段階: ロクロ調整皿B類と非ロクロ調整皿A1・A2類と内耳鍋1類と2類が伴う段階である。従来の城下町期I期に対応し、内耳鍋1類(Ⅰ-1期)と2類(Ⅰ-2期)で2段階に細分は可能と思われるが、今回は遺構単位での区分はできなかった。

2段階: ロクロ調整皿B類と非ロクロ調整皿A2・A3類と内耳鍋3類が伴う段階である。皿類は概ね城下町期Ⅱ-1期に近い様相を呈するが、内耳鍋3類は城下町期Ⅰ-2期に位置付けたい資料である。

3段階: ロクロ調整皿C1類とE1類と非ロクロ調整皿A2～A4類と内耳鍋4類が伴う段階である。概ね従来の城下町期Ⅱ-1期の様相を呈する。羽付鍋も内耳鍋と同様に口縁部が内彎気味に内傾することが判明し、焙烙も伴う可能性が考えられるが、はっきりとはしていない。

4段階: ロクロ調整皿C2類と非ロクロ調整皿B1～B2類が伴う段階として設定した。資料は少なくとも3段階との識別は難しい上に鍋類の様相も不明である。非ロクロ調整皿A類が目立たず非ロクロ調整皿B類が優勢を示すことも変化の様相と考えたが、そもそもA類とB類は系統差と認識されており、問題は多い。概ね従来の城下町期Ⅱ-1期からⅡ-2期の様相を呈するとみられる。

5段階: ロクロ調整皿C3類とE2類と非ロクロ調整皿B2～B4類と内耳鍋5類が伴う段階である。概ね従来の城下町期Ⅱ-2期の様相を呈する。羽付釜は紐状の外耳を有し内傾する口縁部を持つものが伴っている。

6段階: ロクロ調整皿C4類とE3類と非ロクロ調整皿B2～B4類と内耳鍋5類と6類が伴う段階である。概ね従来の城下町期Ⅲ-1期の様相を呈する。火熨斗も確認された。

7段階: ロクロ調整皿C5類とE4類と非ロクロ調整皿C類と内耳鍋5類と6類が伴う段階である。概ね従来の城下町期Ⅲ-2期の様相を呈する。

(5) 小結

今回出土した資料を用いて土師器の段階区分を試みたが、従来の編年案を大きく変更するもので

はない。ただし、従来から城下町期Ⅱ期の土器様相は良好な資料に恵まれず、また城下町期Ⅰ期からⅢ期へ向かう過渡期的な様相を呈することもあって、その内容は不明瞭であった。今回の資料は、少なからずその隙間を埋めるものであり、城下町期Ⅱ期の土器様相を多少なりとも具体的な明らかになってきた意義は大きい。ここでの分析は局所的なものに留まってしまったが、今後は総合的な土器様相の把握を試みる必要があるだろう。

第2節 城下町期の瀬戸・美濃窯産陶器(1) はじめに(概要)

次に、先の土師器による段階区分を踏まえ、城下町期の瀬戸・美濃窯産陶器について検討する。瀬戸・美濃窯産陶器に関しては、藤澤良祐の詳細な研究により精緻な編年案が提示されている。今回の整理作業に際しては、筆者が選別した全ての城下町期の瀬戸・美濃窯産陶器を、藤澤良祐が器種と時期を同定し、これを筆者が集計・分析した。同定作業については、鑑定をお願いした藤澤良祐の他、小山美紀をはじめとする愛知学院大学の大学院生と学生諸氏の多大な協力を得ている。ここに厚く感謝申し上げたい。

今回の調査で出土した城下町期の瀬戸・美濃窯産陶器は、接合前破片数で14881点、接合後破片数で13681点、口縁部計測法による個体数計算では8683/12(約723.6)点を数える。ここでは接合後破片数を中心に説明する。なお、同定結果の詳細は貼付CD-Rに掲載したので、参照されたい。

(2) 器種組成

確認された器種は釉薬の別も加えると全部で217器種を数え、これらを次の8器類に大別してみた(第11表)。結果、天目茶碗は2003点(約14.6%)、その他の碗473点(約3.5%)、小皿類2652点(約19.4%)、向付・盤類681点(約5.0%)、卸皿・播鉢点(約27.5%)、壺・瓶類1191点(約8.7%)、神仏具293点(約2.1%)、その他2624点(約19.2%)となる。これまでの調査事例と比較すると、小皿類が少ない傾向が認められる(鈴木2007)。ただし、今回の調査区に位置的にも時期的にも近い資料(IV 6570SK・IV 6151SK)などと比べると、非常に近似した数値(鈴木2007)となっており、清須城下町南部の町屋

器種	接合前			接合後			器種	接合前			接合後			器種	接合前			接合後			
	破片数	破片数	1/12	破片数	破片数	1/12		破片数	破片数	1/12	破片数	破片数	1/12		破片数	破片数	1/12	破片数	破片数	1/12	
天目茶碗	天目茶碗	2140	1953	1473	鉄袖折縁深皿	1	1	1	山菜碗	154	151	124	大明碗	1244	1138	1514	鉄袖桶	33	31	9	
	鉄袖天目茶碗	3	3	3	鉄袖即目付大皿	6	6	3	鉄袖附付片口	2	2	2	鉄袖片口	1	1	1	鉄袖片口	44	32	62	
	福天目茶碗	1	1	2	鉄袖即目付大皿	15	14	11	鉄袖折縁中皿	1	1	1	志野小皿	1	1	1	鉄袖水注	17	11	6	
	白天目茶碗	4	3	9	鉄袖即目付大皿	13	13	10	鉄袖折縁大皿	162	124	78	鉄袖水注	1	1	1	鉄袖水注	1	1	1	
	小天目茶碗	38	34	33	鉄袖即目付大皿	1	1	1	鐵袖大皿	122	112	64	鉄袖水注	1	1	1	志野水注	1	1	1	
	鉄袖小天目茶碗	6	6	5	鉄袖即目付大皿	4	3	2	鉄袖大皿	1	1	3	鉄袖德利	8	8	1	鉄袖德利	505	460	58	
	小計	2196	2003	1524	鉄袖即目付大皿	37	37	24	鉄袖大皿	4	4	4	鉄袖德利	8	8	1	鉄袖德利	8	5	5	
	その他の碗	鉄袖平碗	58	58	27	黄瀬戸大皿	4	3	2	志野大皿	1	1	1	飛騨徳利	1	1	1	黄瀬戸徳利	2	2	2
		鉄袖平碗	5	5	2	志野大皿	4	4	4	鐵袖大皿	1	1	1	飛騨徳利	1	1	1	黄瀬戸徳利	9	5	7
		鉄袖破反碗	4	4	5	鐵袖大皿	3	3	2	鐵袖大皿	1	1	1	飛騨徳利	1	1	1	鐵袖徳利	17	1	1
		鉄袖浅碗	2	2	1	鐵袖大皿	3	3	2	鐵袖大皿	1	1	1	鐵袖徳利	1	1	1	鐵袖徳利	8	2	12
		鉄袖丸碗	105	89	75	鐵袖大皿	4	3	2	鐵袖大皿	1	1	1	鐵袖小瓶	1	1	1	鉄袖小瓶	2	2	2
		鉄袖丸碗	118	97	117	鐵袖大皿	3	3	2	鐵袖大皿	1	1	1	鉄袖小瓶	2	2	2	鉄袖小瓶	1	1	1
		黄瀬戸丸碗	3	2	1	鐵袖大皿	1	1	1	鐵袖大皿	1	1	1	鉄袖小瓶	2	2	2	鉄袖小瓶	1	1	1
		志野丸碗	116	106	89	鐵袖大皿	60	44	32	鐵袖大皿	1	1	1	鉄袖小瓶	6	3	3	鉄袖小瓶	13	11	12
		鉄袖形半碗	1	1	1	鐵袖大皿	61	39	38	鐵袖大皿	1	1	1	鉄袖水注	1	1	1	鉄袖水注	6	6	6
		鉄袖形半碗	52	29	36	鐵袖大皿	5	5	1	鐵袖大皿	1	1	1	鉄袖水注	1	1	1	鉄袖水注	3	3	1
		黄瀬戸形半碗	2	2	3	鐵袖大皿	1	1	1	鐵袖大皿	1	1	1	鉄袖水注	1	1	1	鉄袖水注	9	9	10
		志野形半碗	4	3	4	鐵袖大皿	34	24	13	鐵袖大皿	28	28	10	鉄袖水注	1	1	1	鉄袖水注	20	16	26
		湯分け兼煎茶碗	1	1	1	鐵袖大皿	5	4	3	鐵袖大皿	1	1	1	鉄袖水注	1	1	1	鉄袖水注	1	1	1
		黄瀬戸煎茶碗	7	2	1	鐵袖大皿	10	1	3	鐵袖大皿	1	1	1	鉄袖水注	1	1	1	鉄袖水注	1	1	1
		黄瀬戸煎茶碗	1	1	1	鐵袖大皿	2	2	3	鐵袖大皿	1	1	1	鉄袖水注	1	1	1	鉄袖水注	3	3	1
		志野煎茶碗	21	19	22	鐵袖大皿	1	1	1	鐵袖大皿	1	1	1	鉄袖水注	1	1	1	鉄袖水注	13	11	12
		鉄袖破反碗	15	9	19	鐵袖大皿	5	5	3	鐵袖大皿	1	1	1	鉄袖水注	1	1	1	鉄袖水注	9	9	8
志野湯分け分け碗		1	1	1	鐵袖大皿	8	3	1	鐵袖大皿	1	1	1	鉄袖水注	1	1	1	鉄袖水注	3	3	3	
鉄袖小碗		12	9	19	鐵袖大皿	4	4	2	鐵袖大皿	28	28	10	鉄袖水注	1	1	1	鉄袖水注	1	1	1	
鉄袖小碗		9	9	10	鐵袖大皿	2	2	2	鐵袖大皿	1	1	1	鉄袖水注	1	1	1	鉄袖水注	9	9	10	
志野小碗		20	16	26	鐵袖大皿	1	1	1	鐵袖大皿	1	1	1	鉄袖水注	1	1	1	鉄袖水注	20	16	26	
鉄袖碗		1	1	1	鐵袖大皿	1	1	1	鐵袖大皿	1	1	1	鉄袖水注	1	1	1	鉄袖水注	1	1	1	
鉄袖碗		3	3	3	鐵袖大皿	2	2	2	鐵袖大皿	1	1	1	鉄袖水注	1	1	1	鉄袖水注	3	3	3	
鐵袖碗		1	1	1	鐵袖大皿	128	115	43	鐵袖大皿	1	1	1	鉄袖水注	1	1	1	鉄袖水注	43	41	2	
鐵袖碗	1	1	1	鐵袖大皿	5	5	2	鐵袖大皿	1	1	1	鉄袖水注	1	1	1	鉄袖水注	2	2	5		
鐵袖碗	1	1	1	鐵袖大皿	4	4	1	鐵袖大皿	32	21	17	鐵袖水注	1	1	1	鐵袖水注	32	21	17		
鉄袖碗か皿	1	1	1	鐵袖大皿	4	4	1	鐵袖大皿	1	1	1	鐵袖水注	1	1	1	鐵袖水注	2	1	3		
小計	565	479	453	鐵袖大皿	1	1	1	鐵袖大皿	1	1	1	鐵袖水注	1	1	1	鐵袖水注	8	8	21		
初皿・磁鉢	鉄袖八輪皿	1	1	1	鐵袖大皿	829	681	365	鐵袖大皿	1	1	1	鐵袖水注	1	1	1	鐵袖水注	2	2	2	
	鉄袖八輪皿	1	1	1	鐵袖大皿	11	11	4	鐵袖大皿	1	1	1	鐵袖水注	1	1	1	鐵袖水注	43	41	2	
	鉄袖折縁小皿	8	7	9	鐵袖大皿	11	11	4	鐵袖大皿	1	1	1	鐵袖水注	1	1	1	鐵袖水注	2	2	5	
	鉄袖折縁深皿	18	18	11	鐵袖大皿	360	375	1307	鐵袖大皿	1	1	1	鐵袖水注	1	1	1	鐵袖水注	32	21	17	
	鉄袖縁小皿	80	77	86	鐵袖大皿	382	376	1311	鐵袖大皿	1	1	1	鐵袖水注	1	1	1	鐵袖水注	1	1	1	
	鉄袖縁小皿	31	29	21	鐵袖大皿	1	1	1	鐵袖大皿	1	1	1	鐵袖水注	1	1	1	鐵袖水注	1	1	1	
	鉄袖縁折皿	99	95	78	鐵袖大皿	86	78	24	鐵袖大皿	14	13	1	鐵袖水注	1	1	1	鐵袖水注	8	8	2	
	鉄袖折縁中皿	7	7	7	鐵袖大皿	1	1	1	鐵袖大皿	1	1	1	鐵袖水注	1	1	1	鐵袖水注	1	1	1	
	鉄袖縁折皿	3	3	6	鐵袖大皿	1	1	1	鐵袖大皿	1	1	1	鐵袖水注	1	1	1	鐵袖水注	46	41	8	
	鉄袖縁折大さき皿	43	42	56	鐵袖大皿	1	1	1	鐵袖大皿	1	1	1	鐵袖水注	1	1	1	鐵袖水注	3	3	4	
	鉄袖縁折大さき皿	12	12	14	鐵袖大皿	1	1	1	鐵袖大皿	1	1	1	鐵袖水注	1	1	1	鐵袖水注	11	2	9	
	鉄袖破反皿	192	173	213	鐵袖大皿	1	1	1	鐵袖大皿	1	1	1	鐵袖水注	1	1	1	鐵袖水注	9	9	5	
	鉄袖破反皿	4	4	9	鐵袖大皿	128	87	15	鐵袖大皿	11	11	4	鐵袖水注	1	1	1	鐵袖水注	11	11	3	
	鉄袖破反皿か丸皿	332	337	1	鐵袖大皿	192	186	5	鐵袖大皿	2	2	2	鐵袖水注	1	1	1	鐵袖水注	2	2	2	
	鉄袖破反皿か丸皿	3	3	3	鐵袖大皿	25	24	14	鐵袖大皿	1	1	1	鐵袖水注	1	1	1	鐵袖水注	1	1	1	
	鉄袖豆皿	2	2	2	鐵袖大皿	47	46	57	鐵袖大皿	1	1	1	鐵袖水注	1	1	1	鐵袖水注	81	76	33	
	鉄袖豆皿	1	1	1	鐵袖大皿	2	2	1	鐵袖大皿	1	1	1	鐵袖水注	1	1	1	鐵袖水注	1	1	3	
	鉄袖丸皿	931	823	934	鐵袖大皿	2	2	2	鐵袖大皿	83	83	2	鐵袖水注	1	1	1	鐵袖水注	362	361	15	
	鉄袖丸皿	12	7	9	鐵袖大皿	43	37	10	鐵袖大皿	9	9	1	鐵袖水注	1	1	1	鐵袖水注	9	9	1	
	鉄袖丸皿	154	134	163	鐵袖大皿	21	20	3	鐵袖大皿	1	1	1	鐵袖水注	1	1	1	鐵袖水注	1	1	1	
	鉄袖破花皿	20	19	18	鐵袖大皿	1	1	1	鐵袖大皿	26	26	2	鐵袖水注	1	1	1	鐵袖水注	26	26	2	
	鉄袖丸皿か折縁皿	1	1	1	鐵袖大皿	25	25	15	鐵袖大皿	16	16	16	鐵袖水注	1	1	1	鐵袖水注	1	1	1	
	鉄袖破皿	7	7	11	鐵袖大皿	3	3	3	鐵袖大皿	2876	2624	1977	鐵袖水注	1	1	1	鐵袖水注	2876	2624	1977	
	鉄袖破皿	161	153	176	鐵袖大皿	51	51	18	鐵袖大皿	16	16	16	鐵袖水注	1	1	1	鐵袖水注	16	16	16	
鉄袖破皿か丸皿	1	1	1	鐵袖大皿	575	569	7	鐵袖大皿	1	1	1	鐵袖水注	1	1	1	鐵袖水注	1	1	1		
鉄袖内丸皿	111	86	112	鐵袖大皿	8	7	7	鐵袖大皿	2	2	2	鐵袖水注	1	1	1	鐵袖水注	2	2	2		
鉄袖内丸皿	20	13	14	鐵袖大皿	1	1	1	鐵袖大皿	1	1	1	鐵袖水注	1	1	1	鐵袖水注	1	1	1		
鉄袖反り皿	26	18	33	鐵袖大皿	3	2	3	鐵袖大皿	1	1	1	鐵袖水注	1	1	1	鐵袖水注	1	1	1		
縁袖折縁皿	2	2	3	鐵袖大皿	1267	1191	138	鐵袖大皿	19	17	11	鐵袖水注	1	1	1	鐵袖水注	19	17	11		
鉄袖折縁皿	157	140	240	鐵袖大皿	22	20	14	鐵袖大皿	6	6	2	鐵袖水注	1	1	1	鐵袖水注	6	6	2		
鉄袖折縁皿	6	6	12	鐵袖大皿	19	16	8	鐵袖大皿	4	4	10	鐵袖水注	1	1	1	鐵袖水注	4	4	7		
焼縁丸皿	4	4	11	鐵袖大皿	1	1	2	鐵袖大皿	1	1	1	鐵袖水注	1	1	1	鐵袖水注	1	1	1		
鉄袖中皿	7	6	2	鐵袖大皿	1	1	1	鐵袖大皿	1	1	1	鐵袖水注	1	1	1	鐵袖水注	1	1	1		
焼縁中皿	3	2	9	鐵袖大皿	4	4	10	鐵袖大皿	14	12	12	鐵袖水注	1	1	1	鐵袖水注	14	12	12		
黄瀬戸中皿	2	2	2	鐵袖大皿	2	2	2	鐵袖大皿	2	2	2	鐵袖水注	1	1	1	鐵袖水注	2	2	2		
鉄袖輪丸皿	2	2	2	鐵袖大皿	76	68	41	鐵袖大皿	1	1	1	鐵袖水注	1	1	1	鐵袖水注	1	1	1		
志野丸皿	4	4	4	鐵袖大皿	1	1	1</														

地区の様相をそのまま反映した数値と評価することができる。

(3) 時期別組成

次に、時期別組成について検討する。単純に、古瀬戸後Ⅳ期新段階と識別された製品は572点、大窯第1段階は1009点、大窯第2段階は798点、大窯第3段階は1892点、大窯第4段階は1998点、登窯第1小期は288点となり、特に大窯第4段階後半と特定されたものは900点を数える。これを各調査区・各面で遺構出土資料とそれ以外の資料に分けて集計したのが第12表である。概ね下面に行くにしたがい、新しい時期の資料が減少する傾向は読み取れるが、全く新しい時期のものがなくなるわけではない。この点が、本遺跡の本調査地点での発掘調査の難しさを物語っていると思われる。

さらに、遺構ごとに時期別組成を算出した。瀬戸・美濃窯産陶器が11点以上出土した174基の遺構（明白に宿場町期の遺構も含めて単純に数値

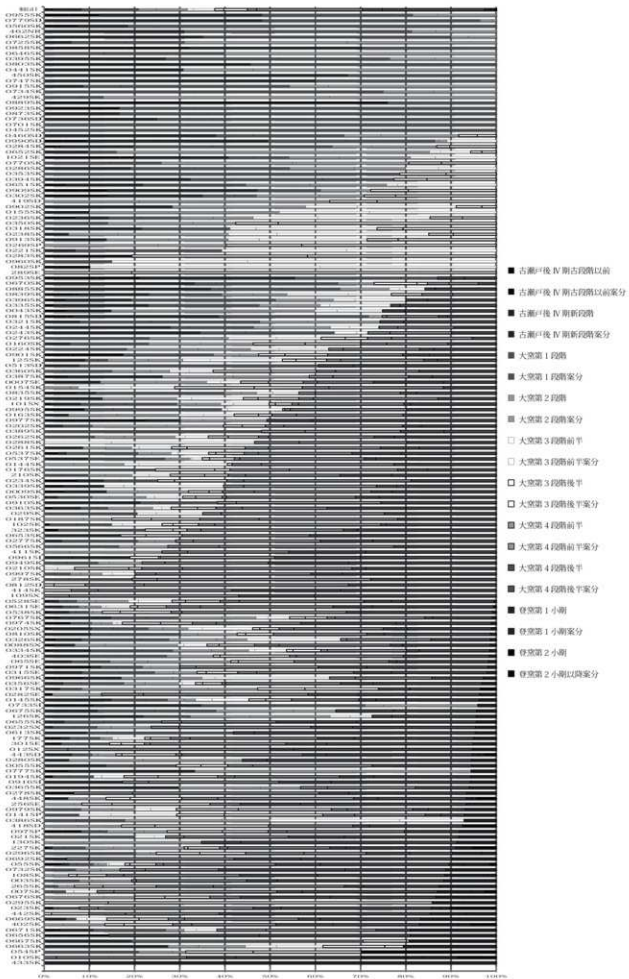
化した）について、古瀬戸後Ⅳ期古段階以前、古瀬戸後Ⅳ期新段階、大窯第1段階、大窯第2段階、大窯第3段階前半、大窯第3段階後半、大窯第4段階前半、大窯第4段階後半、登窯第1小期、登窯第2小期以降の10期に分割して検討した。各時期に該当するものは確定数として認識し、複数の時期にまたがる形でしか同定できないものは、そのまたがる時期の確定数の比率で数値を割り振って（案分して）算出した。そして、この確定数と案分して算出した数値を合計してグラフにまとめたのが、第83図である。

第83図は、(1) 登窯第1小期と登窯第2小期以降の合計した数値の割合が高いもの、(2) 大窯第4段階の合計した数値の割合が高いもの、(3) 大窯第3段階の合計した数値の割合が高いものの順に下から配列したグラフである。このグラフから、A) 大窯第1段階までの製品しか確認できない遺構、B) 大窯第1段階が主体であり大窯第2段階までの製品が2割以下の遺構、C) 大窯第1

段階が主体であり大窯第3段階までの製品が2割程度となる遺構、D) 大窯第2段階までの製品しか確認できない遺構、E) 大窯第2段階が主体であり大窯第3段階までの製品が2割以下の遺構、F) 大窯第2段階が主体であり登窯第1小期までの製品が2割以下の遺構、G) 大窯第3段階前半までの製品しか確認できない遺構、H) 大窯第3段階後半までの製品しか確認できない遺構、I) 大窯第3段階が主体であり大窯第4段階までの製品が2割以下の遺構、J) 大窯第3段階が主体であり登窯第1小期までの製品が2割以下の遺構、K) 大窯第4段階前半までの製品しか確認できない遺構、L) 大窯第4段階後半までの製品しか確認できない遺構、M) 登窯第1小期までの製品が確認できる遺構の13種に区分できる。この区分に基づき該当する遺構を一覧にまとめたのが第13表で

接合後破片数	天目茶碗	その他碗	小皿類	向付・盤類	節皿・鉢類	壺・瓶類	神仏具	その他	総計	
10A区	1面	240	75	325	109	378	75	18	243	1463
	2面	184	45	265	65	293	120	23	232	1227
	3面	204	28	258	40	453	185	39	290	1497
	その他	95	13	107	25	126	34	13	116	529
	小計	723	161	955	239	1250	414	93	881	4716
10B区	1面	80	16	93	31	87	33	10	74	424
	2面	96	16	91	53	190	50	10	90	596
	その他	30	4	45	11	50	29	8	24	201
	小計	206	36	229	95	327	112	28	188	1221
11A区	1面	70	8	92	13	74	33	1	74	365
	2面	140	38	248	37	235	84	21	204	1007
	3面	185	30	267	39	278	111	28	240	1178
	4面	70	7	77	6	110	48	8	94	420
	その他	28	6	49	10	46	21	4	20	184
小計	493	89	733	105	743	297	62	632	3154	
11B区	1面	119	42	149	70	370	56	23	236	1065
	2面	112	40	142	26	235	52	23	177	807
	3面	96	21	126	43	322	76	22	162	868
	4面	21	4	17	10	45	14	4	26	141
	その他	30	10	51	21	91	14	7	41	265
小計	378	117	485	170	1063	212	79	642	3146	
11C区	1面	41	17	65	19	89	29	6	62	328
	2面	65	24	78	25	149	38	10	108	497
	3面	67	24	70	21	95	72	13	85	447
	その他	18	4	10	4	31	11	2	17	97
	小計	191	69	223	69	364	150	31	272	1369
その他	12	1	27	3	17	6		9	75	
総計	2003	473	2652	681	3764	1191	293	2624	13681	

第12表 城下町期の瀬戸・美濃窯産陶器の調査区別の器類組成



第 83 図 遺構別城下町期の瀬戸・美濃窯産陶器の時期別組成グラフ

ある。

この結果、今回の調査で確認された遺構の半数以上は、L) 大窯第4段階後半までの製品しか確認できない遺構、M) 登窯第1小期までの製品が確認できる遺構の2種で占められていることが改めて確認された。加えて、大窯第2段階までの(あるいは主体となる)遺構、大窯第3段階前半まで

の遺構、大窯第3段階後半までの遺構も、少ないながらも一定量存在することが明確となった。そして、大窯第4段階前半までの遺構というものを抽出することは非常に難しい状況であることも判明した。

(4) 新しい城下町期の時期区分について

上記の検討結果と前節の土師器の変遷の考察も

瀬戸・美濃窯産陶器の時期	該当する遺構 (瀬戸・美濃窯産陶器が11点以上出土した遺構)	宿場町期の遺構
大窯第1段階まで	0889SK、0923SK、0736SD、0701SK、0452SK、0560SK、0858SK、0803SK、450SK、0747SK	
大窯第1段階主体 (大窯第2段階2割以下)	0955SK、0779SD、462NR、0662SK	
大窯第1段階主体 (大窯第2-3段階まで2割程度)	0990SD、0353SK、0394SK	
大窯第1段階主体 (大窯第4段階まで2割以下)	0953SK	
大窯第2段階まで	0725SK、0646SK、0395SK、0441SK、0915SK、0734SK、429SK	
大窯第2段階主体 (大窯第3段階2割以下)	0460SD、0652SK、0770SK	
大窯第2段階主体 (登窯第1小期2割以下)	0652SI下層、0777SK	
大窯第3段階前半まで	1021SE、0286SK、0651SK、0155SK、0221SK、0960SK	082SP
大窯第3段階後半まで	0302SK、419SP、0902SK、0236SK、0350SK、0318SK、0238SK、0913SK、0269SP、0283SK、289SE	090SK
大窯第3段階主体 (大窯第4段階2割以下)	0885SK、0670SK	
大窯第3段階主体 (登窯第1小期2割以下)	0386SK、0295SK、0667SK、0663SK	
大窯第4段階前半まで	0839SK、0276SK	
大窯第4段階後半まで	0812SD、278SK、0997SK、0210SK、0949SK、0961SK、0566SK、0277SK、0653SK、323SK、102SK、0187SK、0363SK、0910SK、0530SK、0009SK、0339SK、0234SK、210SK、0176SK、0144SK、0537SE、0288SK、0262SK、0389SK、0202SK、0977SK、0163SK、0995SK、0219SK、0835SK、0154SK、0387SK、0360SK、0513SD、0901SK、0224SK、0160SK、0243SK、0244SK、0321SK、0815SD、0043SK、0335SK、0396SK	414SK、411SK、109SK、029SK、101SK、125SK、0007SE、0261SE、
登窯第1小期まで	0528SE、0631SE、0538SK、0767SK、0974SK、0205SK、0810SK、0326SK、0088SK、0334SK、403SE、0971SK、0315SE、0966SK、0356SE、0317SK、0282SE、0675SK、126SK、0655SK、0232SK、0613SK、177SK、012SK、0280SK、0055SK、0194SK、0916SK、0365SK、0278SK、256SE、0979SK、0141SP、418SD、097SP、021SK、130SK、0296SK、0692SK、0732SK、108SK、265SK、0676SK、442SK、0669SK、402SK、0671SK、0656SK、433SK	065SE、301SE、443SD、227SK、448SK、0145SK、054SP、055SK、003SK、007SK、023SK、010SK

第13表 瀬戸・美濃窯産陶器の時期組成からみた遺構の時期区分

踏まえて、今回の調査区における遺構の時期区分を考察すると、概ね下記のようにまとめることができる。3期に大別することは若干の齟齬が生じるものの、基本的にはそのまま踏襲することとした。

土師器 1 段階=大塚第 1 段階まで	=城下町期 I - A 期
土師器 2 段階=大塚第 1 段階主体	=城下町期 I - B 期
土師器 3 段階=大塚第 2 段階まで	=城下町期 II - A 期
土師器 4 段階=大塚第 3 段階前半まで	=城下町期 II - B 期
土師器 5 段階=大塚第 3 段階後半まで	=城下町期 II - C 期
土師器 6 段階=大塚第 4 段階後半まで	=城下町期 III - 1 期
土師器 7 段階=登窯第 1 小期まで	=城下町期 III - 2 期

従来の 3 期 6 小期区分と比べると、城下町期 I 期と II 期で変更がある。城下町期 I 期に関しては、従来の 1 小期と 2 小期は古瀬戸後 IV 期新段階までと大塚第 1 段階まで（すなわち大塚第 1 段階の有無）で識別したが、ここでは城下町期 I - 2 期を細分する形となった。城下町期 II 期に関しては、良好な資料に恵まれたため、3 段階に区分することが可能となった。従来の区分は土器様相としてはあまり詳しい実態を伴わない形で認識したこともあり、大きく修正する必要もあるだろう。今後遺跡全体で再考することが求められる。城下町期 III 期については、従来通りの区分である。

第 3 節 城下町期の金属製品生産

(1) 分析の方法

今回の調査で通常の掘削作業で検出された金属関連遺物は全部で 3760 点を数える。これらの整理作業は、従来筆者らが実施している金属関連遺物のデータ採取方法に依拠して実施した。その詳細な情報は貼付 CD に掲載した。

ここでは時間の制約もあり、綿密な検証を経ないまま器種同定を行っている。残された問題は多く今後の分析に期したいが、暫定的に次の分類を用いて検討を進めた。椀型鉄滓、流動滓 A、流動滓 B、甕歯片、炉壁、羽口、取鍋、鋳型（外型）、

鋳型（中子）、粘土塊、粒状滓、鍛造剥片、鍛造剥片様遺物、鉄片、鉄製品、含鉄遺物、鉄塊系遺物、銅製品、銅滴、炉材（砂岩）などである。詳細な分類内容は過去の論考と一部は本書第 3 章第 5 節に譲るが、ここで重要なものについて若干の説明を加える。

椀型鉄滓 炉底に溜まり固化した鉄滓。分割の状態から椀型鉄滓と 1/2 分割椀型鉄滓と 1/4 分割椀型鉄滓と 1/8 分割椀型鉄滓と 1/8 以下分割椀型鉄滓に区分した。

含鉄遺物 製品とは認識できない鉄製遺物で、一般に周囲は土砂が固着し内部が観察できない。

鉄塊系遺物 製品とは認識できない鉄製遺物で、金属鉄がよく残存し固着した土砂がひび割れるものである。

(2) 金属関連遺物の出土分布

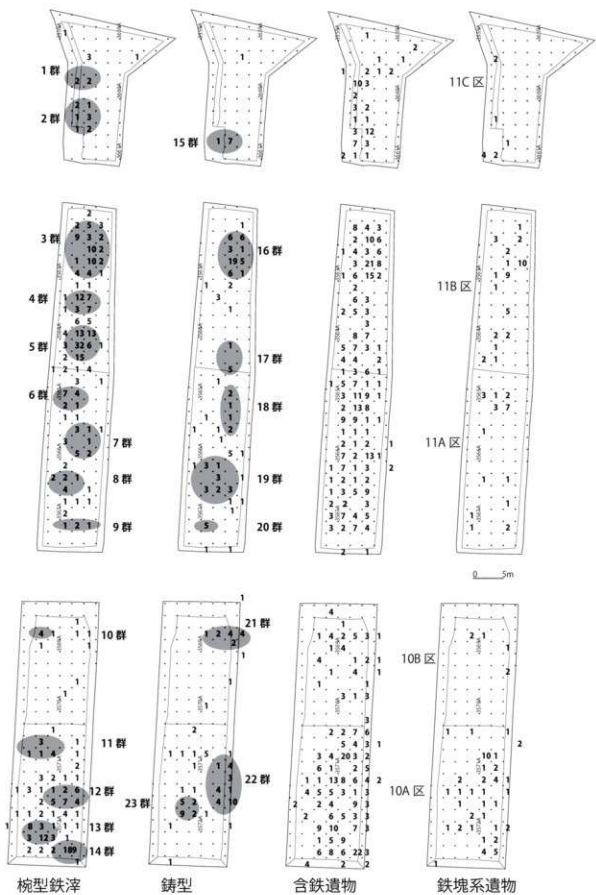
金属関連遺物 3760 点のうち、椀型鉄滓 603 点、流動滓 A 62 点、流動滓 B 234 点、甕歯片 12 点、炉壁 460 点、羽口 84 点、取鍋 15 点、鋳型（外型）104 点、鋳型（中子）102 点、粘土塊 572 点、粒状滓 1 点、鍛造剥片 4 点、鍛造剥片様遺物 14 点、鉄片 1 点、鉄製品 259 点、含鉄遺物 785 点、鉄塊系遺物 147 点、銅製品 153 点、銅滴 1 点、炉材（砂岩）49 点などである。このうち、椀型鉄滓 603 点、鋳型片（合計）206 点、含鉄遺物 785 点、鉄塊系遺物 147 点について、グリッド別に出土点数を算出して図化したのが、第 84 図である。

この結果、椀型鉄滓と鋳型片（合計）についてそれぞれ出土分布の偏りが確認され、椀型鉄滓の分布の偏りを 14 群（1 群～14 群）、鋳型片（合計）の分布の偏りを 9 群（15 群～23 群）確認した。さらに検討すると、椀型鉄滓と鋳型片（合計）の分布の偏りは、それぞれ含鉄遺物と鉄塊系遺物の分布に近似した偏りをみることが可能である。椀型鉄滓と含鉄遺物、鋳型片と鉄塊系遺物の分布には相関関係があるように感じられる。

(3) 主要な遺構の金属関連遺物

前項の分析で、椀型鉄滓と鋳型片（合計）について個別に分布の偏りが確認された。この状況を遺構単位で検討する。

椀型鉄滓が多く出土した遺構を列挙すると、191SK で 150 点、0767SK で 21 点、0528SE で 17 点、272SP で 11 点、181SP で 9 点、0777SK で 8 点、0815SD で 7 点、0537SE で 6 点、



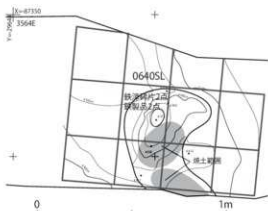
第 84 図 主要な金属関連遺物の出土分布図 (2m グリッド単位)

010SK・012SX・0205SX・0606SP・0810SK・0825SK・0885SK・102SKで4点の順となる。191SK・272SP・181SPは14群を、0528SE・0767SK・0537SEは5群を、0815SDは3群を、0885SKは4群を構成する主要な遺構と認識できる。

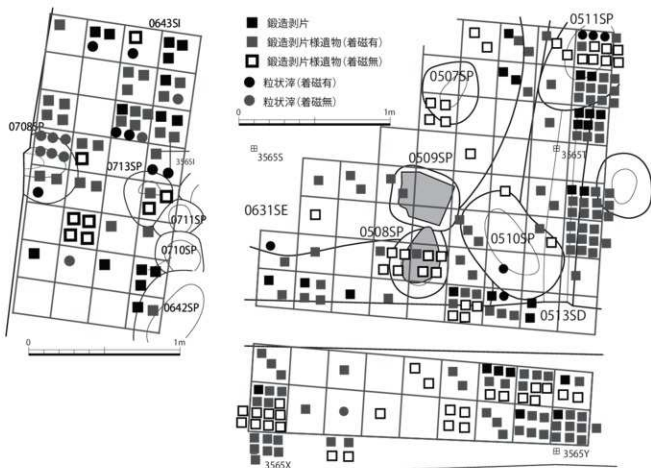
一方、鋳型片(合計)が多く出土した遺構を列挙すると、0810SKで20点、0825SKで12点、0824SKで6点、0974SKで5点、012SX・442SK・0815SD・0655SK・0261SKで4点の順となる。0810SK・0825SK・0824SKは16群を、0974SKは15群を、012SXは22群を、442SKは21群を構成する主要な遺構と認識できる。

第4章第2節の分析で、191SK(14群)、0452SK(6群)、0509SPや0528SEなど(5群)、0915SK(2群)、992SK(1群)は鍛錬鍛冶滓などが含まれることが判明した。椀型鉄滓を伴う1群～14群は付近で鍛錬鍛冶工程の操作が推測されよう。各群を構成する主要な遺構の時期を検討すると、5群・7群・10群は城下町期Ⅲ-2期(登窯第1小期)、2群・3群・8群・9群は城下町

期Ⅲ-1期(大窯第4段階後半)、4群は城下町期Ⅱ-B期(大窯第3段階前半)に位置づけられ、6群は城下町期Ⅲ-1期(大窯第4段階後半)の資料と城下町期Ⅰ期(大窯第1段階)の資料が混在する。遺構単体でみると、城下町期Ⅱ-B期の遺構で椀型鉄滓が1点以上伴うケース(0651SK・0670SK)も確認される。したがって、城下町期Ⅰ期に調査区東部で若干の鍛錬鍛冶工程が行われたが、城下町期Ⅱ-B期になるとやや西側に範囲が拡大し、城下町期Ⅲ期になると城下町期全体で



第85図 0640SL周辺の金属関連遺物の出土分布



第86図 0643SIおよび0508SP・0509SP周辺の金属関連遺物の出土分布

鍛錬鍛冶が操業されたとみることができる。

また、第4章第2節の分析で、10A区トレンチ(22群)、2765SK(19群)、0810SKや0824SK(16群)、0979SK(15群)は鉄鋳物製作に伴う資料が含まれると推定された。鋳型を伴う15群～23群は付近で鋳造工程の操業が推測されよう。各群を構成する主要な遺構の時期を出土した遺物から検討すると、15群は城下町期Ⅲ-2期(登窯第1小期)、16群は城下町期Ⅲ-1期(大窯第4段階後半)、19群は城下町期Ⅲ-1期(大窯第4段階前半)に位置づけられる。ただし、16群は主体となる遺構が埋積した後に城下町期Ⅲ期の町屋の建物などが構築されているので、Ⅲ期の中でも早い時期かⅡ期まで遡る可能性を考慮したい。ただ現状では、城下町期Ⅱ-A期の遺構で鋳型(外型)?が伴う例(0652SK)もあるが、概ね城下町期Ⅲ期に鉄鋳物製作が行われたと推測される。

(4) 鍛造剥片と粒状滓の出土分布

次に、土壌を水洗篩別して選別した資料について若干の検討を行う。発掘調査では全部で5ヶ所(炉跡0640SLの周囲・0643SIの焼土埋積遺構0708SP周囲・石理設遺構0508SPと0509SPの周囲・0652SI中央部・0916SI中央部)について25cmメッシュで土壌を採取している。この中で、炉跡0640SLの周囲・0643SIの焼土埋積遺構0708SP周囲・石理設遺構0508SPと0509SPの周囲について、鍛造剥片と鍛造剥片様遺物と粒状滓の出土分布図を作成した(第85・86図)。炉跡0640SLの周囲(第85図)では、焼土が分布する北端で鉄滓の破片と鉄製品の細片が検出された程度に過ぎない。明確な鍛造剥片や粒状滓は見られなかった。一方、0643SIの焼土埋積遺構0708SP周囲および石理設遺構0508SPと0509SPの周囲について(第86図)は、0708SPおよび0508SP・0509SPから50cm～100cm程度離れた地点に鍛造剥片と鍛造剥片様遺物と粒状滓が分布していることが判明した。

この結果、0708SPおよび0508SP・0509SPで鍛錬鍛冶作業の鍛打工程が行われた可能性を想定し得る結果となった。特に、石理設遺構0508SP・0509SPは金床石かその基礎構造であったかもしれないといえよう。一方、鍛冶炉?のすぐ近辺のエリアでは鍛造剥片や粒状滓の飛散は

確認できないと思われた。

(5) 小結

10AB区と11ABC区では、鍛錬鍛冶工程や鉄鋳造工程が城下町期Ⅲ期に活発に操業されたことが想定され、これらの作業は城下町期Ⅱ期まで遡ることが確認された。これまでに本町西部地区の長者橋付近から本町東部地区北寄りで椀型鉄滓が多く出土していることが知られており(鈴木・藤山2011)、今回の調査でこの傾向は追認され、具体的な様相が明らかになってきたといえる。

第4節 遺構変遷

今回の調査で確認された遺構を主に出土遺物から時期を推定し、遺構配置の変遷を整理した。この結果、下記のようにまとめることができた(第87図)。

古代 調査区東半部で東山72号窯式期を中心とした時期に竪穴建物跡が数棟確認された。調査区東側で確認されている古墳時代から平安時代の集落跡の縁辺部に該当すると思われる。

中世 調査区東半部で第6型式を中心とした山茶碗が伴う井戸や区画溝が確認された。溝で区画された屋敷跡が検出されたものと想像される。調査区中央部の溝0896SDは集落外縁部を画する溝と位置づけられるかもしれない。

城下町期Ⅰ期 深さが1m程度の堀?が2条(0990SD・462NR)確認された。これまでの調査結果から北部では堀を伴う武家屋敷群が展開していることが確認されているが、同様のものと思われるが、どのように展開したかは不明である。0990SDが武家屋敷群の南端となる可能性も考慮される。11AB区で展開する小規模な遺構群は、武家屋敷内か否かでその評価が分かれるものである。

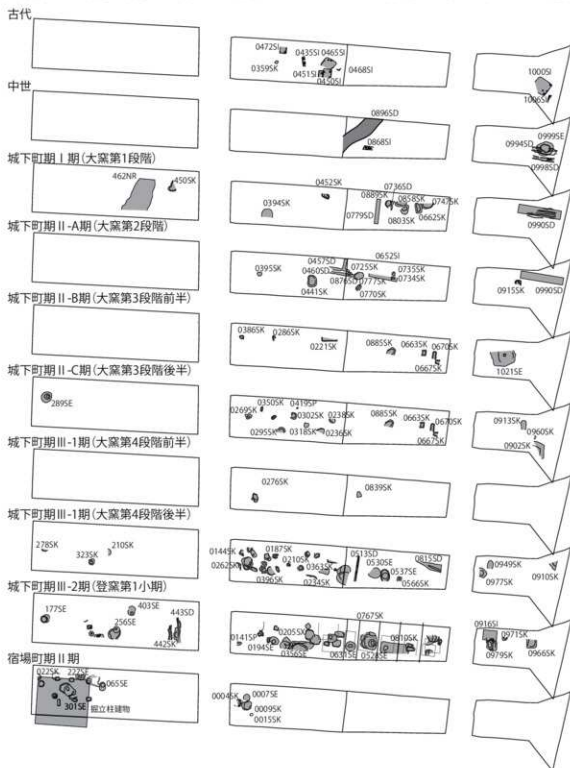
城下町期Ⅱ-A期 11AB区を中心に竪穴状遺構や炭化物を多量に含む長方形土坑(土坑A類)が出現しており、金属製品生産が予測される状況である。0990SDの他に0460SDなどの溝も確認されており、この地区は小区画に細分されたかもしれない。

城下町期Ⅱ-B期～Ⅱ-C期 Ⅱ-B期では、11AB区を中心に鍛冶関連遺物を含む土坑A類などが展開する。鍛錬鍛冶工程を中心とした金属製品生産が行われたと推定される。この段階では屋敷割や

建物跡などを確認することはできなかった。Ⅱ-C期では11AB区の東西にも鍛冶関連遺物を含む遺構群が展開するようになる。

城下町期Ⅲ期 この時期は井戸や区画溝が調査区全体に展開するようになる。特にⅢ-2期には、井戸が177SE・256SE・0194SE・0356SE・0631SE・0537SE・0528SEと概ね東西方向に一列に配列された状態で確認された。これに対応す

るように11B区ではほぼ南北に走る区画溝が設置されており、東西幅が5～6mの南北に長い屋敷が東西に並ぶ形で復元ができる。各屋敷内には井戸の他に掘立柱建物跡と竪穴状遺構も確認され、地点によっては鍛冶や石理設置遺構など金属製品生産に直接関連する遺構が検出された。この結果、金属製品生産は屋敷内に施設を構えて作業されたことが推定できる。なお、これらの遺構は



第 87 図 今回の調査における遺構変遷

Ⅲ-2期で明瞭な形で確認されたが、状況からみてⅢ-1期から展開したものと想定される。定住した常設の鍛冶屋町や鋳物町が展開したと類推される。

宿場町期Ⅱ期 この時期は美濃街道に面する部分で規模の大きめな掘立柱建物跡や井戸などが確認された。18世紀後半頃に町屋が構えられたと推定できる。

第5節 総括

今回の調査成果の中で特筆すべき点は、城下町期の鍛冶屋町や鋳物町を推定できる遺構や遺物が発見されたことである。これらの遺構群は16世紀中頃には本格的に展開し始め、織田信雄の改修後(Ⅲ期)には常設店舗を構えた短冊型地割の町屋の形で発展したことが推定される。この中で特に問題となる点は、金属製品生産が本格的に操業されるのがいつかであろう。少なくとも瀬戸・美濃産陶器大窯第2段階から第3段階前半には開始されたと思われる、これは織田信長が清須に入城した段階に相当するともいえる。

従来、織田信長による清須の改修や改変は、該当する遺構の検出が難しいこともあって、あまり想定されていなかった。今回の調査の結果、武家屋敷外縁部に金属製品生産の操業が織田信長の清須入城と呼応するように展開すると推測されたことの意義は大きい。さらなる詳細な分析が必要と

なるところであるが、ここで本書に伴う整理時間と紙幅が尽きた。今後の研究に期したい。(鈴木正貴)

引用・参考文献

清洲町 1969『清洲町史』

鈴木正貴 1995a『清洲城下町の遺物様相』『清洲城下町遺跡Ⅴ』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第54集

鈴木正貴 1995b『清洲城の復元的研究(1995年覚書)』『清洲城下町遺跡Ⅴ』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第54集

鈴木正貴 2001『尾張の拠点城館遺跡出土の瀬戸美濃産陶器』『研究紀要』第2号 愛知県埋蔵文化財センター

鈴木正貴 2007『主要消費地遺跡解説』『愛知県史 別編窯業2 中世・近世 瀬戸系』愛知県

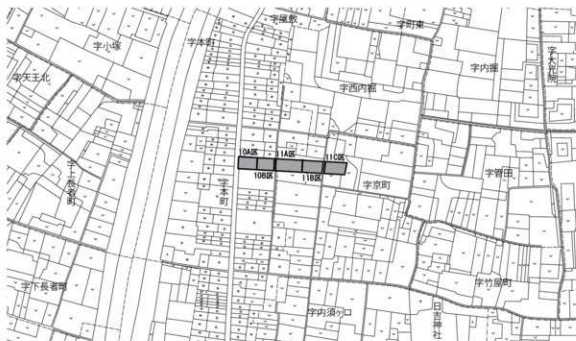
鈴木正貴・藤山誠一 2011『清洲城下町における金属製品生産—愛知県下の古代～近世の集落における金属製品生産と比較して—』『関西近世考古学研究 19』

鈴木正貴 2012『小牧山城とその城下町の土師器』『研究紀要』第12号 愛知県埋蔵文化財センター

中野晴久 2012『総論 常滑窯』『愛知県史 別編窯業3 中世・近世 常滑系』愛知県

早野浩二編 2005『清洲城下町遺跡Ⅳ』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第131集

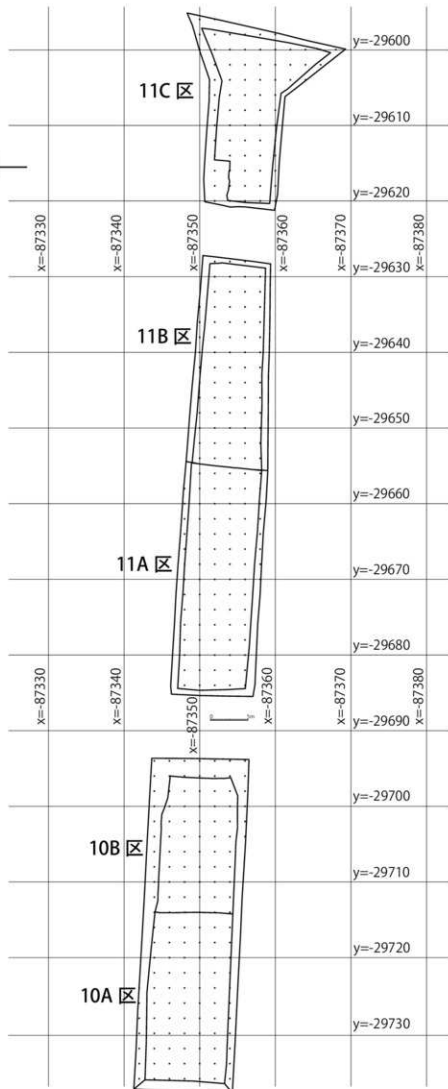
藤澤良祐 2007『総論』『愛知県史 別編窯業2 中世・近世 瀬戸系』愛知県

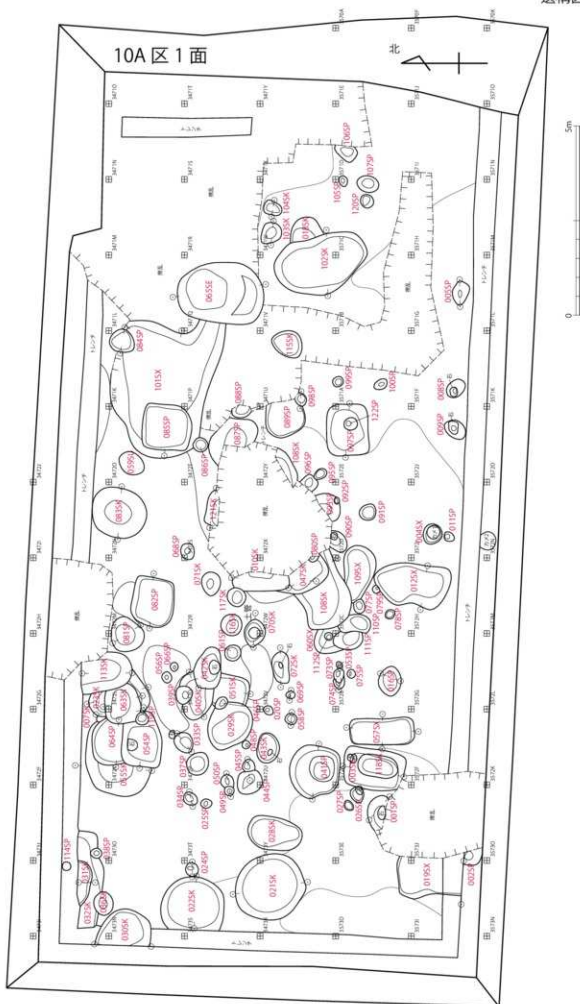


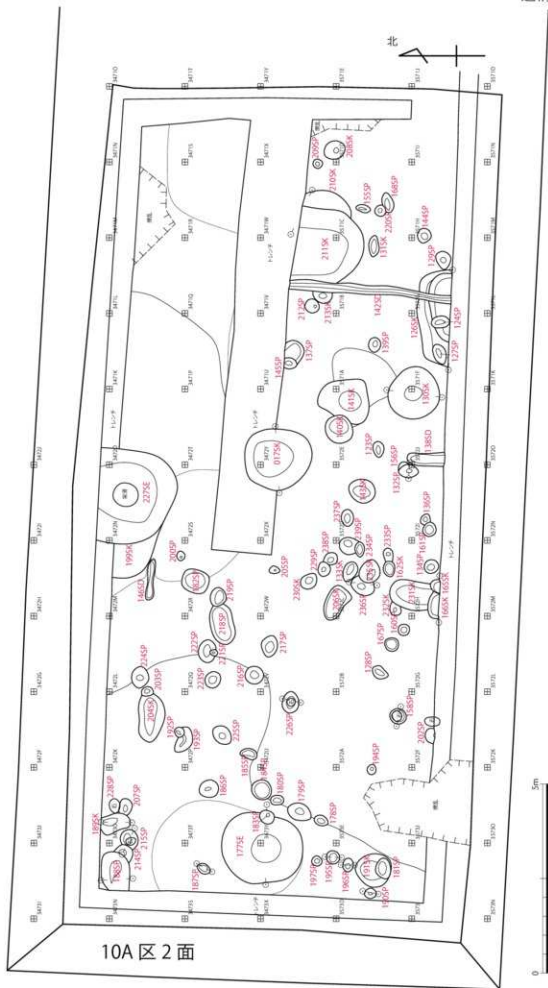
第 88 図 今回の調査区周辺の地籍図 (原図は愛知県公文書館所蔵)

遺構図版

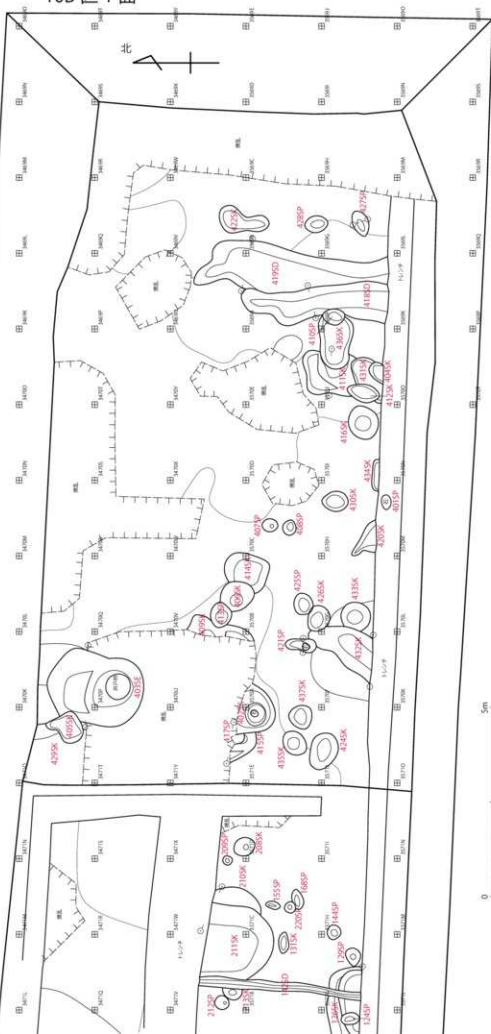
- 1: 調査区全体
- 2: 10A 区 1 面
- 3: 11A 区 1 面
- 4: 11B 区 1 面
- 5: 11C 区 1 面
- 6: 10A 区 2 面
- 7: 10B 区 1 面
- 8: 11A 区 2 面
- 9: 11B 区 2 面
- 10: 11C 区 2 面
- 11: 10A 区 3 面
- 12: 10B 区 2 面
- 13: 11A 区 3 面
- 14: 11B 区 3 面
- 15: 11C 区 3 面
- 16: 11A 区 4 面
- 17: 11B 区 4 面



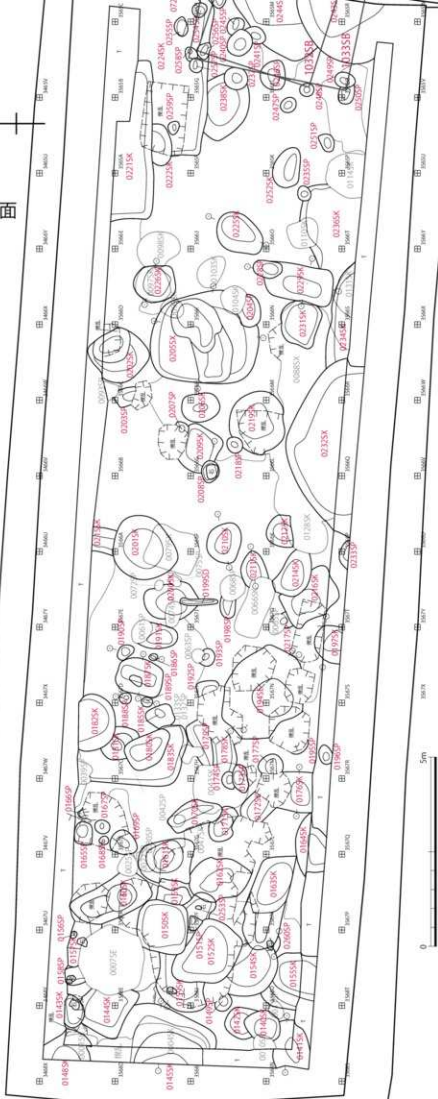




10B区 1面



11A区2面

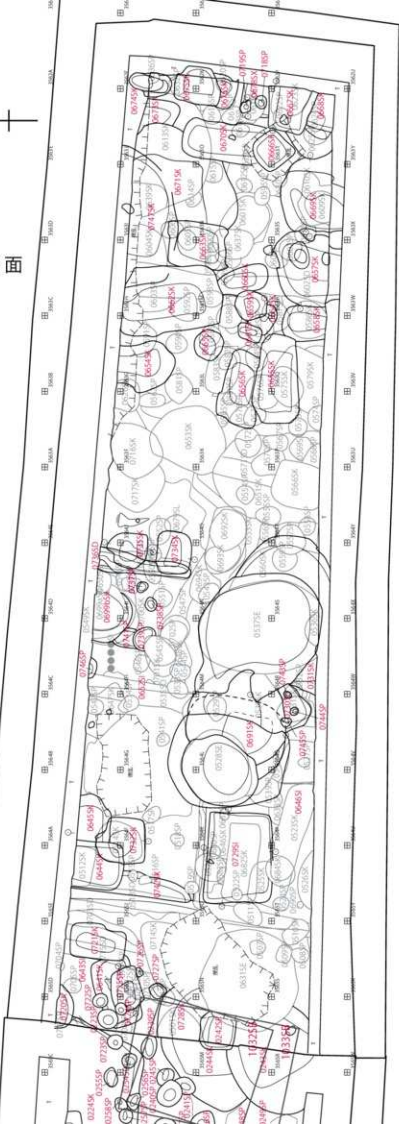


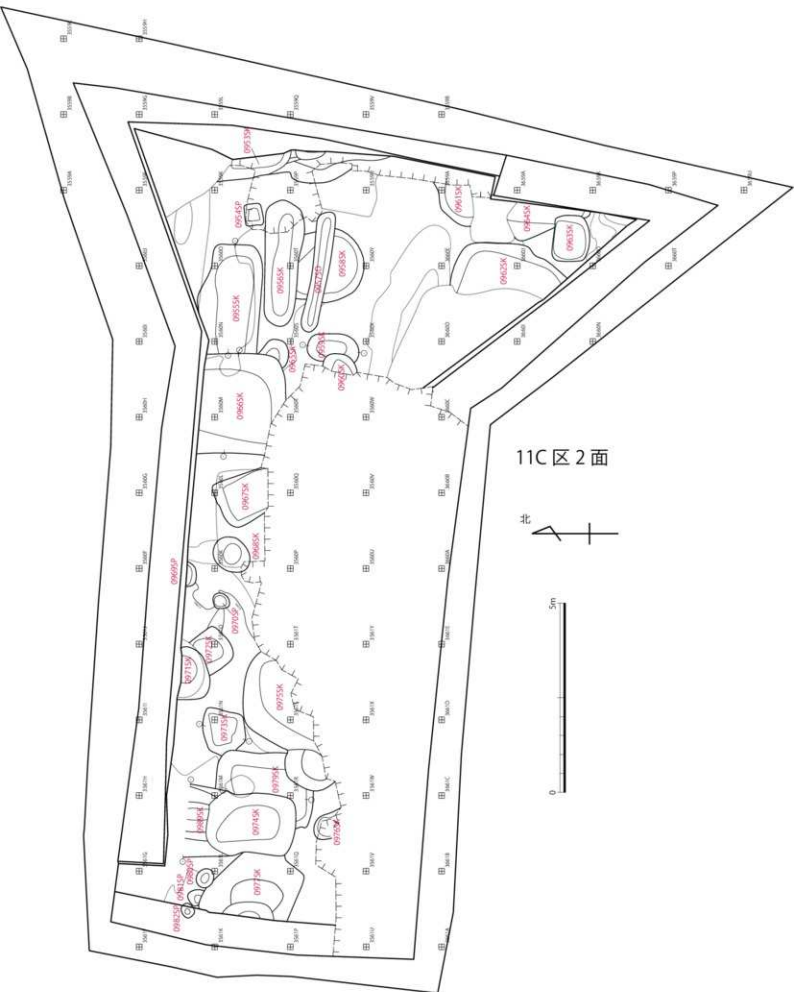


11B区2面

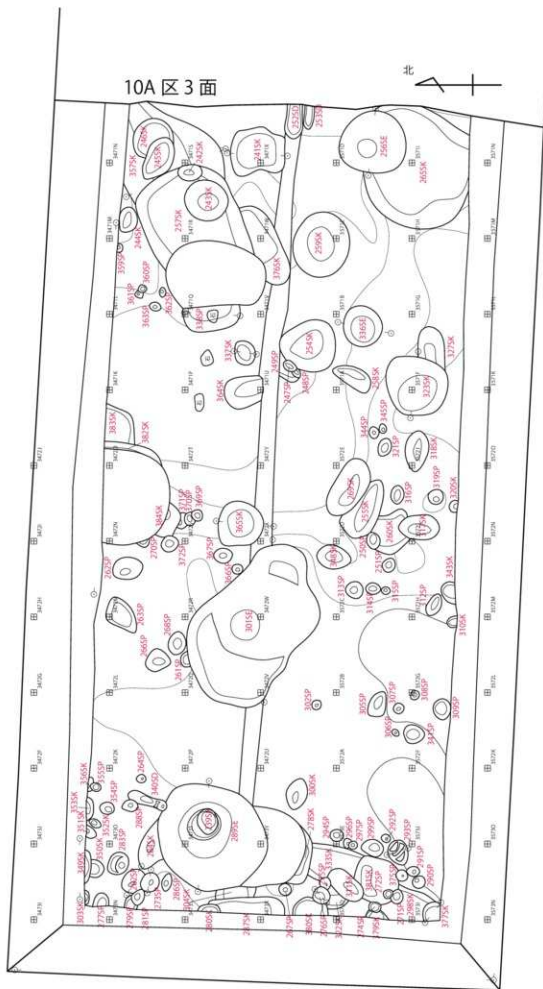


11A区2面





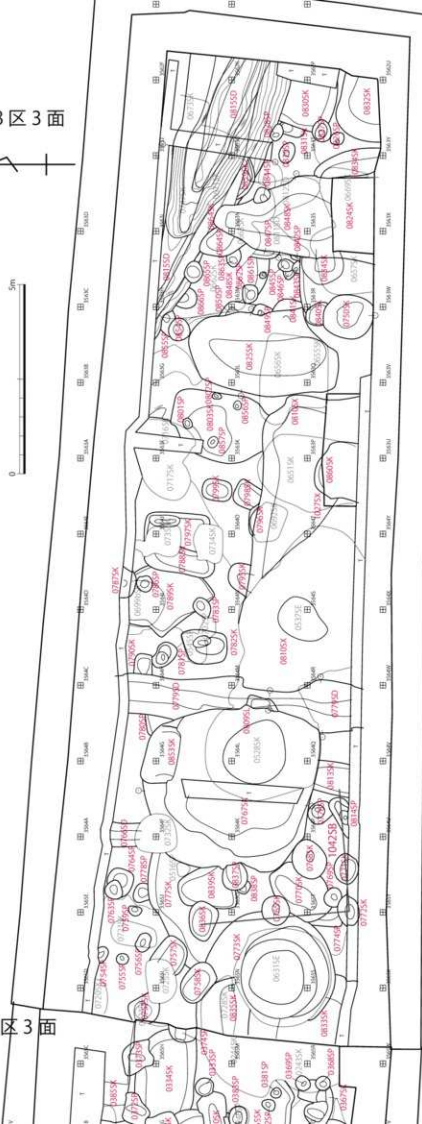
10A区3面



11B区3面

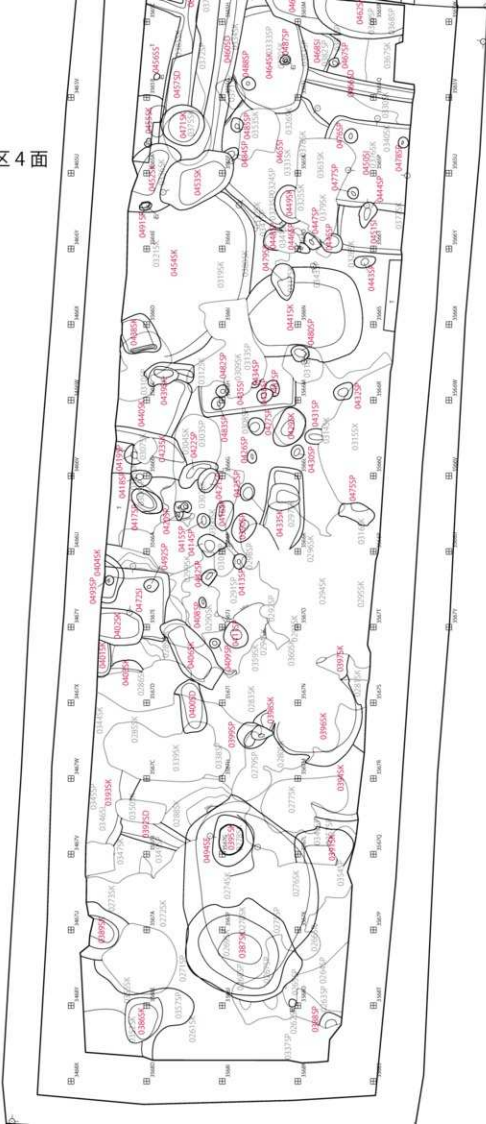


11A区3面



11A区4面

北

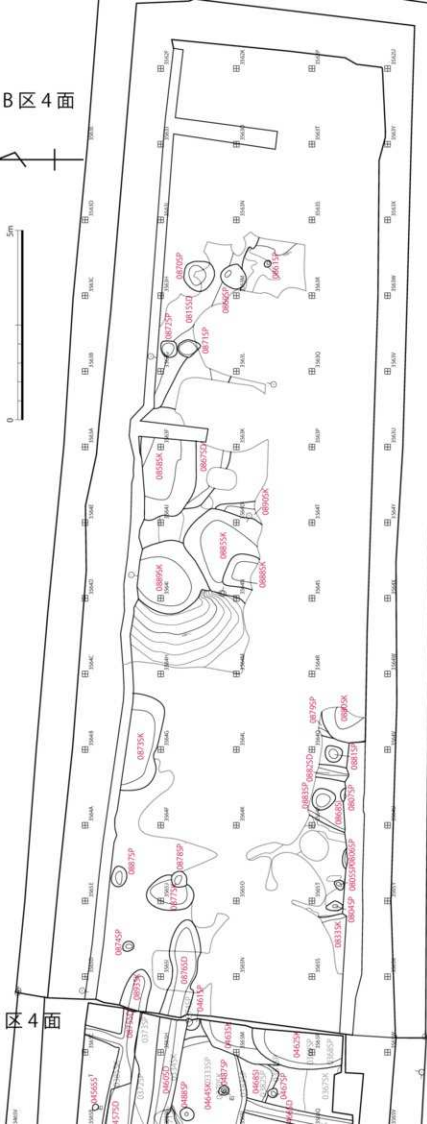


11B区4面

北



11A区4面





調査区遠景 (南西から)



II A 区 3 面遺構 (西から)

写真図版 2



調査区遠景 (東から)



10A区遠景 (東から)



10A区2面遺構 (東から)



10A区1面遺構 (東から)



10A区3面遺構 (東から)



10B区1面遺構(北から)



10B区2面遺構(北西から)



11A区1面遺構(西から)



11A区2面遺構(西から)



11A区3面遺構(東から)



11A区4面遺構(西から)

写真図版 4



11B区1面遺構(西から)



11B区2面遺構(西から)



11B区3面遺構(西から)



11C区1面遺構(西から)



11C区2面遺構(西から)



11C区3面遺構(西から)



11C区3面遺構(北から)



1006SI土層断面(西から)



1000SI土層断面(南西から)



0450SI土層断面(北から)



0999SE 枠内(南から)



0465SI土層断面(南から)



0450SI(北から)



0999SE土層断面(西から)



0999SE 枠内(西から)



0999SE 水溜(西から)



0999SE 井戸側(西から)



0999SE 水溜内(西から)



0999SE 井戸側南東



0999SE 遺物出土状況



0994SD・0998SD(東から)



462NR(北西から)



0896SD(南西から)



0893SK(南西から)

11A区東壁土層断面(西から)

写真図版 6



地震による液状化現象・11A区西端部北壁土層断面(南から)



0815SD 土層断面(西から)



0457SD・0460SD(東から)



0779SD 土層断面(南から)



0779SD 土層断面(北から)



0779SD(南から)



0815SD 土層断面(東から)



0815SD(東から)



0990SD 土層断面(東から)



0910SK 土層断面(西から)



0513SD(南から)



0513SD 土層断面(北から)



0602SD(南から)



0602SD 土層断面(北から)



0261SE 土層断面(東から)



0194SE 土層断面(西から)



0315SE 土層断面(北から)



0315SE 下部(北から)



0494SE 土層断面(東から)



0494SE 枠内(西から)



0528SE 土層断面(南から)



0528SE 枠内(南から)



0537SE(南から)



0537SE 枠内(南から)



0631SE 土層断面(西から)



0631SE 枠内(南から)



1021SE 土層断面(上)(南から)



1021SE タガ出土状況(南から)



1021SE 土層断面(下)(南から)



1021SE 井戸側(南から)



0356SE 土層断面(北から)



289SE 土層断面(南から)



289SE 井戸側(南から)



301SE 井戸側(南から)



屋敷 1 (南から)



屋敷 2 (南から)



屋敷 3 (南から)



屋敷 4 (南から)



屋敷 5 (南から)



0643SI 上面 (西から)



0646SI 上面 (南から)



0643SI 下面 (西から)



0646SI 下面 (南から)



0652SI 下面 (東から)



0730SI (北から)



0916SI (西から)



0916SI 土層断面 (南から)



0640SL (北から)



0640SL 土層断面 (南から)



0679SL (南から)



0679SL 土層断面 (南から)



0346SL 土層断面



0809SL (西から)



0508SP・0509SP (西から)



0633SS・0634SS (南から)



0939SL (南から)



0949SK (南から)



0949SK 下部 (南から)



0989SK 土層断面 (南から)

写真図版 8



0187SK 土層断面 (南から)



0363SK 土層断面 (西から)



0205SK 土層断面 (東から)



0097SK 土層断面 (南から)



0187SK (南から)



0363SK (西から)



0205SK (南から)



0187SK (東から)



0229SK 土層断面



0226SK 土層断面 (南から)



0280SK 土層断面 (南から)



0283SK (北から)



0353SK 土層断面 (南から)



0472SI (南から)



0654SK (南から)



0692SK 土層断面 (南から)



0734SK (東から)



0767SK 土層断面 (東から)



0825SK (南から)



442SK 土層断面 (南から)



1028SA (西から)



0088SX (西から)



0260SP 土層断面 (北から)



0524SP 土層断面



礎石建物 (西から)



0855SP 段目 (西から)



0015SK (南東から)



0855P (西から)



0015SK (南から)



227SE 上段 (南から)



0655E 上部 (西から)



0545P (北から)



443SD (北から)



227SE 下段 (南から)



0655E 井戸側 (西から)



0007SE 土層断面 (南から)



055SK (南から)



0460SD 出土遺物



0955SK 出土遺物



0990SD 出土遺物



0885SK 出土遺物



02055X 出土遺物



02775K 出土遺物



442SK 出土遺物



0732SK 出土遺物



0528SE 出土遺物

写真図版 12



183



297



915



314



541



822



876



540



368



669



857



580



50



309



607



804



863



760



812



577



343



270



311



509



943



45



594



466



521



472



878



633



959



942



504



940



827



282



300



281



988



968



969



970

写真图版 14



478



477



476



198



620



188



535



539



850

584

810



692

705

708

715

710

704

714

707

712

711



224

225

226

227

228

229



935

941

333



221



398



650



405



928



312



861



563



160



202



644



839



778



972



937



1009



1010



931



938



1002



770



930



380



975



811



880



616



855



356



726



330



722



723



724



357



729



346



169



209

写真図版 16



1008



13



12



1007



1005



1006



992



1048



1035



1041



1047



1045



1077



1121



報告書抄録

ふりがな	きよすじょうかまちいせき 11							
書名	清洲城下町遺跡XI							
副書名								
巻次								
シリーズ名	愛知県埋蔵文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第183集							
編著者名	鈴木正貴、鈴木恵介、奥野絵美、鬼頭剛、大澤正己、鈴木瑞穂、黒沼保子							
編集機関	公益財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センター							
所在地	〒498-0017 愛知県弥富市前ヶ須町野方802-24							
発行年月日	西暦 2013年 3月 31日			TEL0567(67)4161				
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °'"	東経 °'"	調査期間	調査面積	調査原因
きよすじょうかまち いせき 清洲城下町 遺跡	きよすし きよす 清須市清洲	23233	210002	35度 02分 58秒	136度 06分 57秒	20100419～ 20100831 20110817～ 20111227	2390㎡	街路新設 改良工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
清洲城下町 遺跡	集落	奈良時代～ 平安時代 鎌倉時代～ 室町時代 戦国時代～ 江戸時代初期 江戸時代	竪穴建物、 土坑など 井戸、溝など 掘立柱建物、 溝、井戸、土坑、 鍛冶遺構など 礎石建物、 井戸など	須恵器、土師器 灰釉陶器など 山茶碗類、土師器 木製品など 瀬戸美濃産陶器、 土師器、木製品、 金属関連遺物など 陶磁器、土師器 瓦など	金属加工を操業 した清洲城下町 の町屋に関する 良好な一括資料			
文書番号	発掘届出(21埋セ第146号・2010.3.30) (23埋セ第57号・2011.7.13) 通知(22教生第119号・2010.4.12) (23教生第1020号・2011.8.1) 終了届・保管証・発見届(22埋セ第141号・2010.8.30) (23埋セ第140号・2011.12.28)							
要約	今回の調査で確認された遺構や遺物は、古代・中世・城下町期・近世の4期に大別される。中でも戦国時代から江戸時代初期にかけての城下町期では、前期では武家屋敷群の南端が、前期後葉から後期では町屋が展開したとみられる。特に、町屋が展開した段階では、長方形土坑などの遺構が重複して多数検出され、これらの遺構から陶磁器・土器類とともに多量の金属関連遺物が出土した。鍛造剥片や鋳型の存在から、鍛錬鍛冶や鋳造作業が行われていたと推定され、16世紀中頃以降に付近一帯が金属加工を中心とした町屋が存在したことが明らかとなった。							

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 183 集

清洲城下町遺跡Ⅺ

2013 年 3 月 31 日

編集・発行 公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団
愛知県埋蔵文化財センター

印刷 サンメッセ株式会社

